

戦姫絶唱シンフォギア  
／ブレイドツ！！

にやはっふー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある都市伝説がある

それは戦場の中、あるいは事故、あるいは一人助けを呼ぶと現れる。一つの化け物戦場では悪人を倒し、事故では如何なる災厄も跳ね除ける。緑の血を流す獣

人の考えを超えたそれは、人の目に触れず、戦い続ける

あなたは『彼』を知ってどう思いますか？

化け物と言って恐れますか？

私は……

これとはある仮面ライダーの、無数にある終わり方の一つを選んだ、仮面の戦士の戦

いと、血の歌姫の物語

2017年11月19日タグ変更並び、追加しました

2017年12月1日戦姫絶唱シンフォギア／ブレイドツ!!G二話を、僅かにシーンを追加しました

# 目次

1	始まりの1枚・暗闇の中の二人	
	第2枚・深淵の出会い	7
	第3枚・防人達と唯の化け物	30
	第4枚・過去の幻影	48
	第5枚・一真	68
	第6枚・救いたいもの	87
	第7枚・過去	111
	第8枚・願いの先	133
	第9枚・悲しみは終わり	155
	第10枚・そして戦いは終焉へ	

	戦姫絶唱シンフォギア／ブレイドツ!!G	228
	最後の1枚・ルナアタック事変、その後	210
	第12枚・ルナアタック事変終焉	189
	第11枚・バケモノを囲む奇跡	172
	第5枚・それぞれの願い	316
	第4枚・怪物咆哮	295
	第3枚・咆哮する少女達	276
	第2枚・いまの響	259
	新たな1枚・永遠のもの	246

X	戦姫絶唱シンフォギア／ブレイドツ!! G	490	470	最後の1枚・フロンティア事変のその後	452	第12枚・仮面の戦士と歌姫の歌	435	第10枚・歌姫の恋歌	418	第9枚・神の船	397	第8枚・数多の思い束ねるは	377	第7枚・迷い進む	357	第6枚・ジョーカー	337
646	第9枚・防人のつるぎと運命のけん	629	610	第8枚・強き弱き者たち	592	第6枚・抜剣される魔剣・後編	576	第5枚・抜剣される魔剣・前編	558	第4枚・一万年前	543	第3枚・敵対するは	524	第2枚・救いの手と滅びの手	511	始まりの1枚・裏側から始まる	

第10枚・キズナ	663
第11枚・歌姫の歌声	680
第12枚・命題の終わり	694
最後の1枚・魔法少女事変後	712
仮面ライダー編	
第1枚・出会うライダー	727
第2枚・各々の戦い	740
第3枚・思い出の大戦	762
第4枚・いつもの？	774
第5枚・出会い	785
第6枚・平行世界者の戦闘と	801
第7枚・状況整理	819
第8枚・禁断の森	834

第9枚・世界を超えたユニゾンと異変	849
第10枚・小さな願いの果て	873
第11枚・別れた後の平行世界の彼ら	892
ワイルドカード・暗黒面2	910
第12枚・新たな平行世界	918
最後の一枚・そしてまた旅に出る	932

## 始まりの1枚・暗闇の中の二人

一人の少女は灰色のフードパーカーを着込み、夜の街をビルの上から見下ろしていた。

キラキラと光り輝く街並みを、虚ろな瞳で眺めている。  
「今日はないか」

そう呟くが、コンビニ帰りか、ビニール袋を持って、青年が屋上へと上がってきた。  
少女はまたかと思ったが、それを渡さず、地面に置く。

「? どうした」

いつも適当に食事を取る自分に、いつも食事を用意したりする。食べたいときに食べる考えだが、彼からの食べ物だけは食べることにした。

それが急に渡さなかったため、首をかしげる。

「現れた」

「ん、なら後で食べる」

理由を知り、納得してそう言う。そして彼女達は屋上から飛び降りる。

彼女は歌を詠う、自分の人生を壊した物を壊す為の歌を。

青年は何も言わず、そのまま着地した。

どちらも人が飛び降りるには高い場所。だが二人とも気にせず、怪我もしていない。少女の姿は変わっている。マフラーで素顔を隠し、見たことも無いスーツ姿。

青年はただ変わらず、どこにでもいる格好。いつの間にかバイクが彼の前にあり、彼の前に止まっていた。

「行くぞ」

「ん」

青年は砂のようにボロボロな色のコートを着込み、ジーパンなどのラフな格好。ヘルメットをかぶり、少女にもヘルメットを投げ渡して、バイクに乗る。

「この姿の時いらぬのに」

そう呆れるが、これをしないと後ろに乗せないことを知っているので何も言わず、ヘルメットを付け、青年と共に走る。

しばらく走るとアラーム、警報が鳴り響く。

「一真より遅すぎ」

「……………」

一真と呼ばれた男は気にせず、いつの間にかベルトが巻かれている。

片腕を上げ、静かに、



「変身」

『ターンアップ』

低い音が鳴り響くと、カブトムシの紋章が浮き出たパネルが前に現れ、それをくぐる  
と青年の姿が、鎧を纏う戦士へと変わる。

腰に剣を差し、西洋風の姿であり、バイクも形が変わり、よりスピードを上げた。

少女は気にせず乗り続けながら、その姿を見つめる。

「今日はそれ」

「ああ」

そしてバイクの走りを強め、一気に駆け出し、それがいる中へと入る。

カラフルな生物兵器、ノイズ。

特異災害と認定され、数多くの悲劇を生む切っ掛けになった存在が、人を探し動き回  
る場所へ。

「さあ、お掃除の始まりだ」

「行くぞ響」

バイクで飛び上がり、その場から二人はバイクから飛び出し、一気にノイズを殲滅し  
出す。

何者よりも早く、何者よりも荒々しく。

雷鳴轟き、拳がノイズを砕き、煤へと変えていった。本来ノイズは通常兵器が効かない。だが彼らは通常ではない。彼らはまるで自分達こそがノイズの天敵とばかりに、それを滅ぼす。

◇

煤が舞う世界に一人、そこに現れる、一つの影。

「またか……………」

ある少女の色違い、剣や刃の武装したスーツを纏う、蒼い髪の少女は静かにインカムに向かって、報告し出す。

「こちら風鳴翼。此度もノイズの影も形も無く、煤のみ。二人組、 GANG ニール装者の姿はありません」

『こちら本部、了解だ翼。後は一課に任せて、帰還せよ』  
「了解しました」

その時、通話先から、  
『例の子はいないか翼っ』

突如変わった声に、少しだけ表情を曇らせ、静かに、

「いないわ、『奏』……………」

『そう、か……………すまない、分かったよ』

そう静かに告げてから、彼女は現場から去っていく。

◇

ボロビルアパート、その一室。もう人がいなく、廃屋になったビルの中、二人はいた。

「身体は平気か」

「ん、大丈夫。前みたいに身体ん中の結晶は無い」

「違和感があれば言え」

「ん」

少女はパンや飲み物を食べ終えてから、座り込む一真の膝に頭を置く。

「もう寝る……………今日は疲れた」

「そうか」

「お休み、一真」

「お休み、響」

少女の手を握りながら、少女が眠るのを待つ。

遠くの町の光が二人を照らす。

一人は暗闇の中で握りしめた手を、必死に握る、小さな少女。

そして一つは、禍々しい、人で無い何か。

彼女と彼はこうしてノイズと戦う。

少女は復讐の為、青年は守る為。

お互い手を握りしめながら、静かに夜が明けるのを待つ。

◇

ある噂がある。

通常兵器が効かないはずのノイズを倒す、カードの力を使う者と、歌を歌う少女の噂。

彼らは決してノイズを逃さず、全て滅ぼす狩人。

少女は獣のように歌い、ノイズを煤へと変える。

カードを使う者は森羅万象を操り、無数の姿を持って、ノイズを討つ。

その正体を知る者は、少ない………

## 第2枚・深淵の出会い

私は響、苗字は、捨てた。

私がそんなことになったのは、二年前、ツヴァイウイングと言うアイドルのコンサートに出向いてから、全てが変わり果てた。

特異災害ノイズ、人しか襲わず、自分ごと人を炭に変えて自滅するそれが、コンサート会場の真ん中に現れる。

私は友達に誘われて、だけど一人で聴くことになる。初めてその歌を聴き、聞き惚れたが、いままではなにも思わない。

あの日から全てが変わった。変わり果てた。

私は死にかけた状態で、運よく生き残った生存者の一人。あの日、不思議な光景を見た。

不思議なスーツを着て、ノイズと戦うツヴァイウイングの二人。

そして彼の存在。

多くの死者が出る中で、多くはノイズが直接の原因では無く、混乱の中逃げまどう人々の所為で生じた二次被害の結果による死者が多い。

その結果、生存者は人殺し。そう言うレッテルを世間に張られた。

リハビリの中でその話を聞く、親友と思っていた子は知らないうちに引越してて、学校では私は人殺しとして噂される。

お父さんが出ていき、母親とおばあちゃんが悲しむ中、私は知った。

私は生きてはいけなかったのだ。

そう思ったことしか、もう思い出せない。

気が付けば私は、街を歩いて、寝ずに歩き、何も食べずに歩き回っていた。

生きることを諦めなかった結果、私の全て、私の側にあるものは全てが不幸になった。

雨が降る中、雨に身体が冷えていくが、どうしてもよかった。

そう思っていたら、アラームが鳴り響く。

「……………ああ」

これで死ぬると、シエルターには行かず、私はノイズの群れへと向かった。

憎々しいほど、ノイズは多くいる。

憎かった、だけど何もできない。

私は、これと戦う術がない。



なるべく寝床は変え、行動している。

「一真、次は魚食べたい」

「……………森か海辺にするか」

「いいね、海ならお風呂沸かして」

いまさら裸なり見られても問題ない。そう私は思っている。

一真と行動していると、ノイズへの怒りが、私に戦う力を与えた。

だがそれは私の中で根付いている物で、時折鉋物のようなものが身体から出て来る為、一真の力で取り除く。

だが全てを取り除かせるつもりは無い。

これは復讐する為の力だ。

壊して壊して壊しつくす。

ノイズを壊すと誓った。一真と共に、ノイズを滅ぼす。

その日まで、一真と共にいる。

「それじゃ、寝床見つけたらここで」

「ああ、響」

そう言つて一真は一枚のカードを上げ渡す。それを受け取る。

「ん」



これがあれば離れていても場所は分かる。一真の力の一部。それを持ちながら、スペードのAを持ちながら、街を歩く。



一真は化け物だ。赤い血ではなく、緑色の血を流すし、傷は放っておいても塞がるし、飲まず食わずでも生きていられる。成長もしてないから、物凄く年上だ。

話によれば、一度海を泳いで別の国に渡ったりして、人がいないところに出向いたり、戦争が起きれば暴れたりして、全てを終わらせることをしたら、海の中で過ごしたらしい。

その時、船を見つけて、その財宝でいまのお金を賄ってる。お金には困らない。

ってか、最近のことを私以上によく分からない。ノイズと戦うのも、普通じゃない、空間から割り込んで出て来るから分かる、そう言って戦う。

私と一真は利用し合う仲であり、一真は私が死ぬまで、側にいてくれる約束をしてくれた。

どんなに拳を振り下ろしても、一真は絶対に、死ねない。

だからこそ、私は一真と共にいる。

(……………一真の一番の相棒、チェンジビートル)

この中に眠る力を見ながら、考えるのをやめる。

その時、絵柄の虫、カブトムシが蠢く。

「……………ノイズ」

歯をギリと動かし、いつでも動けるように、ビルの上、非常階段を駆け上がる。

屋上に着いた瞬間、警報が鳴り響く。

「やっぱり一真が早い」

そして復讐の歌を歌う。

身体に纏うは、あの日見た二人組と同じ力なのだろう。なぜ使えるか分からない。

だがいまはいい。私は、

「ノイズを壊すッ」



とある某地下施設、そこでノイズの反応と共に、ある反応が強く現れる。

「反応絞りこみました」

「ノイズと異なる、高エネルギー反応ッ。例の」

「ガングニールかッ」

それを聞き、二人の少女は、すぐに動く。

司令室では、すぐに衛星モニターを使い、すぐに映像を、

「映像出ますッ」

映像の中で、マフラーのようなものを巻き、素顔を隠し素手で戦う一人の少女。

怒りに任せ、復讐の歌を詠い。感情のまま、ノイズを砕く。

「やはりこの少女か……今度こそ接触するぞッ」

彼らは彼女よりも遅く、ノイズを探知して動く為、いまのままで存在は確認できても、接触はできない。

いつもどう足掻いても煙のように姿を消す為、謎のままにされていたが、

(君はなぜ、そんな歌を詠うツ!?)

一人の大人として、彼女の歌は、あまりに痛々しく、悲しいものでしかなかった。

◇

「ぶち壊せエエエエエエエエエエエエエエエエ」

拳でノイズを粉碎する。

構えながら、まだまだ出て来るノイズは多種多様していて、

「イライラする……………」

そう言い、拳を握りしめた時、

「ママー……ッ」

「ッ!? 子供っ」

子供が泣きながらうずくまり、その場に座り込んでいた。

ノイズは音に反応する。一真がそう言っていた。温度や音で、人を見つけて襲うと。

「チッ」

すぐにそこへ地面を砕きながら踏み込み、少女に迫るノイズを吹き飛ばす。

「お、ねえちゃん?」

「死にたくなかったらここにいろッ」

そして構える響は、歌いながら、迫るノイズをその場にとどまり、全て砕く。

数だけが波のように押し寄せる。それに舌打ちを内心した時、

「!?!」

別の歌が聴こえ、ノイズが蒼い刃に切り刻まれる。

「あんたは」

「剣だッ」

そう言い、蒼い髪をなびかせ、一人の女性。アイドルとしてその顔、その顔だけは忘れられない。忘れるものか。

風鳴翼、そして、

「おつらあああああああああああああああああああ」

放たれた槍が無数に分かれ、ノイズを貫く。その攻撃は、天羽奏のもの。あの日、ノイズと戦えた。二人組が現れた……………

「私と同じ力……………やつぱり、あの日のが」

そう呟きながら、ノイズが迫る。

槍と剣、拳でノイズを吹き飛ばすが、数がどんどん増えていった。

「くつ、多すぎだろ……………」

「だがここで退く訳にはいかないッ」

「……………」

響は静かに、耳を解き済みます。

ここもこうなら、別の場所も多いのだろう。

だから、

「来た」

「えっ」

響の言葉に、バイク音と共に、その場に現れる。

雷鳴を纏い、バイクがノイズを吹き飛ばす。波のようなノイズの群れが、一瞬で煤に変わり果て、一人の男性がヘルメットを外す。

「響、遅れた」

「許すから、戦え化け物ッ」

「ああ」

二人のやり取りの驚きながら、ノイズの前に立つ青年。一真の腰に、ベルトが出現し、一枚のカードを取り出す。

「変身」

『チェンジ』

青年の姿が変わり、赤いハートを象る戦士。『カリス』へと変わる。

「姿が」

「変わったッ!?!」

青年は静かに歩く中、ノイズ達が初めて、怯えた。

その様子に驚く中、彼の手に弓のような武器、『醒弓カリスアロー』が出現し、響もそ

れと共に駆けた。

ほとんど瞬間的にノイズを倒す二人に、二人は呆然と見る。

「砕けるッ、滅びろッ、終われッ」

「一気に決める、集めろ」

「応ッ」

三枚のカードを取り出し、弓にベルトのハート形のスライドするウラザーをセットする。

同時にラウズカードを読み込ませると共に、響は地面に拳を叩き付け、ノイズを大量に空中へ浮かべる。

《フロート ドリル トルネード スピニングダンス》

三枚のカードが光に変わり、トンボ、巻貝、鷹が光の絵柄の中で動き、力を解き放ちながらカリスへと取り込まれる。

暴風のように風が一瞬で巻き起こり、風を纏い浮かび上がる。それが渦巻き、彼を飛ばす。

その暴風と共に、弾丸と化し、ノイズ全てを飲み込みながら、煤へと変えた。

「シンフォギア以外で……………」

「ノイズを、倒した……………」

地面に下りた彼と、響はお互いを見ず、拳を軽く叩きつける。

◇

辺りのノイズを煤に変えると、人が乗った車などがやってくる。

そんなことはお構いなしに、カリスと成った一真は辺りを見渡す。

「ノイズはいない、帰るぞ響」

「ん」

「待てッ」

そう言い、風鳴翼と天羽奏。他にも黒い服の人が現れた。

黒服の人は、懐に手を入れている。拳銃か何かだろうか？ 一真を盾にしよう。

一人の若い人が前に出る。黒服の人の代表だろうか？

「申し訳ございませんですが、ご同行、お願いします」

「断る」

私はそう告げると、そうはいかないと、風鳴翼が前に出る。

「悪いが、そう言う訳にはいかない。ノイズと戦うその力、それにそれは」

「あんたたちには関係ない、何もできない、なにも救わないあんたたちにはッ」



そう叫んだとき、天羽奏が前に出ようとしたとき、

《スモッグ》

黒い煙が辺りに吹きだし、それは一真のラウズカードの一枚。それに姿を隠して、動いたはずだけど、

「！」

「逃がしません」

あの、話しかけた黒服の男が迷いなく私に近づいた。ラウズカード、スモッグは視界を奪うことに長けているのにッ。

「そいつに触れるなッ」

《バイオ》

それは植物の蔓を使い、ムチのように使ったり、相手を縛るカード。それを聞きながら、バイク音が聞こえる。

「ここは任せろ、行けッ」

「ん」

それと共に、シャドーチェイサーに乗り込み、自動運転でその場から走り去る。

一真なら問題ない。だがスピードのカテゴリAが無い以上、あれには成れない。

まあ、カテゴリAはカリスのを除いてあと二つある。なによりも、奥の手がいくつ

もあるのだから、問題ないだろう。

私はそう考え、その場を後にした。



「……………なんだお前」

「これでも、少しはできないと」

バイオで捕らえたはずだが、それがただの丸太と言う始末。それを縛り潰し、蔓を収め、弓を構えなおす。

残りの二人が武器を構え、静かに男は他の黒服を下がらした。

「響と同じ力か、それは……………赤い髪の子は、響と同じ物か」

「……………あんたのそれはなんだ、シンフォギアじゃないよな？」

「それを含め、彼女のこと、詳しく教えてもらおうぞ」

そう言い、蒼い子が刀を構えるが、

「……………」

腰のベルトから、一枚のカードを取り出す。それに二人が動くが、気にせず、ラウザーへ読み込ませる。

『チェンジ』

「止まれ」

姿が変わると共に、瞬時に、世界を止めた。

空中で止まる二人。世界そのものの時間を止める。

この姿、タイムスカラベこと、スカラベアンデッドの姿に変わった。

響にはスペードのAを持たせているため、いま動けるのは響と自分だけだ。

だが、

「……………この子は」

赤い髪、長い髪の女の子は、

「……………」

ハートのAを取り出し、チェンジすると共に、その赤い女の胸に、手を差し込んだ。

「がっ」

「ツ?! 奏ッ」

彼女達からすれば、突然移動したそれが、相方の胸に手を差し込んだように見えるだ

ろうが、気にせず、

《リカバ》

瞬時、赤い子は響と違い、薬の類が原因で悪いようで、その要素を全て奪い取る。

背後から斬りかかられるが、すぐにタイムのカードを取り出し、蹴り飛ばして、赤い子共々避け、タイムを起動。

その後、手の中にある薬を見つめる。

「……………劇薬？　これは……………」

手からしたたる薬、この子の身体を蝕む悪性全てを取り除いた。かなり長い時間使用していたのだろうが、全部取り除いた。

蒼い子からはその気配はない。素で同調しているのだろう。そう判断して、歩いて帰った。

◇

また気が付くと奴はいなくなり、胸を押さえる奏しかなかった。

「奏ッ、大丈夫!?!」

「翼……………」

奏は、

「めっちゃ平気。てか、なんかすつげえええ身体が軽いつ」

そう言いながらアームドギアを振りながら、その場で身体を動かす。

胸を刺されたように見えたが、そんな傷は無い。スーツは傷ついているが。

「ホント?」

「翼は心配性だなあ。けどま、いきなりあんなんさければ仕方ないさね」

胸確実に揉まれたなど奏は言いながら気にせず、むしろ、

「旦那、あたしの身体。いまどんな状態だ」

インカムでそう聞くと、少し間を置いてから、

『問題ない、リンカーによる副作用らしいものが見当たらない。まさか先ほどの行為で、奏を治療したのか?』

「少し乱暴過ぎるけど、私もそう思う。いきなり胸揉みやがって。まあ、どっちかてと、心臓握られたって気もするけど」

「かくなくで〜」

戦っている時は少し肩に力が入るが、少し碎ける翼に苦笑する。

「けど逃がしたのは事実だ。なんだあれ? 男が急に姿が変わるし、空間から突然、武器を取り出すし」

あたし達は静かに、地面に落ちている。なにか身に覚えある、煙を立てる薬品を見つける。あれ、まさかいままであたしの中にあつたリンカーか?

『ともかく、現在解析中だ。後は一課に任せるしかない』

「わーかったよ旦那。ともかく収穫は」

「謎のカードを使う男性と、ひびきと言う名だな」

翼の言葉に頷きながら、月を見る。

「やっぱり、どこかで会った気がする。あの子は間違いなく、あの日あの子だ。それにあれは」

「ええ、コンサート会場。あの事件に現れた、黄金の剣士と似てる気がする」

そう静かに呟きながら、静かにその場を後にする。

あの日現れた黄金の戦士と、あの日、あたしの不手際で殺しかけた少女。

忘れるものか、だが、

「あの子に、なにがあっただんどそっただれ……」

小さく拳を握りしめながら、私達はその場を後にする。



「ハハハ」

「ああ、元は人が住んでたんだろうが、ノイズの所為で人がいないのは確認済みだ」

そう言って、廃屋のアパートの一室に入りながら、一真は座り込む。

カリスの姿から元に戻り、人間体へ変わる。

「はいこれ、これ無いとブレイドには成れないでしょ」

「ああ」

そう言つて、チェンジビートルを渡した私は、風呂場を見る。

「かすま〜お風呂〜」

「……………はあ」

《ファイア ブリザード》

カードをラウザーに通したような音が鳴り響くけど、一真は軽い力なら念じただけで使用できる。風呂場にある浴槽にまず吹雪を起こし、灼熱で水を作る。

私はその様子を見ながら、

「汚いから、バイオの蔦で洗つてよ」

「……………」

《バイオ ポイズン》

バイオの蔦は、汚れなどを消す毒を持つ性質のものにして、それで流す。あとは全て水で洗い落して、先の方法でお湯を入れてみると、

「もう入る」

「！」

そう言い、お湯に入る為に上をブラと共に脱ごうとすると、

「ちよ、チヨマツビキーっ!!」

「……………はああ〜」

ため息を吐く。いま一真がなんて言ったか分からない。

初めて苗字を聞いたときも、ケンジャキと名乗ったのは伊達じゃないのだ。

少ししてせき込みしてから、少しウロウロした後、段差に転びかけ、すぐに我に返り、お湯を張って、浴室から出る。

さすが一真。

「フアイア〜少し軽めにして欲しかった〜」

浴槽の扉は元々ボロなこともあり、背中がはつきり見える。もしそこにある私の下着が見つかれば、一真はどうなるか。面白いことにはなるな。

「私、一真にとつて孫も通り越してるんじゃないやなかつたっけ？　一緒に入る？」

もう見られているし、透き通った水のため見えている。もう隠す気も無い。

一真にいまさら裸を見られても、身体の中の欠片、その侵食みたいなものを抑えるのに、力を使って中も外側も触ってるんだ。何を気にしろと言うのだ。

「もう少し自分を大切にしろ」

「……………無理だよ」



そう言いながら、生み出されたお湯の中、胸の傷に触れながら、お湯を満喫する。

「さっきのこと、ホント気にしないよ。一真も入れればいいじゃん、化け物に成つてから、お風呂らしいこととしたことある？」

「さあな。海ん中で何十年過ごしたから」

「いや最近」

呆れながら、一真はポケットから何かの液体を取り出す。ブリザード辺りで固めたのか、それを見る。

「なにそれ」

「いま見る」

調べものする際、まず自分の中に一度取り込む。

目の色が赤と緑、そして青に変わりながら、手に握る凍った薬品を握り、液体を取り込み、効果を知る。

「響の中にある欠片に合わせるための物だろうな、使われてる物は人体に悪影響が出るが」

「そんなどこから手に入れたの」

「赤い髪の子、中から薬の気配がしたからな。お前の力をより使えるか分かるかなって」

「そう……………ん？」

その話を聞き、疑問に思う。

「一真、あの二人の中に、私みたいに欠片は？」

「……………あつたかな？」

「……………この不死身の化け物は」

呆れながら、顔をお湯で洗う。やはり最強ではあるが愚かである。

中に欠片があるかどうか、少なくとも、

「一真が薬を得る為か治療かはさて置いて、身体の中に干渉して分からないんなら、私のように身体の中に無いのは明白じゃん。薬で外部から、この力使ってるってことでしょ」

「……………そうか？」

「それ以外にどう使うんだよ」

こんなんに負けた、バトル・ロワイヤルのバトルファイトの戦士達が可哀想だ。

いまだってほぼ近くまで私が近づいてるのに、気付いてない。

「ま、身体の中から取り出して使う方法あるんなら、それ手に入れたら中の欠片全部取つてよ。それでいちいち一真に侵食抑えてもらわなくても済むだろうから」

「そうだな……………けど心臓近くで、取りにくいんだ」

「どっちでもいいよ。あゝいい湯だな」

そんな会話の中、私達は変わらないままだった。

## 第3枚・防人達と唯の化け物

あの日からなるべく、私は出歩くことを控えることにする。

だが私は人間で、一真のように何も食べず、寝ないままはできない。

一真と手を繋ぎながら眠り、起きてはご飯を食べに出向く。こんなご時世だ、コインランドリーなども使ったりして着替えも用意したりしている。

今日はラーメン屋に入り、一真に渡されたお金を見ながら、注文して待っていた。

客は私一人、そう思っていると身体の大きな男の人が入り、一つ席をはずして、座り込んだ。

「親父、俺は豚骨大盛りで頼む」

「はいよ旦那」

そしてしばらく沈黙する中で、

「響くん、だな」

そうワイシャツの男が話しかけてきた。

瞬時に戦闘態勢になり、フードの隙間から睨む。

「そう睨まないでくれ、俺は、まあ、この前の黒服、緒川達の上司だ」

「……………彼奴らの……………何の用だ」

「君達と話がしたい」

そう呟きながら、外の様子を見ると、黒い車が止まっている。

「準備はできてるようだけど」

「そう言われてもな、ここはダミーカンパニーの一つなんだ」

「……………」

そう言われながら、ここに一回通つてから目を付けられたようだ。

ワイシャツの、熊のような男は静かに、

「まあとりあえず飯食つてからでいいだろう、ここは奢るよ」

「ダミーならあんたの金じゃないだろ」

「そう言うところが硬いんだ、なにげに融通が利かなくてな」

「……………杏仁豆腐とギョーザ追加」

そう呟きながら、私は食事を楽しむことにした。

◇

それはある日の放課後、

「ねえねえ今日はどうする？」

「せっかくですから、ふらわーに行くのはいかかでしょうか」

「うん、そうだね。おぼちゃんのお好み焼き、久々に食べたいもんね」

そう会話する私達。彼女達とは仲のいい三人であり、できればこの中に、彼女もいて欲しい。

どうして連絡が来ないのだろう。いまなにをして、どうしてるのだろう。

そう思う日々の中、車に乗り込むパーカーの女の子を見た。

「えっ」

すぐに車は動き出し、視界から消えた。

私の様子に、みんなが気づく。

「ヒナ、どうしたの？」

「いま、知り合い、友人がいた気がしたの」

そう、あの日、私の所為で辛い事故に巻き込まれ、音信不通になった。大切な、私の友人。

立花響。その姿を見た。

だけど……………

「響なの……………」

そう思うほど、私のお日様は、顔が曇っていた……

◇

私を乗せた車は、リディアン学院と言う、女子高の前に止まり、裏ルートを使って地下へと移動する。

「エレベーター」

「手すりにつかまりたまえ、俺ですら時々バランス崩すからな」

そう苦笑するが、周りは本当に苦笑する。

私がかここまで来たのは理由がある。一つはまず、この力がなんなのか知る為だ。

身体の中に侵食して、身体の中を書き換えるようなもの、と思っていたが、どうも違うらしい。私がレアケース？とも思う。

もう一つは、このオジサンが強すぎる。奥の手使っても勝てるか分からない。一真が本気の姿をした時のような威圧感を僅かに感じた。

懐のチェンジビートルが蠢く。警戒するレベルらしいのがひしひしと感じる。

高速エレベーターのように、地下へと移動。見たこともない壁画など、よく分からないそれらを見ながら、たどり着く。

「ようこそ、人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へっ♪♪」  
「……………」

簡単なパーティーのようなもので出迎えられる中で、あつそと言う顔で見渡すと、あの二人組もいて、風鳴翼はかなり恥ずかしそうに、天羽奏は楽し気に乗っかっている。

「どういう職場なのだろうか？」

「はいは〜いっ♪ せっかくだからツーショット」

「嫌ですめんどくさい。いいから要件なりなんなり言ってください。ここなら人質いるから、暴れられますよ」

「それでも止めるぞ」

「止められそうでやだこの人、人間ですか」

「俺は人間だぞっ」

それには周りは苦笑するしかない。ちなみになにを言っているのだろうかと言う顔だ。



少し場を整えてから、改めて数名と共に、会話が始まる。

「それでは改めて、俺は特異災害対策機動部二課の司令官、風鳴弦十郎。こっちが」



「できる女っ♪ 櫻井了子よ♪♪ よろしくね」

「響、苗字無し。で、あんたたちが聞きたいことはなに？」

響はそうぶつきら棒に答えながら、それに考え込む者がいる。

（警戒は、してる。が、こちらが手を出さなければなにもしない、か。どんな事が、この子に起きたと言うんだ）

そう心配しながらも、立场上、聞かなければいけないことがある。

「まずは君達のことだ。君はガングニール、聖遺物、シンフォギアについて、どこまで知っている？」

「どれも初耳だよ、なにそれ？」

その言葉は真実であると思ひ、逆に疑問に思う。何も知らずにシンフォギア装者として動いていたのかと。

「シンフォギアについて、了子くん」

「はいはくいつ、翼ちゃん、奏ちゃん」

そう言われ、二人はペンダントのようなものを見せながら説明する。

聖遺物、世界各地の伝承に語られる、現代では作り出されない物。その欠片しか遺跡から出ず、完全な物はそう見つからない。

ロストテクノロジーにより作られたその聖遺物を起動させるには、歌が必要である。

それが鎧のように姿を変え、使用できる状態がああ姿らしいと、かみ砕きながらも、理解した部分を口にし、説明を受ける。

「それが私の中にあるのか」

「私の中？ 君は」

「その聖遺物の、欠片。私の心臓近くにあつて、私に根付く形で身体の中にあるんだよ。だから私は聖遺物を持っているようで持つてない」

「なんだとっ!？」

周りが驚く中、いまさらなので気には留めず、淡々と事実だけ伝える。

「なぜ君の中に聖遺物、ガングニールがある」

「……………答える気はない」

それに全員が黙り込むが、ともかく、

「聖遺物による、ノイズを倒す理論を作ったのが櫻井さんで、聖遺物を纏う装者つてのが適合者。あんたたちからすれば、それ以外にノイズを倒す術が無い。でいい?」

「ああ、現状我々人類は、ノイズと戦えるのは、ガングニールと天羽々斬の装者である、奏、翼。そして君だけだ」

「ま、人類つてくくりは合ってるよ」

その言葉に僅かに弦十郎は眉を動かし、周りも疑問に思う。

そう言いながら、聞きたいことが分かったと、響は内心頷く。

「それではもう一つ、彼は何者だ」

「化け物」

一真のことだと思い、響は事実しか言わない。

あまりの即答に、なぜと言う疑問より、そのまま話をした方がいいと彼は思い、周りの困惑をそのままに、話を続けることにする。

「化け物とは」

「不死身の化け物だよ、バトル・ロワイヤルの勝利者。ま、一真の話じゃ大昔の話だし、その事実は消し去られて、もう二度とバトルファイトが起きないように完全封印されたから、知らないだろうけどね」

困惑する周りだが、二人の大人はその言葉と単語を深く聞く。

そう告げてから、響は静かに立ち上がる。

「おいどこに行くんだよっ」

奏は慌ててそう言うが、フードをかぶりながら、

「聞きたいことも言うことも言った。ようはあんたらは戦力が欲しいだけでしょ。なら問題ない、私や一真の目的は、ノイズを滅ぼすことだッ」

その時の顔は酷く、拳が握りしめられる。

「ノイズは私と一真が滅ぼしつくす、あんたらと協力する気は無いけど、邪魔はする気は無い。後は自分達で調べなよ、一真の話じゃ、ボード？、は日本政府機関だったらしいし」

「ボード？ それは」

その時、言葉をさえぎるように、響が懐のポケットに手を入れていたが、突然取り出す。その手には一枚のカードが握られていた。

「それは」

「またかノイズ……………」

響は忌々しくそう言うと、藤堯は小さく悲鳴を出す。カードの絵柄、カブトムシが蠢き、何かに反応している。

「もうすぐノイズが出るから、私は出る。悪いけど話はここまでだ」

「ノイズがッ!? 待ちたまえ、それはどういう」

「ノイズ感知はこつちの方が早いんだよ。いいから外に出せ、ノイズを駆逐するッ」

「なんだとっ!?!」

それに驚きながら、弦十郎は現状彼女を信じることにした。

「分かった。だが我々も参加させてもらう、翼、奏」

「ああ」

「承知」

彼女を出すと云う選択をするとともに、翼や奏も、彼女についていくことになる。

「……………」

何も言わないが彼女は不満そうな顔のままだが、静かに彼女達は外に出ていく。

彼女が外に出ると、一台のバイクが現れ、それに乗り、彼女はノイズの下に向かう。

バイクなどの乗り物に乗る二人。その数分後、ノイズ警報が鳴り響く。

◇

バイクを走らせながら、深夜の夜、ノイズがすでに湧き出るのを見つけたのは、

「変身」

『ターンアップ』

クワガタのゲートを通り、赤き戦士へと変わると共に、片手に『醒銃ギャレンラウザー』を取り出し、即座に撃ちながらカードを取り出し、バイクへ。

《ファイア》

バイクは『レッドランバス』へ変わり、ファイアランバスをノイズ達に放ち、吹き飛ばす。

同時に下り、銃を乱射しながら、向かってくるノイズを裏拳や蹴りで吹き飛ばす。  
「邪魔だ」

《アッパ》

ラウザーにカードを通し、拳を振り上げると側にいるノイズは爆砕する。

「スウ……………」

《バレット》

アルマジロのカードが身体を丸めて高速回転し、

《ラピッド》

キツツキがカード内でクチバシで突き、

《スコープ》

コウモリがカード内を飛び回り、そのカードが光に成り、銃へと宿る。

《ホーミングショット》

天に向かって弾丸が乱射されるが、すぐに軌道を変え、ノイズ達へと降り注ぐ。

それでも数が多いが、身体を弾丸のようにして突進しギャレンを貫こうとするが、踏ん張るだけで逆に身体を壊すノイズ。

「……………」

無言のまま、ノイズの攻撃すら効かないギャレンは静かに銃と格闘でノイズの数を減

らしている。ノイズの如何なる攻撃も、ギャレンには効かない。

そうこうしていると、三つの歌が聴こえ、後ろを振り返った。

「響?」

さすがに驚きながら、見ずにノイズを蹴り飛ばす。

「一真、さっさと終わらすよ」

「……………ああ」

翼は空高く跳び、無数の剣を放ち、地面に下り『逆羅刹』を放つ。

奏も槍を回転させ、ノイズを巻き込んだり、響はその剛腕から放つ拳風で吹き飛ばす。

このように全員で一気にノイズを倒し始めるが、

「でかいのが出てきたッ」

突如ノイズ達が集まり、巨大ノイズが現れるが、響はすぐに一真を見る。

すでに三枚のカードを取り出し、構えていた。

《ドロップ ファイア ジェミニ》

三枚のカードが光と変わり、鯨は飛び跳ね、蛍は火を灯し、シマウマは二つに分かれながら、一斉に取り込まれる。

足より炎をまき散らし、紅蓮の炎が両足へと集まり始めたとき、

「邪魔になるっ、退けッ」

## 《バーニンググディバイド》

瞬間、足をそろえ、飛び上がると共に地面が割れ、身体をひねりながら、爆炎の炎が渦を巻きながら彼へとまとわりつく。

ノイズが無数槍のように向かってくるが、瞬間二人に分かれ、片方に激突するが何も起きず、そのままつま先蹴りを叩き付けた。

それにより炎に巻き込まれ、爆発する周囲。

二人の歌姫はただ見ていることしかできなかつた。



「凄い……………」

翼はそう呟くと共に、光の門が現れ、元の姿へと戻る。

「響」

「一真、お疲れ。ギャレンで戦うのは珍しいね」

「ああ、あれは橘さんのだからな」

そう言いながら、煤の中で二人は気にも留めず、そのまま帰ろうとする。

「待て一真とやら」



「響待て」

二人が前に出ると、反射的に響よりも一真が前に出る。

「なにかようか」

「当たり前だ、ノイズを倒す力、このまま見過ごせない」

「それはお前たちの言い分だ。俺達には関係ない」

「それでもここで帰すわけにはいかない」

そう言う中で、一真は奏を見る。

「薬か、人が治癒したのに、もうか」

「！ 分かるのか……………」

「お前は……………」

「一真」

呆れながら奏を見ていると、響は一枚のカードを渡す。

「言っても分からないよ、なにも」

「……………だな」

そう言つて、響から受け取つたカード、チェンジビートル。

手を静かにかざすと、片手に収まる機械、バックルが突如現れ、バックルにカードを差し込む。

二人が突然のことに驚きながら、それを取り出すところを見て驚いてた。その間に、それはベルトへ変化しながら浮遊し、彼の周りを回る。そのまま彼の腰に巻かれた。

「話があるなら、その刃で語れ人間」

「それは」

鼓動するように音が鳴り響き、響は少し離れ、構える一真。静かに、

「変身ッ」

『ターンアアップ』

光の門が現れ、それが彼に迫り、姿を変えた。それに二人は驚く。

「その姿」

それは黄金の戦士に酷似した、銀と青の戦士。

腰に下げた『醒剣ブレイラウザー』を静かに構えながら、歩き出す。

「剣か、奏下がって、ここは私が」

「待て翼ッ」

だが二人とも歩き出すとともに走り出し、激突し出す。

翼は歌を詠いながらだが、剣を片腕で振るいながら、その一撃一撃を受け流す。

(強いッ)

剣と剣がぶつかり合う中、こちらは両手で振るう中、彼は自分よりも短い剣で、片腕

で扱い、はじき返す。

剣の構えでは無い。ただ剣を持つ者と、剣を振るう者。だが実力は、向こうが上と、防人を自負する彼女は、顔をゆがめた。

(だが、ここで終わる防人では無い)

瞬時空へと飛び、『千ノ落涙』を放つが、一枚のカードを取り出す。

《サンダー》

剣へスライドした瞬間、鳴り響き、爆雷と言うほどの轟音を響かせ、剣先から放たれた雷鳴が、全て撃ち落とす。

着地を確認した瞬間、剣より二枚、カードを取り出す。

《スラッシュ マツハ》

瞬間、それは近づき、重々しい一撃を放ち、翼の剣を吹き飛ばす。

「くっ」

「！」

追撃しようとしたが、身体が止まる一真。翼の『影縫い』が決まり、瞬時空へ飛び上がり、

「これにて決めるッ」

それは巨大な剣と共に飛来する、『天ノ逆燐』である。



「……………」

何も言わず、その目は静かに黒に戻った。

「行く、一真」

「……………ああ」

翼は己の剣を砕かれ、そして目の前に驚き、何も言えない。そのまま後のことを無視して、バイクに乗り、二人は去っていく。止められる者は誰もいない。

## 第4枚・過去の幻影

あれから一か月、一真と名乗った男は四つのスタイルを披露。

剣による攻撃、雷鳴を纏い、格闘技も得意とする接近タイプ。最も安定しているが、キーとなるカードは融合症例第一号に預けていることが多い。

銃を持つ赤いスタイルは、銃によるけん制をしつつ戦うインファイトタイプ。

カリスと言うスタイルは弓を持ち、光弾を放ちながら、刃にて斬りかかり、風を纏い、自在に戦場を移動する。彼が最も使うタイプ。

杖のような錫杖を使い、パワーによる攻撃と思わせ、最もカードを使用した組み合わせを行い、多種多様の攻撃方法を使用する。対人戦に最も強いと思われる。

ただ静かにそれを見ながら、その時見せかけた力と、黄金の姿は決して見せていない。ノイズ程度では見せないようだ。

「ならばあの子をぶつけるしかない、か………融合症例第一号も確保しなければ」  
そう呟きながら、彼女はコーヒーを飲む。



「ふむ……………」

風鳴弦十郎は使える物を使い、調べに調べたが、

「見つかりませんね、風鳴機関も使いましたが」

「ああ、影も形もボードと言う機関は無い。無いが」

とある時期、情報が操作された後らしき時期があるのを見つけるのには成功した。

その空欄を見つけ出し、その時期に疑念を抱き、眉間にしわが寄る。

「謎の機関、ボード。正式名も何も見つからないが、日本機関なのは間違いないのなら、ここだろう。空欄、どこで税金などが使われたのが不明と言う時期がある。考えられるとしたらそこだが……………」

「これは」

藤堯と友里は少しばかり驚きながら、まさかと思う。

年代が古く、かなりの年代が過ぎている。その時期かと目星をつけた。

「気合いを入れれば、まだ調べられる範囲ギリギリか。それでも中身が国家機密レベルなのだろうか？ 完全に跡形もなく消されている、風鳴機関などにも記録が残されていない」

「これは……………」

「俺達が思うよりよほど、闇が深い力と言うことだろう。ボード、一体何をしていた」  
そう腕を組みながら告げ、現在も調べている。



「……………なにかようですか」

「んな顔すんな、翼がアイドル活動で暇なんだ」

私達の側に最近、天羽奏がうるちよろする。今最近、寝床にしているところはまだ顔を出すほどにだ。

天羽奏、あの事件以来、表舞台ではけして歌を歌わなくなり、彼女はコンサート事件の風評被害を悲しむあまり、歌わなくなったと言う話だ。いまの私には関係無い。

「響」

「一真」

「ごんちは」

アパートに帰ってきたら、天羽奏と出会う一真。僅かに驚きながら、その場に座り込む。

そう言えばと、



「そう言えばあんがとさん、あんたが薬、リンカーの副作用を消してくれてから、少し身体が楽なんだ。おかげでまだ戦える」

「……………かなり身体に影響が出るものだが」

「あたしは翼達と違って、薬を使わないといけない、時限式って奴なんでね。こいつと相性は微妙なんだよ」

「そう言つてペンダントを見せながら、私は静かにそれを見る。あれが自分の中にあるのは、おそらく……………」

「……………少し聞きたいことがある、二年前、あたしらのコンサート事件のことだ」

「そう一真の方を見ながら聞く。あの時の事に気づいたんだろう。」

「なんだ」

「あの日、黄金の戦士が大量のノイズを倒したんだ。あんたか？」

「だとしたら」

「……………助かった、つて言えばいいのかな。あたしは途中で戦えなくなるわ、槍の破片で

「一般人巻き込むわで、響を殺しかけた」

「……………」

「そう言われながら、やはり自分の胸にある破片がどの時の物か、分かったんだろう。」

「生きててくれて、よかったよ」

「……………」

「あんたがノイズを倒してくれたから、助かった人もいる。本当に、よかった」  
そう静かに言うが、

「本当にそう思うか」

そう、一真が言った。

「……………それは」

「あんたも聞いたはずだ、生き残った被害者を、世間一般がどう扱ったのか」

「ッ!!」

その時、顔がゆがんだ。分かっていたようであり、それに黙り込む。

一真はそれ以上は何も言わないし、私も何も言うことは無い。

もう遅すぎる。意味なんて……………

「! ノイズか」

そう一真が言い立ち上がり、すぐにチェンジビートルを取り出すと、蠢いているが、

「最近多く無い?」

「……………この感じ、まさか、ノイズの空間に誰かか干渉しているのか」

「なにッ!?!」

それに天羽奏は驚く。私だって驚く。

「どういうこと一真」

「ノイズは元々、別の異空間に貯まっているのは、前々から分かっていた。それから漏れ出した物がいままでのノイズだが、最近のは開け閉めされている感覚だ」

色々初耳なことが多い、前々から空間から出て来るノイズを倒しまわっていたのだからと、語ってはいたが、ここまで酷いとは。

「誰かが、ノイズを取り出してる!?! そんなこと可能なのかっ」

「ともかく今回は広いぞ、そろそろ警報も鳴る」

そう呟いた瞬間、警報が鳴り響いた。

「気が進まないけど、今回はあんたたちの指示に従う。私は一真と違って、ノイズを感知できさない」

すでに飛び出しているし、あの野郎。

「それは助かる、藤堯さんっ、聞こえるか」

『聴こえますっ。現在、ノイズを確認。数が広いと言うより、ばらけています。広範囲に被害拡大の恐れあります』

「なら別れるか、一真つてのは」

「一真なら数が多いところか、一番反応が多いところに出向く。私らはそれ以外」

「だそうだ」

『分かりました、なら』

話を聞き、私はノイズを壊す為、仕方なく指示を聞き、動き出す。

壊す事しか、この手にはできない。言われたポイントで壊し始める。

「ふんッ」

壊すことしかできない私は、生きていてはいけない。はずだった。

「イライラする……………」

だけど、意味はできた。ノイズを壊すと言う意味。

「私をイライラさせるなッ」

暗闇の公園で、ノイズを一掃する。インカムは天羽奏から渡された物を持ち、破壊の後を見ながら、静かに周りの煤を見る。

「こっちはあらかた片付けた、目視できる範囲にはいない……………」

スピードのAを取り出す。だがいまだ蠢くそれを見て、まだ何かあると思った時、鎖のようなムチが放たれ、それをマフラーで弾く。

いまの攻撃は、

「誰だ」

「へえ、いまのを防ぐか。融合症例」

白い甲冑姿、バイザーを付けて、トゲの付いた鎖を持つ銀髪の女が現れた。

……………一真が見たら、まず目を閉じそうな子だ。シンフォギアを纏うとき、初めのは急だから分からなかったが、意識して使えるようになる、一真は目をそらす。スーツに成る際に見えるらしい。気にすることも無いことを気にする化け物だ。

とりあえず下乳が見える白いギアの不審者に話しかける。

「融合症例？ 私とギアの関係か」

「そう言うことだ」

その子は何か銃のような杖を構え、操作すると、ノイズが突如として現れた。

「……………さすが最強の化け物、本当にノイズを取り出せる物があるのか」

「ソロモンの杖って言うんだ、大人しく来てもらおうぜ」

「アア？ 寝言は寝て言え。私はノイズを壊し尽くすツ、巻き添え食らいたくなきや、家に帰るな銀髪チビツ」

「チビ言うなくそがツ」

歌を詠いながら、ノイズを壊しながら、その子へと迫る。

その子へ拳を振るうが、

「!？」

「馬鹿がッ」

そして弾き飛ばされる中、何度か地面に跳ね上がりつつ、その様子を見る。

拳は命中した。だけど、

「スペックが違い過ぎる」

鎧の装甲はそう厚くはなさそうであり、肌やら胸も露出があるのに、なぜかこのガングニールよりも固く思える。

「こいつはネフシユタンの鎧って言う、完全聖遺物なんだよっ。欠片風情が、良い気になるなッ!!」

「完全聖遺物……つまり欠片じゃないシンフォギア」

なるほど、欠片とそうじゃ無い物じゃ、能力に差ができて当たり前か。

そう考えている時も、左右からノイズが迫り、それを吹き飛ばす。

気のせいか、何か狙っている。私の体力を削る気か？

「大人しく捕まれ、それと、そのカードを渡しやがれッ」

そう言つて、鎖を放つ銀髪チビ。

いま、なんて言つた？

「お前、一真の、チェンジビートルも狙ってるのか……」

それを知り、静かに、

「……………殺すッ!!」

能力差がありすぎる中ためらいもない。奥ノ手ヲ使ウッ!!

◇

「奏っ」

「翼聞いたか!? ネフシユタンの鎧を着た奴が響を襲ってるっ」

「忘れるものか、自分達の不甲斐なさで奪われたものを」

その時、黒い柱が立ち上る。それに驚きながら、インカムから声が、

『フォニックゲイン上昇っ、これは、どうして!? 響ちゃんのガングニールが現在とてつもない高エネルギーを発生!!』

「なんだって!?!」

二人が急いで現場に来ると、黒い光に覆われた響が、光を払い、現れた。

急に周りの温度が上がり、溶岩でも近くにあるのかと思うほど、熱い熱気が放たれる。

「な、なんだそれ。聞いてねえぞっ!?!」

【言ウナラバ、シンフォギアガングニール、暴走状態っ。行クゾ、がキッ!!】

鉋物のような鋭い爪を持つ響は、赤い眼光を光らせ、燃える炎を纏いながら戦いだす。

今度は完全に互角の戦いを始め出すが、周りの破壊が凄まじく、公園が少しずつ形を変え出す。

「これって」

その時、バイクと共に、カリス状態の一真が現れ、響を見る。

「響の奴、また暴走を起こしたのか」

「おいッ、どういうことだよ!!」

奏の言葉に、周りのノイズを撃ちながら、

「響の中にあるガングニールは、心臓から響の中に根付いて、響の身体自体を変え出していた。それを俺の力で元の状態や、問題がないように欠片に干渉した。そしたら響の奴、勝手にいまの姿、肉体の進行を引き換えに力を引き出す状態を作り上げた」

「なっ」

「いまは問題ないが、長時間連続使用は命を縮める。急いで加勢する」

《トルネード》

風の矢が残っているノイズを全て撃ち、急いで響の下に向く。

【一真っ】

「来いッ、チェンジビートル」

その言葉に、カードがふわりと浮かび上がり、一真の下に来ると共に、



「変身」

『ターンアップ』

ブレイドへと変わり、左腕につけた『ラウズアブゾーバー』を出現させる。

《アブゾーブクイーン》

山羊のカードが鼓動すると共に、もう一枚取り出す。

《フュージョンジャック》

鷲のカードのエンブレムがアブゾーバーに組み込まれた瞬間、僅かに鎧が変化する。

羽のようなものが取り付き、刃先が伸び、金色の紋章を胸に、黄金が組み込まれた。

「ハッ」

羽を広げ、飛翔し出し、それにもネフシユタンの鎧の子は驚愕する。

「ここで飛ぶって、ふざけるなッ」

《スラッシュ サンダー ライトニングスラッシュ》

轟雷が剣に宿り、ノイズを切り払いながら、ネフシユタンの鎧へと迫る。

【一真ッ】

「響ッ」

大きく旋回しながら、響は両足で思いっきりネフシユタンの鎧を吹き飛ばす。

今度は向こうがバウンドしながら、響は両腕を後ろへと広げ、爆炎のように炎を吹き

だす。

【ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア】

《スラツシュ》

トカゲのカードが全てを切り裂き、

《サンダー》

鹿のカードが轟雷を纏いながら、ブレイドの周りを旋回し、

《マツハ》

ジャガーが高速しながら、三枚のカードに全ての力が集まる。

《ライトニングブーム》

天空に飛ぶブレイドが一つの雷鳴と化し、高速飛翔し、地面すれすれに飛び、ネフシュタンの鎧へと迫る。

同時に獣のように動き回り、響も迫る。

「く、来るなあああああ」

ノイズを取り出ししながらだが、少女の行為は無駄に終わり、獣と雷は少女を吹き飛ばした。

◇

【グルルルルル……………】

「響」

人の姿に戻り、その胸に触れながら、その瞳の色が変わる。

緑と赤、その色に変わると獣のようになっていた響の身体が一瞬跳ね上がるが、同時に影が消え、熱が引き、元の姿へと戻りだす。

「……………エツチ」

そう言つて胸を触る手に触れる。驚掴みと言う奴だ。

「おまつ、ゾウユチカダナンジャカラジタガナイダロっ!!」

そう言つてすぐに問題はなくなつて、響の胸からすぐに手を放す。響は呆れながらそれを見る。

後ろの二人は？な顔で、一真を見る。一真の滑舌の悪さは初めてだった。

「気にするな化け物。本当に……………」

「お前な……………」

ノイズも余波で吹き飛ばし、響はその場に座り込む。

そこへ奏や翼が駆け寄ってくる。

「おい響、平気かつ」

そう言つて手を伸ばすが、その手を払いのけて立ち上がる。

「平気だよ、この程度」

「おいッ、なんでそんな、命を縮めることするんだつ。そんなこと、誰も」

「私が望んだからそうしてる、一真もいるんだ。そうやすやす死んだりしない」

「そう言う問題じゃないだろつ」

「うるさいつ、あんたたちには関係ないだろ!!」

「関係あるッ、あの日、お前を救つたあたしには」

その言葉に、響は、

「ふざけるな」

静かに拳を握りしめ、睨むように奏を見た。

「ふざけるなッ」

「響……………」

「なにが救つただッ、あの日、私が生き残つた所為で、どんなに全て壊れたか知らないくせにッ、いまさらいい人面してるんじやねえよッ」

その叫びに奏は驚き、翼は前に出るが、響の叫びは止まらない。

「あの日生きることを諦めなかつた私にッ、待つていたのは地獄だつた!! 大切な親友は私に連絡無しでいなくなつて、リハビリの中、看護師から陰口言われッ、学校じゃ人

殺しと言われ続けた!!」

「んな、んなことないだろ。お前は」

「誰もそんなの知らないツ、あの時の私のことなんてどーでもいいんだよツ。家では石を投げられたり、お父さんが仕事を無くしたり……あの日私が生き残ったから、私は家族をこの手で壊したんだツ」

「ち、ちが」

「違わないツ。違わないのならなんで、なんでお父さんは家を出て行った!!? なんで家でお母さんは泣いてた!?! なんでみんなして私を人殺しと言いつつたツ!?!」

その言葉に、奏は殴られるよりも目まいを起こしかけ、視界がゆがんでいく。

響が、目の前の少女の叫び声が、嘘ではないのが分かるから……

「あた、しは……」

「一真だけだ……私の拳、私の存在は全て壊すだけだ。だけど一真は壊れない、不死身の化け物だから、だから私は一真の側にいる。ノイズを壊す為にも、一真の側に」

「ひび」

その時、一真は背後から放たれる。ノイズの弾丸を弾く。

それに全員が我に返り、振り返れば、

「……………」



ジョーカーと言う化け物の姿に、二人の装者は驚くが、

一人だけ違った。

「…………お前、やつぱり、一真……………」

ネフシユタンの鎧の子がそう驚き、震える腕で、ノイズを放ちまくる。

「なんでお前、いや、もしかして」

ノイズを払いながら、それに気づくと、口元を釣り上げた。

「あつははは……………やつぱりだ。フィーネから話を聞いて、戦って、やつぱり……………私を捨てておいて、お前は……………お前はッ」

怒りのままノイズが集まり、巨大ノイズがいくつも出現する。

「ふざけやがってッ、絶対に、絶対に私は、お前を殺すッ。待つてろッ、一真!!」

そう叫びながらその場から離脱し出す中、追おうとしたが、巨大なノイズが目の前に現れる。

【邪魔だッ】

だがジョーカーはすぐノイズを倒した。それは蚊を払うように簡単に、煤だけが大量に舞い上がる中、後を追おうとしたが、すでに少女の姿は無かった。

それに呆然となる中で、はつとなり、すぐに辺りを見渡す。

【……………響】

響も、いつの間にかいなくなっていた。追ったと言う感じではないが、人の姿に戻り、辺りを見渡す。

「……………ともかく響を探すか」

「ま、待ってくれ」

奏は一言、そう言うが、

「……………あの子は」

一真は僅かに迷ったが、静かに、

「俺と出会った時、もうあの子は生きる意味を無くしていた。お前達、人じゃあの子は救えない……………本当は、人じゃなきゃ、いけないのにな」

【!!】

「俺から言えるのはそれだけだ」

それだけで奏は知ってしまった。少女の心がかなり壊れていることを。

一真は響を探す為、その場から去っていく。

奏はしばらくして、涙を流し、その場に座り込んだ……………





「……………なんでだよ一真」

あの姿、カードを見せられてから、もしかしたらと思っただけ。やっぱり、一真だった。

私を捨てておきながら、彼女は他の女を連れまわしている。

「許さねえ……………」

一真は死なない。なら殺すくらいがちょうどいい。

「絶対に許さねえ……………」

一真は私のだ。誰にも渡さない。

「覚悟しろ一真、アンデッドジョーカーツ。世界で一人だけの、不死の怪物!!」  
静かに決意する少女は、目を睨みつけた。

## 第5枚・一真

それはパパもママを失い、捕虜として大人達に捕まっていた時だ。

どうやら私は大事な商品で、無理矢理小さな檻の中に入れられ、これからどうなるか、当時は分からず、震えていた。

大人は何を言ってもやめてくれず、私はこれから酷い事になる。そうとしか分からなかった。

彼奴が現れるまでは……………

眠れぬ夜、銃声が響きながら、耳を防ぎ、身を縮ませていると、目の前に、血まみれの、私を無理矢理ここに押し込めた男が倒れた。

「ひっ」

小さな悲鳴の中、誰かが入ってくる。

それは人じゃなく、化け物だった。

青色の姿、ベルトに青色のハートみたいな機械をつけて巻いている。身体は鎧を着た何か。

その身体から緑の血を流し、両腕に刃物が付いている。その刃先は赤く染まってい

た。

もう片手に剣のようなものを握りしめて、化け物は部屋の中を見渡し、こちらに振り返る。

怖くて怖くて、他にいる子達も騒ぎに気づき、泣き叫ぶ。

化け物が右腕を大きく振り上げた。

私は目を瞑ったけど、どこかで安心していった。

これでパパとママのところに行けると……………

目を閉じて大きな音が鳴り響いた瞬間、金属音が鳴り響いた。

化け物はオリと鎖を壊す。

「えっ……………」

【まだ終わってない、ここにいろ】

そう言って、化け物は私達を繋ぐ鎖や手錠を壊してくれるのだ。

それでもそれが怖く、恐ろしいなにかなのは変わらない。何人かは怯えて泣いていたが、私は不思議と、もう怖くなかった。

【すぐ終わらせる】

そして化け物はそのまま外に出ると、銃声が鳴り響く。それが鳴りやむまで、私は静かに待ち続けた。

全てが終わり、化け物はもう出て平気だと言って、私達に缶詰や水が入った木箱を置く。

そしてそのまま、人の姿に変わった。

血の色だけが変わらなかったが、黒い髪と黒い瞳の男で、男はそのまま、

「騒ぎを聞きつけて、いま保護する人が来る。ここにいろ」

そう告げて、男はそのままどこかへ出向く。

「……………どうしてついてくる」

「……………なんで」

私は、なぜか化け物を追って歩いていた。

だいぶ歩いて、もといた場所から離れかけたときだ。

しばらくして化け物は話しかけ、そして尋ねた。私は、

「なんでもっと早く助けてくれなかったんだよ!!。パパとママは死んだんだッ、なのに、なのになんかいますから、いまさから助けやがってッ」

そう叫び、化け物に言った。

我ながら理不尽だ。あの時、パパやママが死んだ時、こいつは側になんかいなかった

のに、私は自分だけを助けたこいつを許せなかったんだ。

それを聞き、化け物が近づく。殺されてもいいと、私は思っていた。だけど、

「ごめん……………」

そう言つて、私を抱きしめてくれた。

受け入れた。理不尽極まり無いことなのに、化け物は受け入れたんだ。

「助けるのが遅くて、ごめん……………」

その後からほぼ記憶は無い。ただ泣いた、泣いた記憶と、忘れたい記憶しかない。

一真とはその後、一緒に旅をした。

大人は信用できないと、そう言つて何度も困つた顔をする一真と行動する。

一真は、大人達と戦う。ずっとだ。そんな日々の中、

「いいか、ここにいれば保護される。だからここにいろ」

「なんでだよツ、なんでだよ一真!!」

五年後、一真は急にそう言い始める。

いや、前々から一真は私のことを考えて、何度も人里で情報を集めていたことは知っていた。そして何度目かのやり取りだと思つていた。

だけどその時の一真は引かないまま、かたくなに私を置いて行こうとする。

「お前は人間で、俺が化け物だからだ」

「そんな、そんな理由」

分かっていて、化け物である一真の足を引つ張っている。一真を縛り付けている。だけど、いまなら分かる。本当はそれが嬉しかった。

私だけの一真、私だけの化け物。私を理解する、私だけの。

そして一真はパパとママの夢を、化け物だけど同じように見ていると……………

「なのにッ」

彼奴は私を置いていった。人間だから、そう言つて国連に、大人に預けて私を置いて行つた。

だから私は力を欲したんだ。彼奴の側にいられるために、大人なんか頼らなくてい力が欲しい。一真の側にいられるためにも……………

再会した彼奴の側に、別の女がいる。

そこは私のだッ、私の、私の一真ッ。

フィーネに教えたのは一真のジョーカーの、緑色の姿だけだ。他にもいろいろあるが、言うつもりなんかはない。あれは私のなんだから。

「誰にも話さないし、渡さない……………」

その時、私は彼奴の顔を思い出す。

「融合症例一号……………」

そこは私の居場所だ。お前のじゃない……………必ず奪い返す。

一真は殺す。殺して、殺して殺して殺して殺して殺して殺して、殺し続けて、傷付け続け、私のだと言う証を刻む。痛みを与え続ける。

一真は私のだ。あのバカは、私だけのバカなんだッ。

「はははっ……………」

考えただけで、笑いがこみあげて来る。

待ってる一真、すぐに殺すからな……………

◇

「ブッハシヨンっ!! シャケカ?」

アンデッドは風邪をひくことはないだろ。私は呆れる。

いまの寝床。静かに身体を休ませる中、そろそろあのチビの話をするか。

「一真、あの子のこと知ってるの」

「……………俺が日本に来た理由だ」

「確か、人売りしてる組織潰した時に拾ったおもらし少女のこと?」

これ、本人が他人に話したこと知れば、比喩無く殺すだろうな。一真不死身だもん。一真のことが怖くて、最初おもらししたらしい話。後について来た時、しばらくして気づいて大変だったと……

日本に来た理由としてそのエピソード言うんだもん。私なら、必ず殺す。

途中まで一緒にいたけど、少し大きな組織を根本から潰す為に、もう連れて歩けなくなったらしい。というより、私くらの年頃の子になつたから、これやばくない？つていまさらながら思い国連に預けたらしい。

だからこの化け物はバカなのだ。考えずに連れまわしてたら美少女になるけど、同時にがさつな子になっていって、本当にまずいと思つたらしい。親御さんに申し訳ないからと、人の中に戻したら、行方不明。

だから日本に来たら、コンサート事件に遭遇して今に至る。

こいつは時々、別の意味で本能のままに動きすぎるんだよね。

……イライラする。色々な意味でイライラする。

そう思っていると、

「誰か来る」

私は立ち上がり、構えていると、すぐにやめた。敵わないからだ。

風鳴弦十郎、その人が訪ねてきた。



「すまない、力を貸してほしい」

話としてはこうらしい。あの秘密基地の地下には、完全聖遺物『デュランダル』があり、そして防衛大臣暗殺事件が起きた。

様々な思惑が重なり、二課にあるそれが狙われていると推測される。

それを別の場所に輸送する計画があり、できればと頼まれた。

「その話、あの鎧の子も出る可能性はあるか」

一真がそう聞くと、風鳴弦十郎は静かに頷く。それに一真は決めるのには十分だ。

「響はここにいろ、輸送は俺が守る」

「なんで」

そうイラつきながら答える。

「あの子を捕まえるのなら、手を貸す。てか、ノイズは私がこの手で壊す。一真にだってそれは否定させない……………」

「……………そうか」

「……………すまない」

そう話が纏まり、私達は動く。

だけどイライラする……………私をイライラさせないでほしい……………



立花響、ツヴァイウィングコンサート事件の生存者。

二年前の事件にて、ガングニールの破片が心臓付近に刺さり、重傷を負うものの、回復し、リハビリ後退院。

だがその後、彼女の父親蒸発時に姿を消す。

その後は行方不明。現在も捜索願は出ている。

学園生活など、風評被害に遭った形跡有り。それが原因であると考えられ、それは天羽奏、風鳴翼と言う少女達の心を揺さぶるには、十分だった。

「緒川、二人は」

「表向きは立ち直つてますが、父親の蒸発や、学園内でのいじめなど……軽く当時のネット掲示板も調べておきました。無論、一課に問い合わせ、消させましたが」

「酷いつてもんじゃありませんでしたよ。事実を知る我々からしたら、ぞつとする内容ばかりの尾ひれでした」

「そうか……」

藤堯の言葉にコーヒーを飲み、紙コップを握りしめる。

これは自分達の失態だ。

「このような形で、あの日の失態が顔を出すか。いや、目を背けていたのだろうか俺達は」

あまりのごたごた、畑違いから対処も他人任せ。それがこの結果だと、歯を食いしばる。

「奏さんや翼さん、二人のフォローは僕が」

「すまない、俺はその間、やらなきやいけないことをする。ここが俺の踏ん張り所の一つか」

そう言い、紙コップを捨て、次の作戦について考え込む。

「……………この状態では翼達と合わせては戦えない、二人は俺と行動させ、一真くと響くんに、デユランダルの警護を任せるか」

「それしか無いですね」

緒川の言葉を聞き、いまはこうして、作戦は決行するしかない。



バイクを二台あり、一つは『ブルースペイダー』であり、それに響が乗り込む、ハン

ドルは持つだけだ。操縦などは自動に動くから、それ任せだ。

もう一つは一真が乗る『シャドーチェイサー』に乗り、カリスへと変わっている。

「は〜い♪ 二人とも♪♪」

「……………」

「あんたが櫻井了子か」

カリスの姿で陽気に話しかける者は少なかつたが、話しかけて来る者がいた。

「ええ♪ できる女、桜井了子よっ♪♪ 一真くん、よね。できれば今度メデイカル  
チェックさせて、もらうわけにはいかないようね……………」

途中から響から鋭い殺気を受け、渋々引き下がる了子に、一真は何も言わないが、

「あなたに少し話がある、響の中の欠片だ。できれば時間があるときに聞きたい」

「あら、デートのさそ、いや、もう。時間ならいつでも作るからね〜」

響からの殺気の所為で、変に冗談も言えず、渋々自分の車に乗り込む。あそこにデュランダルがある。

獣のように鋭い眼光の中、静かに、

「イライラする……………」

そう呟きながらも、行動を開始する。

複数の車と共に、輸送先までついていく二人。ヘリが二台空を飛び、そこに二人の装者が乗り込んでいる。

司令官である弦十郎さんもいて、そして、

「来るぞ」

「！」

ノイズの群れが、襲い掛かってくる。

◇

カーチェイスの中、化学工場らしい場所にたどり着き、バイクを捨てるしかなく、私はここでノイズを睨み、握りつぶす。

「誘いこまれた……………!?!」

鎖を放たれ、それを避け、相手を見る。

「よお、また会ったな融合症例第一号」

ノイズを従えて、チビが現れた。

「……………ああそうだな、おねしょ少女ちゃん」

それを聞き、バイザー越しでも分かるほど真っ赤になり、鎖を握る手が強まり、トゲ



「なにッ」

「あれは、デュランダルッ!?」

確かに剣のようなものであり、それが僅かな光を放つ。

おねしよちゃんがそう眩き、舌打ちを盛大にし、急いでそちらに跳ぶ。彼女も跳んだ。このままあれを渡すのは癪に障る。絶対に渡さないため、足蹴にしてさらに跳ぶ。そして剣を手にした瞬間、世界が暗転した。

◇

「ッ!?!」

柱のような黒い光が立ち上ると共に、悲鳴が聞こえる。これは、

「響ッ」

その時、何か吹き飛んでくるため、受け止める。それは、

「クリス……………」

「かず、ま……………」

バイザーが僅かに碎け、片目だけが忘れられない。その顔……………

「やっぱり、俺のこと見てもらしたクリぐふっ」





放たれる矢は、柱へと激突するが、その場に止まるだけであり、勢いは殺せていない。

「響、一真ッ」

翼や奏が後ろから話しかけてくる。だが、構ってられない。

「この一瞬があれば」

その瞬間、響から一枚のカードが飛び出て、それを使う。

『ターンアップ』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

全ての過程を飛ばし、13のカードが黄金へと変わり、全てが自分の中へと戻る。

これがブレイド、これが俺の、最強の姿の一つ。

スロットにラウズカードを差し込む暇は無い。ただ力を、13の力を『重醒剣キング  
ラウザー』へ流し込み、ただ振るう。

「オッリイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

黒の柱を叩き折る、黄金の一撃。

暗闇を斬り、反動ですぐに変身が解けたが、俺はすぐに響へと駆け寄った。



「響」

急いで響の側でリカバーを使う。呼吸も正しく、問題は無い。

緑の血を流しながら、周りを見る。余波だけでノイズは消し飛び、クリスは……………

「もういない……………クリス……………」

腹の傷は、もう塞がっていた。

だがクリスになにがあった？ それが分からない。

そうこうしていると、二人の装者が近づいてくる。

「あんた、傷が」

「俺は不死身だ」

奏にそう言い、響を見つめながら、その手を握りしめる。僅かだが、その手は握り返

された。

「貴方は、やっぱりあの時の……………」

あの一瞬で、あの日の姿を見られたようだ。

一真は少しだけ目を閉じながら……………

「……………俺があの時、もっと早ければ、響をこんな風にはしなかった」

「！ 違うッ、そんな「そんなことあるッ」」

この小さな手を握りしめながら、

「俺はジョーカーツ、不死身の化け物だ!! あの日、もつと多くの命を救えていればッ、もつと多くのノイズを切り伏せていれば、この子の人生を壊さずに済んだんだッ」

ネットやテレビなんて見ない。本能のまま静かに戦う。

声が聴こえ、そこに出向き、本能のまま、獣として戦う。怪物、不死の戦士アンデット。

だから知らなかった。あの日、の生還者、その中で風評被害が広まっていたなんて……

「あんた……」

「俺が助けられなかった、もつと大勢の人を助けたかったッ。俺は、俺が遅かったばかりに、この子の人生を守れなかった、大勢の人を救えなかった」

もつと早く声が聞こえていれば、もつと早くノイズを感知すればよかったと、彼は叫ぶ。

「それは我々として同じだつ、あの場にあなたがいなければ、被害はもつと」

「被害に大きいも小さいも無いッ」

「ッ!?!」

二人はその言葉を聞き黙り込み、静かに響を持ち上げる一真。

「俺は守る、そして戦う。戦えない、全ての人の為に、俺は戦う……俺は運命と戦い続

ける。言い訳も何もしない、俺はこの子を救えなかった。だからこそ、いまの俺はこの子を支える、全てを、支えると決めている」

その瞳を見て、二人は黙る。弦十郎もヘリから下りて、それを見た。

本気で言っている。彼は、本気でそう決意している。

「俺は全てを守る為、戦い続ける化け物。仮面ライダー……………ブレイドであり、アンデッドジョーカーだ」

そして化け物の姿に成り、そのまま響を連れていく。

「こんな事態だ、もうデュランダルの輸送はいいだろう。この子を連れていく」

「……………ああ」

弦十郎とすれ違いながら、彼はそう告げて消えていく。

負傷者は出たが、誰も死なない。

それでも彼は背負う。なにも救えない罪を背負い、永遠に戦い続けるために……………

## 第6枚・救いたいもの

あの後、響を連れて帰る中、俺は本当にこの子を救えているのか分らないと感じた。俺は化け物なんだ。もう、人の中に生きていられないのに、もう人間と共に生きていられない。

だけどこの子と離れることはできない。俺はどうすればいい、始……………

◇

デュランダル輸送に失敗したこともあり、少しばかり響の肉体を見る。

完全聖遺物の力がどんな物か分からないが、響の中で多くのエネルギーが暴走し、何かに引っかかり、力を吐き出した。

あの黒い姿、鉋物の生成なども考えると、少しばかり前に出る必要がある。

「すまないな、待たせてしまった」

「いや」

現在、響の治療を終えた後、前に聞いた彼ら二課の地下施設へとやってきていた。

風鳴弦十郎。二課と言う機関の司令官。烏丸所長のような人なんだろうかと思いがら、この人に響の状態と、現状そちらの状態を聞く。

暗殺事件の所為で少しごたつきながらも、デュランダルは引き続き、ここの地下で保管する。そのために、この施設の防衛強化など、色々あるそうだ。

響のあれは、完全聖遺物デュランダルの力。眠っていたが、響の歌で目を覚まし、完全に起動したらしい。

「君にも、少し話したいことがある」

「なんだ」

「あの、ネフシユタンの鎧を着ている装者。知り合いか？」

その言葉に、女性からコーヒーを渡されながらも、それを断る。

「知り合いだ、俺がどこかの国の、人売り組織を壊滅させたときに、俺の正体を知りながら、ついて来た子だ。名前はクリス。それしか知らない」

「！」

僅かに驚くものの、そうかとしか答えず、コーヒーを飲む弦十郎さん。

「君は飲まないのか？」

「俺は飲み食いする必要が無いんだ、あまり人側に成りすぎると、また戻るときが辛い」

その言葉に、弦十郎さんは考え込む。

「それは」

「俺は人の世界を生きていた頃がある、そして、いまは化け物、ジョーカーだ」  
別に隠すことなんてない。俺のことを調べたところで、アンデッドのことが分かるのなら、色々手遅れなところがある。

それが無いのなら、現代科学などでは自分は理解されないモノなんだろう。

「ジョーカー……君の目的はなんなんだ」

「戦い続けることだ」

迷いは無い、もう全部を決めた、運命を受け入れ、抗うと決めたあの日から。

「戦えない者達の為に、仮面ライダーとして、ジョーカーとして、運命に挑み、戦い続けること。だが、いまは響だ」

聞きたいことがある顔をするものの、響に関する言葉に飲み込み、静かに聞く姿勢に入る。

「響は、ノイズを憎む事で、やっとまともでいられてる。戦うことで、響はまだ、人間だ」

「それは……」

苦虫を噛むように、それを飲み込み、受け入れる。

分かるのだろう。響がそうなる理由を知ってしまったが故に。

「できれば、完璧かはやってみなければ分からないが、欠片は取り外そうと思えば、外せ

る可能性がある。だが、いまはそれができない。外せば、響は戦えない。その先は「あの子の自我の崩壊、か……………」

なにより、欠片がある場所が心臓近く。手の出しようがないとも伝えておく。

俺の力では取り除けない可能性が高すぎる。

「だから、俺は側にいる。クリスは戦う術が、憎むべき相手がいなかったから、別の道を進めると信じた。だが響はもう選択肢が無い。ノイズと戦い続ける、それ以外の事を、もう考える事すらしていない……………俺は救うと言いながら、響を戦いの道具にしている」

「それを君だけに言わせることではない……………俺達の不注意もある。聞いてくれ」

それはコンサート事件の裏、とある実験の話だ。

あのコンサートは、聖遺物実験場でもあり、それが失敗した結果が、あの悲劇らしい。「全ては当時の俺の責任でもある」

「いまさらだ、俺だつてその場にいたんだ。手のひらで拾える命は、少なすぎる」

こんな身体、こんな力を得ているのにな……………

「……………君は」

「化け物でも、俺は、俺は救いたい。人を、大切な人を。響の手は、壊す為にあるんじゃないってことを、俺は伝えられない」



「真くん……………」

「人間を救えるのは、やっぱり人間なんだろうな……………俺じゃもう、人間は救えないのかもしれない」

そう言って、俺は二課を後にする。

弦十郎さんがずっと俺を見ていたが、俺は気にせず、歩くことしかできない。

◇

「ぐっ……………」

頭の中がガンガンする。身体が僅かに変化しかかる。

(この前のが、くそ……………)

アンデッドの本能。戦闘本能がざわめく、敵を探して戦えと叫ぶ。

俺の敵はなんなんだろうか？ もうわけが分からなくなるぐらい戦った。

夕暮れの中、崖、道路？ 言語が思いつかない。峠のような場所で沈む日を見る。

何を俺は言って、いや、もう、だめだ、分からない……………

「何度目だったっけな……………太陽が沈むのを見るのは」

そう呟くと、

「んなもん、海ん中にいた時数えてないからわっかんねえだろテメエ」  
その言葉に気づき、すぐに振り返る。

「……………よお、ジョーカー……………苦しそうだな」

「クリス……………」

そこにいたのはクリスだ。

「おも」

「殺すぞ」

「ズイバゼンツ」

鋭い眼光を受けて即座に謝る。そして静かにクリスを見る。

「クリス、その身体はどうした。お前」

クリスの身体はボロボロだ。何かの負荷が強くかかっている。相当な無茶をしている。  
る。

だが、それに答えず、不敵に笑いながら、

「一真、もうすぐなんだ。もうすぐパパとママの夢が叶う、世界から争いが無くなって、もう一真が戦わなくていい世界ができるんだ」

「なにを、言っている」

クリスの顔色は悪い。笑顔なのに、目は黒く、光は無い。目が笑って無い。

俺はやはりもう人間を救えないのか、そうクリスを見て思ってしまった。

「一真だってもう嫌なはずだろつ。ずっと戦ってきたじゃないか？ 戦えない奴の代わりに、その死なない身体で、ずっと化け物って言われながら戦った。もういい、もう十分だつ」

「クリス……お前は、争いを無くすために、いまいるのか」

「そうすればもう終わる……そうだろ？ 一真……」

それは俺の、両親の夢の為に、ここまでなってしまったのか。

「フィーネの言う通りにすれば、もう少し、あともう少しなんだ一真」

その言葉を聞きながら、

「……………そいつがお前を、狂わせたのか」

「……………抵抗するな一真、もう戦わなくていい。私達のとこに来てもらう。もしかしたら、人間に戻れるかもしれないんだつ」

「クリス、俺は戻る気も何も無い。戻っても変わらない。俺は、戦えない全ての人の為に、俺は戦う」

「それを私は、殺してでも止めて見せるッ」

ネフシユタンの鎧を纏い、鎖を振るう。すぐにカリスに成る為に、カードを構えようとしたが、

「!」

自分の聴覚が、人の声を聞き、急いで後ろを見る。

無数の鎖が迫る中、曲がり角から現れ、それに驚く少女たちの前に、俺は立ちふさがった。

◇

それは、お好み焼きふらわーに、友達三人と共に出向いている時だった。

私はずっと、あの日見かけた親友の事が忘れられず、元気が無かったのが切っ掛けだ。だけど、その日、曲がり角で突如、トゲの付いた鎖がコンクリートを吹き飛ばし、近くの車などが宙に浮いて、こちらへ迫る中、

「させるかッ」

一人の男の人が前に出て、何かが響く。

《スクリュー》

鳴り響くと光が現れ、腕に纏わりつく。その拳で全て、吹き飛ばした。

その瞳は青く、黒色になる。その手から緑色の血が流れ、小さな悲鳴を出してしまう。

「お前に誰かを、傷つけさせない」

「ツツ、そんな目をお前に向ける奴らを守るのかよッ」

その時、見たことも無い格好をした女の子が、私達を睨む。

何が二人の間にあるか分からない。だけど、

「ああ。俺は化け物だ、人から嫌われてもいいんだ」

その人はそう優しく言った。私は緑の血を見たとき、人じゃない。そう思つて、正直怖くて恐ろしかったのに、その人はそう言った。

「巻き込んでごめん、すぐに元来た道を引き換えして」

けして振り向かず、その人は一枚のカードを取り出す。それを金色の装飾をされた物に入れた瞬間、紫のベルトが巻かれた。

「レンゲルか」

「変身」

《オーブンアップ》

蜘蛛の絵柄の光が現れ、その人はそれをくぐる。金色の、蜘蛛のような姿に成り、血が止まる。

「望む望まれないは関係ない……俺は戦う、そう決めたんだ」

それにバイザーの子は、悲しそうに、拳を震わせていた。

彼は武器らしきものを構えながら、私達は静かに、その場から去る。

その瞬間、爆発が起き始めた……



「いまのなにッ、変身って!？」

「あの方、緑色の血を流してました」

「……………」

三人とも混乱しているけど、私は、

(あの人……………私達のこと、ずっと心配してた。化け物……………確かにそう、思ったのに)

そう思う中、爆発がまだ続く中、誰かがすれ違う。

それは灰色のパーカーで、フードを付けた女の子。

それを私は見逃さなかった……………

「響?」

その問いかけに、その子は一瞬止まって、こちらを見た。

「なんで……………」

そこにいたのは、私の、大切な親友だった。

◇

ダガーモードの『醒杖レンゲルラウザー』で鎖を吹き飛ばす。

「本気を出せッ、レンゲルッ」

だがレンゲルは本気を出さず、戦っている様子に、ふと気づく。

「……………こつちを見ろッ、なに目線下げてるんだッ」

「……………前々から聞きたいことがあるんだけど」

そう一真は言いながら、

「スーツの下つて、その、な……………なにもつけてないのか？」

その時私は不死身の化け物を殺そうとしても文句ないと思う。

◇

私と出会ったのは、私の大切な幼なじみ。響だった。

「響、響っ」

「来るなッ」

その言葉に、私は訳が分からなかった。

「響?」

その時、私の中にいる響と、目の前の響が違い過ぎた。

あの笑顔で周りを照らす、太陽のような顔は無く、全てを睨むように私を見ていた。

「響、怒ってるの……………あの日、なにも言わず引越したこと」

「ああそうだ、あの日、私を見捨てて一人安全な場所に行つたこと、忘れる訳がないッ」

その言葉に私は倒れそうになる。

確かに響を初め、生存者全員へのバッシングが酷いと思えないものばかりである。

その言葉から、響はその対象になつたことは分かつた。

「ちが、違うよ響っ。響を見捨てた訳じゃないっ、私だつて引越すのは嫌だつた。手紙

を出すことしかできな」

「手紙なんて一通も送られてないッ、そんな嘘をつくな!!」

そんなことを叫ばれ、私の世界が暗くなる。

手紙が送られてない? そんな、私は、

「そんな、な……………」

「私が一番つらい時、あの日私をあの場合に置いていきながら……………いまさら親友面し

てるんじゃないッ」

「ひび」



「やめろッ!!」

私は、私は、

「私はもう壊す事しかできないんだッ、家族も、友達も、何もかもッ。あの地獄から生きて帰った日から、私の手は壊す事しかできないッ。だから」

その時、歌を歌う。その瞬間、響の姿が変わる。

それに驚きながら、私は、

「私の側にいられるのは、化け物しかいない。ノイズは壊す、一真しか、あの優しい化け物しか、私の側にいられない……緑の血を流す、優しい化け物。世界一のバカしかッ」  
そう言って、爆発が起きる場所に向かっていく。

「響待って、響—————ッ」

私は何が起きているか分からないまま、響の名前を叫んだ。

◇

戦いは拮抗している、当たり前だ。レンゲルはけして本気で戦っていない。

《ゲル》

鳴り響く音は、肉体を液状化に変えるものであり、水のように透明になり、攻撃が効

かない。

「はあはあ……………」

「もうやめろクリス、俺には勝てない」

「黙れ……………」

「クリス」

「黙れよっ」

その時、

「お前がなッ」

横やり、まさに槍のように鋭い拳が放たれ、クリスが吹き飛ぶ。

響の登場に驚く中、響の様子がおかしいのに気づく。

「響?！」

近づくレンゲルに、響は獣のような目で、その身体を貫いた。

「がっ」

あまりのダメージに元の姿、一真に戻り、口から出血するが、

「響?！」

一真は動じず、何も変わらないまま、彼女を心配する。突然こんなことをする、それは最も心が壊れかかっている時だと、知っているからだ。

「……………やっぱり一真だ」

そう、真つ黒の瞳で、響は拳を引き抜く。

「私の手は壊すだけだ……………だけど一真は壊れない」

そう言いながら、笑う。

「響……………」

彼の望む結果を、世界があざ笑うように違う結果として姿を見せ続ける。

「アーマーパージ」

白い鎧が吹き飛び、歌が響く。

「歌わせたな……………」

そして赤い姿、全く違う姿になり、立ち上がる。

「私に、歌を歌わせたなッ!!」

「クリス」

「私は歌が嫌いだッ、お前も、一真は私のだッ。傷つけて、殺していいのは、私だけなんだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

無数の弾幕が放たれるが、それを見て、瞬時に響の前に現れる。

ジョーカー化する中で、弾丸を防ぐ気だったが、その前に、

【壁】

が突如現れたが、

「否ッ、劍だ」

その弾丸は全て防がれ、槍が無数降り注ぐ。それは奏の GANG ニール。それにクリスは舌打ちし、構えなおす。

「響、お前自分がなにをしたか分かってるのかッ」

響の腕は緑色の液体に染まっている。それがなんなのか、彼女達は理解した。

「あなたには関係ないッ。私はもう、あの日から壊すことしかできないんだ」

「ふざけるなッ、お前はそんな、お前らはそんなじゃないだろ？ あたしが来た時、バカみたいに呆れて、仲が良かったじゃないか？ そんな風に傷つける仲じゃない」

「あなたに……あなたに何が分かるッ。私の人生は、もう壊すこと」

「私はそのために、生きるのを諦めるなど言ったんじゃないッ!!」

そう叫び、静かに響を抱きしめる。

「お前に生きて、生きていて欲しかったんだ……響、悲しい事を言わないでくれよ……壊すしかないなんて、そんな昔のあたしみたいな間違い、言わないでくれ」

【奏ちゃん……】

「あなたも、全部受け入れるだけ、自分を犠牲にするじゃねえよ……頼むから……抱きしめられる中で、クリスと睨み合う翼。クリスはガトリング銃を構えていると、」

——もういいわ——

突如響く声に、全員が辺りを見渡す。  
すると、

「フイーネっ」

「フイーネ？」

——言われたこともできない、私に隠し事をする貴方は、もう必要ないわ——  
そう言った途端、白い鎧、完全聖遺物がどこかへと飛ぶ。

「ま、待てよフイーネっ。くっそッ」

【待て、クリスっ!!】

そして前に出るが、無数の弾丸が放たれ、それに仕方なくマンティスに力を籠め、光が刃と成り、放たれ防ぎきる。

【クリス……………】

いまので逃がしてしまい、辺りを見渡すがそれらしい気配が無い。

【……………やっぱり、俺は】

「一真」

【ひび】

その時、響からまた鋭い一撃が放たれるが、それを奏が防ぐ。

「ツツ、邪魔するなッ」

「何度だって止めてやる…………お前の手を、壊す為に使わせない」

「私の手はもう、壊すことしかできないんだッ」

「違うッ」

「……………黙れよ……………なにも、分からないくせにッ」

「それでも、あたしは命を賭けてでも、止めて見せる!!」

「そう言い、睨み合う響と奏。」

「私の手は壊すだけなんだ、だけど一真は壊れない。壊れないんだ」

【響……………】

「あんたたちには分からないよ。何もかも壊れた私の人生の中で、絶対に壊れない一真しか……………私には残されてない……………」

その後何も言わず、その場から去っていく響。それに奏はやつと武器を下ろし、膝をつきながら静かにギアを解く。

【奏ちゃん】

「ははっ……………鼻血が」

鼻血が流れる奏に、一真はすぐに一言かけてから、奏の胸に手を置き、リカバーで身体を治す。

少しだけ頬を赤くしてそっぽを向くが、身体が楽になったのか、すぐに立ち上がる。

【悪いが俺もやるべきことがある……響も、クリスも、俺は、諦めない】

「一真……」

「貴方」

人の姿に戻ると、緑の血を流す中、その姿の中、

「俺は人間じゃない、だからこそできることがある。昔と違う、いまの俺にできることを、俺はする」

そう静かに呟き、歩き出す。

「なあ」

奏はその後ろ姿に、

「どうしてそうやって戦う」

「……」

その言葉を聞きながら、

「俺だから、かな……」

そして彼は全てを追う為に動き出す。その言葉の重みが分からぬまま、奏は髪をかき

上げた。

◇

二課の司令室で、暖かい物を渡されて飲む小日向未来。

彼女から響の過去、それを聞く二課。

彼女も響になにがあつたか知りたいと懇願するため、仕方なく話すことになっている。

「響くんの友達、か……………」

「現在の立花響は、捜索願が出ています。二年前のほんの少し後、父親が蒸発後すぐに行方不明。親の話では服も何も持たず、姿を消しています」

「そ、んな……………」

その事実にはショックを受ける未来。それは装者二人も、何度聞いても受け入れたくない真実だ。

全ての原因は、

「あの日、私達のコンサートが……………」

「……………」



それに黙り込む中、その中で、

「これからどうする旦那」

「イチイバル装者、雪音クリスくんの背後に、終わりの名を持つ者。フィーネがいるのは間違いなさそうだ」

今現在情報不足であり、なぜ響の前に現れたか分からない。

「彼女の特殊な症例と関係があるのか？」

「だとしたら、響が狙われる可能性が高いはず。二課で保護しますか」

「……できれば無理矢理話を通すことができない以上、一真さんに頼むしかないか」

響の性格を考え、そう考え至る弦十郎。

それに、

「前はある顔はしてなかった……」

未来が友達達と共にいる中で、静かに涙を流しながら、

「どうして、私は手紙を出し続けたのに……手紙」

その時、眼を見開く。

「私……手紙……」

「? ヒナ?」

「ヒナさん?」



彼女達は一真の姿を見ている。それに静かに頷くが、

「一真、彼奴はなんなのか分からないが、悪い存在とは思えない」

「ああ、響が不安定な中、ずつと側にいてくれたり、コンサートの時だって、あの人がい  
たから、戦えた」

「ですが、彼は何者なんでしょう」

藤堯の言葉に、女の子の一人が荷物を取り出す。

「あの、その人一真って名乗って、ジョーカーって名乗ってるんですよっ」  
「ん、ああ」

奏の言葉に、静かに、

「アニメか……それじゃ、あの人、仮面ライダー？」

その言葉に、二課全員が驚く。彼自身が言った、謎の言葉。仮面ライダーと言う言葉  
に、それを彼女が口にしたことに驚いた。

「その言葉、いったいどこでっ!？」

「えっ、えっと。都市伝説とかで、語られてるんです。仮面ライダーブレイド」  
「ブレイドッ!? 彼奴の姿の一つじゃないかッ」

それにますます驚きながら、取り出した荷物、ある本を見せる。

「これ、この本。昔の都市伝説を扱う、サイエンスライターの書籍です」

そこにはこう大きく書かれていた。

運命と戦う戦士、仮面ライダーブルーブレイド。

著作白井虎太郎と………

## 第7枚・過去

人類、ヒトが地球を制した背景には、進化論で説明できない理由が存在する。

彼らはそれに仮定を立て、研究する機関。人類基盤史研究所、通称BOARD。

その研究の中、ある事実を彼らは見つけ出す。

それは統制者と呼ばれる存在により、管理された戦い。52種の不死身の存在、アンデッド、『バトルフアイト』の存在。

バトルフアイトは、種族の始祖とも言える不死の戦士達が戦い合い、たった一人の勝者が現れるまで戦い続ける物である。

敗者は統制者が管理する『モノリス』により封印、一枚のカードにされる。

我々人類は、人類の始祖であるヒューマンアンデッドの勝利の下、万能の力を得て、いまの世界が生まれたのだ。

だが、これはその戦いを語る物語ではない。

万能の力に目がくらみ、終わりを告げた戦いを、もう一度幕開けた男。その陰謀の為に、運命に翻弄されながらも、運命と戦い続ける選択をした戦士。仮面ライダーの話である。



仮面ライダーギヤレン、橘朔也。

BOARDに所属する人間で、ある人物がアンデッドの封印を開放してしまう。

結果、解放されなかつた数枚のカードを利用、彼らの力を安全に運用する為のシステムとして、ライダーシステムを創り出す。

そのシステムは不死身である彼らを再封印することができる、唯一の対抗策。

彼はギヤレンと言う第一号のライダーシステムを纏う戦士である。

仮面ライダーレンゲル、上城睦月。

このバトルファイトは、不完全な物と言っている。

第三者により、不完全に封印されたアンデッド達が解放されただけの戦いで、バトルファイトが新たに始まったと言うより、再開されたと言った方が分かりやすい。

そのバトルファイトでは、敗者のアンデッドがいたとしても、モノリスに封印されないことを知った上級アンデッドの一人が、新たなバトルファイトに勝利する為に、彼らライダーシステムの戦士を利用する方法を選び、その所有者に選ばれた学生。

最初はそのアンデッド並び、封印されたアンデッドに操られたりするが、多くの苦難

を乗り越え、完全にレンゲルの力を手に入れた。

仮面ライダーカリス、相川始。

この物語のもう一人の主人公。BOARDの作り出したライダーシステム以外のライダーシステムを使い、アンデッドと戦い、封印できる存在。

当初はすれ違う事が多かったが、その後、この後語る彼のおかげで和解し、全員が仲間として、運命と戦う道を選ぶ。

仮面ライダーブレイド、剣崎一真。

BOARDの新入り、ライダーシステムに適合し、BOARDに入った男であり全てを、運命を変え、そして永遠に一人戦うと決めた。優しくも愚かな男。

おそらく、この本が何年後の世界で読まれていようと、いまだ一人、運命と戦う存在。彼ら四人が交差する中、運命と戦い、不死身の戦士アンデッドと、万能の力を得ようとした男の戦い。そして始まりだ。

終わらせることのできない戦いを終わらすため、運命と一人戦う男の物語を語ろう。



翼はそう語りながら、古い本を読み上げていく。

貸してもらったそれは本当に古く、そして都市伝説として語られるそれは、真実味がある物語であり、そして、本当の話だと、彼らは知る。



相川始は、53番目のアンデッド、ジョーカーと言う存在であった。

それは統制者が課した、最後の試練。全ての生物の始祖から外れたそれは、もしも勝者になっても万能の力と、種族の繁栄は無く、世界のリセットを担う存在である。

リセットとは文字通り、生命のリセット。モノリスから無数の怪物が生まれ出て、星の生命体が絶滅するまで生まれ出る。

彼の勝利は新たな世界創造の為に、現在存在する生命の絶滅を意味する。

これは予測ではあるが、生命のリセット後、再度バトルファイトを開催されると、我々は相川始からも聞いているため、ジョーカーは報われない戦いを永遠にする存在なのだ。

我々の戦いでは、彼以外のアンデッドが封印された瞬間、統制者の意思の下、世界のリセットが始まった。

すべての生物、文化、何もかもを一度無に帰すシステムは、ジョーカーである彼も望



んでいなかった。彼は活動の中、人と手を結ぶと言うこと、誰かと共に生きる事の素晴らしさを知り、それを拒んだ。

だが、統制者はけしてリセットをやめない。我々が助かる為には、アンデッド、全てを封印するしか手が無くなってしまう。

それが例え、相川始と言う存在を慕う者達を悲しませてしまうことでもだ。

その運命を壊したのは、劍崎一真の選択肢であった。



「選択？ それって」

あたしは疑問に思い、翼に問いかけた。読み手である翼も首をかしげたが、

「ここに、別のページで黒幕の男のことが書かれてる」

「なんだと？ それは何者だ」

「天王路博史と書かれています叔父様。彼はバトルファイトを現代で再開させ、自身を研究により、最強のアンデッドになるため、人造アンデッドを創造並び変化させ、自身を勝者にしようとして、ライダーの人達も利用した。」と

「それは」

旦那の顔が歪む。そう言ったのは旦那の嫌う人種だ。いや、誰も好きになれない。

そいつは表向きにも、アンデッド解放事件の責任で組織から脱退したが、その後も裏で暗躍していた。

自分が究極のアンデッドになり、現在の人類を消滅させ、新人類の頂点に立ち、万能の力を得ようと計画。

だがそれは仮面ライダー達によって、阻まれた。

「けど、自分をアンデッドに変えたりするって話ですが、それを含めて、なにを」

「少し待ってください藤堯さん。どうもライダーシステムはカテゴリーA。アンデッドのカード、ラウズカードは、トランプのようなものです。そしてライダーはライダーシステムを使い、カテゴリーAの力を借りて変身していただきます」

「そう言えば、一真も響が持つ、カプトムシのAを使って、変身してたな」

「うん奏。ブレイドはスピード、ギャレンはダイヤ、カリスはハート、レンゲルはクラブのAで、変身してるみたいだよ。カリスはそれが無くても、他のアンデッドの姿になれたみたい」

「トランプ………ポーカーでは、ジョーカーは全てのカードの代わりになるからな」

「続きを読みます」



彼はライダーシステムの中で、上位アンデッドである、スペードのKと融合して、その力を行使するシステムを使用した際、その融合を遥かに超え、13枚のアンデットの力と融合した。

だがそれは人の身には過ぎた力であり、彼の身体や意識は、アンデッド達に操られかける。

それでも彼は、その力を行使した。

最後の戦い、ジョーカーの戦いの中、その力を行使した結果、彼は死んだ。

人として死んだのだ。

13枚のアンデッドとの融合は、彼を新たなアンデッドへと変える。これによって二人つぎりのアンデッドが世界に存在する。

統制者から戦いを求められるが、彼らは戦うことを放棄。

相川始は人の中で生きる。

剣崎一真は、人の世から離れ、たった一人で居続ける選択をした。



「なんだよそれ……………」

奏はそう呟く。私もそれに驚く。

つまり剣崎さんは、ここに書かれているように、ライダーシステムがアンデッドの力を引き出す機能と適合率が高すぎて、もはや融合の域まで達してしまった人間だった。

まるで響とシンフォギア、彼女のようなものではないか。

だが彼の場合、適合し続けた結果、アンデッドになつてしまった。

そして彼は相川さんの為に、人の世界から離れたのだ。

「アンデッド同士が側にいれば、本能と、モノリス。統制者の意思で戦い合う宿命……………」

剣崎さんは相川さんの為に、一人、人々から遠ざかったようです」

「そのような戦いが、過去にあったのか……………」

「風鳴機関も当時活動していたはずですが……………」

「私も疑問に思いましたが、天王路博史を調べた者は闇に消えると書かれています。もしやこの男、風鳴機関や他の国家機関ですら欺き、闇に消していたのだと思います」

緒川さんの疑問にそう答える。

まさかと思うが、この二課設立に深く関わる風鳴機関ですら欺き、情報を消す男。そんな男は、自分を異形の姿に変え、いまいる人類を滅ぼし、新たな人類の頂点に立とうとした。恐ろしい計画であり、思考だと思う。

「た、戦いは、それで終わったんですか？」

藤堯さんが震えた声の中で、私は続きを読む。

「……………いえ、どうも戦いは終わっていません」

◇

その数年後、54体目のアンデッド、アルビノジョーカーが暗躍し、統制者による強制バトルファイトが行われかけるが、剣崎一真達が戦い、全てを終わらせる。

だが、剣崎一真はその時、全てを悟った。

おそらくだが、彼はその時に気づいたのだろう。だからあのようなことをしたと我々は思う。

統制者、モノリスと言うシステムが、アンデッドの本能に働きかけ、いずれ一体になるまで戦わせようとする。

これは封印されたアンデッドを管理する、元BOARD所長、烏丸啓が研究の中、封

印が弱まっていると言う推測から、何十年後、またバトルファイトが始まると推測された。

だからこそ彼は最低で、悲しい選択を選んだ。

「剣崎……………」

「橘さん……………終わりです」

「な、なぜ……………」

突如封印が解かれたアンデッドの一体を再封印した後、アンデッド解放を察し、人の前に現れた彼は、突如昔の仲間刃を向けた。

初めはアンデッドの闘争本能により、戦いだしたと思われた為、我々は困惑の中、彼と戦うことになる。

キンググラウザーがギャレンを討ち、ギャレンが持つカードが舞う。

全て舞い上がり、それと同時に、全てのカードが剣崎一真の中へと入り込む。

「……………行くぞ、睦月」

レンゲルも同じように倒し、全てのカードが彼の中に、そして、

「剣崎イイイイイイイイイイイ」

「始エエエエエエエエエエエ」

その日、彼は戦わないため、最も救おうとした仲間。相川始、人を愛したアンデッド

の為、離れたはずの彼らが我々の目の前で戦い始めた。

二人は戦い、そしてモノリスの前で、決着を付ける。

だが、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

倒されたカリスからも、無数のカードが舞い上がるが、一つだけカリスラウザーを通る。

それは意思を持つように、彼に合わせるように……

《スピリット》

それに驚く中、カリスラウザーを通ったハートの2も、一真の下へ飛んでいく。

現れたモノリス、勝利者を宣言するために現れたのだろう。

だが、

「待っていたぞ!! この瞬間っ」

モノリスへと彼は拳を放ち、モノリスが彼の中に吸い込まれていく。

「俺は、俺はバトルファイトを、戦いを、封印する!! 俺の中に封印されるッ、全て、全てをッ」

その瞬間、彼から理解できない音のような言葉が鳴り響き、この音が鳴り響いた。

《バニティ》

それは生贄を封印し、邪神を呼び出す為のカード。

彼は融合するシステム、そしてカードの力、自分と言う全てを使い。

万能の力も、統制者も、モノリスも、ジョーカーも、ライダーシステムも。

何もかも全て自分の中に封印した。

輝きが止み、全ての力、概念、何もかも。

モノリスすら、剣崎一真と言う生物の中に封印された。

「剣崎……………お前は」

【全て俺の中に、アンデッド、モノリス、万能の力。全てを封印した……………】

そして彼は手を掲げた。その手のひらから光が現れ、無数の空間に亀裂が走り、いくつもの光が空間を壊して溶け込む。

「これ、は……………」

【アンデッド達の意味、始祖である彼らの、彼らだけの新たな世界を創造したよ。俺の願い、全ての救い】

「剣崎、お前、まさか全てのアンデッド達の世界を、創り出したのかッ!？」

それに静かに頷く。彼は全てのアンデッドの意識を別の次元に送り、新たな星、新た



な世界で、始祖になる権利を与えた。

そう告げたとき、我々は相川始から流れるそれを見て、全員が驚愕する。

「これは……………」

【人間になったんだ、お前は】

相川始から赤い血が流れる中、我々の前にいるのは、もはや始祖でもなんでもない、  
ジューカー<sup>怪</sup>と化した、彼だった。

【万能の力、その名の通りだ。統制者から無理矢理奪ったかいはある】

「劍崎……………お前、お前はどうかなんだッ。例え統制者がいなくても、意識を奪われなくても、アンデッドの本能がお前を獣、怪物に変えるッ。お前だけ永遠を生きると言うのか!?」

その叫び声を聞きながらも、彼は何も答えず、静かに後ろに下がる。

後で分かったが、彼は統制者やモノリス。バトルファイトを統制する力、バトルファイト関係、万能の力もまた己の中に封印した。

だからと言って、アンデッドである限り、他の生物との闘い、闘争本能は消えない。永遠にそれと戦い合う関係に、彼はなった。

【始、お前は人間たちの中で生きろ……………これは俺だけが背負う。もう二度と、バトルファイトは起こさせない、もうお前は、運命から解放された】

彼は穏やかに言うが、その時の我々は、叫び声として放たれる。

彼はアンデッドの戦うと言う本能と戦いながら、いずれ一人になる。我々は人間、彼は不老不死の存在。それがどういう意味かはすぐに分かった。

「答える劍崎ッ、お前だけ、お前だけに俺達は、全てを背負わせるのか!!?」

「俺はこれでいい………幸せになつてくれ。さよなら、みんな………」

「劍崎イイイイイイイイイイイイ」

それが我々が最後に見た、彼の姿だ。異形になつた彼だつた。

彼は世界でたった一人、いまもなお一人戦う。

独りぼつちと言う運命と、いまも戦っている。

私がこれを書き上げている中、紛争地域などに謎の化け物が現れ、人々を救うという都市伝説が語られる。

これは都市伝説では無く、一人運命と戦う選択をした、一人の怪物の物語。どうか彼が何年後、何十年、どれほどの時が過ぎても、一人でいないことを祈ろう。



「白井虎太郎………」

その言葉に全員が黙り込む。

「この話、もし本当なら」

「彼は不死身の存在であり、全ての始祖を取り込んだ、元人間……」

驚きを通り越して信じられない。だが、合点が行く。

彼はこうして人で無くなり、響を始めとした者達を守る為に戦う。

ずっと一人で……

「本では、組織の情報などは、当時の所長が全て闇に消し去った。残ったのは都市伝説としての物語だけと書かれています」

「すでに話に出た人物の情報操作と相まって、それで完全に組織の情報が消されたんでしょうね」

「全部背負ったと言うのか、彼は。なにもかもッ」

そしていまも背負い戦う。

彼は静かに、運命と戦い続けていた。



「……………響」

響は一人小さく座り込み、帰りを待っていた。

「遅い」

小さく呟きながら、その手を握る。

隣に座り、それに体重を預けて来た。

「一真、一真はこの世界をどう思う」

「俺は」

「私は一人だよ一真、ううん。一人がいい、一人ならもう」

「……………響」

そして静かに眠りにつく、膝を枕に、手を握りしめながら、

「……………俺は」

いつからか分からない。あの日、クリスと出会った日から、俺は人の意識を取り戻した。

人として、剣崎一真としての人格なんて必要ない。

長い時の中、俺は獣と人、その繰り返しの中に意識を置いていた。

だが時折取り戻す人の意思が、俺をクリスと会わせて、五年も維持される。

クリスと言う少女の面倒を見ながら戦う中、俺は人としての色々な感情を取り戻した。

（俺はクリスを失い、今度は響で繋ぎ止めている……………）

やはり俺は、一人が嫌なだけなのではないか？

本当は救いたいと言っていないながら、救われたいから、響を縛り付けているのではないのか。

「……………響」

「かずま……………行かないで……………」

小さな声で呟かれた言葉が、心に響く。

「響、一人つてのは辛いよな。苦しいよな……………だから、必ず」

握りしめながら、クリスを思う。

あの子ども救う。俺が俺であるために……………

◇

「あたしはなににしてるんだろうな……………」

「奏……………」

全てを話し終え、小日向、リディアンが生徒が帰ってから、もうぐちやぐちやだ。

「助けたと思った子は、あんなになるまで心が壊れて……………生きるのを諦めるなって

言っておきながら、その後なーんもしないで」

「奏……………」

「……………あの日から歌いたいつて思うことより、ノイズをいち早く倒すことが一番って思つて、翼のフォローに回つたからよくなつたと思つたけど、全然じゃねえか」

もうあたしは疲れてきた。全部彼奴、一真に任せてしまつてる。

そう考えていると、パンツと言う音が鳴り響いた。

「……………」

痛いと言う感情より、目の前の、泣いてる相棒が視界に入る。

「私とて同じだツ!!」

そう叫び、その場に座り込む。

「何が剣だ、何が防人だツ!? 本当の防人、剣が人の世から離れ戦っているのに、私は気づかなかつた。響のことは私達の責任だつ、奏一人で背負わないでくれツ」

「……………翼」

「まだまだ、劍崎さんが言つてたじゃないか。『人じゃないといけないのに』と……………彼は響が救われてほしいと思うから、奏が来ていることに何も言わなかつたんじゃないのか!!」

「それは」

「私達はもう過去の立花響を救えないのかもしれないけれど、いまの彼女を救おうとするのは彼だけじゃない。彼は諦めないと言っていたじゃないかッ」

「！」

そうだ。彼奴は、響が救われることを、諦めていない。

どんな状態であろうと受け入れてる。諦めていないと言っていたのに、

「なにあたしは………勝手に救った気になって、勝手に諦めて………あたしは」

「考えよう、私達ができるべきこと。彼がいまに繋げた可能性、響を救う。あの子が本当に幸せなことを。剣崎さんが傷が治るからと言って傷つけるような、あの状態だけは間違ってる」

「………今度は傷付けるかもしれない」

「それでも、あの状態が救いでない」

「………ああ」

諦めない。響の為に、一真の為に。

あたし達も諦めるわけにはいかない。



「一真……………」

目を覚ますと一真はいない。一真のコートだけが私にかけられていた。

一真がいない中、私は一人小さくなりながら座る。

彼奴は誰かの為に戦う。私だけじゃない。

「あめ……………」

その日の雨が降る日だった。

私はあの後倒れ、一真に救われたんだ。

一真……………」

「私には、一真しか」

その時、私はある子を思い出す。まだ親友と呼べていた頃の、あの子を……………」

「違うッ、ダメだっ」

そう言つて、雨の中小さくなる。

一真に側について欲しい。一真しか側についてくれないんだ。

一真しか……………」

「一真……………」

私は一真がいなくなった後、ただ静かに一真を待つ。

世界で私の側に来てくれる。優しい化け物を待つ……………」



◇

全部話を聞いた。響のこと、剣崎一真と言う人のこと。

私はどうすればいいのだろうか？ どうすればいいのかわからない。

初めて学校を休みたいと思う中、私は、

「……………えっ」

雨の中、倒れている赤い服の子と出会う。

そして交差する物語は、どんな変化を起こすか、誰も分からない。

◇

二人の人間を救おうとする。だが反発するように争い、どちらの少女も心が壊れかけている。

俺はもう救えないのか？

「いや」

……………諦めない、俺は、俺である限り、救いたいと願う限り、

「諦められないんだ……俺は、弱いな……」  
そう思いながらも、ただ足掻くことしかできず、クリスを探す為に、歩き続けた。

## 第8枚・願いの先

「なんで戦うんだよ」

料理として、テロリストや武装組織、ともかくどこからか奪い手に入れた缶詰を工夫したり、魚を焼いているのは、化け物に成った男。一真だ。

「俺だから」

そうとしか答えない。

私には理解できない、私も含め、誰も感謝も何もしていない。

それどころか化け物として恐れている。私だって出会った時、一真のことを恐れていた。ただどうして話すとただのバカだ。

分からない。どうして戦うのか、ズタボロの服の中、自分用に綺麗な毛布などを持ってくる。

一真の服は撃たれたり、刺されたりボロボロ。それでもこいつは戦う。

パパとママは平和な世界を望んだ。こいつは、

「いつか平和な日が来る、それまで俺は戦う。それだけだ」

こいつだけが戦い続けるのか？

そう思いながら、ずっと誰かを守るために戦う彼奴を、遠目から見ていた。いつしかあの姿は怖くなくなっていた。

いつしかあの手が温かく、パパやママみたいに思えた。いつしか彼奴が、大切になった。

そして彼奴は私の身を案じて、私を置いていく。

五年間一緒だった。けど、彼奴は年を取らない。

このまま人が争い続けていれば、それは彼奴はずっと戦い続けるということだ。ずっと戦い、ずっと一人傷付く。

そんなの認められない。私は、私は………



「私は………」

知らない天井の中、身体を起こす。

服が変わっていて、そして、

「気が付いた?」

あの時一真が助けた、巻き込んでしまった奴らの中にいた、一人がいた。



聴覚などを使いながら、街を歩く。

クリスを見つめる為、あの子を見つけ出さなければいけない。

そして、

「クリス？」

お好み焼き屋の前、静かにその戸を開ける。

「いらっしやうい、悪いけどまだ準備中なんだよね」

「いや、ここに銀髪の、クリスはいませんか」

「おや？ あの子の知り合いかい？」

「いるんですかっ」

彼女の話を聞くと、ここに連れてこられ、保護されているらしい。それだけ聞ければ、少しは安心する。

「よかった……………」

「それで？」

「……………正直、いま俺と会っても、あの子が素直になるか。素直な子じゃないから」

そう言うが、少し心配する。その様子に、おばちゃんは、  
「会っていきなよ」

「……………ですけど」

「事情は聴かないよ、だけど……………念のために聞くけど、名前、なんて言うんだい？」

「一真です」

「ならいいさ、あの子、寝言であんたのこと呼んでたよ」

それに驚く。あの子はいまだに、自分を慕っているのかと思い、そして、  
「分かりました」

教えてもらった部屋の前に行き、

「クリス」

戸を開けたら、

「えっ」

裸のクリスが、汗を拭かれている。

俺はその様子を見てしまい、

「こっんのつ、バカアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

クリスに殴られた。

ちなみに拭いていたのはリディアンの子である。

「お前って奴は、どーしてそうタイミングが悪いんだよっ」

「悪い……………」

クリスは怒鳴りながら、もう乾いた自分の服を着ながら、文句を言う。

そんな中、リディアンの子はこちらを見て、驚いている。なんでだ？

「ともかくだ、テメエはなんの用だよっ、お前はその、もう一人の方が大事なんだろう」

「響も大事だが、クリスも大事だ」

「……………なんでだよ」

それに悔しそうに、睨みながらこつちを見る。

「なんでいつも一つだけにしないんだよっ、もういいだろ？ 疲れて、もうボロボロなく

せて、どうしてそうして誰かのために生きるんだよ!!? どうして……………」

「それは……………みんな大事だからだよ」

「それしかねえのかよお前はッ」

そう泣き叫ばれたが、

「ああ……………俺には、もうそれしか無い」

家族も、仲間も、みんなも無い。

だけど、

「俺の大事な仲間や、人達の大事なものは、ここにある」

そう言つて俺はクリスへ手を上す。

「なんのつもりだよッ、お手で繋いで、仲良しこよししろつてか!? いまさら」

「いまもなにもない。俺は、クリスや響にも、そうして欲しい」

「響……………」

リディアンの子がそう呟いたが、それに首をかしげながら、静かに、

「もう俺の手を繋いでくれるのは、お前らしいないんだよ。だから放さないでくれ」

「なんだよそれ……………」

「クリス」

その時、クリスへ意識を向け過ぎていた。警報機が鳴り響く、これは、

「ノイズ」



私の所為でノイズが町に現れた。

フィーネが私を狙つて、ノイズを放っている。一真の顔が歪んでいた。おそらく自分を探すのに必死で、ノイズを感知しなかったことを悔やんでるんだろう。



私の所為だ。私が一真を傷つけた……………

一真の隙をついて、急いで人のいないところに来た時、周りの光景は私がしたかったことと真逆な場所に変わり果てている。

私は、

「私はこんなこと望んだわけじゃないのに……………どうして……………」

そして無数のノイズが向かってきた……………

【クリスツ】

ジョーカーの一真が現れ、ノイズを吹き飛ばす。

無数のノイズの群れの中、

「一真くんツ」

そう叫び、一人の男が入り込むと、地面が盛り上がり、それが壁に成る。

そして私を抱えて、飛び上がる。二人して建物の屋上へたどり着き、静かに降ろされた。

何も言えず、静かに流れる緑の血を見る……………

「なにしてるんだよ……………私は、私は」

【クリス、俺は変わらない。お前たちが俺になにしても、俺は守るために戦う】

「！」

それになにも言えなくなる。ああ………そうだ、一真はそういう奴だ。いつも傷付き、だけど戦う………

私はすぐにその手を払い、イチイバルを詠う。

「私一人で十分だつ、一真は他の奴を」

【クリスつ】

私は声を見殺して、ノイズの群れに向かっていく。

いまはともかく、自分の不始末を彼奴だけに任せられないッ。



クリスが一人向かう様子に、

【ノイズがクリスを、クリスは】

「どうやら、フィーネなる者と何かあったらしい………俺はあの子を、助けることはできないのかっ」

そう言い、拳を握りしめる弦十郎さんを見ながら、

【いや………あんたがいなきや、あの子達は人の世界に生きられない】

「！ 君は」

気づいてくれたようだ。俺の願い、それに……………

「……………俺は一人でいい、ここに、みんないるからだ」

そう胸を押さえながら、静かに、

「どけノイズツ、クリスも響も。俺は戦う、戦えない人達の為にも。俺は、俺はどんな姿でも仮面ライダーだ!!」

腰ベルトが『レンゲルバツクル』に変わり、左腕に『ラウズアブゾーバー』が出現する。

【変身】

『オーブンアップ』《アブゾープクイーン フュージョンジャック》

蜘蛛の門を飛び降りると共にくぐり、地面に下りると、大地を揺らした。

土煙の中、無数のノイズが向かってくるが、吹き飛ぶ。

両肩はオリハルコンタクスと言う装甲が追加され、巨大な重戦士が前へ歩き出す。

「邪魔をするな」

左腕が巨大な手に成り、自在の鎖付き鉄球を取り出し、それを振り回す。

銃を乱射しているクリスは歌いながら驚く。そのレンゲルは主に戦車や重機機材を破壊する際に使用した、最も重くて軽いと言う矛盾する、破壊に適したフォームだ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

ただ無駄に暴れまわるだけで、敵が爆砕する。レンゲルラウザーも刃が新たに付いており、それをダガーやザツパーと繰り返ししながら、辺りを粉碎する。

鉄球をぶつけ、振り回す。ジョーカーの身体能力故に、高く飛び上がり、身体を高速に動かし、鉄球があらゆる角度からノイズを押しつぶす。

「滅茶苦茶じゃねえかその姿っ」

背中合わせに立ち合いながら、周りを見る。地上に大型ノイズが集まるのを見ながら

「チイ、わーかったよ」

三枚のカードを取り出し、ラウザーに通す。

《ラツシュ》

サイがその角をカード内で豪快に振り上げ、振り下ろす。

《ブリザード》

吹雪を吐く、シロクマが冷気を纏う。

《ポイズン》

尻尾の針から液体を垂らすサソリ。

《ブリザードベノム》

そのカードを取り込むと共に、鉄球から鎖を外し、冷気を放つ、毒の一撃を鉄球に纏

わせ、それを思いっきり突き放つ。

鉄球はあらゆる物を溶かし固める毒と冷気の塊として、激突した全てを粉碎した。大地を揺らしながら、それを見てクリスは少しだけ引きつった顔をする。空のノイズもいなくなり、ジョーカーになり、すぐに別の場所へ走り出す。

◇

ノイズの群れを倒し切り、一度態勢を整える為、ギアを解く。

「はあはあ……………」

一真の調整があるとはいえ、身体 of 聖遺物が気がかりだ。 فقط、

「イライラする、もっと、もっと壊させろッ。私を戦わせろッ!!」

そう叫ぶと、誰かの悲鳴が聞こえる。

身体は熱い、胸が熱い、だけど戦う。

「この手は壊す為にあるんだ……………ノイズを、私は、壊すんだッ」

そして廃屋になった瓦礫の中、私は辺りを見渡す。

「どこだノイズッ、私と戦えっ、壊し合え!!」

その時、頭上から迫るそれに気づき、すぐに飛び避ける。

ノイズは空に浮遊するタイプで、すぐに立ち上がるが体がくらむ。

(くそ……………身体が……………)

すると、誰かが手を引っ張る。

「なっ」

「しっ」

それは、

「みく……………」

スマホを使い、喋らず文面で、

『静かに、あれは大きな音に反応するみたい』

「！」

『あれに追いかけてられて、ふらわーの、知り合いのおばちゃんここにいるの』

それを聞き、おばちゃんと言う人がいる。足でもくじいたのか苦しそうだ。

文字を見ながら、私は何も言えなくなる。だけど、

「……………」

その時、未来が抱きしめて来る。

「ごめん、酷い時に、一番辛い時に、側にいなくて、何も言わないで去ってごめんね」

「……………いまさら、なにを」

「何を言っても、いまの響には通じないよね……………だから」

だから私が囿になる間、おばちゃんをお願い……………

そう呟いた時、何を言っているか分からない。

「これが私の覚悟……………もう一度響とやり直す為に、私はもう、迷わないッ!!」

そう叫び声を上げた瞬間、ノイズが反応して、未来は走り出す。

おばちゃんは何も言えず、くじいているのか足を痛めている奴を放っておけない。

走り出す未来に、声を出そうとするが、胸の痛みで止まった。

「なに、を……………」

勝手にやり直すなんて言われても困る。

そんなことされても変わらない。

私は壊す手しかないんだ。

「あつ、ぐう……………」

身体が熱い、欠片の暴走か、歌えない。何度も歌おうとするのに、歌だけが歌えない。壊す為に歌わなければいけない。そうでないと、私は……………

「わたしは」

また壊れる……………

「私にはもう、誰かと繋がる手なんて……………無いのに」

だけど、

「なんで……………」

なんで、

「なんで涙が出るんだよっ、もう壊れたんだ!! もう親友じゃないっ。私は、私、わだじば」

私は、

『生きることを諦めるなッ!!』

その叫び、また頭の中に。そして、

—— ねえ、なんで一真は戦うんだよ? ——

—— 仮面ライダーだからだ ——

—— かめんらいだー? ——

—— 俺が、俺が選んだ、みんなを守る職業だ ——



「助けて……………」

私は、

「助けて、だずげで。がずまあああ」

涙が、身体が悲鳴を上げる。

お願いガングニール、歌わせて、私は、

「もうだいじなもの壊れるのはいやなんだよ……………」

誰か……………助けて……………

【任せろ】

——任せろ、すぐに暖かいところに連れていく——

あの日、人では無い手が握りしめてくれた時と同じ言葉が、私の中に聞こえた。

◇

「はあはあ……………あつ」

走る中、瓦礫が目の前に、左右は崖で塞がれている。追い詰められた。

くらげのようなノイズや他にもノイズが、私へと近づいてくる。もう限界だ。



◇

「なんだッ」

私がノイズを集め、戦っていると、黄金の波動が、小さなノイズを吹き飛ばす。

◇

「超高エネルギー感知ッ、未知のエネルギー体です!!」

「これって……………」

◇

13のカードがブレイドの周りを旋回すると、黄金へと変わり、足や腕、身体に纏う。黄金の戦士と化したブレイドは、何かの歌が、胸の中から聞こえる。

片手を広げると、キングラウザーが現れて、触手を伸ばすくらげだが、腕のプレート、あれはビート。パンチ力を上げるカードの絵柄が輝き、拳に集まって吹き飛ばした。

「邪魔をするな……彼奴の、響の大事なもの、誰かの、人々の大事なもの。それに触れるなッ!!」

無数の巨大ノイズが現れると共に、身体から五つのカードが飛び出て、手元に来る。

《スピードX J Q K A》

全てのカードを読み込ませ、剣を地面に刺した瞬間、大地が揺れた。

レリーフから黄金の波動が全身に巡り渡る。

《ロイヤルストレートフラッシュ》

「ウエエエエイツ!!」

飛び上がると共に、巨大ノイズ達へと身体を捻り、蹴りの態勢に成ると、五つのカードが光の門のように現れ、それをくぐりながら、飛び蹴りを放つ。

それが光と成り、全ての巨大ノイズを吹き飛ばした。

「これが、一真のキングフォーム……」

あの日、私を救った、黄金の姿。

それが夕焼けの中、まばゆく輝いていた。

私は未来と対面する。手紙は親が止めていたらしいことなど、色々聞いた。

だけど、

「響が辛い時、私は側にいなかった。響、私は」

「……………」

そんな言葉を言われても、私は、

「私の手は何かを壊すしかできない」

「そんなこと」

「あるッ、だから」

静かに未来から顔を背ける。いまは見たくないから、フードを深々と被る。

「私は一真の側しか、居場所なんて無いんだ。優しい、化け物の側しか」

「響……………」

「……………」

そして一真が待つ場所に、私の居場所に、

「なら私もいるッ」

そう言つて、私を抱きしめる未来。それに私は、

「なに言つてるッ、放してっ」

「放さないっ、もう放さないッ」

「私を救つてくれた人を、化け物としか見ない奴や、すぐに壊れる奴の側にはいられないっ」

「私は壊れないっ」

そう言いながら、力が強くなる。

「あの人も恐れない」

「……………未来」

「初めは怖かった、だけどあの人は、何度も誰かを守ってくれた……………私の大切な友人を支えてくれた。私も恐れない、だから」

「……………」

「貴方の手は壊す為にあるんじゃない……………響」

「わた、しは……………」

そして一真がいつの間にか近づいて、フードを外させる。

「お前の手は壊すだけじゃない」

「一真……………」

「俺は救われたよ、こんな世界でも、それでも……………」

そしてジョーカーの姿に成る、恐ろしい姿だけど、私からすれば、頼もしい、あの日、私の手を握ってくれた。優しい手を持つ化け物だ。

【こんな姿の俺の手を、握ったのはお前だ響】

「一真……………」

「お前の手、クリスの手。その手があるのなら、こんな姿に成ってもまだ戦える。まだ誰かのために、俺はあり続ける」

「！」

私は……………

【素直になれ、いますぐは無理でも、な】

「かず、ま……………」

そして私は、

「未来……………」

「響……………」

私はすぐには無理だろう。世界は憎いし、一真を恐れる人々を受け入れられない。

だけど……………

この親友だけは、もう一度、

「信じたいよお……………みく……………」

「ひびき……………」

いつからか止まっていた涙が流れる。さつきも流れていた気がするが、これは違う。

それを見ながら、クリスを見て来ると言う一真。

全部を守りたい、救いたいと願う私の大切なヒーローは、やはりみんなのヒーロー

だ  
っ  
た  
…  
…  
…  
…  
…  
…



## 第9枚・悲しみは終わり

響は座り込み、静かに睨んでいる。

あの後別れた後、しばらくして拾って帰ったら凄いいことになった。その後はこうして無駄に時間が過ぎていった。

そして視線の先にいる、一人座り込む少女は静かに睨み返す。

そこに、

「邪魔するぞ」

そう言つて買い物袋片手に、雨の中やってくる。弦十郎さん。

「こりやまた、大変だな」

「ええ………」

あの後、クリスを拾つて帰り、こうして寢床はギスギスした空間になった。

クリスと響は睨み合いながらも、寢床の廃屋で俺と共にいる。弦十郎はそれを知りながら、静かに食べ物を持つてくる。

お弁当の割りばしを割つたり、カップラーメンを取り出し、慣れた手つきでお湯を沸かす響。キャンペーン用のコンロを使いながら、クリスは俺の様子を見ながら、菓子パンを

食べだす。

「君は、彼女も助けたのか」

「これでも何発も撃たれた」

「一真を傷つけていいのは私だけだ」

「アア？ なに言ってるおもしろい女、一真を殺していいのは私だけだ」

「ウエイ!? サギンノコハオバイ!?!」

拾って連れて来た時は、真つ先に刺された。なぜか鋭利な刃物を持つてた響、その後はクリスにも撃たれた。なぜか睨み合いが始まった。

来る人も増えた。未来ちゃん、響の親友。その子から、

「俺のことは虎太郎が残した本で知ったんだったな」

「ああ、君の仲間か」

「……………」

静かに頷きながら、思い出す。

最初の戦い、俺がまだ人間だった頃。BOARDで仮面ライダーブレイドとして戦い、ジョーカーになった、始まりの戦い。

「俺は数年間、始。始まりのジョーカーと別れ、烏丸所長らが、封印したハートの2以外のカードを保管して、全てが終わったはずだった」

「ハートの2?」

「始祖ヒューマンアンデッド。人間の始祖だ……始、53体目のアンデッド、ジョーカーはそれで人間の身体を保っていた」

だが、一向に戦いを始めないアンデッドに対して、54体目を世に出した。

54体目、アルビノジョーカーの出現。それに一度戦いが再開しなかった。

「その戦いじゃ、巨大な力を秘めた存在を復活させて、俺達を倒し、封印されたアンデッドを開放するなりして、アンデッドを一体にしよとした」

「その戦いは」

「なんとかバニティカードという、それを呼び起こすカードを利用してそれで封印した。アルビノジョーカーもその時に封印した」

だが、それだけで全てが終わらないことが、その時に知ってしまった。

「モノリスや統制者は戦いを望んでいません」

このままじゃ俺が始、どちらかが最後の一人に成るまで戦うか、封印されたアンデッド達、ヒューマンアンデッドを開放するしかない。

「だけでももうヒューマンアンデッドの勝利も、この世界じゃ、もう現人類の破滅が決定してます」

「それは本当かつ!?!」

「本当だよ、新しく人類を作る。それが統制者って言うシステムらしいよ」

「だからヒューマンアンドッドの封印を開放して、一真達ジョーカーが封印されても、意味が無いんだと」

そう言いながらご飯を勝手に作り、食べ始めている少女達。この二人にはもうすでに昔話として話している。弦十郎は静かに聞きながら、

「それで君は、バトルファイト関係全てを、自分の中に封印する選択を選んだのか」

「ああ、それしかもう、バトルファイトを起こさせることを止めるためにも、これしか無かった」

元々、自分はアンドッドとの融合、適合率が高く、アンドッドになった。

ならば、アンドッドジョーカーになった自分は、ありとあらゆるものへ適合し、融合することができると。

ライダーシステムのそれと、さらにアルビノジョーカーが使った生贄を封印するカード。バニティカード、それに目を付けた。

「バニティカード、アルビノジョーカーが邪神復活に使った力、アンドッドじゃないものをカードに閉じ込める力。そこから思いついた、全てを俺の中に封印し融合するって」

だからこそ、バニティ、ライダーシステムによる融合。これにより、橘さん、睦月からカードを奪い取り。ダイヤとクラブを取り込んだ。

「スピリット、人間の始祖とは一度、話がついていた。アンデッド化の影響で、テレパシーみたいだね。その後は万能の力で人の姿、相川始の姿を彼奴に渡す算段はついた時、モノリス、統制者はアンデッドの封印を一体だけ解き、世に出した」

それを察して、もうこの手しかないと思い、それを封印した後、行動に移った。

ダイヤ、クラブのカードを取り込み。最後にジョーカーが持つカードを取り込む。

「戦いに俺が勝ち、始を封印しようとするモノリスから、統制者が持つ万能の力を奪い取る。それが目的だった」

「君は……………」

あの日、みんなの顔は、人間の意識がある間は忘れられないな。忘れるためには、獣になるしかないほど、鮮明に焼き付いた。

俺は仲間たちを裏切った。その事実だけは変わらない。

「力を利用して、俺は万能の力、統制者の力、アンデッド達の力を手に入れた。始には、人の姿を与え、ジョーカーの力を俺は奪い取った」

「なぜ君はそこまで？」

「……………始には、人として過ごす過程で、大切な人ができた。ジョーカーのままじや、彼奴はその人達と別れる日が来る。普通よりも早い、別れが……………」

それを認めることはできなかつた。

彼奴は、栗原家のみんなと生きるべきなんだ。

これは俺の勝手な願いだ。それでも、俺にとつて叶えて欲しい、小さな思いだ。

「始は人の中に生きるべきだ……彼奴が、人間を愛した彼奴の、小さな願い。人間を愛した彼奴は、人間の中に生きてて欲しかった」

「……相川始と言う、仲間の人生のために、君は君の人生を捨てたのか？」

「……彼奴は最後まで、俺の名前を呼んでいた……」

きつと許してないだろう。こんなことをした俺を……

それから海底の、深海で隠れるようにしたな。地上では仲間が探しに来そうだったから。

時々地上に出たりして、分からないくらい時が過ぎたとき、海底探索の気配を感じて、渋々移動した。

その後は、もう本能に近い。

誰かのために戦う本能、ジョーカーとして戦う本能が混じり合い、戦っていた。

仮面ライダーとして、ジョーカーとして、ただ人を守ると言う戦いをしてきた記憶しかない。

危険物を自分の中に封印したりもしたが、なにがどう危険なのか分からないことが多い。本能で危険なもの、ことだと思っただからだ。

「その時クリスを助けて、クリスに今の世界を聞きながら五年過ごした。その後は国連にクリスを任せただけだった」

「……………ふん」

「ご飯を食べながら、食べ終えて毛布にくるまる。その様子に残念がる弦十郎。

「俺はその子、雪音クリスの保護を命じられていてね。装者候補として彼女の名前が挙がっていたからな」

「……………連れていく気か」

「いや、無理に連れて行って、君達と敵対する気は無い。一真くん、悪いが」

「別にかまわない、この子の面倒も見ろよ」

「すまない」

「こうして弦十郎は、

「ああそれと、響くん。未来くんが携帯ぐらいは持つてほしいと言っていた」

「……………そ」

「そう言い、こつちも毛布にくるまる。

その様子にも言わず、今日は帰っていく。

だが二人して後で殴ってきた。ナジエ!?



食い物の買い物に出てた彼奴と出会った。

「一真っ」

「……………奏か」

たまたま出会ったため、そのまま連れ歩く。

近くの公園に、ベンチに腰掛けながら、静かに買い物袋などを見る。

「大買いだな」

「響もクリスも食う方だ……………響は最近、欠片の侵食が少し早い。変に感情が不安定だと、進行が普通の状態でも酷い」

「そうなのか」

少し立ち上がりかけたが、それを抑えられた。

「安心しろ、俺の中にある力で、初期化させているし、最近は安定してる」

「なら、いいんだが……………」

そしてしばらく一真を見る。

「あんたがあの日、私や他の観客を守ってくれたんだよな」

「……………分からないな、それで悲しみの連鎖は消えなかった」



「それはお前の所為じゃないつ、あたしが、あたしが時限式だから……響の傷だって、あたしがしたようなもんだ」

そう言う中、一真は何も言わない。

「事実は変わらないな、だけど未来は、運命は変えられる」

「……………そう思うのか」

「俺は終わらない戦いを終わらせたり、彼奴、始を救えたと思っではいるよ。勝手に決めつけてはいるけどね……………俺は人間の中で大切な家族を得た彼奴や、他の仲間達に、明日を作れたと思っではいる。それだけは、信じられる」

「……………強いな」

「響やクリスのおかげだ……………俺の手を握ってくれた」

その時、僅かにジョーカーの姿がブレて見えた。

あの姿、いまの姿が本当なんだろうが、

「……………戻る気は無いのか」

「戻ることはできない、俺の中に、全てを封印してるんたから」

それを聞き、それは永遠にこのままだと言っではいるようなものだ。

だから、

「だから俺はあの二人を助けられたし、奏ちゃん達も助けられた」

「……………あんたは」

「俺はこの手が振り払われてもいい、もう人間じゃないから……………だけどやめられないんだ。どうしても、俺は人間であつた時の、あの温もりを守りたい」

そう言つた彼奴の顔がまっすぐで、あたしは僅かに心が温かくなる。

そうか、だからあの二人はこいつを慕うんだ。

こいつは人を信じて、愛してる。

愚かでも、こいつは人間の心を持っているんだ。

「……………頼みがある」

「頼み？」

「今度翼とコンサートするんだ、あの日の、あの会場で」

「！ それは」

「頼む」

あたしは決意する。あたしは、あたし達は前に進みたい。

だから聴いてほしい。響に、クリスに……………

(なにより、こいつに届けたい。あたしの、あたし達ツヴァイウイングの歌を。絶対に長い時間の中でも歌われる。こいつを支える歌を、あたしは歌いたい)

私は静かに、決意した。あたしの、進みたい、羽ばたきたい世界を……………



「一真がいるなら」

それが二人の答えであり、奏に会ったことを言うと二人して攻撃してきた。ニヤンデ  
!?

会場では同じように呼ばれた未来ちゃんとの出会い、友達と紹介される。

響は嫌々な顔をするが、三人の友達は気にせず、クリスマスも挨拶されていた。

俺のことも気にせず、挨拶する三人。

(コンサートか)

あの日、全てが変わった。

あの日、忘れられない傷が多くの人々の人生を狂わせた。

それでも、前を向いて向き合おうと、決めた者達だっている。

(俺は)

その瞬間、身体の中が騒ぎ出す。

「また、かあ……………」

俺はアンデッド、その身体は闘争本能でできていて、何かと戦い続けることが生命維

持のように求めている。

戦わないことは呼吸しないことであり、俺は怪物である証。

「キングで早く倒したのに、まだ無理矢理、ギルドラウズの力を使った反動が」  
未来ちゃんを助けたとき、安定したと思っていた。ちゃんと制御するように、手順通りにギルドラウズカードの力を使用したから、問題ないと思っただが……

「敵なんて、そう、都合よく………！」

都合よく、感じ取った気配に気づき、僅かに黙る。

ノイズが大量に現れ、警報が鳴り響く。

「タイミングが良いのか悪いのか………」

身体がふらつきかけ、いまジョーカー化はまずい。

だがこの大量のノイズの進行を止めなければ、コンサートが中止になる。  
ならば、やるべきことは一つ。

《エポリューション》

13のカードが舞い上がり、身体の中に入り込む。

立ち止まる気は無い。幻でも夢でも………

ワイルドカリスの姿で、ノイズの群れに飛び込んでいく。

無数のノイズの中、無双する。

《チヨップ》

腕の一振りが、無数のノイズを吹き飛ばしながら、ワイルドスラツシャーを醒弓へ変えながら、全てを貫く。

「コンサートの邪魔はさせないッ。始っ!!」

13のカードが舞い上がり、一つのカードに変わる。

《ワイルド》

ワイルドサイクロンを放ちながら、波のように押し寄せたノイズを吹き飛ばす。

その様子を見ながら、静かに煤を見る。それでも一向に数は減らない。

「このタイミングでこれか」

二課の人達には声をかけているとはいえ、速い段階で倒さなければいけない。

そう思う中、巨大なノイズが三体も現れ、小型も群れがまだ建物の物陰から這い出て来る。

「……………なら、橘さん、力借ります」

瞬間、左腕にラウズアブゾーバーが現れ、ベルトが変わる。

『ターンアップ』《アブゾーブクイーン エボリユーションキング》

瞬間、爆炎の輪が放たれ、燃え上がりながら飛び立つ昆虫。

13のカードがダイヤのレリーフに収まり、装甲と一体化、火の粉をまき散らしながら、大銃。重醒銃キングラウザーが炎の中から現れる。

巨大な刃を持ち、静かにカードを広げる中、ノイズが槍のように向かってくるが、炎のバリアが発生し、それだけで防ぎ、突破されても、その装甲は貫徹せず、砕けた。

炎を巻き上げながら、昆虫のような羽根を広げ、空を飛びながら五つのカードを取り出す。

《ダイヤX J Q K A》

アラムのように炎が音を鳴らし、昆虫の羽根に集まり、グリップを持ち、固まっている位置を狙いながら、構える。

五つのカードが飛び交い、銃口の周りを浮遊する。

《ロイヤルストレートフラッシュ》

瞬間、炎は輝きと成り、全てを飲み込んだ。

◇

熱気が漂う中、静かに下りるそれを、静かに見つめる二課。

「キングフォーム……………これって」

「ギャレンのキングフォームだろう。あの本にも本来キングフォームは、Kのカードを軸に、ライダーシステムを強化するのだから、ブレイド、カリスの他に、ギャレン並び、レンゲルにもキングフォームがあっても不思議ではないか」

「そう考えると、それを凌ぐジョーカーと言う力。少々興味深いわね」

「了子くん、だからと言って、無理に彼を見ようとするのは」

「わかつてるわよ弦十郎くんっ♪」

そう微笑みながら、

（ただ普通に検査したところで、数多くのDNAしか検出されないのだから、意味が無いか……………）

融合症例第一号の他に現れた、始祖の全てを内に秘めた生命体。剣崎一真。

彼の経歴、過去はあまりに興味深い。

（あの方が現れる前か後か、私の興味はそこに尽きる）

あれはあの方が用意したシステムなのか、一体何なのか。

ああ……………

（必ず手に入れる、そして必ず、バラルの呪詛を……………）



「途中からいなくなつた」

「……………悪かつた」

「許さねえ」

そう言い、廃屋のアパートに戻ると、目に輝きが無い二人がいた。

「響、ご飯作るけど、なにかリクエストある？」

「食えればなんでもいい」

「もう、そう言うのは駄目だよ。一真さんは戦つた後だし、少しボリユームあつてもいい

よね？ 電気と水道来てますか？」

「来てなかつたらこれ使おうぜ、コンロがあるんだから鍋だ鍋」

「奏、なぜ私は離れた位置に置かれてる？」

なぜかほぼ全員いる中、響は呆れ、クリスマスもなんでこうなると言う顔で、一真を放さない。

奏もそれに、

「あたしらの歌聴かなかつたからな、あたしらの料理食えよ一真」

「俺は、食わなくてもいいんだが」



「元人間なんだろう？　そういうの無くすなよ、とりあえず適当に切つて入れればいいかな野菜は」

「小日向、奏。私も」

「翼、お前は三人がどっか行かないように見張りだ」

「分かった、分かったが、釈然としないのは気のせいかな？」

その後、女の子が男の人と一緒に過ぎると未来が響に文句言うが、気にせず流す響。クリスもまた流しながら、奏はまあまあと未来を落ち着かせ、翼は目を泳がせる。鍋を食べながら思うのは、こんなわいわいした食事は、いつ振りかと思いつながら、

「……………」

もう自分はいらないかと、二人を見ながら、そう思った……………

## 第10枚・そして戦いは終焉へ

コンサートは成功した。その際に、ツヴァイウィングの一時解散が発表された。

『私は、多くの人に歌を届けたい』

天羽奏はフリーとなり、多くの人、大小構わず歌を届けたい。そう願ひ、いまから風鳴翼、いまのテレビから離れていくと宣言。翼もそれに頷く。

その理由は、

『あたし達はあの日、助かった人達の風評被害になにもできなかつた。だけど、いまは違う』

そう告げて、彼女達も歩き出す。

響もあの日から、未来と仲良く、ふらわーと言うお好み焼き屋に顔を出し、未来と会うようにしている。

響のお世話したい未来、響は別に何も無いと言うが、お世話されている響。

そんな日常の中で、クリスは思いつめている。



「クリス……………」

俺は買い物、響はふらわーに顔を出していたら、寢床に居るはずのクリスがいない。

「……………」

そして予測通りと言うか、クリスは何も言わず、どこかに行ったようだ。

「たぶん、クリスでなんかしてた奴のどこだね」

そう言う響に、スペードのAを渡しながら、

「響は待っていてくれ」

「……………」

小さく舌打ちしつつも、カードを受け取る。

クリスのことは詳しくは聞いていない。ただ知っているのは、何かを企てている者の側にいた。ソロモンの杖と言う、ノイズを操る道具を使っていたこと。

おそらくそれに関係あるのだろう。

クリスだけ、問題が解決していない。案の定、一人で動いたため、忍ばせていたカード。クラブのAの気配を追うことにする。

「じゃ、行ってくる」

「ん……………」

響が何か言いたげだが、いまは気にしてはられないため、シャドーチェイサーに乗り、すぐに走り出す。



森の中、音を最大限に消しながら進んでいると、

「弦十郎さん」

それは視覚と言うより、アンデッドの感覚で彼ら二課の人達を見つけ、バイクから降りて、人の姿のまま、彼らに接近する。

隠密、明らかに人目を気にしている様子だ。まだ気づかれないと思ったが、弦十郎さんは静かに止まれと指示した。

「気にせず、と言うよりなぜ気づいたのか。スピードを上げてすぐに顔を出す。」

「君か、悪いがここから先に少し」

「クリスも先にいる」

「なんだと……分かった、共に行くこう」

部下の方々と共に、森の奥、とある屋敷が建てられている。

日本にこんなものがあるのかと思いつながら、中に入っていくと……

「一真、おまつ、これは」

「分かってる。死んでからだいぶ経ちすぎだし、落ち着け」

死体の山と、クリスがいて、なんでわかったんだと言う顔に、ポケットを指さす。

蜘蛛の絵柄が蠢き、よりにもよってクラブを渡すなど怒鳴られる。

「とりあえず、周りに爆薬あるからな」

「だそうだ、気を付けてくれよ」

そう言われながら、気を付けている中、爆薬を俺が外し、彼らはここを調べるらしい。

クリスを利用した者はここにはいないようで、クリスは何か言いたげであり、弦十郎さんも気にしている。

少しだけ二人に会話させ、その後、俺は弦十郎さんに少しだけ話を聞くと、

「カ・ディンギル？」

「ああ、分かったのはそんな塔が関係あると言うことだ」

クリスはバイクの方に乗る中、距離を取って話をしている。塔と聞かれても、

「どでかい塔なんて目立つものを、どうやって……」

「敵さんの情報網は俺達、二課側にもいる。君達が聞かないこともあり、情報を制限していたが、クリスくんが動いたか。ともかく、君が計画を狂わす切り札だが」

「向こうも承知か……」

少し派手に動いているし、弦十郎さんの組織内に敵がいるのなら、もうほとんど知られている。

「その計画は、放っておけないよな？」

クリスを利用した事もあるが、あの死体、人達は殺された。

計画の為にすでに人を殺す段階なら、放っておくことはできない。クリスのこと、全て関わりがあるのなら、

「少し、相手の目をそむく手段はある」

「……………頼めるか」

「ああ、俺は戦えない人の為に戦う。変わらない、それが俺だ」



「……………暇なの」

「ううん、響に会いたかったの」

「そ」

そう言いながら、お世話されている中、ポケットの気配に気づく。

ラウズカードを取り出すと、カブトムシが蠢く。

「響」

「ノイズ……………」

その言葉に、だけど少し首をかしげる。

本格的に動いていない。まるでいるだけと言う、少し反応がおかしい。それに首をかしげながらも、ノイズはノイズだ。この手で壊す。

「未来はリディアンのもとに行け、あそこは地下シエルターがある」

「響」

「私はノイズを壊す」

そして走り出そうとしたとき、その手を握られる。

「！ なにッ」

「響の手は壊すだけじゃないよ」

それに少し驚く。なにを言っている。

「私の手は……………」

「一真さんだって、私だって、この手を離さないから」

「……………早く行け」

一真のバイク。ブルースペイダーが現れ、それに乗つくと共に、  
「行ってくる」

「気を付けて……………」

急いで向かう中、インカムで二課の人達から情報が入る。

カ・デインギルとかいう塔が、フィーネとか言う、雪音クリスの後ろにいて、ノイズを出すソロモンの杖を持つ人間の目的らしい。

なにをどう使うかは知らないが、どうでもいい。壊すだけだ。

そう思う中、でかい塔の建物が見えて来る。

あれがカ・デインギルの塔なのか。だがあれは普通の施設、建物だ。特別な意味を持つものではないはずだが、

「ともかく全部壊すッ」

巨大なノイズは戦艦のようにノイズをばらまき初め、空を飛ぶノイズが空に飛ぶが、  
「天羽奏っ、風鳴翼っ」

すでに戦い始めていた二人の名前を呼ぶと、こちらを見る。

天羽奏は最近、リンカーとか言う薬を多用するが、一真のおかげで肉体の負担はリセットされている。だからと言って乱用できないのに。一真は私のなのに、頼るな。

「響っ」

「！ 響以外に、このバイク音は!!?!」



その時、バイク音と共に弾丸が空のノイズを蹴散らし始め、そしてそこからイチイバ  
ルを纏う、雪音クリスが現れる。

あのバイク。『グリ๊งクローバー』か。

「一真からクラブのカード借りてるのか」

「なんであたしは他の奴で、テメエは一真のカードなんだよっ」

なんでだと？ 私は一真と共に戦ってたんだぞ。後ろで見ていることしかしなかつ  
た奴がなにを言うんだか。

向こうが睨むから睨み返す。そんな風に睨み合っていると、

「そっ、痴話ケンカは後か本人の前でしろ！」

「一真はそんなじゃない!!」

そう言いながら、お互い後ろのノイズを倒す。空の戦艦ノイズを睨みながら、

カリスが現れ、ノイズを倒しだす。

「一真っ」

カリスは何も言わず、地上のノイズを倒す用意に、背中合わせに雪音クリスと合わさ  
る。

「気付いてるかバカ」

「ああ、ともかく戦艦みたいに浮いてるの殺れるか？」

「ハッ、時間稼げるか？」

「分かった。天羽奏っ、風鳴翼!! 雪音クリスが戦艦ノイズを倒す、私らはその護衛」

「分かったッ。てか仲良いのか悪いのかどっちだよ」

「いまはいいっ、急ぐよ奏っ」

「あいよッ!!」

カリスは無言のまま、ノイズを倒す。

そして………

◇

「落ち着いてっ、落ち着いて地下に避難してくださいっ」

私は響に言われた通り、リディアンの方に避難していた。

だけど無数のノイズが襲撃してきて、いま避難の手伝いをしている。

そしていまは緒川さんと共に、地下の施設へと逃げるエレベーターの中、どうしてこうなっているのか。

「司令、カ・ディンギルとはおそろしく」

その時、エレベーターが壊され、その時、鎧を纏った人が緒川さんを襲った。



「まさかこうも早くかぎつけられるとはな」

「塔なんて目立つものを、人知れず建造となれば、地下へと上すしかありません。そんなことをできるとすれば」

特異災害対策本部二課は地下にある。それは塔を収めるのには可能なほどだ。

そしてその創立者は、

「くっ」

エレベーターが付いた途端、どうにか離れて銃弾を放つが、全く効かない。

ネフシユタンの鎧を纏う前では無意味であり、鎖で縛られる緒川さんの為に、未来ちゃんがかじようとするが、なにもできず、それでもあきらめず、彼女を見る。

そして彼女に手を上げようとした瞬間、

巨大な鎌が回転しながら飛来し、それを避ける。

「なに………」

【無事か、未来ちゃん】

「貴方は……………」

アンデッド体では気づかないか。すぐに人間体に戻り、彼女の前に現れる。回転しながら、手元に戻った鎌、デスサイズを手に静かに睨む。

「貴様、劍崎一真ツ!!」

「こんにちは、櫻井了子さん」

それに困惑しながら、すぐにこちらを睨み。不可解な疑問を口にする。

「貴様は陽動の方、向こうにいたはずだ!?! カリス体で向こうにいたのは」

「俺はジョーカー……………どの姿も俺だ。この姿は」

白い姿、始の戦い、戦士として登録されたジョーカーと対を成すもう一人のジョーカー体。

【アルビノジョーカー……………統制者の戦士。人を殺す者】

「ジョーカーの姿がもう一つ……………」

【そして】

《リモート》

数枚のカードを投げ、リモートの光をくぐると、そこからアンデッドが地面に着地して、武器を構えながら、緒川さんと未来ちゃんを守る。

「なん、だと……………」

【封印されたアンデッドを、意思無くそれを操る。いまのリモートの能力だ。こいつのおかげで、人はだいぶ助けられてるよ】

「チツ、そのような力もあったか」

その時、天井を破壊し、遅かったと言う顔をしておくか。

「俺も話を聞いたときは驚いたさ」

「弦十郎くん……………」

「まだそう言ってくれるのは嬉しいな了子くん」

静かに構える中、気が引ける中で語る弦十郎さん。

すでに調査部の米国政府の案内で、彼女の手の内は読んでいた。

陽動に陽動をぶつけ、いまこうして彼女をいぶりだしたのだ。

「悪いがここは任せろ」

【人の身で行けるか、下がれお前ら】

アンデッド達を下げたその瞬間、戦いが始まる。

完全聖遺物である了子を追い詰める、その光景に驚く二人。

「完全聖遺物を追い詰める……………ふざけたことが」

「知らないでかッ、俺はこれでも、後ろにいる一真くんとは仲がいいんでね!! いつも時間

があれば、ジョーカー体でいつも鍛錬に付き合ってもらっていたんだ。なによりも後は飯食って映画見て寝るツ。それだけで男の鍛錬は十分だツ!!」

【人間は俺が知らないうちに進化した】

「司令だけだと思えます……………」

その時、彼女はノイズを出す聖遺物を取り出すのが、それには光弾を放ち、ノイズは現れる瞬間、吹き飛ぶ。

【悪いが、ここまで近ければ、別空間からノイズが出現する前に壊すことはできる】

援護射撃に配下のアンデッドもいる中、顔色が変わる。

「これで積んだなつ、終わりだつ」

そしてトドメの一撃を放つ瞬間、

「やめて弦十郎くんつ」

その叫びに、僅かに緩んだ瞬間、剣先のように鋭くなった鎖が弦十郎さんを貫いた。

【しまつ】

すぐにスモッグなどを放ち、射撃をしながらその場を離れる。

弦十郎さんを持って離れたが、

「だめ、だ………了子さんの目的が」

「司令喋らないでくださいっ、こちらへ」

すぐに後を追おうとするが、ノイズの群れを許したうえ、道を破壊された。

彼らを運ぶしか無くなり、急いでその場から離れる。

◇

「すまない………」

【気にするな】

司令室に連れていくが、内側からハッキングされ全機能を奪われる。配下はカードに戻して、静かに人間体に戻った。

「外に出るには」

「すぐにルートを出しますが、避難ルートに影響を出さないとすると少し時間がかかります」

「頼む、すぐに外に出る」

そして聞いたルートを聞いて、マツハ、ジャガーアンドレッドに代わり、すぐに走り出す。



「カードが騒ぐから来てみれば」

リディアン女子学院は酷いありさまであり、もう夜の中、そこに、

「あんたが全部の黒幕か、櫻井さん」

そして笑い出すのは、天羽奏と風鳴翼は信じたくないと言う顔をするが、すぐに切り替え、彼女を見る。

完全聖遺物を纏い、櫻井了子、先史文明の巫女、フイーネは語った。

自身の血筋の関係者、それが聖遺物の起動に放たれるエネルギー波に触れれば、自分の意識が覚醒し、乗り移るように復活する。

歴史の転機、パラダイムシフトと言うタイミング、いつも立ち会ってきたらしい。

「全てはカ・ディングルとかいうのを創り出す為に、全部利用したのかッ」  
「そうだ、全てはカ・ディングルのためッ!!」

その時、大地から、地下から巨大な塔が現れる。まるで砲身のように、それが現れた。実際砲台らしい、それで、

「それでいったいなにを、なにを撃つって言うんだよッ」



「そんなんで世界から争いが無くなるのかよ!!」

天羽奏、雪音クリスの叫び声に、先史文明の巫女、フィーネは笑う。

「ああ、これで、この一撃で。月を穿つッ」

「なっ」

なにを言っているか全員が分からないが、なぜかと問われたとき、まるで話が変わるように語りだす。

あの方と言う存在に並びたいがために、塔を作り、並び立とうとした。

だけど、あの方はそれを許さず、雷鳴で塔を破壊するどころか、人類から統一言語を奪い取ったらしい。

「バラルの呪詛、人々から相互理解を奪い、統一人語を奪ったもの。それが月だつ、月を、バラルの呪詛を破壊し、人類を開放する。そのために、私はカ・ディングルを創り出した」

「バラルの呪詛……………」

「それで、争いを無くすッ。ざっけんなッ!! 結局それは、あんたがこの世界を支配しただけじゃないのかッ。安い、安さが爆発し過ぎてるッ」

「んなふざけた計画に、付き合ってられるかッ」

全員がシンフォギアを纏う歌を歌い、全員が纏う。

「ここまでするのにどれほどの時間を労したか、邪魔はさせぬぞ小娘ども!!」  
いまここに、月の下で最後の戦いが始まる。

## 第11枚・バケモノを囲む奇跡

四人の内の一人、聖遺物のぶつかり合いの中、ガングニールの槍を振るい、叫ぶ者がいる。

「あんたに聞きたいことがあるツ、全部、全部あんたの仕業かツ。あの日のコンサート、ここ最近のノイズツ。全部」

「凡人の出来事に、いちいち覚えていられるか」

「……………それだけ聞ければ、もういいツ。あのふざけた砲台ぶつ壊すツ」

槍を投げ、無数に分かれる投擲を、たやすく撃ち落とすネフシユタンの鎧。

他の者達も向かうが、

「くっ、前より硬いっ」

「クリスが着込んでいた時よりも研究と、私自身を繋げるリンカーを利用している。お前達が戦っていた時より強固なのは当然だ」

ミサイルが飛ぼうと、やはりカ・デインギルを守るように戦う。その様に天羽奏は叫ぶ。

「どんなことがあると、この身が壊れようともツ、ぶつ壊してやる!!」

「させると思うか小娘がッ」

「ちよっせいっ」

ミサイルが放たれる中、それを一個潰す中、もう一つを探す。

「もう一個は」

その時、天高く放たれるミサイルに乗る。雪音クリスを見つけ出す。

◇

あの日も、月が出てた。

一真はいつも缶詰は自分に渡して、ワニとか焼いたりして、食わせてくれてた。

「……………俺の側について、なにがいい」

「……………もう大人なんか、信じない」

当時の私は、もう信じるものなんてなかった。

「前にも言ったが、俺も大人だ」

「人じゃないだろ」

「……………そうだ」

そう言い、ジョーカーの姿に成る。その姿、最初は怖くって、その、あまり思い出し

たかない。

だけどいまは、

「怖くない」

【……………】

その手はごつごつして、ワニよりおかしい。

だけど側にいながら、静かに毛布にくるまりながら寝る。その時は人の姿だ。

「一真は信じられる、私は人が、大人が嫌いだ」

「お前のパパもママもか」

「……………ああ」

歌で人を幸せに、世界を平和にできる。そう思っていた。

だけどそんなもんは幻想だった。世界はいつだって冷たかった。

「俺は、そう思わない」

「なに言ってるんだ」

「お前は温かい」

そう言って、静かに抱きしめてくれる。

「お前は、俺の世界は温かい」

「なに言ってるんだよ」

銃弾に撃たれても、人から化け物と恐れられながらなのに、なのに、  
【よかった……………】

なんでそう言つて安心できるんだ。何度も何度も、どうしてか分からない。

いつもボロボロの一真、血まみれの一真、悲しい顔をする一真しか、見ていることしかできない役立たずな私がいたのに……………

「お前がいる」

「……………え……………」

なにを言っているか分からなかった。

「俺の世界にお前がいる、だから、俺の世界は温かいよクリス」

「一真……………」

静かに抱きしめられている。温かいそれはまるで……………

パパとママ、二人を思い出させる……………

「お前の両親も温かい世界を、お前や、他の人に届けたかったんだ。だってお前がこんなに温かいんだ、だから分かる。お前の両親は」

温かいんだよ、クリス。

そう、一真は言ってくれた。

その日私は、やっと泣けた気がした……………

だけどどうして……………

どうしてそんな優しい奴が、

どうしてそんな温かい奴が、

「来るな化け物ッ」

「うわあああああああああ」

「ば、化け物っ」

どうして世界に受け入れられないんだよッ。

なのに、どうして、

【よかった……………】

どうしてそんな奴らが助かった姿を見て、そんなこと言えるんだ。

◇

「無くしたかったただけなんだ……………」

カ・ディンギルの砲身の軌跡、その真ん中で、腹いっぱい空気を吸う。  
最高の歌を、彼奴に歌う。

世界のためなんて、もつたいない。

一真がいたから、もう一度パパとママの夢が見てみたいとも思った。

一真がいたから、いまの私はいるんだ。

一真の為なら、私は……………

歌を歌える。

わたしの歌、平和を繋げる為に、歌う。



「この歌は」

「クリスの奴、絶唱を」

「雪音ツ」

放たれるカ・ディンギルの光、そこに放つ絶唱の光が放たれる。

「ダメだあああああああああああああ」



◇

砲身の光が、命の光とぶつかり合う瞬間、押し負けた瞬間、

《ロイヤルストレートフラッシュ》

「ウウウウウウイイイイイイイイイイイイイイイイイイリヤアアアアアアアアアアアア  
金色の光が全てをぶった切る。

◇

血まみれだった。

緑の鮮血を流しながら、それでも、

「かず、ま……………」

「休んでろ、クリス」

装甲が壊れ、アームドギアが壊れたクリスを地面に下す。

久しぶりに流れ出まくる血は、やはり緑色だ。だけど、それでもいい。

「貴様か、化け物」

「櫻井了子」

「その名の女はもういない」

「知らない、俺はそう、あんたから聞いた」

それに鼻で笑い、笑い出す。

「いまだに人の為に戦うか化け物。なんのためだ？」

「なんのため？ 人間の為だ」

瓦礫の中や、どこかから現れる、無数のアンデッド達。

「その人間から化け物と呼ばれておきながらか？」

そう言いながら、それでも静かに、

「だから？」

傷口が塞がりながら、静かに、ジョーカーに変わる。

「俺は戦う、戦えない人の為に、俺は運命と戦う」

「ツツ、その先に何も無いとしてもかッ。愚かな」

「愚かでもいいさ、もう………」

その手を見ながら、静かに、

【俺達仮面ライダーは、生きる人の自由を守る戦士……俺もまた、仮面ライダーとして、全ての人の自由を守る】

そう言いながら、響、翼ちゃん、奏ちゃん。そしてクリスを見る。

【俺は仮面ライダーだ。もう誰かを犠牲に、何かを成すことはしない。俺にはもう、救えない笑顔がたくさんあるだろう。だけど俺が戦うことで救えるまでの時間が守られるのなら、俺は喜んで、運命に戦いを挑み続ける!!】

それこそが、

【俺はアンデッドジョーカー……そして】

無数のアンデッド達がカードになり、ジョーカーの下に集う。

金色のカードが身体から解き放たれる。それに静かに、

【仮面ライダーブレイドツ、剣崎一真つ。こんな俺が、俺がこの世界に仮面ライダーと胸を張って言える為にも、俺はあんたを止める。怪人の力であってもだッ】

13枚のカードが舞い上がり、青いジョーカーカードにより一つになり、金色に染まる。

そのカードを、青のジョーカーラウザーへと通す。

《チェンジ》

金色のジョーカー体、俺と言うジョーカーとスペードのギルドラウズカード。それら全てを合わせた姿に変わりながら、巨大な剣オールオーバーと重醒剣キングラウザーを取り出す。

【俺は戦うつ!! この姿、この俺の手を握る、あの温かい手があった。それだけで、それだけで俺は永遠を戦い続けられるツ!!】

そして俺と先史文明の巫女はぶつかる。



一匹の獣が駆け抜ける。あの姿を響は知っている。

「ジョーカーの全力……………」

「知ってるのか」

「ああ、あの姿の時の一真は、アンデッドの本能でできてるツ。もうただの怪物だ」

その姿はスペードのギルドカードを操るだけじゃなく、他のラウズカードも使え、あらゆる現象を引き起こし、振り回す。

「全てのラウズカードの力も使える……………だけど、アンデッドの本能が、意識を奪い取る」

「ッ!? マジかよ」

「しかし、アンデッドの本能は」

風鳴翼の疑問に、すぐに、

「一真の本能に変わってるけど、変わらない。何か、別の何かと戦い続ける本能。それが

一真の中に残った、アンデッドの本能」

「そ、んな」

天羽奏達と共に近づきたいが、一真達の戦いが凄まじく、近づきたくても近づけない。

「一真っ、一真ああああああああああああ」



「一真さん……………」

それは怪物と人が戦う姿。パソコンのモニターには、一人の獣と、この事件を引き起

こした人が戦う。

その姿は怖く、その剣風は瓦礫を吹き飛ばす。

けど、私は知っている。彼は響の大切な人なのだ……………

そしてその力は、みんなを守るために振るわれている。

私にできることを、響達、劍崎さんと共に戦う方法を探すこと。  
「みんな……………」



「邪魔をするな獣風情がッ」

「あんたは月を撃って、呪詛を破壊してその先になにがあるッ。それでなにが」

「黙れ怪物ッ、貴様に何が分かる!! 月の破壊、バルルの呪詛からの解放こそが人の幸福だッ。人々は相互理解を取り戻し、その世界を私がまとめ上げる」

その言葉に、アンデッドとしての本能が身体を駆け巡る。

目の前にいる敵、ただそれを殺せと叫ぶ。

だけど……………」

【それで】

俺の選択は救うことしかない。

【なに】

【それでなにがあるッ。何を救える!?】

無数の剣のように鋭い鎖がジョーカーを貫く、緑色の血が流れる出る中、それでも、

【お前の手を握りしめる人なのか、あの方がそんな人なら、なんでお前の手を振り払ったッ】

刃を掴み、静かに見る。攻撃を止められ、顔を歪ませる。

「黙れと言ってる化け物めッ」

【それでも、この手を温かいと言った子は、いまの世にもいる。なら俺は、後悔はしないッ!!】

その時、人の姿がブレる。

そうだ、その暖かさが身体に、心にある限り、俺はこの衝動に身をゆだねる時があるうと、飲まれない。

「人の身を捨てた貴様が、人を語るかッ!!」

「人を犠牲に、誰かを犠牲に、愛を語るなッ」

そして手のひらにある剣を天へと掲げる。

「ダメー真ッ」

響の叫びの瞬間と同時に、爆発するようにエネルギーが放たれ、全員がその場に座り込む。

それには向こうも、さすがに驚いたようだ。

「馬鹿なッ!!? ただの一つの身で、カ・ディングルと同格、いや、この力、まさか、そん

なことが有り得るはずがないッ」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

突き刺さったまま、そこからあふれだす緑の血を流しながら、剣は金色へと変わり、カ・ディングルへ向ける。

あれがまだ動くのは、本能が告げている。ならば、やることは一つ。

やろうとしていることを察し、何度も鎖を引き抜こうと、抗おうとする。

「や、やめろッ、やめろ化け物オオオオオオオオオオ」

「彼奴は、彼奴はその化け物でありながら、俺たち人間を愛したッ。だがあの方と言う奴はどうなんだ了子さんッ!!」

「!」

「化け物ですら人を愛するのに、人間を愛せず、全てを奪うしかしなかった奴なんて、俺は決して許さないッ。あんたがそれでも、その人を愛するのなら、その人に、誰かを愛する尊さを伝えろよ!!」

そう叫びと共に二つの剣を掲げた。

「や、やめ」

悲鳴に似た声を出す中、彼女の武器は、全て俺に突き刺さっている。もうノイズを弾丸のように無尽蔵に出すだけだが、エネルギー波で吹き飛ばす。



【俺は人間を愛するのをやめないッ】

カ・ディンギルが新たな一撃を放つ前に、刺さる武器の鋭さは増す。

だがそれがどうした？

【俺は運命に、抗い続けるッ!!】

その叫び、届かせるために、剣を振り下ろす……

◇

ズタズタに貫かれ、人の姿に戻った一真。

だが、

「あ、あああ」

カ・ディンギルを破壊し、それに、

「貴様ああああああああああああああああああああ」

一真が刺さったまま、空高く舞い上げる。そのために緑色の血が舞い上がる。

だが、何かをする前に、その鎖を掴む。

【!?!】

そのまま地面にたたきつけられるが、そのまま、血を流し、鎖を掴む一人の青年は、

「俺はあんたも救う」

そう愚かにも告げる。

「この期に及んで世迷言をつ」

そう憎々しく睨みながら、トゲが体内で暴れ狂う。

それでも彼は離さず、静かに立ち上がり、先史文明の巫女を見続けた。

「こんな身体だからこそ、俺はもう、諦めない」

その叫びと共に、鎖を破壊する。一つの拳がある。

「一真っ」

「響がいる」

そして近づいてくる、まともにギアを纏っていない、泣きそうな子。

「一真、どうして」

「クリスがいる」

フィーネの前に、いや、了子の前に現れながら、

「翼ちゃんや奏ちゃん。弦十郎さん緒川さん。まだいる人達、まだ見ず人達の為に」

その二人も前に立ち、驚く顔が見える中、前を見る。

「貴様」

理解できないものを見る、その人物へと、

「俺は戦う、仮面ライダーとして」

緑の血を流しながら、それでも、

「俺はあんたを救う、全部を救う。例えそれでなにも救えなくても救う、もう俺は、自分も、仲間も、なにかも!! もう犠牲による救いなんて、選ばないッ」

いましていることが矛盾であろうと……

目の前のモノは、自分がめちやくちやなことを言っていると知りながら、なおも動く。「なにが、なにがお前をそうさせるッ!!」

その異常さに、了子は後ろに下がる。

「私を救うだと、私はあの方の隣にいらればいいだけだ。愛した、あの方の」

「なら俺がそいつと会わせる、バラルの呪詛がであろうと」

「貴様は、なにを」

「本当に愛しているのなら、誰かの血のついた手で、愛し合えるのか。そんなの愛じゃない」

そう言い、拳を握りしめる。

緑色に染まった、その手は、何度だって立ち上がれる証でもあった。

「お前は」

「俺は本気だ」

それに、破壊された鎖は、剣のように鋭く尖り、エネルギーを纏う。

「ふぎけるな化け物がツ、愛を知らない獣風情がツ」

「それでも、俺は、愛する者達を守る」

丸鋸のようにエネルギーが放たれる攻撃に、翼と奏が前に出て、その一撃を反らす。

「無茶をするっ」

「あんた、不死身でも痛いもんは痛いだろ!？」

「それでも、戦わなければいけない時がある……それがいまだ」

獣のように目の色が点滅し、身体の一部が変化しかかる。

アンデッドの本能が、敵と戦えと叫んでいた。

だがその時、歌が鳴り響く。

「!、これは」

通信機、スピーカーから、そこら中の音声機から、大勢の歌が鳴り響く。

「なんだ? うた」

「この歌……」

「……はは」

笑いが出る。なぜならば、この歌が誰に歌われているか、分かってしまった。

「やっば、人間は……温かいな、始」

その言葉に、アンデッドの本能が鎮まり、別の意思が目覚めていく。

「こんな身体でも、温かいと言う人はいる」

その歌と共に、黄金が輝く。それに鼓動するように、響、翼、クリス、奏のギアが輝く。

「……………ありがとう、未来」

響も感じ取ったのか、そう呟いた。

「これは、貴様がなにを」

「俺じゃない、響達。いや、未来ちゃん達の方だ」

「装者じゃない者がっ!!? この不快な歌がっ、そんな力、有り得ないッ」

「この歌には愛がある、心からの、信じる想いが」

「一真……………」

そして近づいて来た響は、緑色の変わり果てた手を握る。

「この手を握る手がある」

「!」

「あの日、握り返してくれたお前の手は、温かったんだぞ、響」

「一真……………」

「その手はもう、俺だけじゃないんだ」

その時、翼やクリス、奏が側にいた。

「……………私は」

「響」

少しの間がある。だがすぐに、

「私はもう一度、できるかな」

「俺とできたんだ、なら」

「……………ああ」

瞬間光が輝き、全員のギアが吹き飛ぶ。

「なんだその輝き、何を束ね、何を纏うッ」

「シンフォギアアアアアアアアアアアアア!!」

《エボリユーションキング》

金色の剣の戦士が現れると共に、輝きを纏う歌姫達が空を飛ぶ。

「櫻井了子、先史文明からのその間違えた思い、俺が、俺達が正すッ」

「ふざけるなあああああああああああ!」

そして輝きが舞い上がり、ぶつかり合う。

## 第12枚・ルナアタック事変終焉

了さんがノイズを大量に町へ解き放つ中で、四人は町へ繰り出す。

そして金色の戦士は、巨大なエネルギーを持つ完全聖遺物、ネフシユタンの鎧へ。

その鎖が剣のように、鞭のように操られながら、剣風で装甲を破壊するが、すぐに再生する。

「再生能力が高いかッ」

「不死身の化け物である貴様とは違うが、この身はいまは立花響の融合症例に合わせ、完全聖遺物と融合している。この身をどう攻略する?」

「そうだな」

身体からカードが現れ、レリーフから一枚のカードが飛び出る。

二枚のそのカードは金色の13の二つでは無い為、現れた瞬間、その姿を変えた。

「なら」

剣のようなムチを弾いたのは、醒剣ブレイラウザーで、

「ハッとするぜ」

取り出したカードをそれにスライドし、カードの力を呼び起こす。



《スラツシユ バイオ ポイズン チェーンヴェノム》

「ッ!？」

刀身が草木の蔦へと変わり、ムチのように振るう。紫の液体をまき散らしながら、巫女へと絡みつき、それを叩き付けるように斬り付けた。

「なに………!？」

その時、僅かに異変に気づく。

ネフシユタンの鎧が感電するようにエネルギーがうなり、装甲が砕けだす。

「俺が何年、響の身体。聖遺物と人の身を分けてきたと思う?」

「まさか」

「俺の力、アンデッドジョーカーの力。これで俺は響の融合を押しえて来たんだ。融合を解く毒の生成。できないと思うか」

「チイイイイイイイイイ」

急に距離を取り出し、ノイズを放つが、

「ノイズ程度っ」

剣を一振りするだけで、波のように押し寄せたノイズが吹き飛ぶ。

その瞬間、鎧から五枚のレリーフが黄金に輝き、解き放たれ、重醒剣キンググラウザーへと取り込まれる。



「悪い」

「くっ、なら」

その時、ノイズを出す聖遺物を身体に差し込み、それに全員が集まり驚く。

「なに!？」

「まさか、フィーネの奴ツ。ソロモンの杖と」

その時、無数のノイズが放たれては取り込まれ、地下の施設から剣が、

「デュランダルク」

「まずいつ、あれも取り込む気か」

翼と奏の言葉と共に、その姿を現す先史文明の巫女たる彼女。

赤い竜のようなそれは、二つの完全聖遺物。デュランダルの無限のエネルギーと、ネフシユタンの鎧による完全修復。それらが合わさった存在だ。

ギアが強化された装者達。それを振るうが再生能力が高く、逆に無限のエネルギーの力と共に薙ぎ払われる。

『所詮、限定解除された聖遺物であろうと、所詮は玩具。完全聖遺物に対抗できると』

瞬間、その言葉を遮るように、無数のカードが舞い上がる。

「ウツリイイイイアアアアアアアアアアアア」

叩き込まれる雷鳴は、赤い竜の壁を打ち破りかける。



『くっ』

防壁のような壁の中、敵でもあり、仲間だった人を見つめる。

「悪いけど、あたしはあんたが憎い」

目の前にいる巫女に、そう奏は言う。その言葉に、僅かに苦笑する。

『なら教えてやろう、お前の両親達がノイズに殺されたのは、私が襲わせたからだ』

その言葉に、心臓をわしづかみにされかけた。だがすぐに我に返り、睨み返すだけにとどめた。

「……………昔のあたしなら、それで怒り狂ってただろう。だがいまは」

槍が回転し出し、静かに吠える。

「やるべきことを、見失ってたまるかああああああああ」

『くっ!!』

「いま気合い入れてるやつらの為に、旦那達の為にも、ここで終わりにさせてもらおうぜっ!!」

回転する槍が爆発し、その勢いでデュランダルを持つフィーネは、それを放つと、すぐに空へと飛び上がる。

「翼ッ」

蒼ノ一閃が吹き、デュランダルを響の下に。

「来い、デュランダルウウウウウウウウウウウ！」

その手に取る瞬間、黒い闇が身体を覆う。

【ぐ、グウウウ】

その様子に、地下のシエルターの扉が吹き飛んだ。

「正念場だ、踏ん張りどころだろうがっ」

中から二課のメンバーや、未来の友達。そして彼女が現れた。

「強く、自分を意識してくださいッ」

「昨日までの自分をっ」

「これからなりたい自分を!!」

「まだ私達はあなたと友達になってない」

「これから色々あなたの話を聞くんだから」

「負けないで、ビッキーーーっ」

シエルターから出て来るみんなの姿に、響は驚く中、その中に未来がいる。

(未来……………)

「響イイイイイイイイ」

『黙らせてやるっ』

無数のムチが放たれるが、ブレイドが剣を投げて弾く。すぐに醒剣へと切り替えて、

残りを全て防ぐ。

「響ッ」

それに、

【……………ダカラ】

それに、闇と光が合わさったように、黒と白の翼を持ち、赤い眼光で剣を振り上げ、クリス、翼、奏と共に剣を掲げ、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

吹き飛んだ重醒剣キンググラウザーを手に取る。

その様子を見た瞬間、五つのカードを彼女達の下に投げ渡す。

「使え響っ!!」

「一真を傷つけていいのはッ、私だけだアアアアアアアアアア!!」

そう叫び、光を放ちながら二つの剣を重ねる。

《スピードX J Q K A》

「一真がくれた明日を、ジャマスルナアアアアアアアアアアアアアアアア！」

《ロイヤルストレートフラッシュ》

デュランダルと共に、その咆哮を振るう。

『その力、何を束ねたッ』

「明日を信じる、大馬鹿野郎たちの、シンフォギアダアアアアアアアア!!」

五つのカードが光を束ね、その一撃を放ち、赤い竜を撃ち滅ぼす。

それは爆発が起きるが、響は見た。

その炎の中に飛び込む、明日を掴む化け物を……



「……………ハッは」

「気が付いたか了子くん」

怪我で包帯を巻く弦十郎は上着が無く、私にかけられていた。

コートを外している、緑の血によって汚れているものは、私の身体に触れている。

「私の身体を治癒しているのか」

【あのままじゃ、肉体もそのまま壊れていたからな。響に人を殺させない】

「ハッ、貴様は……………」

周りの目を気にせず、化け物の姿をさらす。

どう思われようと気にせず、それは臆することもせず、敵を救おうとする。

「……………」



そいつを慕う者は納得してなさそうだが、何も言わず見ていた。

無論、親を殺された者もいる。

だが誰も止めない。なんともバカバカしい。

「……………傷つけていいのは私だけ、か」

そう呟く中、

「貴様に一つ聞く、劍崎一真。先史文明よりも遙か先から続く、その戦いを終わらせて、お前は何を得た？」

人の身で無くなり、どれほど人を救おうと、お前は総合理解を失った世界で、人の争いを見続けていたはずだ。

なのに、

「なぜおまえは……………人を愛せる？」

「……………」

それに静かに、

【仲間がいるからだ】

【装者達か】

【それだけじゃない】

そして空いている手で、心臓に手を置く。

【ここに俺の仲間たち。始たち、仮面ライダーとして戦った、俺の仲間たちがいる。彼らの明日があるこの世界、俺を愛した人たちの明日がある世界。だから俺は何度だって、この世界を、人を愛する】

愚か過ぎる答えを、それは言った。

「……………死した者達の為に、お前は世界を救うと言うのか……………争い、お前を受け入れぬ世界を」

【ああ】

即答だった。

迷いも無く、それはそう言い切った。

「……………貴様は愚かだ、剣崎一真……………人の身を無くし、化け物と化した愚かな存在」

【よく言われる】

そう言う中、静かに空を見て、僅かに笑う。

「月の欠片が落ち始めている。藤堯辺りに調べさせてみる」

「なんだとっ!?!」

その言葉に、軌道計算し出す。結果はすぐに出て、下手をすればここに落ちる月の欠片に、化け物は空を見る。

「……………ちっ」

そう短く、立花響は舌打ちした。

「一真、月の欠片は私がどうにかする」

【響】

「一真はその女を救え」

そう言つて飛び上がろうとする時、

「響!!」

小日向未来が呼び止めるが、

「……………必ず帰ってくる」

そして静かに微笑みながら、

「今度は、帰ってきたら、迎えてくれるよね」

それに少女は涙を流しながら頷き、そして飛び立つ。

【響】

その後、

「だ———響の奴、旦那、行つてくるっ」

「奏、私も」

「くそつたれがっ」

そして三人も飛び上がる中、それを見る。

「いいのか、貴様は」

【……………信じる】

そう小さく、

【俺が間に合うまで持ちこたえると】

呟いた……………

◇

気持ちよく歌を歌った。

未来が待っている。けど、私は……………

「えっ……………」

暖かい光が私を、私達を包む。

その温もりは、あの日、あの雨の中、ノイズを素手で倒した、怪物の……………

「一真……………」

「……………もう俺は必要ない」

「一真っ」

私の声が響く。一真がどこかに行く。

「いやだよ、なんで……なんでっ!?」

「俺は運命と戦い、勝ってみせる。そう始や、仲間と言った。けれど、本当に俺は正しかったか分からない……それでも、やっぱり俺はこうなんだ」

「そう言いながら、頭に優しい手が触れる。」

「かずまあ……」

溢れる涙、一真は静かに、

「俺は人間と一緒にいられない……俺は多くの人間を守りたい、この運命に戦い続けたい。そのために、俺は戦う……」

「かずまああああああああああああ」

私達が目を覚ます頃、地面の上において……

剣崎一真の姿は、どこにも無かった……

◇

「……いまさら高校生、似合わない」

「似合う似合わないは関係ないよ響」

あの後、未来が一真に言われて、私達を初めに見つけ、現在、装者は生死不明にして、

雲隠れしている。

櫻井了子は、生きている。

だが先史文明の巫女、ファイネは死んだ。幸いかなんというか、櫻井了子は別人となり、さまざまな理由でごまかす。

元々、自分と繋がっていた米国関係者は、もういないらしい。いたとしても表だつてなにも言えない。この国でテロ紛いのことをしていたなんて、誰も言わないのだ。

「というわけで、弦十郎くんの監視下で、このまま二課に滞在することになったわ。あなたのボーイフレンドの所為よ」

「アア?」

クリスが変な声を出す。

「失敬、クリスのボーイフレンド」

「アア?」

これは私。

「分かったわ、二人のボーイフレンドの所為」

「「違うッ」」

クリスと揃って言い。藤堯が苦笑したので、雑誌を投げつけておく。

翼はやや呆れ、奏は、

「違うのか、ならもらってもらおうかな？」

「―!」

「奏っ!?!」

ニシシと笑う奏を睨みながら、未来が耳を引つ張り、勉強に戻される。

確かにあの日から勉強なんてしていないが、だからつていまさかどうかと思う。

ちなみに融合の症例があるため、無理矢理、適合率を上げて戦うことは禁止になり、色々と面倒になった。

全て何も言わずに消えた、一真が悪い。

結局一真は、どこかへ消えた。

一真だけ、この輪の中から消えた。

「……………一真のぼか」

私は小さく、そう呟いた……………

どこか遠い土地、ではなく公園で、風鳴弦十郎は静かにベンチに座る。

「いいのか、このまま姿を消して」

独り言のように、静かに呟く。返事は無く、ただため息と共に呟く。

「響くんはこのまま新生リディアンに通い、クリスくんも通う。君の願い通り、人の中に二人は戻る。装者としてではあるがな。無論、欠片が侵食しないよう、細心の注意を払うし、了子くんがどうにかすると息巻いていた」

「……………ならいいや」

そう、初めて呟く。

「君はいいのか、了子くんがいるとはいえ、響くんの融合症例による、聖遺物の融合は危険なんだ。二人を説得するのに、俺や緒川がどれほど苦労したか。君がいてくれれば」



「……………すいません」

そう静かに言い、弦十郎は黙り込む。

こうして彼と会話するのも最後だろう。最後にする気なのだろうと知りながら、彼はずっと最後まで自分ですら姿を見せず、ただ結果を聞くのみだった。

だからこそ、最後に、

「君は、人間の中に戻る気は無いのか」

「はい」

最後の問いかけに答える。彼は静かに、

「俺は見えなくなるだけで、そばにいるさ。響たち、いや、人間になにかある時、俺は必ず駆けつける」

「……………君は」

「響たちのことはあんたに預ける、ただそれだけだ。俺はいる、人の、人類の側に……………」

そして彼の気配が消えた。また人々の隣、誰かの下へと出向く。弦十郎は静かに、

「頑固者が……………」

彼はそう呟き、その場から立ち去った……………

## 最後の1枚・ルナアタツク事変、その後

それは全てが終わって、地下に監禁されている頃。

めんどくさいが、装者は生死不明状態が一番なので、いまは地下施設で行動を制限されていた。

「響響、今度はこれを着て」

「ええ〜面倒………ジーパンとパーカーでいいよ私」

「ダメだよつ、響は可愛いんだもんつ。次はこれ次はこれ次は次は次はツ」

（親友がしばらく見ないうちにおかしくなった）

親友がオシャレから遠ざかったため、大量に可愛い女物を購入して着せようとするが、頬を赤くして、息が荒い。なにか間違えられそうだと……

そう思っていると、

「おい少しいい」

「あっ」

クリスが入って来て、私たちの様子を見て、徐々に真っ赤になり、悲鳴を上げずに出て行った。

あれは完璧に間違えている。

「イライラする……………」

私はめんどくさそうにそう呟いた。



一真がいなくなり、私はこれから先、どうすればいいのか考え込む。

「クリスちゃん♪ そんなところでどうしたの？」

「つて、一番の元凶がしやしやり出るなっ」

「そくは言っても、ねえ？」

了子口調で話しかけられながら、なんなら恋バナしてみるとか言つて、別のベクトルで構おうとする。

痛みで愛し合う方法でされるより、こっちがうざい。

「いいから私に静寂を寄せッ!!」

「ふっ、ここにまともな人間は一人もいないわ」

「宣言するな」

私は何もかもおかしくなる頭を落ち着かせていると、隣に座る。

「あの男を探すのなら、二課にすることを勧める。住処もあり、情報も得られる。ただ無策に動き回るより効率はいいだろう。上も、剣崎一真の存在に、薄々勘付いている」  
「……………」

「我々が先に確保するべきだろうからな、私なんてものを抱える男に頼めばいい」  
そう告げて、私から離れていく。その時はこの頭もいつもの様に落ち着いていた。

「一真……………」

そうだ、私は、私達は納得していない。

彼奴に会う、彼奴と過ぐす。

「彼奴に、歌を聴かせたい……………」

私は静かに、決意した。



雪音クリスマス歓迎会と、装者行動制限の解除会。

響が未来に肉や野菜を皿に盛られながら、黙々と食べていると、

「そう言えば、クリスマスや響はどこに住むの?」

「司令が用意した寢床があるからそこに」

「わたしもだな……………こいつと隣かよ」

「別に仕方ないだろ」

「そうなの……………私のように、リディアンの女子寮じゃないんだ」

目からハイライトが消える未来だが、いまさら学生気分以学生寮に入れない。

「いままで寝床が無い状態での暮らしに慣れ過ぎている。いまさら一般人のような暮らし方は肌に合わない。」

「いままで、響や雪音はどうしていたんだ？」

「クリスが私の所にいたときは、ベッドの上にいたわよ？ ソロモンの杖とかの起動に、心身ともに使ってたから」

了子はそう言う中で、その後はどうなのと聞いてくる。

「いや、それは……………」

「私と一緒に、一真と寝てた」

瞬間、硝子のカップを握り砕く未来。

「……………えっ、一真さんと寝てたって……………どういうこと」

気のせいか瞳に光が無い気がする。

「どうもこうも。私は一真の膝を枕に、一真と寝てた。一真は寝ないで済むし、ずっと起きてたはずだけだ」

「つまり響の寝顔……………一真さんは見てたんだね」

「クリスもそうだよ」

「ば、バカかお前つ。そゆことは言うもんじゃ」

「なんだなんだ、面白そうな話だな」

奏が面白そうと近づいてくるが、面白くないと耳まで真っ赤にするクリス。

そんな中響は、

「別に一真には身体の欠片の治療で、胸を直接触られたり、身体も触られたりしたから、だからだいたい気には気にしてないし」

「……………え？」

気のせいか未来から黒いオーラと、どこからかシンフォギアのような歌が聞こえてくる気がするが、気のせいだ。

「ささ、触る!!? かか身体!!? そ、それってつまり……………一真さん、あの人は、あの人はっ」

「うっわあ……………これ絶対厄介なことになったぞ」

呆れた顔をする奏。そう言えば奏もリンカーの治療で、胸を触られたことがある。それは一度や二度ではないし、旗から見れば揉まれてると見られるかも。まあ気にしない。

内臓やらも触られたガングニール同士、別に言うことは無い。

未来が黒いオーラを出してる気がするが気にしない。私には関係ないのだから

.....

◇

そして我が家となる部屋があるが、

「殺風景すぎるぞ響」

「なんであんたがいるんだよ」

奏が早速遊びに来る。未来や翼、クリスが全員我が家の合鍵を持っていらしい。クリスのも持っているから私はいいが、クリスは激怒していた。

私の部屋にはカーペット、毛布、テレビ、キッチン用品。布団に入浴セット。未来が用意した衣類と下着。

後は自分で用意した衣類と、それだけだ。

「別に友達ごっこする気もないし、食って寝られればそれでいいだろ？」

「クリスだってソファアーやらなんやらあるんだから用意しろっ」

「ええ〜」

めんどくさい。物が少ない方が掃除が早いし、一真がいらないから、汚れを落とす毒草もないし、色々不便だ。

仕方ないので、テーブルなど買ったたり、司令から借りる映画など見る機具とか買うことにはした。

「……………一真は、なにしてるんだろ」



「……………イエティっ!？」



「そして私の相棒が大変なことについて」

「奏はいじわるだああ」

半泣きでそう言う。好きで部屋を汚くしているわけではないのに。

「あくもう、このペンダントは。大切なんだろ?」

「ああうん、大事なものだよ」



部屋を片付けている間、けして無くさないようにしているペンダント。

ある人に歌がきれいだよと言われたとき、その人が付けていただろうものだ。

小さい頃、本当に小さく、防人の重圧に耐えられないとき、たまたま公園で歌ったら、たまたま野良猫を助けていたお兄さんが聞いた。

その時、そのお兄さんが歌がきれいと言ってくれて嬉しかった。

(聞かせる相手がいなかった、聞いてくれる人がいなかったから。言葉にしてくれる人間なんていなかったから……ほんと、嬉しかった)

そしてお兄さんが猫を連れてどこかに行き、私が少しかだけ勇気と元気をもらった時に、落ちていたのに気づく。

鎖だけが鉄だったから分からないペンダント。大切な物かもしれないと、ずっと大事に持っている。

「翼の初恋相手の」

「かくなくで〜」

別に初恋じゃない。たぶん……

私はそれだけは無くさないように、スパードと剣をモチーフにしたそれを大事に持つ。

そう言えば、

(劍崎さんに、少し似ている気が……まさかな)



「とういわけで、響の家に来ましたって言うか響イイイイイイイ」

「な、なに未来？」

「な、なんで……なんで苗字が劍崎なの!!？」

そう驚く未来に、それはと目線を反らす。

我が家というより、いまの私の苗字として劍崎で色々登録などしている。

奏も気にしていたが、あえて聞かなかったし、クリスも無言のままスルーした。

「……立花の苗字は捨てたんだよ、いまさら名乗れない。どんな顔で、お母さんやおばあちゃんに会えばいいか分からないんだ」

「響……」

「一真には悪いけど、苗字借りる。だから私は、劍崎響、それがいまの私の名前」

「ふん……」

小さく不満そうなクリスがいたが、未来が静かに、

「ごめんね響……てつきり、一真さんとそういう仲だとばかり……けど」

なにかブツブツ言う未来がいる。

目から光が無いし、装者じゃないのに歌が聞こえる気がする。けれど、私は別に気にしないことにした。



「でき、できああああ。誰も乗ってないのに、動くバイク伝説が」

「それ一真のだよ、一真のバイクは能力で自動運転できるから、そんな伝説できたんじゃない？」

「うわああああああああああああ」

未来の友達の一人在、都市伝説集を持って来て、私と話し合う。

クリスや他にも二人いる中で、簡単な物を出す。

「ビツキーって料理できるんだ」

「ビツキーって………一真と一緒にいたら、一真が教えてくれた。貧乏料理、生前の一真、バイトで給料無くて、アパートから追い出されたりしたらしいよ」

「どんな奴なんだよ彼奴………」

呆れる話だが、まあ仕方ない。

「なんか宇宙人とか、別の知的生物とか、なんか話してればいそうだなあ♪」  
 そう言うのだが、

(……………色々な裏側知ってるけど、話さない方がいいか)  
 そう思う今日この頃である。

◇

「……………ウエエエイ!!? ユーフォー!?!」

◇

「そう言えば、私も缶詰料理仕込まれた。ワニ肉だけじゃ、外国で腹壊すから」  
 「それもそれで凄いつ」

「けど、一真さん、お金はどうしてたの?」

そう未来が言うから、

「マフィアとかテロリストとかからかっぱらった金品とかそんなところ」  
 クリスと共に正直に答えた。

クリスなんかは、たまたま金鉱山見つけたときに、一真はとりあえず懐にしまおうと  
していたらしい。

バカだろう、彼奴その気になれば、どんな物も収納できる術があるのに、貧乏が根付  
いている。バカだ。

とりあえず、みんな開いた口がふさがらなかったよ。

◇

「今日は響が学校に初めて来る……響のリディアン女子制服」

心がときめく、響のリディアンの制服。なにか心に響く。

そう思っていました。

スカートにスパッツを穿いた響。神は死んだと心から思った。

◇

今日、学校に始めて出向き、時間が空いたとき、未来が、

「響、まさかと思うけど、下はつけてるよね？」

「? スパッツだからって、パンツははいてるよ」  
「……………」

その日、未来は少し目まいを起こしたが、その後は問題なかった。

◇

その日、私の下に、一人の迷える子羊が現れた。

「了子さん、知っている人に呪いをかける術はありますか」

「……………やめなさい」

とりあえず止めておくように説得した。

◇

「ウエエエエエイイイイイイイイイイ  
!!??!?!? ブチノコ!?!」

◇

一人暮らしが始まる、何度目かの一人での眠るある日の夜……

私は一真がツチノコを見つけて、捕獲する夢を見て起きて、水を飲みキッチンに向く。変な夢だ、一真も子供のように追いかけて転んでいたし……

「……………一真」

一真の体温を感じない。

一真がいらない。

一真。

一真……………

「……………」

今度会ったら、必ず……………

口元が、つり上がる。

「一真……………覚悟してろ……………」

ノイズと戦い続ければ、きっと会える。

だから、待ってろ一真。

私は、諦めない……………

◇

「……………それじゃ、これからは別行動だな翼」

「ああ、奏はボランティアで日本を巡るんだな」

「ああ。彼奴に歌が届けばいいな」

「かな……………はっ」

「えっあんたも敵？敵なのかお前も敵か」

「殺すしていいのは私だけ殺していいのは私だけ殺して——」

二人の後輩がこちらを見るが、私はなにも言えなかつた。

(……………彼奴に聞いてほしいな、一真)



「……………ココドコジャ……………」



「……………」



それは英会話などのテストを受けているとき、その終わり……………

「ひ、響が、英語や数学が。勉強してないんじゃないのっ!?!」

「学を覚える目的ではしてない。生きるために、一真のところであげた。数学は生きて

いくのに必要だったし、英語は生きてたら話せるようになったし、スペルも覚えたんだ」

「そそそ、そうなの」

「うん、暗記とかも覚えたよ。少しすれば未来に追いつくから」

「う、うん……………」

そしてしばらくしてから、

「親友が他人に変えられたああああああああ」

廊下から謎の悲鳴が聞こえたが、私は気にせず、勉強し出す……………



それはある場所で、

「にゃ〜」

「ほら、ご飯だぞ。まったく、ここから離れたら、猫が住み着いた」

まさか顔を出したら猫の親子がいた。どうにか飼えないか考えながら、面倒を見る。

「まったく……ほら」

「にや〜」

名前は後々決めながら、私は、

「私はいま生きてるよ、一真……」

◇

「……………」

ある場所に一人の化け物がたたずむ。そこは墓地。

ここにある男が眠る。

人間を愛し、人間たちの中に眠る。一人の男。

「始、おまえは人間たちの中で、幸せだったんだよな」

静かに花を置き、空を見る。

「俺は大丈夫だ、みんな」

その手を見ながら、ただ思い出す。

その手を握り返した、人達の顔を。

「ここにみんないるから、俺は戦い続ける……………ペンダントとか、昔から少し変わったけ

ど。あれどこで落としたんだか？」

空を見ながら、コートを翻し、そして背を向ける。

「俺は一人じゃない」

そして男は人間の世に背を向ける。

「また必要になる日が来るのなら、俺は戦う。ジョーカーとして、剣崎一真として、仮面ライダーとして」

しばらく歩き、墓地から出る時、その時、ある家族とすれ違う。

ある友人によく似た男性と親子に似た、家族だった……………

「……………」

静かに歩く。どんな道であろうと……………

そして少女たちを思いながら、彼は人間の世界から姿を消した。

また運命と戦うために、彼はまた一人で歩き出す……………

# 戦姫絶唱シンフォギア／ブレイドツ!! G 新たな1枚・永遠のもの

炎が燃える。瓦礫の中、歌姫は歌う。

己の命を代価に、目の前の怪物を抑え込む歌。

一人の少女が瓦礫の下、かばわれながら、歌姫へと叫ぶ。

——誰か助けて………私の妹を、誰か………——

血に染まりし、歌を歌う。銀の歌姫が息を吸った瞬間です。

雷鳴が轟き、瓦礫を破壊しながら、怪物を吹き飛ばした。

全ての者達が驚く中、永遠の戦士はその場に駆け付ける。

◇

《アブゾーブクイーン エボリユーションキング》

13枚のカードが舞い上がり、黄金の波動が辺りに放たれた。

私はその場に踏ん張る。聖遺物アガートラムを纏うのに、吹き飛ばされそうになる。

「! マリア姉さんっ!? マムっ!!」

後ろに振り向くと、瓦礫だけ吹き飛び、二人も驚きながらそこにいた。

炎が吹き飛び、火災が消える中、13のレリーフを鎧に刻む、黄金の戦士が静かに現れる。

その時、私の上に瓦礫が降る瞬間、私は気づくのに遅れ、目を瞑る。

それと同時に、砕け散る音を聞き、恐る恐る目を開けると、黄金の騎士が私を守ってくれた。

けれど、

「だめっ」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアア』

背後から完全聖遺物ネフィリム。生き物のようなそれは咆哮を上げながら、彼に迫る。

だけど彼は後ろを見せたまま、右腕のレリーフが光り輝き、裏拳を放つ。

とてつもない黄金のエネルギーが拳を強化したのか、ネフィリムは簡単に吹き飛ん

だ。

「すい………」

壁にめり込み、瓦礫が吹き飛ぶその一撃。ネフィリムが傷付き、僅かにひるんでいた。

「……にいろ………」

私は初めて、彼の言葉を聞いた。男の人の、静かな声であり、静かにネフィリムへと近づくと、手元から巨大な剣が現れ、瞬間、左足のレリーフが輝くと加速した。

『ガルルルッ』

巨大な剣と腕がぶつかり合う中、もう一本、別の剣を取り出す彼は、黄金の輝きを纏いながら、ネフィリムと斬り合う。

ネフィリムの圧倒的な力、高エネルギーの火力を真正面から受けても動じず、彼は切り続けた。

瞬間、右足のレリーフが輝き、蹴り飛ばす。

吹き飛ぶネフィリムと距離を取り、一枚のレリーフが輝くと、一枚のカードが飛び出し、短い剣へとスライド。読み込ませるような音が鳴り響く。

《マグネ》

瞬間、鉄を含む瓦礫が浮かび上がり、ネフィリムへと押しつぶすように飛来する。

「電気………磁力?」

その時、彼の鎧、その顔を覆う兜の目が光ると共に、五つのレリーフが輝き、カードがまた飛び出す。

大きく巨大な剣を振り上げ、腕を伸ばして、剣を軽く掲げた。

カードは静かに、スロットのようなどころへと吸い込まれる。

《スペードⅡ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ ストレートフラッシュ》

五つのカードを描く光が、二つの剣に宿ると共に駆けだした。

『ウオオオオオオオオオオオ——』

輝き、雷鳴を纏う双剣で斬りかかる。

ネフィリムは両腕を交差していた。並みのエネルギーや兵器では傷も何もできないはず。なのに彼は、咆哮するネフィリムを建物の外に吹き飛ばした。

閃光が辺りを一瞬照らし、土煙が僅かに辺りを包む。

それを静かに見つめ、短い剣を消すと、

「トドメだ」

その瞬間、また五つのレリーフからカードが浮かび出て、それを手に取る。

《スペードⅩ J Q K A ロイヤルストレートフラッシュ》

重々しい剣を地面に刺すと、建物どころか大地や空間自体が揺れた。

静かに手をかざし、腰を少し下げる。目の前にカードに酷似した光が現れ、それと共

に彼の黄金の鎧が、金色へと光り輝いていた。

「ウツリイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア」

彼は飛び上がり、身体を捻り、光に変わる。カードをくぐりながら、ネフィリムへと飛び蹴りを放った。

巨大な爆音と、爆発の中、私はただ見ているしかなかった。

強烈な光が消えると共に、私は建物の外に出る。



「ネフィリムが………」

ネフィリムは完全に機能が停止していて、まるで剣が刺さった痕のように沈黙していた。

そして、彼らしき青年がいた。

「あ、あのっ」

その人は静かに振り返るが、トルネードと言う音と共に、風が吹き荒れ、姿を消した。私は僅かに胸に残る鼓動と共に、その姿を忘れない。

あの日見た、黄金の騎士。





それを聞きながら、私は少しだけ心配になった。切歌は好きなものだけ食べるし、マムは肉しか食べない。ドクターは論外。

あれから数年、まさかあの日の出来事を引き起こした聖遺物が鍵になるなんて……  
(あの日の彼は知ったら、どう思うかしら……)

あの日、私達姉妹とマムを救った彼。

私は見ていない、日本人らしき彼は何者だったのだろうか？

施設の研究者やエージェントが調べたが、どこの誰か分からないままだった。

彼が全てを消したのは、理由はおそらく、彼らと関わる気が無いからだろう。私ですらそうするし、そう思う。

何者であろうと関係ない。彼は私の大切な家族を守った。それだけで十分。

(だけど、セレナは……)

気持ちは分かる。私も……

そう思い首を振る。

彼はセレナの大切な人、私は恩人。それだけでいい。

そして静かに、休憩室で一人過ごす。

願わくば、彼にあの日の恩を返せることを願いながら……

◇

「……………おいしい〜〜」

「おいしいデス〜」

「うん、おいしい」

お好み焼き屋で、三人の娘はお好み焼きを頬張りながら、幸せそうにしている。

「マリア姉さん達にもお土産に買わないと」

「デスデス、きつとドクターは食べないのでドクターは無視するデス」

「うん、あの人お菓子しか食べないから」

「そうだね」

そう言いながら、買い物を済ませ、そのお店を出る中、フードを深々とかぶるフードパーカーの少女とすれ違う。

◇

「ん」

なんだろう。何か敵な気がしてしまった。

先ほどの客の一人、年上の、姉か保護者。敵と感じてしまったのはなぜだろう？  
ここ最近、イライラすることが多い。

それとクリスや奏が敵らしい。最近は翼も怪しい。

あれはよく動き回るから、分からないことだらけだ。

いまはとりあえず、ノイズと戦い続けよう。そのためにも、

「おばちゃん、お肉大盛り、特性スペシャルで」

「はいよ♪」

ご飯をよく食べ、備えよう。

一真に出会った時……………

(逃げられないくらいに殺す為に……………)



「つたく、やっつけられるかよ」

「なによ、学校で何かあったの？」

了子、まだ少し慣れないが、いま愚痴を聞いてもらっている。

「私が学園祭なんて、なにすればいいんだか」

「あら？ クリスは可愛いんだから、なにしたっていいじゃない。学生は学生の時しかできないわよ？」

「……………だけだよ」

ため息を吐く了子。それに頭を悩ませながら、コーヒーを飲む。

「情報整理しても、ノイズがソロモンの杖の所為で出やすくなったせいとか、各国に目撃例がある。それと共に、煤のみと言う結果もね」

「……………彼奴か」

それに静かに頷く。

「自壊するには早すぎるし、人と共に自壊したわけではないから、破壊されたのだろう。だいぶ動いているが、少し動きが早い」

「彼奴らしい」

静かに考え込む。ここから出ていくことは得策じゃない。

タイム、フロート、マツハに色々ありすぎる。

その気があれば、あれは世界からも逃げていく。

（絶対に責任取ってもらおう、彼奴だけは逃がさない）

できれば了子から不老不死の方法くらい聞き出したいが、沈黙を守っている。

まあいい、いま年取らなくなっても困るしな。

そう思いながら、いまはいま、彼奴がくれた日々を生きる。



「久方ぶりの大舞台か」

そう眩きながら、私はペンダントを取り出す。

スピードと剣のペンダント。初めて私の歌をほめてくれたお兄さんが付けていた物だ。

それを見ながら考え込んでいると、

「つばさくいる……うわああ」

現実に戻された。

また部屋が物で溢れている。

何故いつもこうなるんだ？

「いや、片付けないからだし、飲み物もキャップをちゃんとしろよ。つたく……翼は何年経つても世話が焼ける」

「奏は意地悪だ」

そう眩きながら、これだけは無くさないように、大事に箱にしまった。

どこかで聞いてほしい、私の歌……

◇

「ブヘッション!!  
???

どこかの外国で、コートを羽織った青年は大きくくしゃみをする。  
周りに誰もいないことを見る為、辺りをキョロキョロするが、誰もいない。  
いるはずもないか、ここは、

「ブヘッタナ、ポイブ!!」

海底なのだから。

「ヴボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

そう叫びながら、彼は姿を変え戦う。

ノイズを殲滅するため、人々を守る為に、戦い続ける。

◇

「最近は安定したかな………」

海底から這い出て、岩場に腰を下ろす。

いまは各国のありとあらゆる場所に現れながら、空間から漏れ出るノイズを倒す事しかできない。

ここ最近、とある組織の者達に追われていたが、ようやく姿を見せなくなつた。ともかく、ノイズはシンフォギアと言うシステム以外は、一応倒せない。

できるとしたら、それ以上の能力を持つ、自分などしか思いつかない。だからと言って、人の側にいるわけにはいかないのだ。

深夜、人気も無い海辺。その岩場で静かに、

「……………日本か」

そろそろ包囲網は無いだろう。

歌姫と呼べる少女を思い出しながら、一目見るかとも……………

カードを握りしめ、ラウズカードを取り出す。

《チェンジ》

イーグルアンデッドに変化し、その場から飛び立つ。

目指す地は、自分を思う者達がいる日本へと……………

いま、また歯車が動き出す。



## 第2枚・いまの響

それは不思議な建物だった。

人々が気にも留めないが、いつからあったか分からない建物。

今日もすであつたかのようにあり、静かに、カフェでは無いのだが、コーヒーの香りを漂わせる。

そこに一人の青年が訪ねて来る。

それを出迎えるのはこのオーナーで、よく手作り料理をして来る者達に振る舞う、変わった趣味のおじいちゃん。

「いやいや、久しぶりだね剣崎くん」

「ですね、すいませんがコーヒーももらえますか」

「はいはい、任せてね」

そう言い、知り合いがいらないらしいことを聞きながら、コーヒーをもらう。

ここで少し落ち着くかと、剣崎一真はそう思いながら、ここにはあの二人も連れて来たりしたことを思いだす。

「今頃なにしてるんだか………テレビ見れば分かるか」

そう思い、何気なくテレビを見ることにした。

◇

深夜の特別列車。そこにフードパーカーの少女と、赤いワンピースの少女がいるが、

「くっそがッ」

列車内で報告の為に outward と、一人の男が大切そうに金属ケースを持っている。その中に聖遺物、ソロモンの杖が収められている。今回の任務での輸送の一つだ。

そして友里あおいもいて、一人だけと言うことに驚く。

「クリスちゃん、響ちゃん達は!？」

「あの槍姉妹はッ」

◇

「ん、なんか姉妹扱いされた気がする」

「それより来るぞッ」

空を飛ぶノイズは身体を丸め、弾丸のように飛来するが、それを二人の歌と共に、列

車に飛来するのを回避させる。

拳を振るい、シンフォギアの空圧にて撃砕し、奏のアームドギアが光り輝き、刃を伸ばして振り回す。

「まるで操られてる、ソロモンの杖を狙われてる?」

「おいおい、ソロモンの杖以外にも、ノイズを操る聖遺物があるのか」

ルナアタック事変。三か月前の先史文明の巫女フィーネが起こしたとされる事件。

その責任から櫻井女史の櫻井理論は世界各国政府に、詳しい内容と共に発表されたりと忙しい日常の中、ソロモンの杖をとある国の基地へと輸送する話である。

(ソロモンの杖以外の、ノイズ操作の聖遺物………例のこと言わないといけないか?)

考え込んでいると、弾丸がガトリング砲で放たれ、そして現れるのは、

「おいそのバカ姉妹っ、迎え撃つぞ!!」

「こんな姉はいやだっ」

「おいおい、お姉ちゃんって言っただけ二人とも?」

そう言いながら、歌いながら列車を守る二人。

でかいノイズが攻撃を耐える中、遠距離のクリスが派手にぶつ放す。

私と奏でそれを守る。

だが、

(やっぱり、こいつらの動きは統一されている。やっぱり言っておくか……………)

クリスも同じ顔をしている。正直、ある化け物の行動は変わらなかったらしい。

各国政府の目が特異災害対策機動部二課に向けられている。

フィーネと呼ばれていた存在に、乗っ取られていたことになっている櫻井了子がいるからだ。

だから言えなかった。聞かれていないからと言うのもあるが……………

「つて、まずい二人とも」

「なん」

「げっ」

奏が女としてどうよと言う声を出すのが仕方ない。

トンネルが迫り、急いで列車内へと入り込む。

「くそっ、攻めあぐねているな」

「この前みたいに飛んだりできればな、できないか響」

「無茶を言うな、あんなにどうしてできたか分からないし、そもそも私が引き出したなんて信じていないっ。ともかくこのトンネル内で倒すぞ」

そして私は、弦十郎司令が貸してくれた映画の、ある行動を元に動き出す。二人は呆れていたが、マニュアルと言つて映画を貸す司令官に文句を言つてほしい。

◇

列車の連結を外し、相手にぶつける。

ノイズは位相差障壁により、簡単に言えば物理法則が通じない。つまり普通の攻撃や、ただの壁などは通り抜ける。この行為もただでは無意味だ。

だが相手の動きをより狭くできる。

列車から抜け出るノイズへと重い一撃を放ち、吹き飛ばす。

「つたく、彼奴がいれば、暴走モードで、より壊しているのに………イライラする」  
そう呟きながら、朝日を背に、その光景を見る。徹夜かよ。

◇

搬送任務を終える手続きをしている中、一人の博士、もう一人の輸送物。ウエル博士が静かに挨拶する。

「さすがはルナアタックを鎮めた英雄ですね、その活躍は噂に違わないものでした」  
そう言うが、正直気に食わない。

英雄？ 私が？ ふざけるなと叫びたくなる。

だが何も言わず、ただ意識をぼーっとすることで消して、話の九割も聞かないことにする。人殺しと罵り、いざとなれば英雄扱い。

ほんとイライラする。



こうして四人で外に出る中、奏はうっしやとテンション高い。私はだるい。

「これなら翼のステージに間に合いそうだ」

翼は相も変わらずアイドル、歌い手として活動している。

前よりも前向きになり、一人でテレビ（バラエティー番組やクイズ番組で）活躍。奏はテレビでは見ることは無いが、ボランティア活動を主に、二人して歌い手として活動していた。

奏はほぼこちらに時間を割くが、おおむね自分ら問題児の監視役だ。

「よく考えたら、前座やるあんたもここにいていいのか疑問に思うが」

実はこの後に、翼が海外のアーティストとコンサートがあり、奏もゲストとして呼ばれている。だからここにいるのはおかしいのだが、やはりメインはこっちらしい。

「心配してくれるのか響く？ 私は平気だよ、メインは翼と外国のアーティストだしな」  
「抱き着くなつ、暑苦しい」

そうじゃれ合っていると、基地の方で爆発が起きた。  
その場で固まるが、すぐに切り替えて突撃する。

◇

ソロモンの杖や博士、多くの人の生死確認の中、正直イライラする。

やはり言うべきかとクリスと話し合いながら、翼のステージ。世界各国生配信すると  
言う豪華なもんを見に、私達は出向くが……………

「はあ、めんどくさ」

「それはこっちのセリフだ」

奏だけはすぐに帰ったが、こっちは間に合うかどうか分からない。未来達が見に出向  
いてるし、なにより、

「彼奴も見るかな……………」

「彼奴のことだ、美人だからって言う理由で目え行くんじゃねえ？」

外国のトップアーティストの夢のコラボ。それが今回の目玉だ。

私達は外国アーティストを見る彼奴を思い浮かべて……

「殺したい……………」

「同感だ……………」

イライラする。私を置いて、どこかに行った。異世界だろうが見つげ出さなければいけない。

そしてそれ相当のおしおきもしないといけない。責任も取ってもらわなければいけないし、奏との関係も問いたさなければいけない。最近奏も意識してる。

インカムから藤堯が『ヤンデレだ……………』と呟いた。今度覚悟してろ。

『そっちはどおくリスちゃん、響ちゃん？』

「慣れん、フィーネ口調を要請する」

『分かった、そっちはどうだ二人とも』

通話先は櫻井了子。一応ソロモンの杖以外にノイズを操る物が無いかなど、色々聞いてみるが、無いらしい。

「ノイズか」

『こつちも空振りだ。やはり各国のノイズは、何者かに倒されている』

「……………そ」

一真はやはり一真だが、どうもノイズが格納されている空間。バビロニアの宝物庫と



言う空間の扉、それが開きかかっているらしい。

各国のノイズ目撃例の他、それを撃墜する戦士やシンフォギア装者も噂がある。

『やはり黙示録の竜は……………』

ぼそりとなにか聞こえた。

あなたの最後の悪あがきの所為か。だがいまは言っていられない。その分働くだろ  
うし。

『ともかく、二人は弦十郎くんの指令が来るまで待機だ』

「ああそうだ。ついでだから了子さん、話しておきたいことがある」

クリスと共に話し合い、話すと決めた。テレビ画面には生放送のコンサートを点けな  
がら話す。

『なんだ』

「一真が、聖遺物を回収している」

電話先が沈黙する。おそらく眉間辺りを押さえてそうだ。

『初耳なんだけど』

「いま話した。正直彼奴はバニティって言うカードで、物を自分の中に封印できる。そ  
れで危険なアーティファクト、そう言ったものを取り込んでるんだ」

『初耳なんだけどっ』

少し呆れが入るほど叫ぶ、了子が呆れているのは分かる。だが仕方ないだろ。

『彼のことは分かったわ、まさか聖遺物まで相手にしてたとはね』

「時折色々あったから、私の時もクリスの時も」

色々あったなと思いつつながら、向こうからため息が、

『余計に彼と会わないとね。このまま貴方達もこじらせたら厄介だし』

「るっせえ先史文明からこじらせた女」

こうして通話を切り、横のクリスを見ると、クリスが硬直している。なんだと思つたが、

「……………おい、いつから演出で黒いガングニール纏った外国アイドルが、ノイズを従えてる」

私が通話している間にながった!?



マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴと言う外国アーティストが、ガングニールの装者であり、現在コンサートに乗っ取った。

確認して結果を言うが、ぶっ飛んでるなどと思う中、だが現在観客は下がらせ、翼と奏

だけはステージに残す。一応リンカーを使ってしまった奏はもう使えない。歳だし。

となると、戦えるのは翼だが、この映像は世界生中継。気合いを入れれば真っ裸が世界中継されるのはまずいだろう。

「お前、少し論点ずれて考えてないか？」

「気にするな」

クリスは知らないようだ。私らが真っ裸になるの。いや、何も言うまい。

「相手さん、なにがしたいのかはよく分からないが、人質がないのなら、後はどう、突入するかだな」

「ああ、いまは翼と奏がステージに残されてるだけだ。だけど目の前には色違いのガングニールを纏うお姫さん。どう出るか……」

それまでながあつても纏えない二人を、見ているしかない。

そう思っていた。



人がいなくなった瞬間、ノイズが集まり、マイクを剣として使い戦うよりも、カメラから外れるために動きたいが、

(ダメだ、向こうはこっちの思考が見え見えだつ。人質がないのが助かるが、このままじゃ、あたしら装者が世界中に中継され)

そう奏が試行していたとき、

何かが降つて来て、マリアはそれを避けた。

「!? 何者っ!!」

マリアがマントを翻す中、土煙の中で風が吹き、煙を飛ばす。

二人の前にフード付きのコートを羽織った青年が静かに立ち上がる。

「っ!!?」

二人は驚きかけながらも、顔には出さず、そして彼はすでにベルトを巻いている。

「変身」

『ターンアツプ』

クワガタの絵柄が現れ、それをくぐると、ギャレンアーマーを纏う、一人の戦士。

「仮面ライダーギャレン………あんたらは避難しろ」

「させるかッ」

ノイズと共に迫るが、瞬時にホルスターから醒銃ギャレンラウザーを取り出して、ノイズを撃ち抜き、インファイトでマリアと対峙する。

瞬時に刃先を向けて接近するマリアに対して、ラウズカードを扇状に広げ、一枚の

カードをスライドし、読み込ませる。

《ロック》

銃と、突如現れた岩壁が激突し、マリアが驚く中でもう一枚のカードを使用。

《ラピッド》

銃へと光の絵柄が吸い込まれ、瞬時岩壁から飛び出し、引き金を引くと、弾丸が雨のように連射され、マントで防ぐマリア。

ノイズは近づいてくるが、拳で吹き飛ばし、距離を置いた瞬間、お互い構える。

「何者かは知らない……だがこのガングニール、如何なるものをも貫く、無双の一振りッ。貴方が何者でも、ステージから降りてもらおうわ」

「悪いが、少し本気を出す」

そして左腕を静かに構えると、腕にアブゾーバーが出現し、二枚のカードが舞う。

《アブゾーブクイーン フュージョンジャック》

回転し、銃を軸に突撃するマリア。孔雀の羽根が広がり、それを纏い、ギャレンはジャックフォームになる。

それと共に、三枚のカードを、強化され、刃先が付いたギャレンラウザーへ読み込ませた。

《バレット ラピッド ファイア バーニングショット》

鳴り響くと共に後ろへ飛ぶ。炎が孔雀の翼から放たれながら、炎の弾丸が連射される。

「なっ」

竜巻はその勢いで吹き飛び、黒いマントを翻して地面に下りる。

《アッパー》

「!? はや」

いっ!?と叫びながら、すぐさま槍で防ぐが、その拳を振り上げた一撃を防ぎきれず、吹き飛んでいく。

（なにっ!? 見た目以上、これは重い。ほとんど瞬時に距離を縮めた!!?）

周りをノイズで囲まれるが、気にも留めず、ファイアの音と共に、爆炎が身体から放たれ、全て焼き尽くされた。

「くっ」

顔をゆがめ、その様子を静かに見つめる。だがその視線は、カードへと向けられる。「そのカード……まさか、同類?」

その問いかけと共に、テレビ画面が全てシャットアウトされた。

「なに!? 中継が」

「止まったっ、翼っ」



の下にあるシャツフルは、空間内にあるものの位置を取り換えた。

ノイズと奏の位置が変わり、そこに無数の鋸、丸鋸が放たれていて、翼も気づき、二降りの鎌を防いだ。

「他にも装者がっ」

「デッスうううう」

弾丸での狙撃でけん制して、丸鋸の装者の追撃をやめさせた。奏はすぐに位置を把握して、翼の側に来る。

マリアはそれに気づき、槍が迫るが、銀色の風が舞い上がり、奏のガングニールを阻む。

「なっ」

銀色で、小さな刃を吹雪のように操る、白い妖精を思わせる装者。

そしてマリアは翼の攻撃を避け吹き飛ばし、地面に下りる。そこに翼が吹き飛ばされて、それを受け止めたギャレン。

「あんやろう、三対四か」

「すまない……だが私達の前から消えたこと、許していないからな」

そう少し愚痴るとき、翼はなぜか悪寒が走る。

ギャレンもその様子に気づき、首をかしげた。



そして現れた丸鋸の子は、すぐにその二人に攻撃をしかけに接近し……………

「いや、四対四と一だよ」

そう言つて、その子を蹴り飛ばす存在がいた。

弾丸にでも貫かれかけたように吹き飛ばすその子に、ギャレンは呆然と、翼はすぐに何事も無かつたかのように離れた。

「遅いからな……………」

だがすぐ後ろから、耳元で囁くように銀色の髪、赤い弓と言う銃弾を放つ歌姫がいる。防人は静かに汗を流している中で……………

「……………会えた」

そう言つて、マフラーを顔で隠し、一人の拳、ガングニールのもう一人の装者。響がここに現れ、すぐにノイズへと弾丸が雨のように降り注ぐ。

「ああ……………」

イチイバル装者、クリスもまた、口元を釣り上げた。

「一真アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

二人の少女の咆哮に、ギャレンは、

「……………(めんなさい)」

謝ることしかできなかつた……………

### 第3枚・咆哮する少女達

それは謎の犯行声明を宣言した、ノイズを操り、ガングニールを纏うアイドルと戦う。そんな出来事の中に飛び込んだのは、仮面ライダーなる戦士。さらに別の聖遺物を操る、三人組の装者。

そしてそこに援軍として登場したのは、二人の装者。

少しの硬直後、すぐに全員が動き出す。だが、

「邪魔だガキイイイイイイ」

「くっ」

丸鋸を操る装者の歌と、獣のように全てを破壊する歌が鳴り響く。

そんな中、めんどくさくなり、丸鋸を素手で受け止めた。

「なっ!!?」

血を流すが、気にせずそれを握りしめ、指がめり込み、無理矢理動きを止める。

それには装者の少女は驚きを隠せず、それを引っ張りよせて、その腹に重い拳をめり込ませた。

「調ええええ!!?」

クリスと戦っていた、翡翠の装者が叫びをあげ、銀の風が舞い上がる。

吹き飛んだ調と呼ばれた子を回収して、他の二人も集まり、こちらも集まった。

「ごめんなさい、セレナ」

「気にしなくていいよ。それより……」

そしてそれに挟まれるように、ギャレンと言う仮面ライダーが、四人組。マリアと言う歌姫達を見る。

「大丈夫デスか調っ!？」

「うん………平気」

お腹を押さえ、せき込む調。奏が前に出て、ガングニールのマリアを睨む。

「テメエら何者だっ!？」

「イガリマ装者、暁切歌」

「シウルシャガナ装者、月読調」

「アガートラーム装者、セレナ・カデンツァヴナ・イヴ」

そう名乗りを上げ、ギャレンを見る駆けつけた三人。

「姉さん、あの人は」

「………彼のようなカードを使う、システムの使い手よ」

「!？」

その時、セレナが悲痛な顔を見ると、クリスと響から殺意が放たれる。翼と奏もムツと言う顔で、彼を見る。またかと言う感想が出た。

「……………銀の歌姫以外、時限式か」

ギャレンはその視線から顔を反らしつつ、そう呟く。

それに驚きながら、奏はすぐにその影響を受け、その場に座り込む。

「奏っ」

「悪い、あたしはアウトだ……………纏っているので、限界か」

そんな中、響が手を広げ、爪を上すように構える。

「なら私達に任せろ、後の話は、病院で聞かせてもらおうから」

そう言い、マリア達を見る。マリアはその殺気に、

「ルナアタック事変の英雄、そう言われている貴方から考えられないほど好戦的ね」

その言葉には、

「イライラするッ、私を英雄なり、正義の味方と呼ぶなッ!!」

歯を食いしばり、殺気がより増す。それに少女達は年上二人の後ろに隠れかけた。

「都合の悪い時は人殺し、都合が良い時は英雄。第三者の言葉が私は嫌いだ。イライラする……………一真は殺す、テメエらのように、自分の都合で他人の楽しみを壊した奴は、半殺しだッ!!」

彼は少し怯えるが、すぐに切り替え、銃を構え、歌姫達は武器、アームドギアを構え  
ると、

「! こんな時に」

ギャレンラウザーに収納されているカードを取り出し、すぐに切る。

《バレット》

「なに?」

突如地面から飛び出るノイズ。響を狙うが、それを撃ち落とすギャレン。

「全く、私達だけでは信用できないようだ」

無数のノイズが現れる中、各々の戦いが始まる。



「貴様らの企み、聞かせてもらおうぞっ」

「できるものならやってみなさい」

防人と黒のガングニール。

「なんでテメエらがノイズを操れるか……、ともかくテメエを真つ先にハチの巣にし  
てやらああああああああああ」

「女性なんですから、少しは言葉使いに気を付けた方がいいですよ」  
イチイバルと銀の腕。

「悪いデスけど」

「貴方を先に潰すっ」

「ちっ」

「邪魔だ!!」

響と奏が二人組に攻撃されている間、ギャレンはいくつも精密な射撃でノイズを倒しながら、周りを見る。

銀の刃を無数に取り出し、それが風のように操られ弾丸を貫き、クリスに迫ったりしていた。

防人は黒のガングニールと敵対して、響は切歌と激突し、女の子らしからぬ声で踏ん張り、無理矢理地面に投げ飛ばしたり、拳を叩き付けたりする。

「このままじゃまずい」

奏はギアが軋み、火花を散らす。

すでにリンカーを打ち終え、再度リンカーも打たずに使用している彼女は、いつ戦闘不能になるか分からない。いまノイズと言うものがウロウロしているここではなおの事。

無数のノイズが弾丸のように、奏へと突進する。奏は槍を構えるが、次の瞬間吐血し、膝をつく。

だが、

『ターンアツプ』

ギャレンが光の門を出現させ、それを阻む。消し飛んだのを確認してから潜り抜ける。ブレイドに変身し、奏の下へ留まる。

「！」

マリアとセレナはその姿を見た瞬間、驚きを表情を変え、セレナは少しだけ頬を赤く染めた。

「！」

その瞬間、約二名から暗いオーラが噴き出した。

「あの人は、まさ、きやつ!？」

「テメエが敵なのはなんとなくよく分かったっ!!」

セレナの言葉を遮るように無数の弾丸が放たれるが、銀の風が渦巻き、それが高速回転して弾丸を防いでいる。

だが刃の僅かな隙間から、弾丸が風の壁を突破していた。

「きゅ、急に力が増した……!!? だけど、私は、あの人に用があるッ」

その言葉に歯を食いしばり、無理矢理歌いだすクリス。それに負けずとセレナも歌い、歌が激突し合う。

それは別の場所、響と言う獣もそうだった。

「ザババの鎌を食らえデスっ」

「ああッ」

「デデスっ!?!」

響が両腕で投げ放たれた刃を弾いたとき、鎌を振り下ろす切歌…しかし。

それに響は口で噛み、防いだ。

そのまま身体をひねり、無理矢理投げ飛ばす。

「む、むちやくちやデスっ」

獣のようになり、切歌へと追撃し出す。

「一真……………」

拳の装甲が爪のように鋭くなり、ブースターが付き、加速しながら四足歩行する響。

まさしく獣そのものとして、切歌が警戒して構えた瞬間、背後にいる。

「!」

息をのむ切歌は思いつき蹴り飛ばされた。

「切ちゃんっ」



「切、！」

セレナは一瞬隙を見せた瞬間、その口に銃口をねじ込む。

「死ね」

「むぐっ」

ためらいもなく引き金を引いたクリスは冷たい目をしていて、すぐに無理に身体をひねり、避けたが、蹴り飛ばされ吹き飛び、せき込むセレナ。

そして二人してブレイドを……見る。

「殺していいのは」

「私だけだッ!!」

黒い光をまとう響は、すぐに獣のように動き、調が前に出るが、

【邪魔ヲスルナああああああ。道ヲ開ケロ!!】

黒い炎、流星のように突進して引き裂く。

前に吹き飛んだ調は、そのままの状態で無数の丸鋸を放ち、それを舌打ちして斬り砕く。

【マタカがキツ】

「貴方が、貴方のような非道な人間がいるからっ、世界が悪くなるんだッ!!」

よれよれに立ち上がりながら、そう叫びながら睨みつけるが、

【ぎっつけるなツ、こんさーとヲ楽シミニシテイタ人達ヲ裏切ツタ奴ラニ、言ワレタクナイ  
!!】

その時、蹴りが放たれる。黒い光を纏う蹴りは、調から鳴つてはいけなような音が  
鳴り響くように放たれ、吹き飛び、建物の一部を壊す。

全員が驚き、すぐにマリア達が調に近づくと、巨大なノイズが現れた。

「これは」

「でかいっ、こんな時に……響つ、テメエの絶唱でどうにかするぞ。彼奴だけでも逃が  
す前に」

【アアッ】

どうも膨れ上がり、増えるタイプであり、ブレイドを横目で見ると、奏を持って跳ん  
で高い位置に移動している。

それを見ながら、合わせ技のように、響を主体に歌い、束ね、放つ技。  
静かに歌い放ち、それを吹き飛ばす。



「調、平気？」

「うん……………けど」

「デス……………やっぱ強いデスし、なんですかあの光」

黒い光ではなく、綺麗な光を放つその様子に、目的の一つを達成させる。

セレナは複雑そうにその光を見ながら、今回の混戦を思い出す。

「姉さん、あの人達」

「ええ。あのカードを使う人は」

「あの時の人」

胸が締め付けられるような思いになるが、首を振り、振り払う。

「セレナ……………」

「平気だよマリア姉さん……………あの時のこと、仇で返すつもりは無い……………けれど、例え敵として現れても」

「……………ええ」

そして姉妹と二人の少女はその場から去っていく。

◇

奏をお姫様だつこのように抱き上げ、ノイズから守る中、

「平気か」

「一真……………えっち」

「……………」

何も言わず、胸を触りながらリンカーによる肉体の不調を取り出す。

（しよーじき、一真に診てもらおうと、身体が楽なんだよな……………胸触られるし、内臓触られてる感あるけど……………）

いつの間にか手が身体に突き刺さっているが、それを抜く。

同時にギアが解ける。一真もまた人の姿に戻る。

いつもの、彼は変わらず静かに建物の外に移動して、奏を下す。

「……………もう離れた位置で、シンフォギアを解いているか」

「一真?」

「俺にはアンデッドの目がある。意識すれば、人知を超えた力の発動地点を、見ることができる……………あの子、アガートラームの子はもう」

それに少し疑問に思う。どういうことだ?

「少し身に覚えがある」

「……………手を出したのか?」

なにか、少しイラつく。



歌姫の叫び声に何も言わず、彼はそのまま消えていく。

◇

あたしはいま危機にさらされている。

「えっ、彼奴逃がしたの？ 奏だけ彼奴に触れて、彼奴に助けられて、彼奴に守られて、彼奴と話し合って、彼奴と彼奴と彼奴と——」

「あんただけがあんただけがあんただけがあんただけがあんただけがあんた——」

「だーもう、いいだろう。許してくれよ二人とも!？」

後輩二人から目から光が無くなり、このような事態になりながら、旦那に報告していた。

「私の名を語った組織、フィーネね……なにが目的なのかしら」

「それと仮面ライダーブレイド、剣崎一真か」

◇

みんなの視線に二人はそれに気づき、奏を見ながら、

「彼奴がまた出て来るだろうな、なんか向こうの二人知ってそうだったのが気になるが」  
「……………そうだな〜」

奏の言葉に少しだけ顔を近づける。もう少しでキスしそうなほど間近で見ると、

奏は目をそらし続け、仕方なく二人は呪詛のような言葉をやめて、

「話していいけど、たぶん組織的には一真を敵にする。そうならないようにするなら」

響がそう言い、弦十郎はすぐに、

「俺は初めから、隠していたことなど咎める気は無い。無論、彼を敵として見ていないし、そう立ち回る気だ。だが今後も無くすためにも、知らなければいけない」

「なら話す」

「おそろくだが、私と同じケースだと思う」

「雪音と？」

「私は海外、内戦でパパとママを失って、捕虜として人売りの組織に売られた」

そして話すのは、大事な商品としてオリに入れられ、どっかに売られると言う状態だったとき、一真が現れ、その組織とアジトを潰した。

「たぶんだけど、一真は文字通り人より感覚は鋭い。妙な実験や、声を聴く。エネルギーにも意識すれば敏感だ」

「なら彼女達とは？」

「それについては覚えがある、聖遺物の研究機関。私が関わった機関に、いたような気がする」

その言葉に、全員が驚く。

だが本人はあまり気にせずに、

「別に驚くことじゃないわ、私は本来、月を破壊すればよかったからね。色々やったし、前の私、先代フィーネの遺産のように、後の為の保険も用意したりしてたもの」

そして話は戻り、おそらく聖遺物の回収、もしくは何かで、関わったのだらうと思われる。

了子は改めてその話を聞き目頭を押さえ、弦十郎も頭を抱えた。

「一真とはそういうのがあった」

そしてそのまま爆弾発言を続ける。

「そういうのとは？」

「遺跡の何かを壊しながら、一真が何かと戦った」

「一真、彼奴貴重な文化遺産破壊してるのか？」

奏は呆れながら言い、そう言われてもと言う顔の二人。

響はよく知らないと言い、クリスは時々岩の化け物とか、色々あったらしい。

「いま思うに、私は機会多かつたな……………」



遠い目をしながら、思い出すクリス。

色々なことを体験し、見たり聞いたりしたらしい。無職の星は綺麗だったと、よく分からぬことも言う。響は後で聞きださないととか呟きながら、話を戻す。

「下手をすれば、彼奴は聖遺物も持つてる。危険なもののは全て回収してるからな」「聖遺物の実験、暴走は各国でもあることだからね。もしかすればと言うことか」

ともかく一真が一人活動中に、研究機関で何かして知り合った可能性が高いと話し合う。

そしていまはそこで話を終わらせた。

「あんただけ一真に——」

「悪かった、だからやめて……………」

後輩二人は最後まで呪詛を奏に放ち続けた……………



「お疲れ様です皆さん、無事ネフィリムの起動は完了しました」

「……………うん」

正直複雑だ。あの日、あの人が助けに来なければ、私はネフィリムを止める為に、絶

唱を歌っていたはずだ。

それを起こすなんて、いまだに実感がわかない。

「セレナ、貴方の気持ちは理解できます。ですが」

「分かっているよママ」

「デスけど、あの話に聞いていることと、途中で現れたあのカードの聖遺物はなんデスカマム？」

「……………かめんらいだーと名乗っていたわ」

姉さんが静かに呟く。ママはそれを聞いて、少しコンピューターで検索をかけた。

そして、

「都市伝説、そう言ったたぐいの言葉ですね。昔、そう言った話があったようですが」

「デスウ？」

よくわからない、なぜ彼はそう名乗ったのか。

「ドクターなら何かわかるかもしれません。ともかくいまは身体を休めなさい」

「うん……………」

調のダメージが大きい。やはり情報を整理しないといけない。

ルナアタックの英雄は話と全然違う。あの人……………仮面ライダーと言う存在。

私達のやることに、深く関わるその二つ。これから先、どうなるのだろうか……………



「それで、了子くんからして響くんは」

「一応、そんなに侵食はしてないけど。ガングニールの侵食に関しては、細心の注意を払わないといけないわね」

「うむ……………」

今回でまた侵食が始まり出ししても不思議ではない。

劍崎一真、武装組織ファイネなる装者達。

みんながいる時には濁して話していたが、

「こつちに関しては」

「少しでも記憶があるとしたら、私の転生体候補を集めた機関があつたはず……………確か、マリアと言う姉妹の名前が、あつた？」

「そんな曖昧な」

緒川が呆れるが、仕方ないと呟く。

「自分の次の器なんかには、気に掛ける暇があるのなら、いまの器でバラルの呪詛を壊すことに集中すればいいことだったから、組織がどのような手で器にたりえる子を集めた

り、どんな実験をしていたかなんか知らないわ。まあ大事には扱えとは言ったわね。次の私なんかも、変な事されていたらそれまでとは言つてあつたはず……………」

了子の言葉に、頭を痛める。いまが丸くなつたと言うべきか。

「少なくとも、私がここにいるのだから、次のフイーネが生まれるはずがないわ。表向きには死んだけどね」

「となると、ただのブラフ、ということもあり得るか。あるいはそれほど何かがあるか」

「ともかく、調べなければいけないことには変わりないですね」

緒川はそう呟き、藤堯達も至急動き出す。

「そうね、私の名前でこれ以上罪状増やしたくもないし、気合い入れないと……………」  
ため息交じりに呟き、次の動きを待つことになつた……………」

## 第4枚・怪物咆哮

なにもないまま一週間、フイーネなる組織が何もせず、何も起こらない。

そんな中、緒川からある情報を得ることになるが、それをまだ知らない装者は、  
「未来、学校行事はいまのうちしかできないから、力仕事回して」

そう言いながら、荷物やら色々運んだり、設置したりする。

もうすぐリディアンで学園祭がある為、各々がその活動をできる限りしていた。

「響、手先器用になったね」

「ああ、バイト仕事してた時もあるから。一真から教えてもらったんだ」

「そうなんだ」

「ビッキークッチもお願いっ」

「お〜」

私は一応、ここには慣れたのだろうか？

周りの女子から劍崎さんと呼ばれて慕われてはいる。全部未来達のおかげだ。

「ビッキーの女子人気高いね、お願いしたいことがあるんだけど」

そう、なぜか女子人気が高い。いや女子高だから女子しかいないのは当たり前だが。

ともかく、弓美からあることを頼まれながら、少しだけ、

「そう言えばビツキー少し、気を付けた方がいいよ」

「ん？ なにが？」

「女子たちからお姉さまとか言われてるよ、ヒナが奥さんとか、彼女とか言われてる」  
なぜそんな噂があるのだろうか？ 一真ではないが最近の女子が分からない。

そんな疑問の中、未来が訪ねてきた。少し休憩だ。

弓美と別れ、未来とお昼を共にする。

「今日もいい天気だね」

「うん、野良猫たちも元気だろうね」

そう言いながら、未来には少しだけ二課のことを話せている。外部協力者と言う肩書だ。

一真が現れたことは、未来も知っている。あの子のことを、少し話し合った。

そしてこれからのこと、一真と武装集団フイーネのこと。

「響、一真さんと出会ったら、一真さんと戦うの？」

「うん、一真を許す気は無い」

私は静かに決意を言い、空に突き刺す拳。

その拳を握りしめ、静かに降ろすと、未来はそつとその手を両手で包む。

「なら、私の分も持つて行つて。一真さんのこと、私も許してないから」  
「うん、分かった」

私達は怒っているのだ、あの日、一人消えたことに。

一真、私はまだ一真に依存してる。クリスもだ。

責任を取ってもらわなければいけない。新しく手を出したあの女、銀の腕についても聞きださなければいけない。

いつ、どこで、どうやって手を出したか。聞く権利は私にはあるから。

「響、少しでも本気で一真さんを殴つてね」

なぜか未来の瞳から光が無い気がしたが、気のせいだ。

「分かったよ未来」

「うん」

私達の決意は固いぞ一真、覚悟している。

そう話しながら、その日の夜、物語が動き出す。



「仮面ライダーですか、昔の都市伝説ですね」

ドクターウエル。ソロモンの杖を奪取し、私達に協力。リンカー製造並び、マムの体調管理を一任するしかない相手。

正直、私は、私達は苦手だ。

だけど、この人無くしては活動できない。仕方ないし、私情で決めつけるのもダメだ。「どんな話なんですか?」

「なに簡単なことです。悪の組織に改造された怪人が、正義の心で戦う英雄譚。様々な話がありまして、中には神になった者や、異世界から来た者もいるとかいないとか。そのような話です」

「なにか」

「現実味が無い話デス」

「その通り、そのような存在は存在しないんですよ。いまのような現状で現れない時点でね」

そう言うが、私は昔の、あの後ろ姿を思い出す。

どうしても考える、あの人のことを…………

「セレナ、どしたデス?」

「う、ううんっ。なんでもないよ切歌」

「デス」



こうしてそれで話を終えて、会議に戻る。  
本当に仮面ライダーは、実在しないのだろうか……………

◇

ええそうですよ、英雄は……………ただ一人いればいいんです……………

◇

町の外れ、ずっと昔に閉鎖された病院に、機材やらが運ばれたりしているらしい。  
深夜の夜、いまは三人の装者で動き出す。

『悪い……………敵のことを考えて、時限式は待機で』

「謝る必要は無い奏、ここに剣、弓と槍がいる。案ずるな」  
連絡し終え、しばらく進むと、

「っ!?! ガスか……………」

「意外に早い出迎えだぞ」

翼の一声に、私達はギアを纏う。

ノイズが向かってくる中、それを吹き飛ばす。

「ノイズ程度と言いたいだが」

制御されているノイズだが、勘がさきやく。

「ギアが重くなるっ、ナビゲートっ、私らの周りに異変は無いかつ?!」

『装者達、適合計数低下っ』

『このままでは戦闘維持できません!!』

「ギアの質量が落ちてている……………」

「ッ!! 翼ッ」

翼に襲い掛かる何かを吹き飛ばし、それにイチイバルの弾丸が命中するが、

「この手ごたえ、生物型のなにかっ。ノイズじゃないぞ!」

「なんだとっ?!」

その言葉に拍手をする者がいた。

暗闇の中、眼を凝らして見ると、

「ウエル博士……………」

「さすがルナアタックの英雄。戦い慣れてますね」

「まさか、彼奴は基地で……………」

「まさか全部」

その言葉に肯定しながら、あの時すでにアタックケースにソロモンの杖は無く、ソロモンの杖でノイズを操り、欺いている。

ソロモンの杖の所有者を名乗り、ノイズをけしかけて来る。

クリスが対処するが、

『適合率低下に伴い、ギアのバックファイアが酷いわよつ。クリスはそれ以上弾幕を使わないっ』

「んなこと言われたって」

「ちっ、道を開けろッ」

黒い影を纏い、暴走状態になる。

「響っ!?!」

【邪魔スルものハ、壊ス】

ノイズを私が引き受ける間、生物型のそれは蠢く。

翼は剣を構えなおすが、やはりギアが重く、僅かに顔をゆがめる。

その時、



「変身」

《エボリユーション》

そう鳴り響き、ワイルドカリスと言う姿でバイク、シャドーチェイサーに乗り現れた。  
《トルネード》

一陣の風と共に現れ、醒鎌ワイルドスラッシャーを構える。

それを投げると意思を持つように動き周り、辺りのノイズを切り払い、翼の前に立つ。

「剣崎さん……………」

「……………」

裏で無理矢理動こうとする叫び声が聞こえるが、カリスは無視して自立型聖遺物へと向かう。

「ネフィリム、貴様を封印するッ」

カリスアローを取り出しながら斬り合う。その様にネフィリムと呼ばれたそれは、カリスに怯えていた。

「ど、どうしたんですネフィリムっ、くっ、下がりなさいっ」

無数のノイズが現れ、弾幕のように突っ込んでくる。

カリスはすぐに後ろに下がりがり、翼の前に立ち、全て切り伏せる。

「剣崎さん」

少しだけ頬を赤くしかけたが、すぐに首を振り、ウエル博士を見た。

ネフィリムと言うものはオリに入り、飛行型ノイズにより運ばれている。

「劍崎さん借りるぞっ」

そのままシャドーチェイサーに乗り、翼は加速する。

◇

『そのまま飛べ翼』

「飛ぶ？」

『海に向かって飛んでください翼さんっ、どんな時でもあなたは』

『お前ならいけるッ』

その時、その言葉のまま海へと飛ぶと、急速浮上した潜水艦が現れ、それに伝って飛び、バイクを乗り捨て、飛行するノイズへと飛ぶ。

一太刀でノイズを討ち、落ちるオリを切り伏せようとするが、

『避けろっ』

その言葉に槍が降り、それをギリギリで避けたが海に落ちてしまう。



「あれは」

槍が海面に浮き、その上に器用に立つ歌姫。

「時間通りですねフィーネ」

「フィーネだと？」

そう言うウエル博士は、終わりの名を持つ巫女フィーネは

マリアのことをフィーネと、再誕したと言うが、

(フィーネは生きてる、なら、嘘っ!?)

マリアはガングニールを纏い、槍が海面に浮かび、オリを掴む。

朝日が昇り、静かに顔色を変えずにいる。

「響達はここにいろ」

「一真っ」

「お前の身体はだいぶ侵食されてる」

「!」

「……………ここにいてくれ」

そのまま高く飛び上がり、潜水艇の上で戦い始める二人の下に来る。



「はああああああああああああ」

歌を歌う歌姫の中、マントが生き物のように蠢く。

それを交わしながら、カリスの援護を受けたりするが、

「っ!?!」

その時、身体に激痛が走る。

(先の一撃かっ)



「ちっ、完全によけられてないかッ。つば」

その時、身体が、息が、肺から全て、心臓が飛び出るような感覚に襲われた。

「がっ」

暴走状態のバックファイアがいま、来た。

瞬間、丸鋸が無数向かってくる。

舌打ちして、その場から離れるが、身体が重い。

クリスには鎌を振り下ろす装者、切歌が迫り、クリスはそれを避けながら舌打ちする。肩で息する中、無数の丸鋸が放たれ、巨大な丸鋸のようなものになり、突進する調。

「チイイイイイイイイイイイ」

それに手を伸ばし、激突する響。

歌う調はその中で、

「!?」

【ガルルルルルルルルルルルルルルルツ】

手で回転する丸鋸を掴み止め、静かにその顔を掴む。

「っ！ 調っ」

それを投げ飛ばし、切歌はそれを受け止め、吹き飛んだ。

「がっは、ぐっああああ——」

瞬間的に暴走値まで適合率をはね上げたが、その所為で胸から鉱石が生まれ、それに、(まだそんなに侵食はしてないはず?! 侵食スピードが上がってるのか?)

その現象は知っている。一番危険値が高い時の現象。だが、

「グッアアアアアアアアアアアアアアグ」

無理矢理開く口を閉じ、身体の鉱石を投げ捨て、睨みつける。



それを見て二人の少女は青ざめ、血の気が引く。

「な、なんデスカあの人……………恐怖ドラマ真ッ青デス」

「い、言わないで切ちゃん……………」

クリスは響の側に来て、ウエル博士の前に立つ二人を見る。

「おいガキ二人っ、いったいなにをたくらんでるッ」

「……………正義では守れないものを、守るために」

そう静かに、無表情に言った。頑張ったデスと小さく呟くが……………

こちらの行動や様子に少し臆しているが、それでも調と言う者はそう告げる。

それには、

「はっ、なるほどね……………正義……………正義？」

そう何度も口にし、

「ふざけるなあああああああああああああああああああ!!」

「っ!」



二人の少女は突然そう叫び、静かに、

「クリスツ、こいつらをボコボコにして引きずり回すツ。気合い入れて適合率上げ口おおおおおおおおおおおおお!!」

「んなもん、分かつてるんだよくそつたれがああああああああああああああ」

黒い影を纏いながらの、突然の激昂に驚く二人の装者。

クリスは反動でダメージを負い、目から血を流しながら、それでも滅茶苦茶に撃ちつ続ける。

「怖いデスっ」

「な、なにあの二人っ」

響達に怯え、すぐに丸鋸を構えるが、それをかみ砕きながら響が激突する。それはまさに獣だ。

【オマエらがああああああああああ、お前ヲみたイな悪にジぶんがナれば救エルと錯覚するノガいるからあああああああああああああああ】

「こ、来ないでっ」

調は恐怖に顔を歪ませ、弾丸がウエル博士や響がいようと放たれる。

いや、自分も含め、辺り一面に、

「ま、待ちたまえっ、ボクはなま」

「威力マシマシのぶっ飛びしようだクソツタレっ」



「おい」

その時、私はゾツとした。

顔を掴まれ、血まみれの彼女が、口元を釣り上げて目の前にいる。

「笑え」

「え……………」

視界目の前にあるのは血まみれの、瀕死のはずの人。

だけど勝てる気がしないッ。

なにを言っているか分からない!!?

「笑えよおい……………敵が死にかけてるんだ、笑ってみせろよ。正義を捨てた正義の味方」

「あ……………」

怖くて怖くて、怖くて、怖くて怖くて怖い怖い怖い怖いッ。

「覚悟しろ、お前ら正しくても、犠牲で誰かを救うのが正しいのたまうのならな

……………」

そして手を放ち、地面に下りる。

怖くて怖くて、もう会いたくない。

私は彼女の認識を改めた……………



「クリス、弾幕は取っつけ……いまは動けない」

「ちっ」

「二人とも、無茶をするなッ」

翼が駆け寄って怒鳴る中、だが、

「許せないんだよっ、正義では救えない？ ふざけるなッ」

そして周りを見る。いつの間にかいない。いるのか分からないが、叫びたくなるクリス。

「だったら彼奴はなんなんだっ、正義を捨てて、人間を捨てて、報われることを捨てて誰かを守る彼奴は、彼奴は」

「二人とも……」

そして血を流しながら立ち上がり、静かに歯を食いしばる。

「絶対に許すか、自分を犠牲にすれば何もかも救われるなんてこと考える奴なんか、絶対に許すものかッ!!」

だって、でないと許せない。

彼奴は、正義ですらなくなった彼奴の戦いを、まるで他人がそれを正しいと思ってい

るのが許せない。

自分の全てを捨てて、全てを終わらした男。

正義も、正しいも、仲間も、何もかも裏切った。

彼奴は、

「彼奴は正しくない、それで彼奴は迷い、苦しんでるんだああああああああ」

私は叫び、静かに消える飛行船を睨み、静かに拳を握りしめた。

「壊す為だけじゃない、この拳は」

そんなバカをぶっ叩いても止める、拳だ。

認めるものか、自分を捨てることで誰かを守った気になっている者達を、認めてなるものかッ。



「調、調っ」

「……………」

「……………セレナ」

調は無言のまま抱き着いて、切歌も怯えながら私に抱き着く。

「セレナ」

「マリア姉さん……………」

二人の様子にマリア姉さんは困惑している。

「二人とも、あのガングニールの装者の人、話と全然違うから、もう」

「会いたくない会いたくない会いたくない会いたくない会いたくない——」

調は急にそう言いながら、私の胸に顔を埋める。

本気で怯えている、切歌も後ろから抱き着いてきた。

マリア姉さんは叱咤しようとするが、異常過ぎる為に言うのをやめて様子を見る。

「なにがいったいどうなってるの……………」

もう分からないことだらけで、これから先、どうなるの……………」



「……………」

遠く離れたところで、歩きながら変身を解く。

「響の侵食……………」

少しずつスピードが上がっている。まさかと思うが、侵食が早まっているのかもしれない。

ない。

だからと言って顔を出せば、二度と離れないようにされそうだ。

「俺は人の中には戻る気は無いんだ……」

んなの知るかと怒られるだろう。

分かっている、分かり切っている。

正しい事をするために動いているはずが、どうしても誰かを傷つけるんだろうか。

「……なにより、いまはネフィリムか」

あれは身体の中に、一部記録のように存在する。

聖遺物を食らい、共食いしたその兵器。見過ごすわけにはいかない。

過去の記憶から引つ張り出す、あの時は、側にいる誰かも敵として認識してしまい、行動不能にして終わらした。

もしかすればあの日、ネフィリムを封印していたら、こんな事態にはならなかっただろう。

「だとしたら、やらないといけない。なんとしても」

そして思い出す。白い小さな少女。

生命力を跳ね上げようとしていた、明らかに肉体の限界を超えようとする。



確か絶唱か、これも響の治療などで知り、二課と関わる時に知った知識だ。あまりの威力に、自身にダメージを負うほどの力を放つ歌。

「……………あの子なのか」

思い出す、戦いの中にいる子の中に、よく似た子達がいる。

成長したのだろう、俺はしていない。

あの日、みんなを裏切ったあの日から、ずっと……………

「……………俺は中途半端だな」

そう呟きながら、決意して歩き出す。

今度こそ、全てを解決する。いまはそれしか無いと考えながら……………

## 第5枚・それぞれの願い

二課にて、

「聖遺物の機械的安定起動方法に時間と労力を割いていた機関。そして私の次なる器候補を集めていた。という程度しか認識していなかったが、まさか聖遺物『神獣鏡』をステルスに使うとは」

「それ、物凄く覚えがあるんだが」

奏の言葉に、了子はばつが悪い顔になる。正直彼女の親が見つけた物だが、了子が調査の為に他国に流したのだ。

奏の両親はノイズにより死んでいる。天羽奏以外、生存者無しであり、彼女がけしかけたものである。

物凄く居心地悪そうに、静かに小さくなり、情報を提示した。

「この聖遺物は装者が見つからず、また聖遺物としてはかなりランクが下がるために、機械によるステルス機能が可能になったようだ。だから装者の襲撃並び、ヘリの出現や追跡ができなかった」

「はあ、厄介だな。それと、装者達が遭遇した聖遺物。名をネフィリム。これが私の記憶

通りなら、聖遺物を食べる」

「聖遺物を？」

「そうよ。本来は複数いた個体が共食いし合い、ネフィリムと言う個体になった孤立型完全聖遺物。私を知る限り、何かしらの実験に失敗、のちに活動を停止した。そう聞いている」

そう言いながらコーヒーを飲み、一息つき、そこから考えられるのは、

「ネフィリムで何をしたいか分からないが、少し検討する」

「頼む、俺達は装者達探索か」

「それと、私が流したリンカーの情報から、アンチリンカーを生成したのでしようね。響ちゃんの話じゃ、建物に入ってからギアが重くなつていったと言う当たりガス状。今後屋内戦闘は避けるべき案件だ……」

そう締めくくり、その中で彼が現れなかったことも気になる。

「劍崎一真、此度の事件、どう関わるか」

了子はそう言いながら、クリスと響が物凄い勢いで獣のように、一真の写真を殴るものや壊すものに貼り付けていたので、奏が呆れる。

「つたく……好きな奴なのに、どーしてあーなるんだかね」

「子供なのよ、まあ分からなくは無いわ。人がせつかく、櫻井了子として生きると諦めた

のに、まったく気づかないから、核爆弾でも用意したくなる時があるわ」  
「やめてくれ、誰だろうと使用しないでくれよ」

弦十郎の言葉に、了子はため息をつき、奏は少しばかり頬をかく。



私は布団でくるまりながら考える。

「しらべ〜平気デスう?」

覗き込んできた切ちゃんに、顔だけ出して、話をする。

「ごめんね……………」

「謝らなくていいデス、私も怖くてマリアとセレナとで一緒に寝たほどデスから」

後で二人にも謝らないと……………

聞いていた話と全然違う、何もかも違い過ぎた。

あれは英雄じゃなくなつて魔王だよ。

「それもあるけど」

「アジトが無くなつて、ネフィリムを育てるのに、聖遺物が必要……………」

つまりあの人と戦わなければいけない。少なくとも、すぐに聖遺物を所持する組織

は、あの人がいる場所しかないのだから、当然だった。

「……………やろう切ちゃん」

「調」

お布団から出て、私は静かに起き上がる。

私よりも辛いのはセレナとマリアだ。

マリアはフィーネの魂に塗りつぶされて、セレナは本当のお姉さんが変わっていくのを、黙って見ているしかない。

二人とも、本当の家族じゃないけど、私達にとって大切な人。このままなんて、いやだ。

「行こう切ちゃん、マリアは戦わせることはできない。セレナはママ達の護衛をしてい  
る、動けるのは私達だけ」

「デス、そうデスね」

「天羽々斬、時限式のガングニールを」

「手に入れるデスっ」

ま、まずは、弱いところからね……………

◇

それは秋桜祭。私立リディアン音楽院にて行われる学祭、その歌を歌うステージ。板場を初めとした仲良し三人組、彼女達と言うより、板場の目的、アニソン同好会を設立したいらしく、この優勝すれば生徒会権限の範囲なら叶えてくれる商品の為、ステージに立ち、歌う。

だが、チーンと鳴る。

「くうううう、だが、まだ切り札があるツ。そう、お願いビツキイイイイイイ」

そう叫ばれ、私はステージを歩く。

その衣装は未来が用意した為、なぜかボーイッシュになるが、曲の内容が内容の為に、致し方なしだし、私はひらひらしたものより、こういうのがいい。

「特撮ヒーロー物つ、頼むよビツキー!!」

「頼まれた以上は、歌ってやるよ」

それになぜかきやあああああああと言う悲鳴が響くが、怖いからとかじゃない。未来が時々、ワンピースとか着た時にあげる声に近い。

そして私は選ばれた選曲を歌う。

なぜか、一真達、仮面ライダーが頭をよぎった……………



私はいま切ちゃんと共に、敵の本拠地へ侵入している。

「調、平気デスカ」

「うん……………」

あの人の顔が過る。偽善者と思っていたあの人の顔が怖くて、夜眠れない。夢の中で私を追ってきたんだもの。マリアの布団に入ったのは悪くない。

おかしい、話と全然違うのだ。偽善者、いまを知らずに、英雄扱いの人のはずなのに、あんな人だなんて知らない。思わない。怖い。

『都合の悪い時は人殺し、都合が良い時は英雄。第三者の言葉が私は嫌いだ』

どうということなの？ 話と全然違い過ぎる印象。

正直会いたくない。会ったら……………何されるか分からない。

(けど、マリアに無茶はさせられない。聖遺物を使えば、フィーネの魂に塗りつぶされる。マリアがマリアじゃなくなる、セレナや私達を置いて……………そんなの嫌だ)

そして私達は勇気を振り絞って、前へと進む。



「ほう」

なんで見ているのおおおおおおおおお!!?

聖遺物を手に入れる為に、私達はお祭りのステージに立った。

なんでも好きな物が手に入り、イチイバルの人が歌っていた。だから私達は聖遺物を手に入れるため、ステージに飛び入りする。

そしたらステージの観客席、その奥にあの人が静かに笑みを浮かべた。

笑ってる。

こっち見てる。

なんでいるのツ!?

切ちゃんが涙目で生まれたての小鹿のように震えている。

(けど)

それでも、

(勝つよ、マリア)

私達は戦う。



私達は歌うよマリア。

◇

「ん、響がサブミッション系を思い出したり、中を壊す方法を考え出してる気がする」  
そう思いながら、静かに何かが起きるのを待つ。

草野球チームの練習を手伝いながら。

「いくぞッ、俺の昔の取り柄」

暇なとき、こいつらと出会ってから、時々こうして教えている。子供達からはケンジャキと呼ばれている。

どうしてこう俺は滑舌が悪いのだろうか、オノレデケーロっ！

そんなことを考えていると、ん？

「ん、三人足りないですね」

「あつ、はい。彼奴ら、剣崎さんが来てから楽しんでるのに……」

監督さんがそう言う。おかしいな、フオークの投げ方とか教えてくれって言ったのに。

「ケンジャキさん、ボール行ったぞああああ」



少女達は叫ぶ、だが聞く耳を持たない。

(やめてっ)

その少女の叫びに、

『ターンアツプ』

光の門がノイズの進撃を防いだ。

「!」

そしてバイクごと通り抜け、金色の戦士が、バイクから雷鳴と共に現れた。

「……………」

「う、うわああああああああ」

少年たちは異常事態に逃げ出し、その様子にほっと胸をなでおろす。

そして、

「貴方は、カードの使い手ですか、邪魔を」

「黙れ」

ノイズが無数、ブレイドに放たれるが、黄金の波動がそれを吹き飛ばす。

静かにバイクから降りた瞬間、大地が揺れた。

「貴様は……………俺の本能を刺激した」

「! くっ」

無数のノイズが現れる。

「どうやらあなたも英雄希望のようですが、英雄は一人で十分なんですよッ」

「知るか」

鎧が輝き、ノイズを吹き飛ばす。

それに驚き、再度取り出そうとするが、空間から現れた瞬間、黄金の輝きに焼かれて、ノイズは煤に変わる。

「なっ、なっ!?!」

重醒剣を取り出し、引きずりながら、近づいていく。

「……………」

だが不意に顔を上げ、獅子のレリーフが輝き、振り払うように、銀の腕を弾いた。

「がっ」

『セレナっ』

いまの彼はインカムの音声が入り、静かに顔を上げ、煤を見渡しながら、銀の歌姫を見る。

一瞬驚くように顔を上げ、しばらく見つめていた。

「……………なぜだ」

「……………あなたは」

「なぜ君は、彼らを助けるのが遅れて現れた」

「っ!？」

その瞬間、僅かに心音が早まり、動揺している。

ソロモンの杖を持つ男はその隙に逃げようとしたので、キングラウザーを片腕で投げ、その前の地面をくり抜いた。

「ひいひいひい」

しりもちをつく男は無視し、再度見る。

歌姫は、いまにも泣きそうな顔で、彼を見た。

「……………君は、僅かに躊躇った。もしくは、気付くのに遅れたな」



それは少し前でした。

「ドクターっ、マムお願ひ!! 私に米軍の兵士と戦わせて」

いま私たちのアジトに、米軍の工作員が現れ、対処しなければいけなくなつた。ただドドクターは、ノイズを使って彼らを実に殺し、抹殺している。

私は、こんなことを、私達はこんなことをしたいわけではない。

だけで、

「無理を言うのではありませんセレナっ」

「ダメよセレナっ、なら私が」

「マリア姉さんが戦うのは駄目っ、リンカーで身体が、なにより、フィーネに近づくとその言葉に、姉はなにか衝撃を受けたように固まる。

そしてママは、

「セレナ、貴方が出ることは許しませんっ」

そうママが告げた。

なぜなの、私達がやりたいことと、全く違うのに。

私は部屋から出て、モニターから、現実から目を背けた。

扉の奥から、悲鳴が聞こえる。姉さんはどうして、ママは……………

『おやあ？』

その時、姉さんが叫んでいる。

それに気づいてモニターを見たら、無関係な民間人に、ドクターは手を向けようとしていた。

私は急いで外に出た。そして、

「……………」

どうしてあなたがいるんですか？

どうしてこんな形で会わなきゃいけないの？

あの日、私たち姉妹を、大切な人を救ってくれた人は、

「……………行くぞ」

私の敵として、現れた……………

◇

少女は歌う、己のギアの性質を上げ、戦う為に。

青年は黄金を放ちながら、彼女を倒さんと、拳を振るう。

バツタのレリーフが光り輝くと共に、ジャガーのレリーフも光る。

動きが速くなり、その蹴りが少女を襲う。

「がっ」

そのまま建物を壊し、中に入る。

そして追うように、ゆっくり彼は迫ってきた。

「……………なんでだ」

「……………」

——やめて……………——

「なぜ君が、あの日、命を捨ててでも誰かを守ろうとした君が」

——やめてッ!!——

「こんなところにいるんだ……………」

——そんな悲しそうに、言わないでッ——

——あなたに知られるくらいなら、いつそ罵つて、嫌つて——

——あの日、救われた命なのに、私は、私は……………——

「……………!」

槍が迫り、それを素手で掴む。

それに驚きながらも、

「マリア姉さんっ」

◇

「はあああああああああ」

マントと共に回転し出し、彼に対して立ち向かう。

「……………」





肩で息をするマリア姉さん。なぜかスーツは傷付いているが、姉は無傷であり、私は困惑する。

目の前にいる戦士は、あの日の人。間違いない。だけど、

「そ、それ、は……………?」

「……………」

傷口を抑えるはずが、すぐに手をどけた。傷はもう、無い。

緑色の血、人間の、生物では無い、血……………

「あな、たは……………」

「俺は怪物だ、あの日、俺は戦闘本能であれと戦っただけだ。君らを守ったのは偶然だ」

そう彼は言い、僅かに身体がブレた。

「……………あの日から、歳をとってない?」

それに気づく、あの日の記憶と彼は瓜二つ過ぎた。

私は大人になったのに、あの人は変わっていない。

「……………君らは綺麗になった」

そう悲しそうに眩き、また身体がブレる。

「!」

だけどその瞬間、無数の爆薬が点火された。

彼の足元が爆発して地下へと崩れる。

「マムっ」

『二人とも、ドクターは回収しましたっ。急いでその場から離れなさいっ』

いつの間にかドクターは逃げていた。

彼がいた位置は陥没しているが、これで終わるとは思えない。

マムの言葉に、静かに従い、今は去る……………

「……………」

だけど……………

あの人の悲しそうな顔と声が、心から消えなかった……………

◇

「逃がしてよかったのか……………くそ」

しばらくして、地面を吹き飛ばして出る。

あのまま戦闘を続行してもよかったが、警報も無い事態だった。一般人の避難は十分ではない。

向こうは一般人を構わず巻き込むのなら、これ以上の戦闘は危険と考えた。  
だが、

(……………なんであの子が)

僅かに残る記憶から、あの日見た子、会話からもそれは間違いない。

腕から薬のにおいがする。これで問題は無いだろう。

だが正しいか分からない。

俺は間違っただけだ。

「……………それでも、あの子のあの顔は、望んでいるわけじゃない」

ならやるべきことは一つだろう……………

ともかくここから立ち去らなければな。



「というわけで、決闘を申し込まれました」

あのチビ達は、私達にあの場、少なくとも学園内での戦闘行動はせず、場所を指定してきた。

正直、あそこで戦うのは、いまの私はできない。

ツインテは顔から血の気が無くなっていたが、いまは関係ないな。

気になるのは歌を歌い、クリスの聖遺物を手に入れようとしたこと。その時のあの子達は、テロリストなどの犯罪者でも、私のように心が壊れているようでもない。

壊れたものたしに怯えるさまは、まさに普通の人間のものだ。

それでも戦うことを選択するため、何か裏があるのだろう。それなら罠があるだろうが、彼女達の指定した場所に出向く。そう話を進めた。

「まあ罠があるだろうな」

あの子達ならともかく、どうもウエル博士だけは別だ。あれは信用できない。

そして、ノイズの出現。どこぞでノイズが発生。だが大量の煤だけで、なんなのかはいま調べている。

だけど分かる。一真がいた……………

クリスも頷く、あそこに一真がいたんだ。

私は身体を休めて、静かに考えていた。

ノイズを倒すことは、シンフォギア以外では自壊を待つしかない。それか、仮面ライダ―たちしかないない。

「考えるなんて、昔の私なら考えられない」

壊すことしかできないと思っている。いまでも、そうだ。

「なら壊してやるよ、一真」

あんたも含めて悲しい運命なんて、

「私が全部壊してやる!!」

待ってろ、一真………

## 第6枚・ジョーカー

私の好きな人は、命を捨てても守ろうとした家族を守り、私を守ってくれた。燃え盛る炎を消し去り、血の歌を歌おうとした妹を止めてくれる。

あの後だが、あの子も彼を好きになり、そして彼を見たらしい。

黒い髪に黒い瞳、黄金を纏い、剣を振るう戦士。

私は彼に感謝してもしきれない。

だけど……………



「……………誰かを殺したくなつた」

「なぜだっ!？」

深夜の夜、指定の場所へ向かう装者達。

今回は奏、リンカーも打てるように持ち歩きながら、対処する気だ。

カ・デインギルの跡地。そこに出向くのだが……………

私ならあの子達の行動に怒り、悪い奴はこれを使って、のこのこ現れる私達を殺る。

「ちようどいい、そいつをサンドバックだクリス……………」

「ああ。ハチの巣にしてやらあ」

「なぜこうも好戦的……………剣崎さんがなにかしたのか!？」

「まったくもう」

翼も奏も染まりつつある。



「で、やっぱりかっ」

そこにいたのはチビ達ではなく、ウエル博士。

ノイズを大量、もう無尽蔵に取り出して、自分は戦わない。

「貴様らはなにを企てるっ、F. I. Sっ」

「企てる？ 人聞きの悪い……………我々の望むのは人類の救済っ」

そう言い、いまの欠けた月を差す。

「月の落下にて損なわれる無辜の命を可能な限り救い出すことだ」

「なにつ!? そんなこと」



「そんな馬鹿げ……いや、可能性があるかつ」

「月の落下なんて馬鹿げた災厄なんて、各国機関が察したとしても」

「どう対処すればいいか分からない災害だ。そんなん口外するわけにもいかない。いま月の落下が分かる連中は、自分達が助かれればいいと思う連中かつ」

クリスと共に人間の、偉い人間の考えを察して語る。それにウエル博士は笑う。

そしてネフィリムと叫ぶと、地面から何かが出て来る。

「生物型っ」

「チイイイイイイイイ」

だが気になる事がある。こんな世界災害、あれが黙っているわけではない。

世界を守る、化け物が………

【フオオオオオオオオオオ】

その時、咆哮と共に衝撃波がノイズを吹き飛ばす。

「な、なんですかあれはっ!？」

驚愕するウエル博士。知らない奴が見たら驚くだろう。

「アンデッド」

「カプリコーンっ!!」

それは山羊の始祖、カプリコーンアンデッド。

続くように次々とアンデッドが現れ、ネフィリムと呼ばれたものやノイズを倒し始める。

だが自分達を阻む壁のように、アンデッドが襲い掛かっても来た。

「響、雪音。これは」

「アンデッドだつ、リモートで完全制御のな」

「腰ベルトがラウザーなら、一真が変身してるはず………」

「ラウザーつて、カリスの赤い奴のこと、だっけか？ んなもんいるのかつ」

時折一真のことを説明したおかげで、多少の説明はしなくて済む二課の面々。

リモートにより現れたのは、上級アンデッドとXのアンデッド。何人かの下級、戦闘力選ばれたのだろう。そしてクラブのQとKは外されている。

だがこの局面で、彼奴がいけない訳がない。

「い・たツ」

口元を歪め、睨むアンデッドは双剣を振るうギラフアアンデッドだが、腰のベルトはラウザーではない。

だが、

「一真ああああああああああああ」

私は挨拶として拳を放ち、貫くことは無かったが吹き飛ばす。

そして地面に転がると姿が変わる。

「あれは、カメレオン？」

「カメレオンアンデッドの力で、ギラファに変化しやがって」

カメレオンのその腰には、青いジョーカーラウザーが巻かれていた。

【なぜバレた……………】

困惑する声を出す、二人は即答した。

「一真の存在ならすぐに分かるんだよっ！」

立ち上がりながら、クラブのA、スパイダーアンデッドがカードに戻り、手元に戻り、バックルに入れた。

「……………仕方ない、取っていたものだ。あまり時間も無いからな」

『オープンアツプ』《アブゾーブクイーン エボリユーシヨンキング》

「っ!? それは」

姿が変わる。あまり見ないレンゲルのキングフォーム。

レンゲルはキングフォームのシステムもとい、ラウズアブゾーバーのシステムは対象外だ。

だが一真のは、そもそも物が違う。似せているだけで、一真が取り込んだバトルファイト関係物として取り出している。つまりはラウズカードと同じ扱い。

だから知らないが、後付けで違う用途で作られたシステムとかみ合っている。

レンゲルのキングは、ギャレンと同じレリーフが隠された、絵柄が無い装甲の鎧。専用のラウザーを持つが、

「はあああああ」

力を込めてそのまま動かなくなる。

それに不思議がると、アンデッド達が襲い掛かってきた。

「一真？　一真なんでこんな面倒な、一真」

分からない顔をしながら、レンゲルは手に持つラウザーを落とす。

「……………睦月、力を……………俺に貸してくれ」

静かに歩く。それと同調するように、鎧に亀裂が走る。それと共に光があふれだす。

「なっ」

その瞬間、13枚のカードが舞い上がり、周りを旋回する。

絵柄、ラウズカードの金色のレリーフが現れ、爆発するように光が辺りを包む。

装甲が崩れ、13枚のカードがギルドラウズカードへ変わり、装甲に纏わり、王の鎧になる。

城の城壁を思わすほど強固な鎧。杖のキングラウザーが手元に現れ、冷気を放つ。

左腕だけ形の違う籠手、ギルドラウズカード専用の、重醒杖キングラウザーとか言う

のか？

マントを纏うレンゲルの姿の違うキングフォーム。下半身の装甲も厚いものに変わる。

「レンゲルのキングフォーム、悪いが進化させてもらった。ネフィリム、お前を封印する」

この時ダガーのラウザーを杖で打ち放つと共に、駆けだす。

◇

「くっ、このー！」

技の一つ『蒼ノ一閃』を叩き込みアンデッドを切り伏せたが、すぐに立ち上がる。

「不死身の化け物……………」

そう言われるアンデッドの戦いに戦慄する。

封印システムが無ければ、彼らは永遠に戦う。いまの自分達では倒せない。

「否、倒せても意味が無いのかっ」

彼らは不死身として存在する、元より死が無いのだ。倒して封印しても、その大本である彼をどうにかしなければまた蘇る。

なによりなぜ敵対するか分からない。

いまの彼は、ネフィリムと言う生物型と言うものと激突するが、

「レリーフがおかしい。雪音」

雪音の側に来ると、ガトリングを受けながら歩くアンデッドを吹き飛ばす。

「わりい、私の武器じゃ、吹き飛ばすしかできない」

奏も苦戦しながら、二人の側に来る。視線の先は変わり、さらに変化したレンゲルだ。

「レンゲルの様子がおかしいが、あれはなんだ？」

「分からない、レンゲルとギャレンは、カテゴリーKのラウズカードだけでキングフオームになるシステムで、レンゲルは後にできたもんだ、そもそもあるかも詳しく知らない。 فقط」

「あのレンゲルはより強化、変化している？」

それに静かに頷く。確かにレンゲルは、完全に中身が違うもの。ブレイドとギャレンとは違うように設定された。

そこに響も来て、

「レンゲルは彼奴が後付けのようにつけたもんで、ラウザーも」

キングラウザーは、重醒剣のスロットが先端にあり、クラブのマークがついている。

柄を短くすることでこん棒のように扱い、VIのマークが輝くと吹雪が放たれ、柄を長

くすると棒術として振るった。

これでは完全に別の何かだ。

「なにより、キングフォームは元々Kだけとの融合で、ブレイドの13枚同時融合もイレギュラーだ。そのレリーフが壊れて、カードの絵柄が姿を現すなんて」

「ブレイドと同じ、13枚同時融合？」

カリスはジョーカーの、元々のシステムが違う。

そしてブレイドも本来はKだけの適合変身だ。なのにブレイドのようなイレギュラーのように変化した。

地面に左腕の籠手から鎖が放たれ、土の塊が鉄球のように固まり、ネフィリムに放たれる。

やはり姿形が違い過ぎる。これは、

「意図的に13枚全部と融合するシステムに変化させたのか!？」

その言葉に、響がアンデッドの群れへと向かい、そこから飛び出す。

ある意味、アンデッド戦はかつて彼と肩を並べ、戦っていた響が誰よりも適応し、前に出られた。

「響っ」



「一真っ」

13枚の融合。そんなことをし続けていいのか分からない。少なくともレンゲルのキングフォームを進化させた。

ギルドラウズカードに変化させていた。そのようなこと、一枚二枚程度なのに、13枚も変化させたんだ。

その結果どうなるかなんて………一つしか無い。

「一真あああ」

一真が一真でなくなる。

一度だけ見た、一真が一真では無い一真になる瞬間、だから、  
「うおおおおおおおおお」

ネフィリムとかいうのは、私が壊す。

そのつもりで接近して、拳を突き出した。

「！ダメだ響っ」

その時、拳が、

「えっ………」



ネフィリムの口の中に入り込み、嘔み千切られる。そう思った……………

◇

アンデッド達が止まる。

ネフィリムは吹き飛び、地面にめり込む。

「な、にが……………」

ウエル博士が驚愕する中、困惑する我々の視界に入るのは、

「……………かずま」

響を抱き上げる剣崎。その姿はレンゲルキングフォームのままだが、様子がおかしい。

目の色が青く点滅していた。

「ネフィリム、お前は俺の本能を刺激し過ぎた……………」

その瞳は緑と赤、二つに輝いている。

「なっ」

その時、雪音は驚愕する。

突然光から、二枚のカードが取り出される。緑と赤のハート、あれは……………

「ジョーカーのカード」

「なっ」

「なんだとっ!?!」

◇

その時何かに怯え、向かってくるネフィリム。

だが鎧から光が放たれ、それに眩む瞬間、重醒杖で吹き飛ばし、五枚のレリーフが輝き、カードが現れる。

それを投げ飛ばすと、スロットへと吸い込まれていく。

《クラブ X J Q K A》

カードの絵柄が光と化し、杖の先端に連なる。

持ち上げるように杖を両腕で振り上げた。

《ロイヤルストレートフラッシュ》

その瞬間、光の柱が現れ、それをネフィリムに叩き付ける。

大地は割れ、揺れた。

装者達はバランスを崩すほどの一撃が、星へと放たれる……

だが、

「……………」

獣の怒りは収まらない。

◇

自分の中にある、進化に使用した道具。数多の力が逆流する。

ああいいだろう。

俺は……………」

◇

青のジョーカーカードが現れると共に、一つになる。光り輝き、銀へと変わり、一真の手元に舞い降りた。

その姿はすでに鎧を着こむ青いジョーカーで、そのままラウザーへ通す。

《チェンジ》

白い光が朝日のように辺りを照らす。

そしてアンデッド達が彼の中に封印され、響の隣に立っていた彼は、  
「なん……………」

翼と奏が息をのむ。クリスマスも響も驚きながら、それを見る。

黒い外装に、銀の色、四色の色と金色が刻まれた姿型。

左肩にコインのような盾、右肩に杯が取り付けられた肩アーマーをつけた、鎧を着て  
む何か。

右手にスピードのような剣を、左手にメイスを持つ。

獣、魚類、鳥類、昆虫、爬虫類、鎧。全ての生物の特長を持ち、人の英知が生んだ武器を纏うそれは、三つの爪痕のように黒い宝石が目のように刻まれた、仮面をつけた竜人のようなそれ。

胸の鎧で顔のようなそれは鎧を纏っていた。

【これがもう一つの俺、バニティアンデッド……………行くぞッ】

生命の全ての力、人が生み出した力を持つ、幻獣ですらあるそれは、静かに歩き出す。その瞬間、翼達、生物は恐怖から全身から汗が流れ出る。

本能があれに畏怖を抱き、全身を固めた。

ネフィルムだけは、響を狙い、飛び出したが、瞬間消える。

轟音だけ轟き、地面にはメイスを振り下ろした一真。

メイスはありとあらゆる物を凍結させるメイスであり、クラブを象徴する。

咆哮を上げ、ネフィリムは火球を放つが、盾が回転し、炎の盾になり、防ぐ。

次の瞬間、宙に浮き、回転しながらネフィリムを削る。

コインはダイヤを象徴し、杯から突風が沸き上がった。

杯はハートを司り、雷鳴を纏い、剣を振るう。

スパーードは剣を象徴している。

「全てのアンデッドの力を、取り込んだ……………」

「バニティアンデッドジョーカー……………」

それは一種の天災だった。

大地を砕き、空を汚し、滅びをまき散らす。

「二真のジョーカー……………青は武器を使う人から成った。緑は始まり、赤は違反者を殺す統制者の戦士。金はコーカサスのブレイドの融合。だけどあれば、アンデッド全てを一つにしたんだ」

震えながらクリスは呟き、自分ですら見たことも無い。獣のようにネフィリムを追い詰める。

そのネフィリムは向かい、掴み上げようとした瞬間、

「……………え」

バニティジョーカーの口が開いた、それは腹の——  
「あれも口だったのかっ!？」

相手を掴もうとしたネフィリムは、逆に先ほどの響のように口へと手を入れ込まれ、それは嘔み引きちぎられ、ネフィリムを食らう。

【……………】

無言のまま、ネフィリムは咆哮を上げ、逃げ出そうとするが、瞬間鬣の草木や鎖が地面に伸び、それがネフィリムの逃走進路に現れ、それを阻止する。

「や、やめ、やめろおおおおお！ネフィリムが、僕のネフィリムがあああああ！」  
そしてメイスによる激突で上半身が吹き飛び、咆哮と共に四つの力が振り下ろされた。

大地を叩き割る一撃、僅かなうなり声と共に、翼を僅かにはばたかせ、土煙を晴らす。  
そこにいるのは、バニティアンデッドのみ。

【……………】

そして静かに、ウエル博士へと剣を向け、歩き出す。

「ひい、ひい、ひい」

その様子に装者は困惑する。

いや、でも。まさか!？」

「ダメだ、一真ああああああああああ」  
響だけ暗闇を纏い、獣になり向かっていく。

◇

【一真？】

私にはわからない、分かりたくない。

いま私は、私に気づき、戦いだした一真と戦う。

爪と爪、拳と拳が激突する。

身体の一部一部が変化する。昆虫の針を持つ尾には魚のひれがついていたりするし、羽毛の羽根は、鋭いトゲを持つ草木。

一定の身体を持たず、人間のように武器を振るい戦う。

そして私を認識していない。

【一真じゃ、ない……………】

そんな獣、かつて一度だけ、ノイズが子供を殺しかけた瞬間、爆発するようになり果てた姿。

その時は、何もできず、ただビルも何もかも破壊する一真を、見ていた……………





それに、

「一真っ、このバカ!! なにしてるんだよっ」

「一真!! お前は化け物だけど仮面ライダーだろっ、意識を無くした獣になるなよっ」

「剣崎さんっ」

「さっきの許してやるから、いいから目を覚ませっ!」

この場にいる全ての者達と叫びに苦しみ、そして、

【aaaaaaa——ッ!!】

腹の口から光弾が放たれ、空で割れる。

無数の力が大地に降り注ぐ。



【ぐっ】

先ほどの一撃は、全て自らに放った一撃だ。

それすらも耐えきるが、耐えた後、青のジョーカー体。鎧を纏う、人の英知を振るうジョーカーになり、カードが身体から飛び出て、二枚に割れて戻る。

【……………逃がしたか】

ネフィリムを操る男がいないことに、そう呟く。

私が近づこうとすると、剣が飛ぶ。

この姿、青はアンデッドの武器を全て使える。

「一真……………」

こちらを見る響。だが、

「……………お前は人間たちの中で生きろ」

「！」

【俺は……………もう戻る気は無い】

俺の言葉を聞き、その時、顔を見た。

それでも俺はジョーカーの力を使い、その場を後にする。

【……………】

響たちのあの顔は……………

あの日、けて忘れてられない。仲間の顔と変わらなかった……………

## 第7枚・迷い進む

どこかの廃棄された工場施設、そこで目を閉じ、静かにしている一真。静かに座り込みながら、眼を開く。その瞳は青色で、すぐに黒に戻る。

「……………無い」

ネフィリムが自分の中に無い。

破壊したのだろうかとも思うが、自分の中にあるネフィリムの細胞から、もう少しだけ、情報を拾っている。

「ネフィリムの細胞、独立する聖遺物か……………コアが無いとすぐに消滅するな」  
そのコアが関係あるのか？

もう少し調べてから、動くことにしよう。

だが、同時に思い出す。

「……………響」

あの時、あの顔を思い出しながら、首を振り、また中を見始める……………

◇

「……………」

私はいま、全身検査、メデイカルチェックを受けている。

了子は静かにその結果を見ながら、

「はあ、まずいわね。上半身だけじゃなく、全体に聖遺物の融合が見られるわ」

「欠片の融合、侵食が早まつてる……………」

「こればかりは長期で当たらないと無理ね」

難しい顔をする了子。つまりは、

「私は戦えない」

それでは一真に会えないじゃないか。

察したのか、了子は静かに、真剣にこちらを見る。

「いい、いまの状態なら、通常時でも侵食が始まっていると考えるべきよ。だから」

「ギアを纏うな、つてこと」

「そうよ」

それに拳を強く握る。イライラする。

一真は何を考えている。月の落下も、完全に明るみになった。これからどうなる？

分からない、分からないことだらけだ。

「一真……………」

◇

「響、なにか悩み事？」

「未来」

上の空の中、未来には気づかれたらしい。話したくないが、

「聞いて後悔と聞かなくて後悔、どっちがいい」

「……………聞いて後悔」

「ん」

人のいないことを確認して、私はいまの状態を説明する。前々から理解はしていた、  
侵食による危険性。

それが少しばかり、明るみになった。

衝撃を受けるが、少しは覚悟していたからか、未来はその後私を見つめる。

「響は、どうするの」

「正直、死にたくないよいまは」

そう言いながら、静かに考え込む。

「まったく笑えるよ、昔は死んでもいいって思った、生きてちやいけないうって思ってた。けどね、いまは違う。死にたくない、けど、戦いたいと思う」

「……………響」

心配そうな未来、一真は、

「一真もそうだったんだろうな、彼奴、私より優しくバカだもん」

だから人を捨てた。

だから戦い続けると決めた。

愚かな、人間だ。

人間だから人間をやめたんだ。だけど……………

「私は一真の選択肢は選びたくない、私は一真の所為で、それが悲しい選択だつてことが身に染みてる。選びたくない、けど……………選びたくつて、選んだんじゃないんだろうな、

一真」

そう、一真是きつと、仲間を裏切ったこと、人間であることをやめたことは後悔している。

いまはクリスと翼、奏は別行動で活動している。

いまの私は前線から外された。

「救える手があるのに、振るわない苦しみ……………彼奴は永遠に味わい続けて、壊れたんだ

よ。私よりも、誰よりも」

「……………」

何も言わず側にいる未来。それに少し寄り添う。

「未来はあたたかいや……………日なたのよう」

「なら私にとつて、響は太陽だよ」

「太陽は一真だよ……………温かく照らすのに、近づくのは危険。彼奴は……………」  
ずっと一人で、世界を守ると決めてるんだから……………」



「それじゃ、ふらわーでお好み焼き食べるんだね」

「なんで国家機密なのに、こう知られるんだらうね」

「まあまあ」

そんな会話をする。いつの間にか、友達と呼べるものも増えた。

未来達と共に、お好み焼きを食べに出向いて歩く。

そんな中、黒い車が前を横切る。

「……………いまの」

あれは裏の人間だ。

そう思った時、車が出向いた先で爆発が起きた。

「！ みんなはここから離れてろっ」

「響っ」

駆け出し、走る。

その先に、きつと……………

◇

「くっ、化け物が!!」

【人殺しに言われたくない】

巨大な剣オールオーバーと、盾ソリッドシールドを持ち、コーカサスビートルアンデットの姿で、ウエル博士を追い詰める。

【この前倒した時、ネフィリムは俺の中になかった。あるのは残滓、ならば核となる心臓は……………】

その時、ソロモンの杖を持つウエル博士は青ざめ、何かを布で巻いた物。それを隠すように後ろに下がった。



【それか】

「い、嫌だつ。これがないと英雄に、僕は英雄になるんだああああああああ」

無数のノイズが放たれるが、カードを一枚取り出す。

《リモート》

瞬間、身体から無数のカードが飛び出て、アンデッドになる。

AとダイヤQ、ハートとダイヤのKを除く、上級アンデッド達が、武器を構えながら現れた。

【ああああ………】

青のジョーカーになり、コーカサスも解放し、静かにマンティスとデスサイズを構え、ノイズを殲滅する。

「ひいい、化け物がっ」

【ああ、この世界最強だ】

その時、ノイズが風で吹き飛び散る。その様子に、エネルギー波を放った者を見る

【響っ】

「一真っ」

「ま、また出たっ」

そして彼は戦慄する。

【馬鹿なっ、平常時でも侵食し出してるのかっ】

アンデッドの目で見る響の身体は、ほとんど神経に繋がるように聖遺物が融合している。

「……………やっぱりか」

そうマフラーで素顔を隠しながら、拳を構える。

【馬鹿やろうっ、すぐにギアを解けっ。カテゴリーKっ】

四体のアンデッドを放つが、それに、

「へいき、へっちやらだこの程度っ」

そう言い、四体の上級アンデッドの攻撃をかわして進む。

【ちっ、後ろもうざいッ】

マンティスでノイズを吹き飛ばし、腕の刃物を構え、突き刺す。

そのままネフィリムのコアを封印する、全てはその後。

だが丸鋸が現れ、火花を散らす。

【！】

「この身に宿るシウルシャガナは、おつかない見た目よりもずっと、汎用性に富んでいる。防御性能にだって不足ない」

「それでも、全力の二人かがりでどうかこうにか受け止めてるんデスけどね」

攻撃を止めたのは二人の少女。

そう言われながら、丸鋸が腕の刃を受け止め、後ろから緑の子が支える。

だが、

【だがジョーカーは止められない】

そのまま腕に力を籠める。青色に光り、腕を上には振り上げ砕く。

「デスっ！」

「!？」

【聖遺物程度で、アンデッドは止められ】

その時、吹き飛ぶカプリコーン。

【なにっ!？」

◇

突然のことに驚き、俺は後ろを見ると、響が炎を纏い、闇纏う姿で、赤い眼光で見ている。

「あう……………」

「調っ」

なぜか調と呼ばれた子が酷く怯えているが、アンデッドを地面に建物にめり込ませて動けなくする響。

そして鉄柱や、建物の中にある鉄の骨組みで磔のように差し込んでいた。全身を緑色に染めながら、静かに、

【今度は一真の番、そして……し・ら・べちやあああんのばあんだよおお……！】

あつ、この響調って子いじめてる。そして俺もか。

ともかく、先に俺がどうにかするか、

「くつ、プレゼントですよっ二人とも!!」

そう言い、薬品の入った銃のような注射器を、首筋を当てて使った。

二人とも仲間のはずの男から離れ、薬を打たれたところを抑える。

「なにをしゃがるデスっ」

「これはリンカー？」

「効果時間にはまだ余裕あるデス」

「だからこその連続投与ですよ！ あの化け物たちに抵抗するには、いま以上の適合率でねじ伏せるのです」

「ふざけるなッ、なんで私達があなたの為にそんなことをっ」

「するでしょうっ、いや、せざるを得ないのでしよう。貴方達は連帯感や仲間意識で助け出そうとはしないでしようっ。大方、あのおぼはんが倒れたから、おっかなびつくり駆けつけたのでしよう!!」

自分でしか薬を作れない。なら守れ、それは、

【貴様はどこまで、どこまで俺の本能を刺激するッ】

デスサイズを投げ、光速回転し、マンティスで光を放つ。

土煙が立ち、男の悲鳴が聞こえる中、すぐに接近する。

「くっ」

「来るなっ」

【動くな】

そう言い、鎌と丸鋸が展開されたが、無視する。

手を差し込むのと同時に、自分に食い込む刃。丸鋸は回転しているため、鮮血が舞い、鎌の刃は特殊なのか、身体の中で普通のものよりも食い込む。

だが、

《リカバー》

彼女達の中にある、リンカーとか言う薬を中から取り出す。



「デスっ」

「な、に……………」

【このままでもいい、だから離れるな】

薬を体内から取り出し、後ろに下がる化け物。

前にマリヤ達を、ネフィリムの暴走から守った人。

セレナは彼と敵対することで精神的に追い詰められてる。セレナから聞いた。

『私は、ううん私達……………あの人のこと好きなんだと思うんだ。だから月の落下を止める。きつとどこかにいるあの人に、恩返しするために』

そうセレナは言っていた。

そして目の前にいる彼は、

「身体が、軽いデス……………」

「これ、って……………」

先ほどの光景、マリヤ達から教えてもらった話と合致する。

マリヤも身体からリンカーの影響や、負担が消えていたと言っていた。

傷付きながらも、その人は私達を癒した。

それに何も言わないけれど、私達が傷つけた傷から血が流れる。赤では無い、その色は、あの人が人間じゃない何よりの証拠だ。

「どう、して……………」

「……………」

その時、銀のナイフ、銀の風が吹き荒れ、そして飛行船が、ママたちが来る。

【響】

「……………」

あの人の側にいる。あの人は、彼の手を握りしめる。あの人とは思えない。そして私達は見逃された。そんな気がする。

「あの人は、なんなの……………」

分からないことが多すぎて、胸が苦しい。

私達は、何をしてるの？

◇

響の傷、侵食を消す剣崎さんがいた。

響から取り出したのは、鉋石であり、それを握りしめる。

【……………】

「どこに行く気だ、剣崎さん」

私は前になる。雪音や奏も、奏はまだギアを纏っていないが、雪音は違う。

そして響も、

「一真、どうして……………」

【俺はジョーカーだ、人の中では生きられない】

「何を言っているっ」

私には彼の気持ち分からない。だが、雪音や響の思いをこれ以上踏みにじらせる気は無い。

彼女達はいまは落ち着き、彼に異常なまでの依存はしていない。時折それらしい様子は見せるが。だが、彼の望む救いには向かっている。

だが、だからと言って彼がそこから消えていいはずは無い。

「剣崎さん、なぜ貴方は」

【俺の中でまた、アンデッドの本能が目覚めだした】

その言葉に、我々は言葉を無くす。

【最近、目覚めだしてるんだ。怪物としての意識、バニティアンデッド、ジョーカーとしての本能……………闘争本能がまた、な】



「アンデッドの、だが」

【ああ、戦いは終わっている。俺が戦う相手は、人を傷つける何かだ】

確か、彼は紛争地域に現れたり、雪音を助けたりしていた。

その言葉に何も言わず、彼は立ち上がる。

【……………クリスに会う前に戻りかけているだけだ。人とも獣とも言えない怪物に戻る】

「それって」

その時、小日向が駆けつけてきた。

肩で息をし、それで彼に、剣崎さんに近づく。

「それは響の側にいられないことなんですか」

【……………俺は怪物だ】

「それでも、私の親友を救ってくれた、恩人です」

「未来……………」

そう言い、緑の血に触れる。恐れず、静かに目の前の剣崎さんを見る。

だが剣崎さんは、顔を背けた。

【俺はいずれ、この世界に害あるモノを破壊する怪物に戻る。あの子、銀の歌姫達の施設でもそうだった】

「それって」

【俺は一度、ネフィリムの反応に気づき、本能のまま、それと戦った記憶がある。が、前後の記憶は曖昧だ】

覚えているのは、ギアを纏う少女と目が合ったこと。または瓦礫に埋もれた人達、銀の子をかばった程度であり、それ以上は無いに等しい。

そしてネフィリムを半分機能を封印した後、その子に襲い掛かろうとした。

【俺があの時、施設を破壊すれば、あるいは】

「そればっか、一真はそればっかだっ」

響もまた、剣崎さんの手を握りしめる。

「かもしれない、あるいは、もしかすればばかりだっ!! どうしてなんだよっ!? どうしてそう全部、悪いこと全部背負うんだよ!!」

【俺は】

「怪物でも、一真は響にとつて大切なんだっ。いい加減にしろよ!!」

奏の一言にも、剣崎さんは何も言わない。

「あるいはなんて言葉、それは私達防人として同じだ。戦場にて我々は、いつもそう思う」  
「ああそうだよっ、一真だけ背負わないでくれよ。私は、私やそのバカは一真に救われたんだ」

そう言われながら、そんな中、

【……………俺にはもう、分からないんだ】

「そう言った瞬間、煙が立ち上り、すぐに剣で切り伏せたが、剣崎さんはいない。一真……………」

誰もが戦うことしかできない剣に思いをはせるしか無く、なにも言えずにいた。

◇

あの彼が治癒したからか、身体が軽い。

ママからは念のために時間を置くと言うことになり、計画はまだ進む。

私達は食糧調達をしていて、少し休憩する。

工事現場の跡地で、ご飯を少し食べることにしたけど、私は分からない。

分からないことばかりだ。

偽善者と思った人は、怖い人だった。

大切な人達の好きな人は化け物だった。

その化け物は、傷つけられても、私達を救おうと、敵を救おうとした。

分からない、分からない過ぎて何が正しいか分からない。

私達はフィーネの魂の器として、施設に閉じ込められて、私達の代わりにマリアは

フィーネの器になった。

自分が自分で無くなる中、セレナは静かに戦っている。

家族のこと、大切な人と敵対しながら。マリアだって戦っているんだ。

(私は……………私達は)

そう思い、立ち上がると立ちくらみがした。

「調っ」

切ちゃんの叫びと共に、

「危ないっ」

そう叫ばれ、無数の鉄が落ちる音が響いた。

◇

「アブネエエ……………ナブネダンドトコイダンドダキメラっ!!」

「えっ、えっと……………」

「ご、ごめんなさい、デス?」

よく分からない。滑舌が悪すぎて日本語ですらない。

大人の、男の人が私達を助けてくれたようだ。私達がいたところは、鉄パイプが落

ちて土煙を立てている。

そして、

「あつ」

すぐに気づいて立ち上がろうとすると、足に痛みが走る。

その人は再度私達を支えてくれた。

「調つ、平気ですかっ」

「……………大丈夫か？」

「すいま」

せんと言い終える前に、抱き上げられ、今度は彼のものらしいバイクの上に座らされた。

「あ、あの」

「足が少し、すぐに冷やした方がいいな。こっち来なさい、君も」

「で、デスけど」

「いいから」

そうして私達はその人に連れられていく。

バイクは走らせず、私を乗せたまま押して、カフエかな？ それらしい場所に連れていられる。

この人には関係ないけど、分からないところで、危険を顧みずこうして優しくするその人に、私は余計に分からなくなっていく。

正しいとは？ 正義や偽善とはなんなんだろうか……  
ただ一つ言えるのは、

(……胸触られた)

恥ずかしくて、本人は気づいてないから言わない。

切ちゃんも頬を赤くしていた……

◇

「一真を殺したくなった」

「奇遇だな、私もだ」

いつものように、唐突に二人は謎の怒りを醸し出す。  
そして……

(なぜあたしは……否定できないのはなぜだ?)

奏もそう考え込み、なぞの一体感を感じた……

## 第8枚・数多の思い束ねるは

月の落下が近づく中、本能がささやく。

まあ、どうにかしようとすれば、どうにかできる。代わりに、

「必ず、アレが、俺の中で騒ぎ出すか」

夜の月、いずれ世界に落ちる月落下。その災いに対して未だ国の機関は黙っており、そしてなにかしていても、おそらくは自分達が助かるためだ。

「だが、俺がアンデッドとして覚醒すれば、止められる」

月をどうにかするのはできるだろうが、その後俺はきつと、その人たちを殺しに動く。俺のアンデッドとしての本能は、決して止まらない。

「だがネフィリムや、あの子たちを、放っておくわけにはいかない……」

俺は静かに、月を睨む。

「いずれ決着を付けないとな、全部」

そう決意するしかない。

俺に選択肢なんて無いのだから……



「ひかりしゃしんかん？」

よく分からないデスので、おじいちゃんに聞きました。ようは、カメラ屋さんデス。デスけど、

「いまね、ドーナツ、揚がったよ。せつかくだからコーヒーも出すから、ゆつくりしてなさい」

「いえ、あの」

「あつ、若い子だから、ミルクかカフェオレがいいか」

そう言っておじいちゃんはエプロン姿で奥に、お兄さんは救急箱持って、捻挫らしい調を診てくれたデス。

ドーナツもおいしいデス。

「とりあえずこんなもんか」

「ありがとうございます」

「ふあみふあほうふおふあいふあす」

そうお礼を言い、ドーナツをもう一個。

お土産を持たせてもらいながら、私は歩けるようになった調と共に帰る。



不意に後ろを見ましたが、気のせいか景色が揺れている気がした。  
蜃気楼デスカね？

「日本は暑いって、ホントなんデスね」

「？」



「……………はあ」

なにしているんだろうな。

いまあそこから出ていき、海岸沿いにいる。

あそこはそうそう、使うわけにはいかないから、本人が帰る前に出て行った。

まさかと思うが、介入はしないだろう。

一応確認したが、しばらく帰っていないようだしな。

「明日、どうもきな臭いことが起きそうだ。いい加減にそろそろ動いた方がいい」  
いつの間にか後ろに数体のアンデッドが、情報を集めてくれた。

あの場所を襲撃した人間はある。煤の数で分かっていたが、なんなんだ？

怪しい集団に目をつけ、意識を傾けた。

アンデッドの目、そして万能の力。これらのおかげで透視のようなことができる。これにはかなり利用して、助かっている。

米国の会話らしい、なんだ？

「…………風呂の中？ なんのことだ？」

…………

一時間後、フロンティアと判明した。

「…………フロンティア？ フロンティア?? フロン、ティア??？」

???

考えれば考えるほど、なにか引つかかる。

「……………」

…………

???

ウエエエエエエイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ。

——海の遺跡だ剣崎——

ウエイ!?

「そうだ、海の中だ!? だけど深海魚以外知らないぞ?」

海の中で確か、そんな言葉を読んだ記憶がある。

これはジョーカーの無意識。物体や施設などから情報を読み取った。

「……………ん」

そう言えば声が聞こえた気がする。懐かしい声……………

(まさかな)

海の中での活動は、ほぼ無意識であった。アンデッドの本能で活動していた時期。フロンティア。もう少しなにか思い出しそうだ。

「……………海の中と言えば、財宝やら手に入れたことしか思い出せないが……………」

遺跡で財宝。遺跡?

「……………なんかあった気がする」

無意識での行動なら遺跡だろう。海の遺跡のことだろうが、なんだろう。

思い出してはいけないことがある気がする。これはなにか面倒なことだ。

これは思い出さなくていい気がするから、場所や施設の機能を思い出そう。



「月の落下なら、私が月破壊後に使用しようとした施設、フロンティアが利用されると思われる。向こうはネフイリムと神獣鏡がある以上、使われると思ってもいいだろう」

「フロンティアとは？」

二課の潜水艇にて、作戦会議。そこで了子からの言葉に、響以外の全員が首をかしげた。

「まさかと思うが、私が月破壊にて起きる災いを無視していたと思うか？ 月破壊後、混乱する世界を掌握する為、遙か昔、カストディアンは異なる天地より飛来した、飛行船、それを利用しようとした」

「つまり、神様や、異端技術の船ってことでいいのか？」

「無論、遺跡レベル、箱舟と言っているいいものだ。封印されているが、鳥乃石楠船神が正式名称だ」

「そんなものが」

「ごく小さな穴があつて、初めて場所が分かったんだ。私も正確な場所を見つめるのに、何度繰り返し返しの中で調査し、挫折したか。なぜ穴が封印に空いていたか、分からずじまいだが」

そう言いながら、その封印を完全に解くには、神獣鏡の力が必要不可欠と説明する。だから無理やりにも手に入れたかった。

それを向こうが手に入れていて、なおかつ、座標はすでに知られていると言う。

「なぜ神獣鏡ほどの特化した機能が無ければ解けない封印が、一部壊れていたんだ？」

了子はいまだに謎な疑問を口にするが、奏は次に進めるため、尋ねた。

「ならば」

「封印を解く為のエネルギーだろう。それがあればフロンティアは起動する。ネフィリムは起動に使う。あれは聖遺物を食う、何者かが起動実験失敗の際、徹底的に壊したらしいからな」

「それを補うために、聖遺物が必要と」

弦十郎の話に頷きながら、カ・ディングル跡地を調べても、戦いの残滓を僅かに食らった形跡があると報告が来ている。

「だがとてもじゃないが、エネルギー不足だ。それでも正直、月落下を防げる、防ごうとしているのは彼らだけと理論付ける」

各国はこぞって、自国が自分を優先する。そう告げた。

「……………」

弦十郎は静かに考え込む。次に何をするかだが、

「彼女達はどう出る……………」



「もはや、我々だけでは月の落下を止めることはできません」

「ママ」

私達はドクターと話し終えたママとマリア姉さんから、今後について話し合うことになる。

「まだ策があります。今後の為、マリアには私と共にについて来てもらい、セレナ、切歌、調は待機していて欲しいのです」

「そう、なんだね………」

フロンティアはすでにママを始め、聖遺物研究機関で何度も調べに来ているらしい。

ママ達が海底でフロンティアを発見したのは、偶然にも封印に空いていた穴のおかげだと言うことがある。

なぜ封印に穴が開いていたか分からないままであり、その穴はすでに小さくなり、そこから中には入れない。

だがそこに集中的に神獣鏡の力を用いればこじ開けられると希望の証。

「ですが、その穴ももうじき閉じてしまい、このままでは神獣鏡の力を以てしてもフロンティア起動はできないでしょう」

「穴が開いた原因が分からないんですかつ、いざとなれば私の絶唱で」  
「なりません」

静かに、だけどはつきりと告げる。

切歌の絶唱は、物理的防御を無視して、魂を切り裂く。

だけど絶唱の反動は酷く、適合率が高くリンカー無しでシンフォギアを纏える私ですら、命の保証はない。

切歌や調にそんなことはさせられない。マリア姉さんはフィーネのことがあるから論外だ。

マムの話では大丈夫と何度も言うけど、心配で仕方ない……………

(ドクターも正直信用できない、二人に連続投与するなんて……………)

そう考えたとき、彼が脳裏をかすめる。

私の、私達の初恋。

だけど、彼は敵……………

「……………もう助けてくれない、よね……………」

きつと、もう誰も私達を助けてくれない。

だからやるしかないんだ。もうそれしか、無いんだ……………



「月の落下を止める施設、フロノテアか……フロンティアか」  
町を徘徊しながら、静かに時間を潰す。

何かしてないと本能が目覚め、どこに移動するか分からない。

ともかく、人間でどうにかするにはそこしか無い。

思い出した。みんなから姿をくらました時、暇だから海底を散歩してたらアンデッドの力で発見して、中に入ったんだった。

封印のように閉じられた空間で数年間過ごして、出る時は入る時より硬いから気合い入れて出たんだ。

だが、

「……………ドコダケ？」

正直覚えていない。クリスと初めて出会った時、それに顔を真っ赤にしたため、近くの川で温泉を作って、そこに入れた記憶ならある。

当時は小さくて、大人しく、またお嬢様な感じだったが、いつからか風呂入る際は見るな来るな触るな側に居ろ。

洋服を洗うのもどれほど前だったのだろうか……………女の子の下着は初めてなのは覚



えている。

響もそうだ。一人で寝られないからと言ったり、必ず側にいないとだめで……  
気のせいかな、悪寒が走る。アンデッド化が始まり出しているようだ……

「……………」  
思い出そうとするが、思い出せない。海の中は一番記憶があいまいなんだ。  
そう考えていると、

「！」  
視界がぐらつく。

どこか別の場所が頭の中に映し出され、急いで立ち上がり路地裏に走る。  
頭を押さえるが、身体が変わる。

【ア……………A a a a a a a a a a——ツ!!】

ダメだ、誰かが、争いを起こす。

トメラレナイ……………

◇

私が前線から外され、未来と共に色々なところを巡ることにした。

よく考えれば、ここに根をおろしても、私はこの街を良く知らないままだ。  
「響、どうしたの？」

「私はなにも知らないまま戦ってたんだなって」

そう思いながら、戦うことがどんなことかは知っている。

「この拳は壊す為にある、だけどそれで救えるものがあることを、一真が教えてくれた。  
戦い続ける、そう選んだ怪物のおかげで」

「響……………」

「私は、死にたくないけど、戦いたいんだ。どうすればいいんだろうね」

そう思いながら、展望台から街並みを眺めている。

いろんなものを守りたいと願うようになったよ一真。

「……………」

その時、無数のノイズが空を飛び、絶叫と悲鳴が響き渡る。

「響」

「……………」真のおかげでリミットが伸びてる」

そう思い、歌を歌おうとしたとき、

「！」

雷鳴、竜巻、爆炎、吹雪が放たれ、硝子を壊して怪物が入り込んできた。

「な、なんだっ」

「ノイズじゃない!？」

「ば、化け物だああああああああ」

「だけど私は知っている。」

「アンデッド」

◇

本来は、月の落下を隠し、自分のことしか考えない者達。だがいまは彼らと協力する  
しかも私達は世界を救えない。

ママはすでにエージェントと話を通し、こうして交渉しに向いた。

だが彼らは裏切り、私達を抹殺しようとしたとき、ドクターが暴走する。

歌いながら走り抜ける。ノイズは敵味方、一般人問わず襲う。

ママを担ぎながら走るが、武装した彼らが襲い掛かる。

(こんな時に、自分の保身しか頭にないのかッ)

怒りがこみあげて来る。

ここは一般の人々もいると言うのに、銃器を持ち込み、私達の命を狙う。



前の基地、一般人の子供を守った、彼だ。

「なぜお前達は、ノイズを町に放ったつ。彼らを追い払うためか」

「……………貴方に話すことではないわ」

「俺は人間を守る、その為に戦う怪物だ。関係なくは無い」

その言葉に、私はガングニールを向ける。

「笑止ツ、彼らはその一般人に銃口を向けた、そんな者達を守ると言う」

「守る」

それに、私は目まいがした。

彼は真つ直ぐだ。真つ直ぐ、迷いなく言ったのだ。

「俺に命を選ぶ権利、いや誰にだってそんなものは無い。だから俺は戦えない、全ての人達のために、救いを求める全てを救う」

「傲慢な」

「生憎と、だから人間であることは捨てたツ」

《チェンジ》

【オオオオオオオオオオオオオオ】

ハートのベルトにカードを読み込ませると、また狼の姿に成る。

「くっ」

このまま彼と戦う。そう思った時、それは高速に動き、  
「えっ……………」

私達を担ぎ上げ、高速で上へ逃げていく。

「あ、貴方」

【言ったはずだ、救いを求める全てを救う。俺はそう言った】

そう言いながら、窓の外が見えだす。

「えっ……………」

無数の怪物たちがノイズと戦い、人々を守っている。

彼のように、人を守っていた。

「なん、で……………」

彼らはお世辞にも正義の味方でもなんでもない。怪物だ。

だけど、彼はそのまま高速で階段を上がる。

【なんでだつて、意味なんて求めてない】

そう言いながら、彼は全てを救う。

【俺が俺だからだ】

そして屋上近くにたどり着くと、彼は別の姿。鎧を着た青い色の怪物へ変わった。

《リモート》

そう鳴り響き、数名の怪物をカードから取り出す。

【建物のバカを取り出せ】

そう命じると彼らは動き出し、彼は窓に身を乗り出す。

【ここからはギアがあればいいな、俺はノイズを討つ】

「あな、たは……………」

【…………俺は守りたいだけだ。傲慢でも、偽善でもなんでも…………それしか、俺が生きる生き方が無いから】

そう告げたとき、頭を突然抑える。

【こ、んな、と…………ぐっ】

苦しみながら、窓から飛び降りていく。

私はただ、それを見るしかできない。

(…………あの人は)

あの人は、変わっていない。見た目も、生き方も…………

「マリアアッ」

「!? ごめんなさいママ」

ママの言葉で意識を現実に戻す。ここはまだ安全じゃない。

速くママを安全な場所に連れていけないといけなかった。

「いえ……………！ あそこにいるのは」  
「！」



「この階にもう人はいない、そろそろ歌って戦う。未来、運ぶから捕まっ」  
その時、爆発が起きる。

何の爆発か分からないが、その所為で身体が宙に浮かぶ。

未来が私の手を掴み、落ちるのを防ぐが、

「まずっ、未来っ」

「……………響」

「未来だめ、待っていまギ」

その時、心臓が跳ね上がる。

「がっ、なっんで……………」

心臓が跳ね上がるように鼓動する。

そんな、なんで、だって私はまだギアを纏ってもいない。

「まさ、か」



「ひびき……………」

「ぎあ、まとつ、てないのに……………しんじよ、くが」

その時、一真のアンデッドが一匹、飛翔している。あれはイーグルアンデッドか。

「……………一人だけなら、あのアンデッドさんが助けてくれそうだね」

「……………え」

いま……………なんて言ったの……………

「ごめんね響、けど、私はあの日、あの時でできなかったことを、もう一度する気はないの」

「や、やめっ、み」

その時、手を放す。

落ちる私に気づき、イーグルアンデッドは私を捕まえ、下へと降りていく。

「やめ、イーグ、アツグ」

ダメだ。心臓が、身体が熱い。

「み、ぐ……………」

その時、私は、私の目で……………

未来がいたフロアが爆発した……………

「……………あ……………」

ああ

ああああああああああああああああああああ——ツ  
!!!  
私はただ、悲鳴を上げた………

## 第9枚・神の船

私の目の前で、大切な友達が爆炎に飲まれた……………

ただ声を上げるしか無かった。そう思ったが、

——大丈夫だ、君の友達は助け出されている。心配するな——

「えっ……………」

どこからか声が聞こえた。だがどこから？

イーグルアンデッドはどこにもいない。いたとしてもあり得ない。

いまのアンデッドは一真以外、意思は無いのだから。

なのに……………

「……………」

私はその言葉は事実だと、なぜかそう思った……………

◇

なぜかは知らないが、ノイズの中に、アンデッドが混じっていた。

「クリス、こいつらは」

あのバカ以外、全員いる中、その光景を尋ねられた。

「ノイズじゃないのは、完全にアンデッド。不死身の戦士達だ」

「まだ数がいたのか……………」

「トランプみたいなもんだから、リモートとヒューマンの、ハートの2以外いるのか」

ほとんどがリモートで使われて、戦いまくっている。

ノイズを倒し、瓦礫を壊しての救助活動。これは一真が側にいると見て間違いねえ。

「一真がいる」

「一真の野郎、顔ぐらい出しやがれっ」

いまなんで名前呼びしたッ。ガングニールの姉妹はやっぱりくそッ。まあいい、それは後で問いたです。

そう思った瞬間、何名かカードになる。

「！ この種類は、ダイヤッ」

「雪音っ、あれは」

『ターンアップ』

そう鳴り響き、カードが集まった場所、地面のくぼみからギャレンが現れた。

「一真っ」

《アブゾーブクイーン エボリユーシヨンキング》

その瞬間、紅蓮の炎が巻き上がり、ギャレンがキングフォームに変わった。

そして13枚のカードが、その周りに浮かぶ。

「まさか」

その疑問に答えるように、ダイヤの13枚もギルドラウズカードに変化し、ギャレンキングフォームの装甲に変わった。

重醒銃キングラウザーはそのままだが、より黄金が輝いて、炎の昆虫の羽根を持つギャレンが空に舞い、弾丸を撃つ。

「ちよっせいっ」

私もまた弾丸を放ちまくるが、炎の熱気を纏う弾丸の貫通、威力はけた違いに一真が上だ。

ラビッドのレリーフが輝くと、ガトリングのように弾丸が放たれて、常に輝くのは、ファイアのレリーフだ。炎を吹きだす。

接近されても重醒銃の刃で切り裂かれ、バレットが輝くと簡単に貫通する弾丸が放たれた。

そして飛翔する中、別の13枚が集まる。

『オープンアップ』《アブゾーブクイーン エボリユーシヨンキング》

地面に下りたつ、蜘蛛の戦士。

レンゲルもまた、13のレリーフとギルドカードを持ち、それを、  
「行くぞ『重醒杖キンググラウザー』」

《クラブX J Q K A ロイヤルストレートフラッシュ》

巨大なエネルギーの柱を振り回し、それが大地を揺らす。

ノイズの大群へと叩き付ける一撃。クラブの最強の役なのか……  
そう思う中、仮面ライダーの進撃は続く。



「……………真のバカ」

そう呟く響。どうやらこの場所にいたが、シヨクなことがあって動けなかった。

小日向がいたフロアが爆発して、さらに一時的な欠片の暴走で歌えなかったらしい。

色々あり混乱したが、その後の調査でマリア達に連れてかれたのが確認され、いまよ  
うやく落ち着いた。

混乱する中、落ち着くのに時間がかかる。

「ともかくいまは姉ちゃんに任せておけ」

「あんたが姉は嫌だ」

ともかく返事はする程度には落ち着いたが……………

それでもやるべきことはできたと言う顔で、通信機を取る。

「了子さん、私のこれ、どうにか抑えられますか」

『できる、と言いたいが、保証はしない。ギアを纏えば、嫌がおうにも侵食が早まるだろう』

そう連絡を聞きながら、なら、

「気合いでどうにかしてやんよ」

『……………分かった、こつちでもどうにかできるか調べてみるわよ』

そう言われ、私も頭をかく。



私も呆れて、前に出た。

「つたくよ、テメエばつかに任せられねえな」

ソロモンの杖は私の責任でもあるのなら、今回の件だって私の所為だ。なら、このバカに付き合うしかない。

「調ちゃん、待つてろ。トラウマ植え付けておねしよさせてやる」

「おいバカ、なんで私を見るっ」

「雪音、そこはやめてやれでいいだろ」

「あーあ、つたくよ……………」

少し話し合っていると、オッサンが止めに入った為、そのまま特訓コースに入った。



「……………」

万能の力、それで未来ちゃんを探す。

どこかの廃屋、この方法しか探す術はない。

どこだ。

「……………」

もう数日探している中、そして、なにも無い空間。だが、何かある。

そう思い、力を籠めたら、

【ウエエエイイイイイイイ!!?】

未来ちゃんいたけど下着姿だった。



「いや、まさか……………シュルトケスナー藻!? いや、似たものか」

一瞬だったのがカプセル内にいる未来ちゃんだった。

だとすると危険だ。あれは闘争心が強化されるが危険なもの、全て自分の中にあるはずのそれを見て、場所は、

【場所……………場所……………】

とりあえず急いで向かう。

◇

もう手段は選んでいられないの？

ドクターが唐突に手段があると言って、フロンティア浮上の為、私達はフロンティアが眠る海底を目指す。

途中エージェント、自分達だけが助かりたい人たちの乗る船を、ドクターが襲撃する。

私は……………

色々なことが頭の中を駆け巡る。

気が付けば、ノイズを倒し始めていた。

「私は……………私達はこんなことをしたかったわけじゃないっ」

あの人のように、あのおじいちゃんのような人を守りたかっただけだっ

「調っ」

「切ちゃん」

「調はバカデスっ、ドクターもマリアもセレナもカンカン怒りん坊デス」

ギアを纏い、アームドギアを構える切ちゃん。

それは、

「なにより……ずつと一人で考えていたことに、私はカンカン起こりん坊なんデスっ。

私も、私もノイズを倒すデスっ」

「切ちゃん」

「イガリマの鎌とシウルシャガナの鋸があれば、如何なる敵も絶てるデスっ」

そう言つて、ドクターが放つたノイズを倒しだす。

切ちゃんも悩んでいたんだ。なのに勝手に私だけ動いて……

「ごめんね切ちゃん」

「マリア達にはあとで二人で叱られよう、デス」

そう言つて戦いだすと……

「っ!!」

「えっ……」

鼻血が出て、ギアが勝手に解けた。

「そんな」

「活動限界はまだ来てない……なのに、まさか」

リンカーに細工されていた。私達のギアが解け、ノイズの中で私達は無防備になる。

ノイズが、

「切ちゃんっ」

私は両手を広げ、切ちゃんの前に出た。

◇

「ドクターツ、これはどういうことですかっ」

「どうもこうも、敵になるのなら塩を送る気は無いですからね」

そう当たり前のように言う。

マリア姉さんは何も言わず、ママも言わない。

だけど顔は驚愕して、動揺していた。

女の子を攫い、私達が初め何をしたかかったかももう分からない。

ノイズが切歌と、それを庇う調へと向かった。



そのベルトは、

《チェンジ》

瞬間、カマキリのような姿に成り、肩などを鳴らす。

「カリスはワイルド……強化変化できないか……だが」

左右の足に納められた鎌を取り出し、風が舞い上がる。

「ギルドラウズカードには成っている、力は増すことはできる。ならッ」

風が放たれ、ノイズが吹き飛ぶ。

だけどドクターのもとにソロモンの杖がある限り、ノイズはバビロニアの宝物庫から取り出され続ける。

「ちっ、まあいい」

そう言つて、私達を担ぎ、移動しながらノイズを倒していると、

「一真アアアアアアアアアアアアアアアア」

そう叫び声を上げ、イチイバルの装者が現れて、戦いだす。

あの人達が来たようだ。

「し・ら・べ・ちゃ・ん？」

その時、背筋が凍り付き、お兄さんに抱き着く。

怖い、なぜかは知らないけど怖いッ。気のせいかあの人の声が耳元に聞こえたッ。

イチイバルの人もさつきから銃口をこつちに向けている気がする。なんでこつち見ながら戦えるのっ!?

「劍崎さん、詳しい話は後で聞く」

「ソロモンの杖はどこだ」

もう一人のガングニールの人と、天羽々斬の人が近づく。それには首をかしげながら、

「どこなの?」

「デス、ドクターが持つてるデス」

切ちゃん、そこを素直に言わない方が……………一応敵対関係だし。

そう思った時、歌が響き渡る。

「えっ」

マリアでもセレナでもない歌。

そして突然光が降り立った。



二人の子を助けてたら、突然光が降ってきた。

「……………未来ちゃん」

バイザーを付けて、その様子に驚く。

「小日向っ!?!」

「こいつは」

「気を付けろ、操られてる」

その言葉通りに、歌いながら光を放ち、鏡のように反射しながら機動を変え、俺に降り注ぐ。

急いでまた二人を担ぎ上げ、その場から退避する。

他の船に飛び移りながら移動する。攻撃はこちららへ向かってくるが、瞬間、青のジョーカーへ切り替え、フロートを独自に使用した。

(とはいえラウザー無しで使うのは)

——俺がサポートする、お前は避けることに集中しろ——

声が聴こえる。懐かしい声。

頭の中でアンデッドの力が沸き上がる。やはりこの姿でラウザー無しはきつい。

——俺達が抑えますっ、剣崎さんは集中してください——

突然、衝動が抑えられる。

——ッ!?! 来るぞ剣崎っ——

無数の光が放たれる中、

「壁デスっ」

「っ!! 違う、剣だっ!」

無数の剣が光を遮り、時間を作ってくれた。

「ありがとう翼ちゃんっ」

すぐにビークルを取り出し、それに二人を乗せていると、

「剣崎さんっ」

「緒川さんっ、えっ、ニヤンデウミノヴェバハジレタノ」

「いまは気にしないでください、そちらもバイクを海の上に浮かべてるじゃないですか」

……………それもそうか。

二人を緒川さんに任せ、バニティアンデッドになり、翼を広げる。

鳥でも昆虫でも、機械の翼でもある翼を広げ、未来ちゃんへと向かう。

「アアアアアアアアアアアア」





私の親友と大切な人が争う。けど未来を傷つけるわけにはいかないから、一真は未来を氣遣って戦っている。

「装者達が、アガートラーム装者と戦闘に入りましたっ」

「……………司令」

「出るのか」

「あの二人は私の大切な人……………もうこの手で放したくない人達です。片方は女の子なんだから、壊さないようにしないと」

「……………分かった」

「ああ、まかせて」

そして二人の前に潜水艦が現れ、私はそこから出る。

【響】

「……………」

「二人とも……………」

そして私は、

「もう放さない、親友も、大切な人も……もう二度と、放してなるものかつ」  
黒いギアが炎と共に爆発して、身体に纏う。  
初めから終わらせる。

「ミツツクウウウウウウウウウウウ！」



閃光と炎、銀の切り札が交差する。

無数のレーザーが反射するが、

《リフレクト》

無数の光線を反射させ、響の猛攻も反射させ、接近戦に持ち込む。

【私はもう、放さないッ】

「アアアアアアアアアアアアアアアア」

光線が無数に反射、増幅する中で、その一撃が自分を捕まえた響ごと狙う。

【まずいッ】

そこに飛び込む。光が、自分達を包んだ。



私は響と、劍崎さんを救いたい。

ただそれだけでこの力を掴んだ。

響を助けたい、劍崎さんを解放したい。ただそれだけ……争いたかったわけではない。

そして私達のギアが壊れた。けれど、

【ぶっ】

そう言う声を出し、羽根の翼で私達を包む劍崎さん。正直ギアが無くなったところを見られた。

けれど、

「どう、して……神獣鏡は、魔を払う力なのに」

【……………これは魔の力じゃない、この力は、消せないものだよ】

そんなわけない。だって、その力がどれほどの人達を狂わせて、そしていまもたった一人に背負わせて……それが違うというのなら、魔と言うものは一体なんなのッ。

「未来……………」

響は平気だった。ガングニールの破片が消えている、手ごたえを感じた。一時的で薬

を使ったとはいえ、神獣鏡の装者だったから分かる。

なのに、一番背負ってる人は救えないの……

【それに神獣鏡？ それは………！】

その時、海面から何かが浮上し出している。

それを見ながら、潜水艇へ降りてくれた。

◇

「フロノノヴァ」

「フロンティアが浮上したのか」

弦十郎さんはそう言い、その様子を見る。

翼ちゃん、奏ちちゃんがいる中で、奏ちちゃんは二人。切歌ちゃんと調ちちゃんを連れて来る。二人とも俺を見て驚いていた。

「まさか、海の中で過ごした場所が、こんな施設なんて」

「えっ、どういうこと」

説明したら、全員が驚きと呆れ顔になる中で、未来ちゃん、奏ちちゃん。そして二人をリカバーで治した後、了子さんに、

「了子さんこれ」

「鏡の欠片？ これってまさか」

「神獣鏡の欠片、海の中で見つけた財宝の中に、これがあつた」

「そうかつ、神獣鏡で封印が解けるのは、性質だけじゃなく、神獣鏡で封印したからだったのかッ」

了子さんが言うには、聖遺物は数あれど、どんなものよりも神獣鏡による封印解除、起動方法に合う聖遺物は無く、かなり長い時間探していたらしい。

まさか、封印の核として欠片が使われていたとは、さすがに分からなかったし、俺が封印を飛び越えて、中にいたとも知らなかったらしい。

「響からはガングニールの気配は無い。さすがにガングニールは俺は持ち合わせていない」

「それより、クリスは」

「クリスは……………」

翼ちゃんの話では、セレナと言う子、あの子との闘いの中、突然裏切り、向こう側に出向いたようだが、

「たぶん、ソロモンの杖か。あの杖を取り戻す為に」

「クリスの奴、一真のこともそうだけど、色々考え込んで重いんだよ彼奴……………」

そう言いながら、奏ちゃんはよしと言い、

「ともかく旦那、いまの現状は」

「ああ。各国政府がフロンティアに上陸し出し、フロンティアを掌握しようとしているが、いつノイズが出て来るか分からない」

「ともかく制御室と操作室があつたはずだ、昔そこで寝てたから」

「お前、ホントなにしているの」

場所を教えつつ、翼ちゃんはクリスを。奏ちゃんは各国の暴走で現れるノイズを。

そして、

「マリア達の説得をさせてください」

「お願いしますっ」

二人の少女達、それに、

「私が面倒見る」

「ひい」

「なんで悲鳴上げたのかな調ちゃん……可愛いな仲良くしようね」

「あ……………」

怯える調ちゃん。ともかく、マリアと言う子とセレナと言う子。さらにママと言う人と色々暴走している。

「俺が言うのもなんだけど、このまま放つておいても月落下を止められるか分からない。俺はドクターと言う男が信用できない」

「同感、ともかくお願い。マリアって人の下に私を連れて行って」

「何をする気だ」

「なあに、少し、お・は・な・しするだけだよ」

マリア逃げてと言う小さな声が聞こえたが、いまは放置するしかない。

そして、

「小日向未来、まだ装者として一時的に戦いたいのか」

「……………戦えるんですか、響と一緒に」

「その気があるのなら、急いで彼が持っていた神獣鏡の欠片を加工する。どうする」

「お願いします」

「……………」

響はそれを聞き、静かに目を閉じ、そして、

(私が守る、一真のように、自分ができることで、やり遂げる)

何かを考え込みながら、そして全員がフロンティアに乗り込んだ。

## 第10枚・歌姫の恋歌

響を運ぶのは切歌ちゃんと調ちゃんが担当し、案の定ノイズが放たれた為、奏ちゃんがノイズを討つ為に出向く。

翼ちゃんは心臓部だろうと思われる場所、そこを目指して進む。クリスとソロモンの杖を取り戻すためだ。

「すぐに片付けて、二人が出られる状態にする」

「一真、バイク借りるぞ」

「ああ」

そして静かにブレイドのバックルを構え、静かに変身する。

ブレイドの相棒である、こいつと共に、各国のエージェント達などで戦場と化している場所へと走り出す。



「……………剣崎さんのバイク、さすがに高性能だ、！」



その時、無数の弾丸が放たれ、それを避け、バイクを乗り捨てると、バイク、レッドランバスが炎を上げて爆発する。

「ギャレンのバイク……………一真がいるのか」

「雪音……………」

首元に何かを付けた、イチイバルの雪音が現れる。

劍崎さんや響の考えでは、

「おそらくソロモンの杖を取り戻す為に近づいた」

「たぶん、なにかしらチャンスをうかがう為に戦うだろうね」

そう言っていたが、

「一真のバイク……………あんであんたが乗ってるんだよッ」

そう叫び、辺り一面に弾幕を張る雪音。

目から光が怪しく光り、ギラギラと刃物のようにこちらを射貫く。

(本当にこれは演技だろうか)

そう思うほど、後輩との激しい攻防を繰り広げるしか無かった。

◇

もうすぐマリア姉さんが歌を歌う。

フロンティアは起動した、後は月遺跡を動かす為のエネルギーを、世界中から集める。いまからその歌で世界を救う。

その時、バイク音が響き渡る。

心臓が締め付けられる。それは、

《アブゾーブクイーン エポリューションキング》

黄金の戦士、その日、あの場所で私を、私達を救ってくれた人が、敵として現れた。

「……………姉さん達の場所には行かせません」

私はいまどんな顔をしているんだろう……………きつと酷い顔をしている……………

「……………君は」

銀の腕である私は、歌を歌う。

彼と戦う、その為の歌。その為に、銀の光が彼に迫った。

彼は……………



「緒川、準備はいいか」

「ええ」

「つたく、困った弟子たちだ」

「切っ掛けを作ってもらったの間違いでは？」

そう言いながら、車の準備をしていると、電波がジャックされ、一斉報道される。

「これは」

「どうやら彼女達のようにです」

どうもフォニックゲインを集めるようで、連絡が入る。

『どうやら彼女達は、フロンティアの機能を回復させ、月遺跡を掌握して落下を防ぐ気だ』

「その為に、フォニックゲインを集めるつもりか。緒川っ」

「はい、急ぎますよ」

司令の言葉に車を走らせ、ノイズやらエージェントの皆さんがいる中で、車を走らせた。



「行くぜ先輩っ、いままでの全部を使い切るっ」

そう言われ、私はすぐに勘付いた。

コンビネーション攻撃、さんざん練習した雪音との鍛錬。それを思い出す。奏や響の為にも、私が引くわけにはいかない。

そのコンビネーションでの攻撃の中、雪音の首に付いた爆薬を斬り壊し、そして雪音と共に一気に動く。



「まったく、最近の子は行動的なのねっ。私ももう少し行動的なら月破壊して、バラルの呪詛を壊してたのかしら」

「不吉なこと言わないでくださいっ」

藤堯の叫びを無視して、私はある少女の前に立つ。

急いで加工したが、余計なことをしてくれた。

「小日向未来、いい、これが用意した貴方用のシンフォギア。神獣鏡よ」

「これが、ですか」

「あの男に感謝しなさい、これは貴方用に調整されているわ」



私は響達に助けられ、了子さんに呼ばれてここにいる。

みんなが戦い、各々の戦いをする中でそれを聞かされ驚きながら、詳しく説明を受ける。

「まず貴方がこれを纏っていたとき、リンカーや機械制御をされていた。貴方の制御もあつたのですが、その際貴方に触れていた彼は貴方の意思をくみ取り、性質を変えたようよ」

「性質を……………」

私は驚きながら、その手に聖遺物のペンダントを包み込み、了子さんは静かに言い聞かせる。

「神獣鏡は性質上、魔を払う鏡であり、異形の力であるものを払う力がある。だからこそ融合症例の彼女から、ギアを弾いたし、貴方自身も弾かれたわ。その際に回収した欠片と自身が持ってた物を合わせた」

いつの間にとと思うが、それと何かしら別の力を感じる。下手をすればそれが万能の力、アンデッドの力だろうか？

私がそう思うほど、これからは力を感じる。

「その結果、リンカー無しであなたは装者になれる」  
「だけどと付け加える。」

「それは危険な目に遭うという事よ、それでもこのペンダントを手に取り、装者としてのこの戦場に舞い戻る覚悟はある？」

「それは」

それは、この場にいない、私の大切な人達の代わりや、色々な人達の代わりに聞かれているのだろう。

しばらく黙り込んだ後、私はそれを静かに受け取る。

するとすぐに呆れながら、静かにため息をつく。

「はあ、ホント、いまの世で計画を行ったのがそもそも間違いのようだ」

そんなことを言いながら、いつもの了子さんに戻ったように苦笑した。

「あつははは……頑張ります」

「即席だから、援護に私が色々手を加えたわ。そのサポートがあればノイズ程度は倒せる。頑張りなさい、恋する乙女」

「はいっ、って私は」

恋なんかしていないっ。はずです。

「はいはい、性別は関係ないわよもう。世界は移り変わるのだから」

「も～～～～」

ともかく私はノイズ退治の為に、走り出した。

◇

そう言いながら、未来ちゃんを送り出した後、すでに出ているであろう男たちを考える。

まだノイズが動き回っていると言うのに、呆れたものだ。

「はあ、そもそもこの騒ぎって、巡り巡って私の所為よね……………それに指揮官系統任せるって弦十郎くん。男って勝手なんだからっ」

私の文句は誰に言えればいい。今度藤堯か緒川を連れてはしご酒するか？

それとも、クリスや響、奏や翼に、今後の為に恋愛話を仕込んでやろう。そうするか。

◇

「つたく、なんとかかんとかって奴か」

「ああ」

あの後爆発の余波で地下の通路かは知らないが、そこに落ちた。

まあそのおかげであの野郎からソロモンの杖を取り戻せた。

ギアを纏い、私はすぐに話を聞くために近づく。

「とりあえず、なんで一真のバイクに乗ってたんだよ」

「そこは本気だったのか雪音……………」

「るっせえ、一真のバイクは、その、乗っていいのは私だけだつ」

「そう言われる中、私は小さく、

「早く一真に会いに行くぞ……………先輩」

「そうぶっきらぼうに言われた。

「……………ああ」

「そう返され、私達は戦場に戻る。

「剣崎さんは、大丈夫だろうか」



「……………なんで」

「……………」



私の攻撃を一斉避けず、この人は近づいて来た。  
鎧が解けたその姿は、緑の血を流す人だ。

「……………どうして」

分からない、なんで抵抗しないの……………

どうして……………敵になってくれないのツ!?

「月をどうにかしたいのは、君たちだけじゃない。聞いたよ、各国政府の機関にノイズを放つたり、色々したの」

それに唇を噛み締めながら、

「しかた、ないことです。彼らは交渉にも応じず、自分達だけが助かろうとしていました。そのためにも多くの人を巻き込んで……………」

私はいま……………どんな顔をしているのだろうか。

もう嫌だ、もういや……………

やっと、この人に嫌われるだろう……………

なのに、

「ならいまの君は」

「……………」

それに何も言えない。

この人はどうすれば止められるのだろう。  
もう、私は――

「貴方は、なんなんですか………」

震える声で私は、彼に聞く。

彼はなんでもない様子で、

「俺は戦う事だけしかできない怪物だ、君を救うことも、世界を救うこともできない。けど戦う、救いたいから、俺は戦う」

怪物……人間じゃない………」

「………ならどうやってですか」

意地の悪い言葉だ。

私が私でなくなる感覚。私はいつからこうなってしまったんだろう？

マリア姉さんはこんな感覚で、ギアを纏っているのだろうか？

そう考え込んでいると、意外な答えが来た………」

「月を押し戻す術がある、仲間には、みんなには内緒にしてるけど、俺が俺で無くなることで月を元の位置に戻す術がある」

「えっ………」

その時、怪物の姿に、目の前で変化した。

【この姿も俺だ、この姿の時、俺は俺で無くなる。君たちを助けた時も、俺は俺では無かった】

「……………」

そして静かに、青い怪物は静かに頭を叩いた。

「ツツ」

油断していたから、痛かった。

【君らは頭が良いのか悪いのか、どっちなんだ。国が信用できないからってテロリストになったり、国に協力交渉して破断したら、一般人を使ったり】

「ツ!? 貴方に何が分かるんですかつ、私だって、ママや姉さんだってしたくてしてるんじゃないツ。私達は世界を」

【世界はみんなの物だ、世界を救いたいのは、君たちだけじゃないツ】

その言葉と同時に、肩を掴まれた。

【いい加減にしろツ、君たちが願った道に出向かないのは、君たちが君たちだけでしかないと思っただけだからだろツ】

「そ、れは……………」

【助けてほしいのなら叫べ、手を貸してほしいのなら初めからそう言えツ。俺はバカだから分からない、声が聴こえなければ、俺はそこに出向けない】

そう言いながら、静かに抱きしめられた。

「俺は人を、人類を守りたい。君は本当は、何がしたい」

「……………わた、しは」

本当は、本当は……………

「本当は、誰かを傷つけて、みんなを傷つける作戦なんかしたくないっ。けど、姉さんが今犠牲になろうとしているっ。いまマリア姉さんはフィーネの意識に塗りつぶされてでも、世界を救おうと」

「あの人は世界を救わないッ。あの人の願いは、好きな人の側にいることだ。月の落下なんてどうでもいいことだ」

それに、私は驚く。

「?」 だって、いま姉さんは……………」

「僕にも君の姉さんは、姉さんじゃないことを言ったか。それとフィーネはいま別の人間として滞在してるから、記憶の塗りつぶしは起きない」

今この人はなにを言った?

「君たちはそこまで追い詰められてたんだ、だから」

「フィーネの魂に塗りつぶされたい? 姉さんは、ママはじゃあ」

「世界を救う為に演じてたんだ、だけど、そんな中自分のことしか考えてない男がいる」

ドクターとすぐに答えそうになる。

私はもう分からなくなる。確かにこの人の言う通りかもしれない。  
どうすればいいの？ もう分からない。

【俺は戦えない人達の為に、戦う】

その言葉が優しく、透き通っている。

ああそうか、変わらない。

(この人は……………)

あの日から変わってないのだ。

私は、

「わたし、私を……………姉さんを、私の大切な家族を、助けてええ……………！」  
その言葉と共に、涙が溢れる。

止まらない、ずっとと言いたかった言葉。この人に、求めていた言葉。  
そして静かに、

【任せろ】

あの日に見た人は、やっぱり私の……………騎士に見えました……………

◇



「……………本当に、ドクターは世界を救う気は無い？ 私達は」

このままじゃ世界を救うどころではない。

ならばもう、迷わない。

涙を拭き、あの人にああ言っただけど、全部任せる気は無い。

「姉さんを、私の大切な家族を守りたいっ！」

それが本心だ。

【……………ならさっさと行こう】

「一真さん……………私を、私の大切な家族を、守ってください」

これもやっと言えた。私の、私達の本心だ。

【ああ】

そう言って、私の手を取る。

私は色々した、過ちを、間違いを。

だけどこの人は……………

（ああやっぱり、私は……………）

そして私は首を振る。

いまは考えるのをやめよう。彼のこと、この人のことをちゃんと聞くときまで……………

「マリア姉さん、ママ、待ってて」

そして私も走り出す。

◇

——ネフィリムの細胞ですか——

——……俺達はなんなんだろうか。いや、もう関係ない——

——ああ、剣崎を、俺達の仲間を、助けを求める者達を——

◇

【……………】

身体の中でざわめく力、何が起きているか分からない。

だが不思議と、信じられる。

【……………俺は】

そして静かに、前に進む……………



## 第11枚・仮面の戦士

炎の中で彼を見た。

妹を止めてくれただけでも、私にとってはヒーローである彼は、暴走するネフィリムも止めてくれた。

妹であるセレナは彼を見たらしい。黒い髪と黒い瞳の男性。

私も好きになっていくことに気づいたのは、後々だ。

妹であるセレナも彼を思っている。

だけど、彼は敵だ。

敵なのに……

なんで彼を敵だと見られないの？

◇

「そ、んな」

全能力が集まらない。これでは月遺跡再起動に足りない。

その時、彼を思い出す。

私は、彼のように誰かを救うことはできないの？

力が出ないと思つた時、ドクターが現れ、私を吹き飛ばす。

いまのドクターの片腕はネフィリムの因子を打ち込んだものだが、いまリンカーが足りず、力を出せずに吹き飛んだ。

「月が落ちなきや好き勝手出来ないだろうがっ」

そう言い、勝手にパネルをいじり出す。

『なにをしているのドクターウエルっ、フロンティアの機能を使い、収束したフォニックゲインを月へと照射し、バラルの呪詛を司る遺跡を再起動させれば、月を元の軌道に戻せるのですっ』

そんなマムの言葉に、心底うんざりしたような顔になり、

「そんな月に戻したいのなら、あんたが月に行けばいいだろっ」

そう言い、パネルを動かすと、マムがいる施設が火を噴いている。

「ママっ」

「有史以来、英雄が人類を救えないのは、人の数が多いからだっ。なら支配可能になるほど、人の数を減らせばいいっ。この僕だからこそ思いついた英雄になるための必勝法っ」



【別に必要なエネルギーはフォニックゲインだけじゃない。この俺の、俺が持つ、アンデッドの力ならば、聖遺物は動かせるツ!!】

閃光が舞い上がり、フロンティアが脈動する。

それにドクターは辺りを見渡し、狼狽えた。

「ば、バカな、そんな、僕が、僕が英雄になるんだあああああああつ、邪魔するな化け物おとおおおおおおおお！」

機能を使い、何かしだしている。フロンティアの起動音が妙な旋律へと変わる中、エネルギーがおかしい。

『やめなさいドクターウエルっ』

「! おぼはんっ、どうしてまだ」

「ママっ」

その時、外を見ると、ママのいる施設が飛んでいない。途中で止まっていた。

【悪いが先手を打っておいたツ、すでにここは、俺の支配下だツ】

光やエネルギーがラインのように彼に根付き、そして彼はそれを意のままに操る。

【貴様は英雄なんかじゃない!!】

「なにをツ」

【ある男が言っていた、英雄って言うのは、英雄になろうとした瞬間に失格だつて。お前

は、初めからなる資格なんて無いッ!」

「なッ」

《チェンジ》

【バニティツ、この俺の中にある全てを使うッ、ウオオオオオオオオオオオオ——!】

莫大なエネルギーが放たれる。それだけが肌で分かる。

『っ?! 無数の聖遺物、それに未知数のエネルギー………貴方、これは』

【人でないからこそ、俺だから掴める手があるッ】

ありとあらゆる生物の寄せ集め、奇跡的なバランスで出来上がるその姿は、生きているものであるのに、生き物で無いと分かってしまう。

「ふぎけるな、そんな、そんなことが。僕が英雄に、英雄になるんだっ」

【ウオオオオオオオオオオオオオオ——】

その時に、くそくそと言いながら、パネルを操作している。だからこそ、

「私は、私はッ」

その槍を掴み、ドクターを見るが、

「やめろッ」

槍の刃先を掴み、ガングニールの装者がこちらを睨む。

「放せ、いまはドクターを止めなければ、世界を救う為にも」

「抜かせガキっ」

その拳はギアを纏っている私を吹き飛ばす。

セレナが駆け寄り、その子はフードをかぶりながら、私の胸ぐらをつかむ。

「世界を救う？ 都合の良い事言ってるんじゃないよっ」

「貴方に、貴方に何が分かるの？」

「わっかんねえよっ、好き好んで世界を救おうとするバカなんてッ」

「なにを」

「私はなッ、始め人殺しして言われて死ぬと世界に言われ続けたっ」

その言葉に衝撃を受ける、嘘のような話だ。

彼女はルナアタックの……………

「だけどな、自分達の都合がよくなれば英雄扱いされた。分かるか、死ぬと、人殺しと言われ続けたと思ったら、今度は英雄だと言われることが」

「それは」

「それでも、こいつは人を救いたいんだよっ。わっつけわかんねえよッ」

そう叫びながら、槍を掴む。

「化け物と言われながら、それでも人間を助ける。私も助けられた、だから」

血が流れながら、刃を握りしめると、砕け散り、私のガングニールが光へと変わる。

「こ、れは……………」

「私は力を掴む、この手で、絶望を壊す。だから私に来いっ。撃槍ッ、ガングニール!!」

その輝きの中、ギアがはがされ、光の中、ガングニールは彼女を選ぶように、彼女の  
下に。

顔を隠し、マフラーをなびかせる。私はすぐに私服に戻った。

ドクターウエルは後ずさりながら、私はセレナに支えられる。

「なんなんだ、フロンティアのエネルギーが、なんなんだお前らはッ」

それに、

「俺は守る、戦えない人々を、人類の自由の為にッ。俺は、俺は仮面ライダーブレイド  
だあああああああああああッ!!」

無数の生き物の雄たけびが、辺りに響く。彼の目が光り輝く。

「一真ッ」

「邪魔すんなって言うてるんだ化け物がアアアアアアアア」

その時、無数の柱が押しつぶさんと向かっていく……

◇

頭の中がおかしくなる。戦いたい、何と、誰と、ナニガ、俺はッ!!

「言ったのはお前だ剣崎」

ッ!?

「俺達はお前の中にいるとな」

気が付くと13枚のカードが一つの輪を作る。

自分を含めた四つの輪。その中心に、誰かが立っていた。

「全てを背負ったお前だけに、全てを任せる気は無い」

「俺達の思いは、けして貴方から消えないッ」

「剣崎………お前が運命に挑み続ける限り、俺達は、ここにいる」

それは懐かしい声だった。

ああ、そうだ。知っているとも……

【………ああ】

辺りは光で真っ白だ。



カードを手につ。それはギルドラウズカードでもない、ただのラウズカード。俺たちみんなの始まりでもある。

【力を、貸してくれるのか。だけど、これは】

「奇跡なんてものじゃない」

その時、その輝きに覚えがある。さつき見たし、少し前に浴びたじゃないか。

ああ……

【……………にんげんの、あたたかさか】

始めに会ったとき、全てを失って泣いていた女の子。

いまでは、こんなにあたたかい存在になった。

四人は前を向き、各々がカテゴリAのカードを構える。

ある者はただラウザーを腰に巻きカードを構え、ある者はバックルにセットし、腰に巻き付け、全員が構える。

その時、俺は、剣崎一真は、

「……………行くぜ」

人間だった。

「変身ッ!!」



れ、ザッパーモードのレンゲルラウザーのクローバー・エッジがひるんだネフィリムを追いつまむ。

四人は同時にラウズカードを使う。

《サンダー》《トルネード》《ファイア》《ブリザード》

四人からの一斉攻撃に吹き飛びながら、それを追撃する。

「凄……けど、なんで四人の仮面ライダーが」

彼女は困惑する中、完全に一つの生き物のように、全員が全員、お互いの動きが分かっている。

「ウオオオオオオオオオオオオ——ッ!!」

剣を収め、何度も繰り返し返し殴ると言うそれだけで、ネフィリムがダメージを負う。

「バカなバカなバカなバカなバカなッ、そんな、ネフィリ」

「使え剣崎ッ」

三枚のカードが投げられ、振り返ると共に斬り、取り出してカードを広げ、一枚取り出す。

《ビート アッパー チョップ スクリュー アームドアップ》

両腕に纏わりつく光、軽く跳び、落下すると共に左腕でチョップを叩き込み、そのまま右腕でスクリューアッパーを叩き込む。



「これがライダー………バトルファイトを戦った、四人の戦士。仮面ライダー」

そう静かに呟き、四人は静かにドクターを見る。

「こ、こんな、こんなところで終わってたまるかっ」

そう言つて穴が開き、そこから逃げ出す。

「待て、ドクターウエルツ」

そう言つて弦十郎が追いかけて来たが、穴の中に消える。

「響くん、そのガングニールは」

「こいつから奪つた」

「あのな………」

「劍崎ツ!!」

突如ギャレンが突然殴り、それに驚く。

「ナ、ナニジャルンジャズカ!？」

「一人全てを背負つた報いだッ」

その時、大きな揺れが起き、それに驚く。

「外？」

「さっきの奴かっ」

そう言つてブレイドは地面に触れながら、その力で見る。

「さっきの奴の腕と、この施設の心臓部が繋がっている?」

『ドクターウエルは現在、片腕をネフィリムへと変貌させています。その力を持ってフロンティアを自分の物にする気でしよう』

「このままこの施設を彼奴の物にするのはまずい」

そう告げたとき、弦十郎は床を拳で破壊し、それを見て驚く響達。

それと共にブレイドは外を見る。

「外も様子がおかしい。おそろくなにかある。すぐに出るつ、あの男のことは任せます  
!!」

そう言って、彼は先に建物の外へと出る。

「待て劍崎っ」

四人の仮面ライダーは飛び出し、それに響も続く。

「……………二人とも」

「デス」

「セレナ」

「私はここに残る、少し待ってて」

「セレナ……………」

「分かった、待ってるよ二人ともっ」

そして二人が後を追う中、弦十郎達はウエル博士を追いかけ、二人の歌姫がその場に  
残る。

◇

「セレナ……………」

「ママ、エネルギーは」

『彼のおかげで十分、と言いたいですが、まだあと一押し、あと一押し足りません』

「セレナ」

「歌おう姉さん」

「無理よ、私では、私の歌ではっ」

「マリア姉さん」

私の歌は色々なものを傷つけた。

初恋の人も、何もかも傷付いている。

「私は」

「マリア姉さん」

セレナは私の、その手を取る。

「姉さん、私は好きだよ。マリア姉さんの歌」

「セレナ……………」

「私達は色々間違えた、けどまだ生きてる」

「……………」

「まだ間に合う、姉さん。胸の中の歌を偽らないで……………私達はもう、偽らず、歌おう」

そして口にするのは、小さい頃からセレナが歌うあの曲、歌……………」

それを口にするセレナは心晴れやかであり、私もそれを歌う。

『マリア……………』

「ママ」

『もうあなたを縛るものはなにもありません、月の落下は私が責任を持って食い止めます。貴方は貴方の歌、貴方達の歌を歌いなさい』

その言葉に、私は……………」

「!」

「なにつ」

セレナのギア、アガートラームが輝く。

そう思った時、その欠片がしずくのように、私の手のひらに……………」

「アガートラーム……………姉さんに戦う力を、私の力を貸してくれるの」



「アガートルーム……………」

それを握りしめ、私は立ち上がる。

「行きましようせレナ、私達の本当に出向くべき場所へ」

「はいっ、マリア姉さんっ」

そして私達は、彼らの下へと向かう……………」

## 第12枚・仮面の戦士と歌姫の歌

外は重力場がおかしいのか、浮遊する足場などあるが、彼らは気にも留めずにかけている。

そして外にはギアを纏う、弓と刀、槍の歌姫がいた。

「クリス、翼ちゃん、奏ちゃんっ」

「なっ、なんでギャレンやカリス、レンゲルが!?!」

クリスは叫び、それにあえて何も言わず、ブレイド、一真はクリスが持つ物に気づく。「取り戻せたのか、ソロモンの杖」

「……………こいつはもう、悪用させない。こいつを起動させた私が取らないといけない責任だ」

「説得するのに苦労した」

「ありがとう、翼ちゃん」

少しばかりちゃん付けはやめて欲しそうな顔をするが、後ろの二人に気づくクリス。その瞬間、ブレイドの足元に弾幕を張る。

「またか……………またなのか一真」

「一真、敵に手出すのどうかと思うぞ」

「ニヤノコト!?」

「オヨヨ」

「やっぱりこわ、ひいつ」

少し離れていたはずの響が、いつの間にか調の背後に回り、すぐそばにいる。

「調ちやくん? なにか言いたいのかな」

「何も無いですつ」

その時、二課の歌姫達のインカムに連絡が入る。

『本部の解析にて、高質量のエネルギー反応地点を特定したつ。一真くんがいるのなら、

彼の指示に従い、フロンティアの炉心、心臓部へ急行せよ!!』

「だつてさ一真、頼むぜ」

「ここに二降りの槍、剣と弓がある。頼もしい二降りの鎌もな。四人の戦士と共に、我々

が止めて見せる」

「応っ」

「デスっ」

そしてブレイドの案内で炉心へと向かっていくが、途中で地面が盛り上がりつついく。

「何か来る、気を付けろ」

カリスの一言と共に、怪獣のようなネフィリムが姿を現す。

「これは、自立型完全聖遺物っ!？」

「ネフィリムはいま、ドクター達がフロンティアと融合させてるっ。だから」

「その名残デスっ」

無数のミサイルや、炎の火球を吐き出す。

それを見たレンゲルがダガーモードのレンゲルラウザーを取り出し、カードを読み込ませる。

《ブリザード》

レンゲルの周りに白い霧のように、冷気が集まり、それを放つ。

「続けっ」

翼の一振り、響の一撃が放たれたが、甲高い音を鳴らすだけで、何も起きず、それに驚きながら、響は距離を取る。

「なら、全部乗せだああああああああ!!」

弾幕を張るクリスだが、無傷であり、炎の塊を吐き出すネフィリム。

すぐに奏が担ぎ、その場から離れるが、シンフォギアの攻撃が効かない。

腕を振り下ろし、片腕がうなり上げると、突然伸び、響の下に向かう。

「デッスウウウウウウウウ」

そのゴムのような、伸びた腕に細い糸が絡みつき、ギロチンのようにその腕を切り落とす切歌。

シウルシヤガナを使い、そのわき腹を斬る調。

だが傷が治り出し、奏はクリスを下ろす。

「全然効いてない」

「これは骨が折れそうデス」

「だけど歌があるっ!!」

銀色の風が吹き荒れ、それに少しずつ切られていくネフィリム。

二人は振り返り、そこに、

「マリアっ、セレナ!!」

全員が集まり、マリアは静かにペンダントを握りしめる。

「私は、私達はもう迷わない………本当にしたい事、大事なことを」

「歌おうっ、私達の力、シンフォギアの力をッ」

その時、巨大な炎の塊が、歌姫達に放たれるが、

《《《アブゾーブクイーン》》》

その音と共に、戦士達が炎の前に現れる。

《《《エボリューションキング》》》《エボリューション》

炎が激突すると共に、歌が響く。

その瞬間、無数の光がネフィリムを貫いた。

「間に合ったかな？」

そう呟いて、鏡の装者は首をかしげながらも、シンフォギアの戦慄が流れる輝きの中に加わっていた。

「これは」

「セレナがいる、調や切歌がいる。この程度の奇跡、安いものよっ」

黄金の輝きから、三人の王が現れる。13枚のレリーフを持つ装甲、鎧を纏い、剣を、銃を、杖を構えながら輝く。

風と共に、13のカードを一つに束ね、また一人の王も鎌を構えながら揃う。

キングの姿で現れた四人の戦士は、どこからか現れたバイクに乗り、大地を駆ける。

「歌が終わるまで俺達が時間を稼ぐぞっ」

「ウエエイイイイイイ」

炎を集め、装着時に発生するフィールドで防いだ歌姫を守る為、彼らは駆けだす。



「俺は運命と戦うッ」

無数の炎の弾丸が放たれながら、ワイルドスラッシュャーで斬りかかるカリス。

重醒杖キンググラウザーと化した杖を、こん棒のように何度も叩き続けるレンゲル。

無駄だろうが関係なく、三人のラッシュにネフリムが悲鳴を上げ、後ろに下げる瞬間を見逃さなかった。

カリスは己のラウザーにカードを読み込ませる。

《シャッフル》

全員がすでにカードを取り出して、それが全員入れ替わる。

《ダイヤⅡ スペードⅢ ダイヤⅣ ハートⅤ ダイヤⅥ ストレート》

ギャレンは炎を巻き起こしながら、アルマジロは回転し、ライオンはその拳を振り下ろし、キッツキは何度もくちばしを振るい、巻貝が回転。ホタルが炎を灯す。

放たれた弾丸は無数であり、全てが貫通しながら粉々に肉体を破壊する。

《スペードⅣ V VI クラブⅦ VIII ストレート》

猪のように突進し、バッタの脚力を鹿の雷鳴を纏い。クラゲのように肉体をほぼ液体にし、さそりの毒として突き刺すレンゲル。

それに雄たけびが響き渡る瞬間、二人は構える。

二枚のカードを別に取り出し、ブレイドは走り出す。

《ハートVI　ダイヤVI　スピードVII　ダイヤVII　ハートVII　フルハウス》

カリスはワイルドスラッシュヤーとカリスアローを合わせ、輝きの中でカードを読み込ませた。

鷹の竜巻、シロクマの凍気、三葉虫が鉄、岩の亀が動き、毒草のプラントがネフィリムをその場に固定する。

《スピードII　スピードII　スピードIX　ダイヤIX　ダイヤIX　フルハウス》

ブレイドが四人に分裂し、鋭く研ぎ澄まされた剣が、ネフィリムを切り払う。

拘束ごと切り払い、うめき声をあげながらも火を噴く。

「しまったっ」

「いや……………」



「歌を束ねる、みんなの歌……………私なんかがおかしいけど」

「ばーか、おかしくねえよ」



「それよりさっさとするぞ、あのままじゃなんもやることなくさ」

そう言いながら全員が手を繋ぎ、歌を束ねながら、静かに前を向く。

「私らのやることは正しいか何かなんて分からない。ただ言えるのは、私達は正しいと思っただから、こうして手を取り、前に進むんだ」

そう、一真の姿を見ながら、

「未来ごめん、巻き込んだ……………」

「ううん、私が選んだんだよ響」

「……………私が守る」

そう強く握りしめ、

「一真達くれた明日を守るのは、私達なんだっ」

「その明日を、私達も守る」

「九人の絶唱……………」

「違う、そんなんじゃ足りない」

炎が迫る。一真が見てる。なら、

「七十億人、世界中の、絶唱オオオオオオオオオオオオ!!」

無数の光が、歌が沸き起こる。

「響き合うみんながくれた……………」



その時、炎が集まり出す。

「見ろっ」

「あれが司令さんが言っていた」

「ネフィリムと言う聖遺物のコアか」

それは再生し、ネフィリムとして姿を現す。

咆哮するそれに、調のアームドギアはロボットのようになり、切歌は巨大な鎌を振り下ろす。

だが、

「うああああああああ」

「ああああああああああ」

「二人ともっ」

「聖遺物どころか、そこから発生するエネルギーも食らっているのか」

「なら私の神獣鏡でっ」

「だめだ、その力で消し飛ばせば、いまここで高密度のエネルギーが爆発するっ。切り離されたもの以外に光を放つなっ」

一真の言葉に、未来は驚き、翼は顔を歪ませる。

「だがこのままエネルギーを放っておけば」

「地上が蒸発しちまうっ」

奏の言葉に、クリスはソロモンの杖を構え、

「バビロニア、フルオーブンだ!!」

ソロモンの杖から光が放たれ、ネフィリムの後ろへ空間の扉を開けだす。

「エクストライブの影響で、ソロモンの杖を機能拡張したのかっ」

「ゲートの向こう、バビロニアの宝庫にネフィリムを格納できれば」

「人を殺すこと以外、やってみせろよ。ソロモオオオオンウウウウウウウウ」

光が放たれると共に、一真が手を伸ばす。

「……………開け」

その時、黄金の輝きに鼓動し、空間にヒビが入り、ソロモンの杖も輝く。

「万能の力っ」

空間が開くが、その時、

「っ?! 避けろっ」

ギャレンの叫びは一手遅く、手で払うようにネフィリムがクリスを叩き落とし、ソロモンの杖が宇宙空間に舞う。

だがそれを掴み取るマリア。

「明日をおおおおおおおおお」

そして巨大な入口ができ、ネフィリムが手を伸ばし、触手を伸ばしてマリアを掴む。

「格納後、私が内部よりゲートを閉じるッ、ネフィリムは、わた」

「違うだろッ」

その時、重醒剣キンググラウザーで斬り込み、熱エネルギーが伝わらないように阻む。

「あなた、逃げなさいっ。私は」

「諦めるなッ」

そう叫び、片腕で抱き寄せる。

「例えあの空間に入っても、俺はあんたを救い出す。放しはしないっ、あんたを」

「！」

その時、

「「「「ふざけるなあああああああああああああ」」」」

何名かが叫びながら、まだ触手を伸ばすネフィリムを阻む装者。

「一真あああ、てめえええまた……………」

「やっぱ殺そう、うん殺そう……………」

「テメエ、ほいほいほいほい手えだしやがって」

三人はそう言いながら現れ、セレナ達も、

「姉さんずるいですっ、このままなんてさせませんからっ」

「デスッ」

「一人だけダメ」

そして翼は静かに睨み、未来はムウ〜と言う顔で、バビロニアの宝庫を睨む者はいない。

無数のノイズが蠢く空間に、全員がほぼ無視していた。

「……………剣崎、長い年月の中、妙なことに」

「……………大変だな」

「剣崎さん……………」

三人の仮面ライダーも呆れながら、ブレイドだけ困惑しながら、大剣を片手に触手を斬る。

響はそれにイライラしながら、叫ぶように拳の爪をとがらせた。

「英雄じゃない私でも、あれくらい壊し尽くせて見せるッ」



「フォニックゲイン、照射検測……………」

光に満ちる星、聞こえる歌声。それに、

「星が、音楽と成った……………」



「ウエイイイイイイイイ」

無数の場所に破壊し出す装者と仮面ライダーたち。

「マリア」

マリアを助け出した後、次は脱出。

「中から閉じ開けることもできるはず、マリア」

「ええっ」

開く扉、そこに向かって飛ぶ者達。

だがネフィリムが前に出るが、

「道を開けろおおおおお」

「最短で最速、この手をもう放さないっ!!」

『一直線にイイイイイイイイ』

装者の手が合わさり、巨大なアームドギアが生まれ、それと共に、外へと出ていく。



ネフィリムを貫くが、アームドギアが壊れ、倒れる装者達。その時、ソロモンの杖を一真が拾う。

「早くゲートを閉じな……………」

その時ハツとなる。

ネフィリムの身体の一部が、すでにゲートに手をかけている。

だが、

「始、橘さん、睦月っ」

「ああっ」

「分かった」

「はいッ」

三人が頷き合い、カードを取り出す。それによる、最強の一撃へと構える。

瞬間、四つの黄金と共に、彼らが四人は飛び上がり、ゲートへと向かって放たれていく。

「一真っ」

そしてゲートの中へと、放たれた……………





バラルの呪詛がまた世界を覆う。

どこかの砂浜、夕焼けを見つめる装者。

四人の装者は起こしたこともあり、二課の人達に連れていかれる少し前。

「……………一真」

一真達、仮面ライダーの姿はいない。

そう思いながら夕焼けを見ていた。

「彼のおかげで助かりましたね」

「「「ママっ」」」

四人の顔が晴れ、ナスターシャ教授も車いすがボロボロだが、どうにか帰ってこれたらしい。

「デスけど、どうやって」

「崩落し、ほぼ宇宙空間だったフロンティアから、彼が助けてくれました」

「……………かれ」

「……………緑の血を流しながら、私を助けてくれました」

それに全員が顔を見合わせる。

「彼は言いました、『あなたは生きていなければいけない。あの子達のためにも』と……リカバーでしたか、その光が私を包み、いまは身体が軽く、不思議なほど安定しています」

「あいつは……」

奏は呆れながら、またどこかに行った男を思う。

「今度こそ、今度は逃がさないぞ。一真ああああああああああ」  
少女の叫び、静かに海に響き渡った。



「……………響？」

青年は振り返る。だが誰もいない、いまは傷を癒すことにする。

だが……………

「……………もう反応は無いか」

三つのAのカードを見つめながら、静かに考え込む。

だが、もう気にせず、静かに歩き出す。

自分が選んだ明日を……



鎖に繋がれた二人がうなる。奏がまったく思いながら、

「まあ分からなくはないが、あたしだって探しに出ていきたいし」

「奏までそんなこと言わないで」

疲れた顔をする翼。二人はその様子に、

「自分だけまとも人間なフリするな汚物部屋先輩っ」

「そうだっ、自分だけ別の男のこと考えてるからっ」

それに二課はざわめいた。

「ち、なんの話だっ。か、奏か!? あの人は違うって何度も言ったじゃないかっ」

「悪い悪い♪」

そう言う中、未来だけがよく分からず、了子が、

「ああ、翼ちゃんね。大好きなお兄さんのペンダントだけ、大事に大事にしてるのよね」

あー青春♪ 剣とスペードのペンダントなんて、翼ちゃんらしくていいし」

「……………えっ」

目から光を消し、二人は翼を見つめた。

「な、なんだ二人ともっ」

「それってスペードから剣が繋がってる?」

「コートの方が持ってたとか言わないよな?」



響は暴走の為、いまはマリアさん達のいる施設へとクリスマス達と共にいるらしい。  
クリスマス達と……………」

◇

「彼はそのような人生を歩いたのですね……………」

「ああ」

風鳴弦十郎とナスターシャ教授、彼らの間で剣崎一真の情報を交換し合った。

ナスターシャ教授は片目や足は治せないものの、他の病気などは完治していると言っている。  
「いい。」

これも万能の力、勝利者の力なのだろうと弦十郎は頷く。

「彼にはマリア、セレナの件でも助けられたと言うのに、今回もまた助けられました。私の今後の人生、必ず罪の償いと、あの子たちの為に使おうと思います」

「それがいいでしょう」

「しかし、最後に現れた、あの戦士たちは……………」

一人は一真だが、ラウズカードを使う戦士は、もう一人しかいない。四人揃うことは

もうないはずだが、

「それについて了子くんの意見としては、ネフィリムの残滓を食らった剣崎一真くんの中で、神獣鏡とガングニールの光により活性化した結果、彼の中に眠る力が覚醒した。そう解釈している」

「過去の戦士の思いが、あの場に現れた……人の世は本当に」

思いと思いが奇跡を生んだ。そう思いながら思いはせている。

「ところで、あの子たちは……」

「ああ、いま了子くんに連絡してみましよう」



「くそつたれがッ、たかが一瞬の分際で一真を語るな!!」

「いいじゃないですかっ、一目惚れなんです!! こればかりは姉さんにも譲りません」

「アア、そうか全員ハチの巣になりたいんだなッ」

「こ、これだけ、これだけはゆゆ、ゆず」

「あはっ♪ 可愛がつてあげるよ調ちゃん」

「ま、負けない!!」



「絶対に負けないデスっ」

「やめるんだみんな、このままではすぐに出してもらえなくなるぞっ」

「どーしてこうなるのおおおおお」

「……………と言う訳で、弦十郎くん、少し来て」

『……………分かった』



「と言う訳で、翼さん以外、まだここにいるんだよ未来」

「一真さん、結局一真さんは、神獣鏡じゃ、どうにもできなかつたね」

牢屋の中での面会、未来は響と話しながら、少しだけため息をつく。

「一真の力は、魔やそれに類するもので無い為ってのが、了子さんの予想らしい。そりや  
そうか、世界のシステム、万能の力。人生を狂わせていても、そうじゃないってことだ  
ね」

「……………響」

少し考え込む響。未来は不安そうになる。

「安心して、別に人間やめる気は無いよ」

「えっ」

そう言われて、驚く未来。

響もまた驚く。

「あれ？ 私が一真と一緒に居たいから、人間やめるって考えてると思ったけど」

「それは……………そう言えば、不思議とそう考えないね」

「だね。ま、理由は分かるよ」

捨てたくて捨てたわけじゃない。それが剣崎一真なのだから……………

だから選ぼうとしないのだろう。そう考えながら、少しだけ寄りかかる。

「響……………」

「私は人間のまま、一真が、一真達がくれた明日を生きるよ。未来」

「……………うん、がんばろ、響」



「フイーネ、身体を維持したまま長寿になりたいんだけど、異端技術教えて」

「クリス、もう迷わないわね……………」

実は何人が聞きに来ているのだが、どうしたものかと頭を痛める。先史文明の巫女で

ある。



「ところで響、普段はなにしてるの?」

「うん? 調ちゃん抱き枕にして寝てる」

「……………えっ?」

調はその時間帯、謎の悪寒を感じたらしい。

「調ちゃんと……………一緒なの?」

「うん、かわいいよ調ちゃん」

「どうして?」

「ん?」

その時身を乗り出して顔を近づける未来。

響も首をかしげながら、未来を見る。気のせいか、瞳から光は無い。

「なんでなのかな? かな? なんで私じゃなくて調ちゃんと一緒なのかな響?」

「それは寝る時調ちゃんしか側にいないからだよ」

「……………どうすれば響とずっと一緒になれるんだろう……………」

「？」

帰り際、なぜか頭の中で神獣鏡の曲が鳴り響き、調ちゃんはずつと怯えていたと響は語る。

◇

「あー学園以外が独房とはこれいかに」

「しゃーねえーだろ、ちっ。これも全部一真がワリイんだ」

響とクリスは学園に着いてから、そう愚痴り合う。

そんな風に普通に過ごすのだが、

◇

おかしなことに気付く。

「なんか最近、生徒の視線が変な気がする」

「えっ、どんな風に？」

未来と共にお昼ご飯を食べている響。もぐもぐとご飯を食べながら、

「なんか嫌な視線じゃなくなつて、いつの間にか見てたり、私が気づくときやーつて、翼が振り向いたような声が……………つて、未来？ どしたの？」

「……………」

その後、色々調べた結果、響の人气が上がっている。これは学園祭での歌の効果で、喜ばしいが……………

「響が……………私の響が……………あれ？ 神獣鏡が無いのに、胸の内から歌が聞こえる？」  
ちなみにクリスも人気者になっています。



「独房で新年つて斬新だね」

「わざわざここで過ごすのね、ここは私達の家かしら……………」

響とクリスが遊びに来て、少しの間過ごすらしい。マリアは困惑しながら、調は響におっかなびつくりしている。

「まあここじゃなきや、一真探しに行きたいからな。長期休暇の予定どうする？」

「海外がいいな、刃物とか、護身用つて言つて持てる国を」

「なんか物凄く怖い話してるデスっ」

「あれくらい思考が無いと、恋は無理なのかな」

「二人ともあれは悪い見本よっ」

「けどマリア姉さんは恋人もなにもいない……………」

その日、妹からの残酷な一言でマリアは血を吐き、医務室へと連れていかれた。



「やっと落ち着きだしたね、姉さんは」

「私はこれから国連所属のエージェント扱いで、このままアーティストやることになるわ」

「……………ごめんね、姉さんにだけ、辛いこと押し付けて」

「別にいいわよ、みんなとの連絡は難しくなると思うけど、歌を歌うのは嫌いじゃない。なにより、この程度で私達がしたことは許されない」

「……………うん」

姉妹は色々と思うことがある。

今回のこと、初恋の相手のこと。

「剣崎一真さん、か……………マリア姉さん、私ね、時間が空いたら、あの人を探そうと思う

の

「セレナ……………」

「あの人と私達人間が過ぐす時間は違う……………それだけで諦められないもん」

そう頬を朱く染めて、静かに告げる。

マリアは静かに聞きながら、静かに、

「そうね……………そう簡単に割り切れないわ、いまさら……………」

そう、呟くマリアに、セレナは……………

◇

「مامツ、やっぱりマリア姉さんもあの人のこと好きだったああああああ。さ  
んっざんツ、違うって言ったのにいいいい」

「セレナアアアアアアアアア、嫌わないで、ゼデナアアアアアアアアア」

『……………二人とも、ともかく泣くのはやめなさい……………』

◇

「……………あの優しいお兄さんが、二人の初恋の相手なんだね切ちゃん」

「デス……………私達はどうぞでしょうか？　好き、なんででしょうか」

つい勢いで好きだ組に入り込んでいるが、実際どうだろうか？

自分達にとって、姉のような二人と、ママを救った恩人。そして、優しくしてくれた人。

「……………少なくとも、切ちゃんやマリア達みたいに、大事な人って答えられるね」

「デス、私もデス。なら」

「うん。好きな組でいいね」

そう微笑み合っていると……………

「そう……………敵……………なんだね調ちゃん……………」

その日、調達はセレナの布団にダイブした。



（あの人に届いてほしい、ママや姉さんだけじゃなく、私達を止めてくれたあの人に、私の思い……………）



◇

（あの人のおかげで、私は大きな間違いをせずにすんだ……ちゃんと会いたい。届いてほしい、私の願い、私の歌を）

◇

（今度はちゃんと）

（お話したい……届いてほしいです。私達の想い）

◇

「一真のバカ一真のバカ一真のバカ一真のバカ——」

◇

「一真を傷つけていいのは私だけ一真を傷つけていいのは私だけ一真を——」







「翼は卒業後、海外デビューか」

「ああ」

「まさかと思うが、一真を探す、なんて言わないよな」

「言わない、と言えば嘘になる。だが無理には探さない、私には私の、挑むべき戦いがあるから」

そう言いながら、奏と共に話し合う。

「そう、か……………あたしは日本で頑張るさ」

「ああ、お互い頑張ろう」

「……………とりあえず」

奏は周りを見渡す。

無数の着替え、飲み物、ゴミや雑誌。

ゴミにあふれかえった部屋を……………

「翼、あたしは別の意味で、不安で胸いっぱいだよ」

「……………ごめんささい」

「……………そろそろ私らは出られるね」

「ああ」

クリスと話しながら、部屋の中で同じ部屋なのは幸いだ。

「ここから出たら、お前どうする？」

「学校以外でやっと出られるから、やることは一つ」

「ああ」

そう……………

「先輩から一真のペンダントを奪い取る」

二人は固く握手した。



「……………あれ？」

ここに置いてあった、剣崎さんに返す大切なペンダントが無い。

なんてことだ。ついに私はしてはいけないことをしてしまったのか……

「私は、わた………ん」

ペンダントが仕舞われた箱の中に、一つの紙。

私はそれを取り、見てみると、

『あたしが預かる。奏』

「かくな〜でええ〜」

◇

どこかの街並みで、歌を聴く。そんな中、

「……………」

ふと、己の胸に触れる。

(神獣鏡、ガングニール……いや、響と未来ちゃんの光か)

かつての仲間達、それに思いをはせながら、静かに前を、空を見る。

◇

「剣崎……………」

「始、みんな……………」

「もう時間だ……………忘れるな剣崎、俺達はある。お前と共に……………」



もうネフィリムの残滓も、なにもない。

あるのは彼らのカードと、その力だけだ。

だが……………」

「始、橘さん、睦月……………」

きつと、他のみんなもいるのだろうか……………」

「行くか……………」

そうして、歩き出す。また戦うために……………」

## ワイルドカード・暗黒面

俺の名前は剣崎一真。大昔の力、ラウズカードの適合者であり、仮面ライダーブレイドに変身できる、フリーターだ。

学校は行っていない。親の都合で世界中を飛び回りすぎていたから、通信教育で行った方が早いため、そっちばかりである。

俺は仮面ライダーブレイドに選ばれたのは早い時期であり、その力でノイズと静かに戦う。

そして……

「ん……………」

「起きた一真？ いま朝食作ってるから」

「響……………」

響。コンサート事件の被害者、風評被害で心が傷だらけになった子だ。

俺が助けたときも、死にたかったのにとかすらも無く、もうなにかも投げ出していたため、家族のもとにも帰せず、一人暮らしの俺の家に置く。サラバツテニヤイヨっ!!

これでも昔は酷く、親がいない我が家の使つて無い部屋を使わせているが、時々布団



の中に入って来たりして大変だった……………

子猫のような子だが、こうして元気になってよかった。

「かゝずくまぐ飯」

「ああ」

そして響が作った朝食を食べる。

いまは平和だ……………

◇

「ねえ一真、今日はなにをするのかな？かな？」

そう、眼から光が無く、漆黒の闇で話しかけて来る……………

洋食の朝食、ベーコンや目玉焼きを食べながら、軽い会話だ。

まずい、今日はセレナにお願いされて、買い物に付き合うのだ。気づかれるわけには

いかない。

「キョウナイヨ」

よし。

「……………」

響はそれを聞き、静かに、

「嘘だツ!!」

「っ!?!」

そう言っつて持っていたフォークを握りしめながら、いつ掴みかかってもおかしくない様子で、

「一真は私だけに優しくしてほしいって何度言えば分かるのかな? かな? なんて他の人まで優しくするのはツ!! まあそれが一真の良いところで好きなのかな? かな? なんて私のお願いを分かってくれないの? ねえどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして……」

説得にかなり時間がかかりながら、響は俺に依存している。

俺のせいであるのだから、最後まで責任を取るが……

俺は生きていられるだろうか? 頑張ろう。

◇

「一真さん」

セレナと待ち合わせの場所に来る。

セレナは俺がまだブレイドの力が制御できないとき、たまたま助ける形で助けた子だ。

本人はそれを知っている。けれど、それでも恩を抱いてくれるいい子であり、時々こうして会っている。会わないと大変だから。

理由はママことナスターシャ教授のこと、姉の行き遅れそうなどこなど、色々重い愚痴である。聞いてあげられるのが俺しかないのだから仕方ない。

「あつ、一真さんお昼どうしますか？」

「お昼？ その辺で食べるつもりだけど」

「よかったらお弁当作ったので、味見お願いしていいですか？」

「ウエイ？ いいけど」

時折、セレナが調ちやんたちのために作る料理の味見をお願いする。

時々心配になる。いつもゆびに傷ができていて、心配になる。不器用だな…………

「うん、うまい♪ セレナはいつか、良いお嫁さんになるよ」

「あうあう〜恥ずかしいですよもう♪」

そう顔を赤くして、俺が食べているのをジッと見ていた。

「なにか隠し味みたいなものあるの？」

「はいっ、色々入れてますよ」

そう微笑みながら、俺を見ている……………

◇

今日も全部食べてくれた。

あの人が口にするたび、身体が震える……………

一口一口、あの人の中に入る。

私のいろいろな……………

この人と私は結ばれる運命なんです。

だって偶然にも私の危機に現れ、そしてまた現れるなんてこれを運命と言わずなんて言いますか？

これは運命なんです、一真さんは私のナイトなんです。

色々な人が一真さんの優しさに勘違いしてます。ですが本当は私と結ばれるのが正しいんです。

いまは一真さんを自由にしてます。ですけどいずれ……

ふふ……ふふ……

待っていてくださいね、一真さん♪

◇

「おお、一真」

「奏か」

そう言い、サングラスに素顔を隠す天羽奏。

色々な事件の後はボランティア活動メインで、アーティスト活動している。

「奇遇だな、こんなところで会うなんて。少し散歩付き合えよ」

そう言ってフレンドリーに接してくる奏。仲が良く、時折暴走を止めるのにも手を貸してくれて助かる関係だ。

いまも首に手を回している。少し異性なんだから、フレンドリー過ぎる気がするが

……

「別にいいけど、荷物持ちは勘弁してくれよ」

「え〜どうしようかね」

そう言えば、よく奏とは会うんだよな。ナジエジャロ？

◇

一真……………

あたしは一真と別れた後、すぐに家に戻ってコレクションを見渡す。

一真の写真、一真の捨てた物、一真の服。

捨てたんだからあたしがもらっても問題ない、髪の毛も気づいていないんだから問題ない。今日の方もちゃんと管理しないと……………

服だってそろそろ捨てる物をあたしがもらったただけだ。捨てておくと云ったが、これもあたしが好きにしているもんな一真？

「一真の写真、今日も増えた……………」

一真は戦闘なんかじゃ隙は無いけど、少しでも親しくなるとこうも緩いんじや、心配になるな。まったく……………

「そう言えばまた響達の話か」

少しばかり嫉妬してしまうが、可愛い後輩なんだから我慢しないとな。

なにより一真は私を頼ってくれている。後輩達のおかげで、一真は私を信頼している

んだから、少しくらいはいいだろう。

私は見ているぞ。

ずっと、ずつつつつとな………

◇

「すいません、いつも手伝ってもらって」

「いいよ、気にしないで」

翼ちゃんの部屋の掃除、翼ちゃんとは昔、偶然出会っていた中である。

「いつもいつも、申し訳ない」

そう言いながら、翼ちゃんはいつの間にか俺を頼るようになった。

だがこのままじゃ問題だな。

翼ちゃんはアーティスト。俺が毎度部屋に来るのは問題だもんな

そう俺は考えていた。

◇

カチャカチャと、私はパソコンを操作する。

風鳴翼に男の影っ!?

これでいい、後は緒川さんに気づかれずに、この噂を大きくすればいいだけだ。  
私もいい歳、問題ないし、こういつたことがあっても問題ない。

「ああ……………」

剣崎さん。これを知ったらどんな顔をするんだろうか？

困った顔？ 困惑する？ 迷惑？

可愛いな剣崎さん、困った剣崎さんは私だけのお兄ちゃんだ。

「はーやくおーきくなーあつれ♪」

そう言いながら、私は静かに、待つことにした……………



「……………クリス」

いつものようにクリスがいた。

クリスもまた、俺が完全にブレイドの力を制御できないとき助けたようなものだが、結局助けたか分からない。



この子の親、大切な家族を助けられなかった。

しばらく保護された場所と近く、何度も付き合うようになり、なぜか……

「一真、一真は私を捨てるのか？」

なぜか誤解を生むような言い方をする。

出会った頃はこうじゃなかった。なのに、いつしか俺が別の人と一緒に居ると、このように誤解を生むようなことを言う。

「待てクリス」

「一真が捨てるのか私を捨てるのか捨てないよな一真一真はそんなことしないようにもんな私のこと大事だつて言つたもんなそれならうん違う先輩が悪いんだな部屋を片付けられない先輩が悪いんだなうんそうだ——」

どうも翼の部屋を片付けたときの話をしているようだ。

翼もまた、小さい頃出会った関係で、部屋を掃除したりする。

そう言えば、年頃なんだから、男の前で薄着はどうなんだろうね。いつも言うのに、気にするなつて……

「私と話してるときに他の女の子と考えんなッ」

ナジャココロガ!?

「お前だから分かるんだよッ」

マジヤ!?!

「一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真——」

その時、刃物を取り出すクリス。

その瞳に光は無く、静かに目を見開きながら近づく。

「一真が私のだ………みんなそれが分からないのなら、やっぱり」

「なににする気っ!?!」

「名前を書くんだよ!! 自分の物には名前を書くって、ママが言ってたもんっ」

その時、クリスの両腕が気になった。

なんで赤い染みがついた包帯を巻いてるの？

「……………クリス？」

「あつ? ああ……………書いたよ」

そして包帯を取ると、そこには剣崎一真と書かれた……………

一つじゃなく、書けるだけ書きまくった血の文字の自分の名前がクリスの腕にびっし

りと……………」

「クリスっ、なに考えて」

「私だつて一真のものだもん、名前書かなきゃっ」

当たり前な事のように、クリスは無邪気な笑顔で答えた。

血は流れるが、それを舐める。

「痛くないのかよー！」

「一真に同じ痛みを与えるんだ♪ 一真と同じ……………一真と……………んっ♪♪」

なにか身をよじらせて、高揚している。

息が荒く、頬を赤く染めて、よく見れば血の染みが付いていた。

「い、急いで了子さんに連絡しないと」

「その前にお前に名前書くんだよッ」

刃先を向けて、突き刺して来る。

それを避けて、ただ逃げるために走り出す。

走る中、あることを思いだす。

ラウズカードのリカバーを使えば消えるだろうけど、

「消えても何度も書く、何度も何度も何度も何度も何度も何度だつて書くのッ!! 一真に私の

名前、ずっと書く……………いいなそれ、うんッ。すごくいいな!!」

走りながら追いかけて来る。クリスは片手に彫刻刀を持ち、走る。

「背中にううん一真に分かるように腹に書こうッ。一真に字を、私の名前を、私を刻むの！ 私の名前、私を刻む。一真に、一真ああああ」

甘えるような声を出して、俺を追うクリス。

いつからこんな関係になったんだろう、どこで間違えたんだろう。

俺は走りながら了子さんたちに連絡しておく。

クリスの傷はこれで傷があつたと思えなくなるほど、綺麗になるだろうけど…………

「逃げるな一真っ!! 私を、忘れられないくらいに、いつつつつっばい♪ 刻むんだからね♪♪」

そう満面の笑みで、無邪気な子供のように言えるクリス。

クリスに刻まれた俺の名前は、本当に消えるのか不安でいっぱいだ…………



「一真逃げないでッ」

俺はいまマリアから逃げている。

クリスは弦十郎司令に取り押さえられ、逃げている時に、出会ってしまった。

「名前を書くだけでいいのツ。この婚姻届にツ!!」

ジャズケデ。

「マリアそう言うのは」

「貴方しかいないのツ、もうあなた以外にいない。これを逃せばもう後が無いのツ」  
そう言って向かってくるマリアから逃げる日々……………

◇

「はあ」

「大丈夫?」

「マリアは仕方ないのデス、一真のことを考えて欲しいのデスよ」

そう言って、唯一普通に接する二人。切歌と調。

マリアから逃げてしていると、二人と出会い、二人のおかげでマリアを撒けた。

いまは二人が住まう部屋に匿ってもらい、静かに過ごしている。

この二人は、まあ普通だ。

色々フオローしなくて済むし、依存もしていない。

すごくホツとする……………



『私達と一緒に居て、ホツとしている一真』

『先輩らより、私達の方がいいのデス』

「これでいいね切ちゃん」

調は部屋に仕掛けているカメラから抜擢した一枚を取り出し、携帯に移す。

一真はもういない。落ち着きを取り戻して、部屋を出て行った。

一真が座っていた座布団などは、後で二人でおいを嗅ぐ。

一真が飲み残したコーヒーは、後で二人で飲む。

その前に、一真が自分達と一緒に居て安心しているこの映像を、流さなければいけない。

「はいデス調♪ 先輩たち、これを見てどう思うんデスカね？」

「さあ？ いい加減、一真さんは、私達の一真さんだつて気づくんじやないかな？」

「デス、一真は私達といるのが幸せなんデス。これを見て、気付くと言ひデス」

「そうだね切ちゃん」

「そうデス調」

二人は頬を赤く染めて、静かに微笑み合う。その瞳に光が無いが、それでも狂気と言う光を宿しながら、二人で一人の男を分かち合う。

そうして写真がラインにあげられた。

◇

「響、どうしたの？」

私が、たまたま、外を歩いていたら、たまたま、大切な親友と出会った。

「未来、一真を探してるの。一真がまた浮気してるの、探して分かせないといけないの。どこにいるか知らないかな？かな？」

「一真さんなら海辺付近のところに、走ってるのを見たよ」

「ありがとう未来っ、大好きっ」

そう言つて、私の親友は走る。

姿が見えなくなつた後、私は先ほどの言葉を繰り返す。

「大好き………響が、私の事、大好き………大好き………んっ」

親友は私の知らない間、辛い目に遭つていた。

だからか、そこから助け出した一真さんしか見ていない。





どうしてこうなったんだろう。

海辺の人気の無い倉庫が並び立つ場所に、しばらく時間を潰そうとしたはず。寒いのを我慢していたら……

「響……………」

「……………どうして」

目から光が無くなり、拳だけだが、それでも怖い。

周りに人の気配は無く、町から自分たち以外誰もいなくなったように思える。

「ねえどうして？ どうしてなのかな？ かな？ どうして一真は私を見ないのかな？ かな？」

「ひび」

「どうしてッ！」

そして静かに血走った目で、ドンツとぶつかる。

その時、腹から何かが流れた。

「ひ、びき……」

「あああつたかいなあ……………一真はやっぱり、あたたかいよ……………」

そうやって満足そうにしている響の手の中に、光り輝くなにかがあった。  
「ひび、きゅー」

そのまま馬乗りになり、上着を脱ぐ響。

赤い血を肌塗りに塗りながら、静かに、

「かずまああ……………わたし、一真の子供が欲しい♪」

「ひび」

「えへへ……………えへへ……………かずまーのこーどーもー♪」

そう言いながら、子供のように歌う。

笑顔の顔で、ナイフを片手に、俺に……………



「……………ん……………ゆめ？」

私の名前は剣崎響。

いま、布団から身体を起こし、周りを見る。

「一真の夢……………他の人も出て来たけど、一真の……………」

変わらない部屋、だけど僅かに感じた一真と言う存在。

「……………だいぶあれだったな」

だけど、

「うん、いい夢」

一真のあたたかさが感じた、あのあたたかい血。一真のあたたかさ……………

「他はともかく、もう一回見よ」

そう思い、時間を確認して私は眠りにつく。

ただ願うは、先ほどの夢の続き。

そして他はいらない。私だけの一真、私だけいればいい。

だけど……………

(未来の反応はなんなんだろうね……………)

そして私は静かに眠りについた。



響? 私はここにいる……………

あなたのそばに、ずっと、ずっと……………

ふふ……………ふふふふふふ、ふつふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

.....

ほら、ふりかえって.....

そこに、あなたのとなりに.....

「わたしがいるから.....ね♪」

ふっふっふっふっふっふ.....

# 戦姫絶唱シンフォギア／ブレイドツ!!GX 始まりの1枚・裏側から始まる

一人の男が新聞を見る。

フロンティア事変の後、二課は国連直轄の超常災害対策機動タクスフォース『S.O.N.G.』になる。

「超常災害……過去の歴史、異端技術並び、ロストテクノロジー……オーバーツ」  
色々なことが久しぶりに凝縮された日々だ。

星空の下、それに思い耽る。シャトルを助けるために山壊すのは、響達らしい。粉々に破壊しなかったが、大きな穴を開くとは……

その為か、色々思うことがあり、僅かに目を閉じ、記憶に耽る。  
過去の記憶、その中……

◇

「……………また君か」

放たれる風を弾く。

姿は変わる。始まりのジョーカーと言えば良い姿。対峙するのは、小さな少女。本当に小さな少女だ。

「なにか不愉快なことを思っていないか？」

【色々小さいなと思っただけだ】

火や風、水やエネルギー波が放たれる。

マンティスを取り出し、エネルギー波で纏めて吹き飛ばす。

「相も変わらぬの高エネルギーか」

静かに構える、三角帽子の小さな少女。

彼女は錬金術師。

「怪物、悪いがお前はオレがいたたくつ。このまま俺の所に来てもらおうか!! お前はオレのものだッ」

そのやり取りは何年続いたか。

ともかく、彼女から行方をくまますために裏技のようなものを使用した。

全く異なる世界、平行世界に出向いたりしたおかげで、彼女から逃げられる。だが出会うたび、攻撃が過激になった。



「……………あの子は元気にしてるだろうか？」

そう呟く。

もしかすれば自分はあの子にも依存させていたのかもしれない。

一人であると言う事実から目を背けるために……………

そう考え込んでいると、

「……………来たか」

ここはとある海にある、古代の遺跡。その海の遺跡でそれが現れる。

「……………お前か、俺の本能を呼び起こすのは」

それは海の魔物と現地の人達に呼ばれる、現代科学を超えたなにか。

「目的の物でないにしても」

静かに姿を変化させ、勝利者として、駆けだす。

【お前を封印するっ】

その瞬間、爆発が辺りを包む……………



## 《ワイルド》

ワイルドカリスにてワイルドサイクロンで撃ち抜き、機能を停止させた。

「……………どうしても目的の物が見つからない」

だがこれも異端技術であり、人が持つには早い力。それを自分の中に封印して、周りを見る。

戦い、立つのは決まって不死なる勝利者。

姿を元に戻し、その場から立ち去ろうと、

【そんなことをしてなにがあるんだい？】

誰かの声を聴き、身体の中の力が騒ぎ出す。

その場に膝を突き、頭を押さえた。

【意味なんて無い、どれほど力を封印して、消し続けても、世界は力を創造する】

「……………黙れ」

【君は見えていないだけさ、まあいい。じゃ、君が世界をメチャクチャにするのを待つよ】  
そして声が消え、静かに深呼吸をする。



全身から汗を流しながら、その場を後にした……………

◇

外に出て空を見つめ、静かに別のことを考え出す。

「……………そう言えば、あの子に会ったのは、こんなものを倒し回っていたときか」  
そう呟きながら思い、銛と遺跡を封印したのを確認して立ち去る。

目当ての物は見つからず、だが分かる……………

(ここ最近、ここいつがざわめく……………欠片が目覚めようとしているのか……………急ぐか)  
そう思いながら、バイクに乗りその場を後にした。

◇

「はあ、じゃんけんに負けたとはいえ、私の家か」

「お邪魔するデスっ」

調が少し怯えながら、現在響が住まう部屋に、リディアンの三人の友達、未来。

装者のクリス、リディアンに通う切歌と調が集まり、マリアと翼の海外コンサート

生中継を見ることになった。

「奏やセレナは向こう？」

「そうデース」

「向こうで応援だそうです」

お菓子やジュースを出しながら、リビングに集まり、コンサートを待つ一向。

全員が集まり、コンサートをしながら、それが多くの人達に映るものと思うと、考える。



「一真も、どこかで聞いているのか」

「……………だといいな」

私の一言に、クリスも同意する。

コンサートの大舞台は大成功の中、その映像を見て思う。

彼奴はいつも一人だ。これから先もだ。

たまにだけでいいから、平和な時があってもいい。そう思えば、翼達が羨ましい。

「組織が世界規模になっても、一真の姿形は見えないし……………だからと言って、何もして

いないってのも考えられない」

「まあな」

「私も……………一真さんと、ちゃんとお話したいです」

「私もデスっ」

後輩二人はお話ししているのを見る。まあ、許してやろうそれくらい。

そう考え込んでいると、通信が入る。

◇

「……………」

いまマリアは国連の監視下で歌を歌う。

手元に分離したシンフォギア、アガートラムは無い。それはS・O・N・Gに預けている。

「そんなあなたはどうか抗うのかしら?」

「あなた、何者?」

突如人形の一体が動き出し、エージェントを殺害し、刃を向ける緑の人形。

「あなたを殺そうとすれば、マスターが欲する者は現れるかしら?」

そして一陣の風が巻き起こる。



「踊れ、踊らされるがままに」

無数のコインが弾丸のように放たれ、一人の黒いローブを着込む子供が逃げる。

それを見下ろし、燃え盛る炎を見つめる少女。

そちらを見ず、火を見つめていたとき……

【フオオオオオオオオオオオ】

その雄たけびの中、それらが現れた。

少女はそれを見て口元を釣り上げる。思わず、長年探していたものが現れるのだから

……

「アンデッド、世界創造の、万能の力っ」

そして少女は捕獲の為、火より現れ、人を助けていたアンデッドへ牙を向けた。



聖遺物、ギアがない事態での戦闘。危険な瞬間に駆け付ける。

「翼っ」

マリアが剣に刺されかけたとき、ギアを纏う翼が防ぎ、槍と銀の刃が交差した。

「マリア姉さんっ」

「平気かマリア」

それに距離を取り。ステップを踏むようにタンつと音を立て、剣を構えるのは、  
「残念ながら、あなたにはナイトが現れないようですね」

「なにを………狙いは一真なの」

そう怪訝しながら、静かに刃を構える。

「貴様は何者だっ」

「オートスコアラ………装者の皆さんもお待ちしていました」



「カードになり消えた………奴ではないか」

そう言い、どうしてもアンデッドを手にするには本体を捕獲しなければいけない。  
倒したところでしばしの間動かなくなるだけで、本体がいればその状態でも動く。

何かで捕獲してもカードになり、どこかへと消える。

いまま倒したと言うより、本体がもういいと判断して戻したのだろう。

「ちっ……………」

軽く舌打ちし、そうした手で何度撒かれたか分からない。

だが逆に言えば、本体は近くにいる。それを思えば口元がつり上がる。

そんな中でその思いと共に、炎を見た。

思い出の中の記憶が混同しながら、オレは炎を見る。

そう思っていると、

◇

敵がいた。

そう思った瞬間、手が出ていた。

「くっ」

「……………」

謎のローブを着込む子供。泣きそうな顔のガキがいたが、僅かに、そう僅かに敵と認

識できたから攻撃した。

だがどうだ？ バリアーのようなもので拳を防がれ、その場から距離を取る。

「貴様、シンフォギア装者……………響」

「……………念のために聞くが、お前がこれの原因か、ガキ」

「貴様はそう確信して攻撃したんじゃないのか？ 聞いてた以上に好戦的だ」

そう言いながら、静かに手を掲げる。

「キャロル・マールス・ティーンハイム。錬金術が、世界を壊し、万象黙示録を完成させる」

「世界を壊す……………」

「俺が奇跡を壊し、一真を手に入れると言っている」

その瞬間、爆発するように黒を纏う。

【お前いまなんて言った？】

暴走状態なのに、喋り方に変化が無い。なにより壊したいと言う衝動が落ち着いてい  
る。

だいぶこの姿に慣れたな。いまはそれはどうでもいいが……………

ガキはふんと鼻で笑いながら、静かに、

「聞こえなかったのか？ 一真はオレの物であり、所有物だ。血の一滴から何もかもオ  
レの物だ。貴様らに、オレと一真の間に一ミリも入り込む隙間は無い。そうそうに諦め

ろ」

得意げに、当たり前のようにそう言う。

【よし殺そう】

「やれるものならやってみろ獣が」

◇

ボクはやらなければいけないことがある。

キャロルの計画を止めなければいけない、この聖遺物。ドヴェルグダインの遺産を届けなければいけない。

キャロルの追手から逃げる最中、ボクはこの人と出会った。

「あな、たは……………」

暗闇の中、その人は、

「君の……………敵だ」

そうボクに告げたその人は、キャロルの知識の中にある。森羅万象の力を手に入れた人類。

剣崎一真さんだった……………





【ふふふつ——】

それは不敵に笑う。

【気を付けなよ………封印したつもりで僕に支配されないように………ふふふつ】  
それが頭の中でこだまする………

## 第2枚・救いの手と滅びの手

火事災害の中、私はへりを下りて、火災マンションの救助活動は響がほとんど片付けたらしい。

私はその原因くらい見つけねえといけない。そう思った時、

「!?」

アンデッド、カテゴリー2が現れ、コインを弾いていた。

だが無数にある弾丸のようなそれに、ついに倒れる。

「アンデッドっ、それに」

下級アンデッドは倒れた所為で、カードに戻り、どこかに消える。

この現象は知っている。

あまりにもダメージを負い過ぎて自己再生よりも、大本である一真の下に戻った方が治りがより早いためだ。

所詮いまのアンデッドは、本来の不死身の戦士ではない。その器や能力を持った人形。

急いでアンデッドが現れ、倒れたところを目指すと、

【ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！】

「なかなか派手な男、話に聞いていた通りか」

始まりのジョーカーで戦う一真が、コインを弾き、撃ち貫く人の姿をしたなにかと戦っていた。

「一真ああああああああああああああああああ！」

とりあえず一真ごと殺るツ！！

私はイチイバルを纏って、辺り一帯に鉛玉のオンパレードをお見舞いした。



「一真一真一真一真ツ、アアアアアアアアアアアアアアアアアア——！！」

俺の名前を連呼しながら、イチイバルの歌を歌うクリス。

人形、確かオートスコアラーと言うそれごと、俺を撃つつもりらしい。

【厄介な……………】

そう思いながら青のジョーカーになる。

青のジョーカーは完全にイレギュラーにより生まれた、俺自身の姿。人間の特性と言  
うべきか、アンデッドの武器を呼び出し使用できる。



「それはこつちだッ、一真はオレの物だあああああああああああ！」

爆発し、道路はアスファルトが吹き飛び、人がいたら大災害レベルで争っていた。

「もー嫌ですよーヤンデレ同士の争いわー」

「【違うわああああああああああああああああ!!】」

青色の、何者かが現れ、距離を取る二人。

「ちっ、ガリイのぞき見か。性根の腐ったガリイらしい」

「やめてくださいよーそういうふうにしたのはマスターじゃないですか」

そんなやり取りの中、渋々と話し合い。そして小瓶を取り出す。

「次は決着を付ける、一真の全てはオレの物だ。今度は殺す」

【フザケルナアアアアアアアアアアアアアアアアアア】

爆発して向かうが、飛び出した瞬間、左右に何かの紋章か、魔法陣のようなものが現れた。

【チイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ】

「ハッ、獣は単純で助かる」

その瞬間、爆発が起きる中で、相手が消えるのを見ることしかできない。

防御したが瓦礫が邪魔で、すぐに動けない。

【アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——】

闇を纏う片腕を瓦礫の山から出し、地面を引つかきながら少しずつ這い出る。ともかく今度会ったら討つぞあのガキツ。



会場の一角を爆発させ、その隙に翼の手を握り、皆と外へと逃走する。

途中で緒川に助けられ、いまは不満そうな翼達の顔を見た。

車を運転しながら、私はセレナと奏を見る。

「姉さん、どうして逃走を？」

「あのオートスコアラーというものの狙いは、一真と装者。少なくともここじゃ翼を初めとした貴方達よ」

あれと戦っている時、人の姿をした異形の物だと感じ取った。実際そうだ。

剣と風を振りながら迫るそれ。被害を最小限にするのに人から離れるべきと判断したと聞くと落ち着いて話をする。

その時、翼のマネージャーから連絡が入るが、

「マリア前っ」

奏の声に急いで身体を反らす。ギリギリ斬られなかったが、車は斬られた。

車は両断され、翼とセレナは再度ギアを纏う。ギアを纏えないのは、私と奏。

セレナが私達を抱え、翼が斬りかかり、距離を取った瞬間、何かをばらまく。

そして私達は、

「あれはっ」

「なんでノイズが現れるっ」

ノイズ。バビロニアの宝庫で全て消し飛んだはずのそれが現れ、私達は驚愕する。

「ちっ、ならまた」

「ダメです奏さんっ、またリンカー無しにギアを纏うのは」

「チッ！」

奏は静止されてペンダントを握りしめたまま、戦いを見る。

向こうはセレナと翼の視線が交差する。おそらく私達の保護をセレナに任せるかの

アイコンタクトだろう。

もしも私達の前にあるのがノイズなら、私達は足手まといだ。

◇

「なっ、先輩たちここでノイズで、響からの連絡無しだどっ?!」

どうなつてやがるツ。今さっき錬金術と言うものを使うのが、私が保護した奴から聞いた。

もし襲撃してる奴と、一真が対峙していたのが同じなら、錬金術はノイズまで操るのか。

それを報告しながら、現状連絡を受けて驚く。あれは全部熱蒸発したと思ったのに。そう思っている時だった……………

「！ クリスさんっ」

助け出した奴、名前はエルフナインが私の後ろに下がる。

「敵かッ」

そして銃を構え、静かに暗闇の中を見たとき……………

「！ 一真っ」

「……………」

一真が静かに現れ、エルフナインは後ろに下がる。

なんだ？ エルフナインの前でジョーカーに……………

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——」

手に武器を出現させ、青のジョーカーが迫る。

それに慌てて構えた銃口が火を噴くが、全ての弾丸はジョーカーの鎧に阻まれなが



ら、劍が振り下ろされる。

「一真つ、アンデッドの暴走じゃねえよなおいッ」

【悪いが、いまの俺はお前の敵だ!!】

攻撃をかわしながら、オッサンから仕入れた接近戦の銃撃戦をして、一真の攻撃を捌くと共に、エルフナインを担いで逃げる。

攻撃を防ぐことも躲すこともせず、全てを受けながら傷はすぐに癒えて、私を追って来るのは、不死身の勝利者。

「くそがッ!! ぜんっぜん嬉しくねえええええ」

ともかく、まさか一真から逃げることになりながら、逃走劇が始まる。



「くっそおおおおおおおおお」

《リモート》

無数のアンデッド達が現れ、弾丸を撃ちこむが、鉛玉がこいつらには効かない。

正確に言えば、効いても意味が無いんだ。

傷を負っても無視でき、生命活動の停止が無い以上、封印以外には倒せない。

さっきのように一定のダメージで、解放状態で傷を癒すより優先的にカードに戻ったり、一真の下に戻るほどのダメージを負う。

いまのアンデッドはそれしか対処方法は無いが……

一真は違う、違うんだ。本当に不死身の戦士なんだ。

何十、何百の弾丸を受けながら、突進してくる。

「一真、どうして」

「その子を渡せ」

殺す。

【な、なんで無言で正確なヘッドショット!?】

一回殺した。

「テメエエエ、しばらく見ないうちに、ガキに手エ出すのか」

【なんの話だっ!?!】

だから後輩にも手を出したのか。合点がいった。

特に調だなっ。彼奴が一番好感度高そうだし、納得だッ。

背の小ささじゃ私だって……

「殺すッ」

ともかくでかいの、威力マシマシでぶっ放すしかない。

ミサイルを撃ち放ち、辺りの被害は一真がかばうだろう。だから撃つ。案の定、周りの被害を考慮してか、不死性だからか避けずに命中する。黒煙が舞う。これなら……………

「ともかく、これで止まるっ。いまはそれだけにしといてや」

《チエンジ》

炎、風、雷、氷の嵐が吹き荒れ、バニティアンデッドが姿を表す。

肩のコイン状の盾が回転しながら、銀の不死身が現れた。

「なん、でだ……………んなに、こいつが欲しいのかッ」

「なんの話だ……………俺はその子の持つ、ダインスレイフをもらっただけだ」

「ダインスレイフ？」

「だ、ダメですつ。それだけではできません!!」

そうエルフナインが叫ぶが、一真は静かにスパードの剣、クラブのメイスを取り出す。

本気だ。

「……………一真」

【その聖遺物だけは世には出させないッ、それは俺が封印する!!】



れば、プロジェクトイグナイト。ボクの償い、そしてキャロルを止めるために必要不可欠。

ボクは何重にも封印した箱を抱きしめ、彼を見る。

ケンタウロスと呼ぶにもおかしなほど、足が四足、いえ六足になっている。まるでスレイプニルのようにであり、全て獣の足を持ち大地を駆けながら、迫ってくる。

「！ チイイイイ」

突如舌打ちし、ブレーキを掛けながら地面を砕き、ボクらに腕を伸ばす。

瞬間、眼を閉じたから分かりました。無数の金属音が響き渡り、ボクは目を開けるとボクらは守られていました。

「えっ……………」

「やはり貴様は派手だ勝利者」

そうディーラーのような姿のレイアがいて、無数のアルカノイズが向かって来ます。

それに気づくと、ボクらを掴む腕がボクらを遠くへと投げ、レイアへと向かっていきます。

【ガアアアアアアアアアア】

「胸が口とはやはり派手だッ」

ボクらにはアルカノイズが迫り、クリスさんはボクを遠くに投げ、すぐに応戦。

「ダメですっ」

そうダメです、アルカノイズには、



「なっ」

「!?」

突如、私のギアが解け、勝手に素っ裸にさらされた。

「なんでギアが、つて一真見るなああああ！」

み、見られた。一真に……………



つて言ってられないかッ。

【変身ッ】

いくつかのノイズを食らい、すぐにベルトを変化させた。

『ターンアップ』《アブゾーブクイーン エボリューションキング》

キングラウザーを振り回し、ノイズを払うと共にブルースペイダーを呼び出し、それに乗る。

《サンダー》

雷鳴を纏うブルースペイダーは回転しながらノイズを討ち、体内で滅ぼすそれを見る。

ノイズとは違うノイズ。性質が違う。

(だからクリスのギアが)

よく見ればペンダントはある。おそらく強制解除なのだろう。だから服を戻すこともせず、あのような事態に。

二人を担ぎ、ジョーカーラウザーへ変化させ、リモートを取り出す。

《リモート》

複数のアンデッドを放ち、バイクを走らせた。

「やはり派手だッ」

そう言い放ち、目の前にノイズが現れた。

「読まれてたかつ」

「デッスウウウウウウウウウウウ」

だがイガリマの緑の子、切歌ちゃんが突然ギアを纏って出て来て、ノイズを切り裂き、丸鋸が無数に放たれ、道が開く。

バイクの後ろに切歌ちゃんが下りて、側に調ちゃんが来る。

「一真さんこんにはデ」

「あのノイズと戦うなつ、あのノイズ、性質が違う。ギアが触れ続けるのは危険だつ」

「!？」

ともかくそう言い放ち、急いでその場から離れる。



海岸付近へ下り、クリスにコートをかけ、二人の容態を診る。

「平気、のようだな。クリスは」

「平気なもんかッ」

クリスはそう言い、切歌ちゃん達はギアを解かしている。この子達は時限式。薬が必要な奏ちちゃんと同じだったはずだ。

そして一通り終えた後、俺は、



「！」

視線が合うと、猫のようにびっくりするが、箱は離さない。

「一真っ」

「……………君はその箱の中身を知っているか」

「……………はい、ですが悪用はしませんっ。ボクは、ボクの罪を償う為、キャロルを止める為に、これを使います!!」

はつきり言うその子の姿に、あの日、自分の、父親の命題を語るあの子と重なった。

「キャロル……………そう言えば、君はキャロ」

その時、なぜかクリスに刺された。

「ひい」

「デースっ！」

「なっ」

「……………」

クリスの目に光は無く、ただ無表情だった。

なにか尖った石を掴まれ、腹を……………

「な、なんで……………」

「一真さんっ」

「せ、先輩っ？」

「オメエ………まだ手出すのか」

「なんの話………」

「小さいほうがいいのか………小さければいいのか？」

無機質に喋られるが何が言いたいのかわからない。どうしてこうなった？

その時、耳で車の音を拾う。人が来る。

その中にはおそらく………

「………クリス、弦十郎さんに伝えてくれ。それを使うのなら、俺は貴方達の敵だ」

『！』

全員が驚く中、もう時間が無い。

「………」

《チェンジ》

そして俺は空を飛べるアンデッドに変わり、飛翔してその場から去っていく。  
いまは願わくば、血の剣が解放されなことを願うことしかできない………

◇

【あーあ見逃した〜♪ 災いが解き放たれる、君の所為で】

【……………】

地面に下りれば声が響く。

【君が悪い、君の所為で世界が壊れる】

【……………】

【ああ楽しい、君の所為で世界が壊れる。ふふ、ふふふふ……………】

【黙れ】

たまらず声を出す。だが声は消えない。

【黙れ、だまれ、黙れ？ ねえ……………】

それは間を置きながら、頭の中に響く。

楽し気に、ただ語る。

【君は知っているはずだよ、僕の、声が、聴こえなくなる、方法、を】

【……………】

【滑稽だね。どうすればいいのかわかっているのに、答えは出ているはずなのに】

【……………】

【何度も、何度も、何度だって……………僕はいる、君を苦しめた声として、君が弱まったと

きかた】

笑い声と共に、声が聴こえなくなり、それを確認してから元の姿に戻る。  
声がなんなのか分かっていて、だがどうすることもできない。

いや……………

「……………俺は」

どうするべきか分かり切っている。

だができない……………

考えても仕方なく、静かにその場を後にする。

矛盾を抱えたまま、まだ歩く。

それしか、彼には残されていないから……………

## 第3枚・敵対するは

それは、偶然の産物だった。

ただ偶然、偶然過ぎる。

「この辺りに聖遺物があるはずだが」

そう呟きながら、遺跡を探している時、大きな音が鳴り響く。

自分が見つける前に、聖遺物が何かしら起動したかと首をかしげ、そこに出向き、出会った。

「！　なんだ」

ノイズは分かる。この聖遺物の守りとして、古代人が配置した類だろう。

そして巨人の怪物、燃え盛る自立型の聖遺物。

「スルトの巨人の原点の聖遺物………だが」

オレが見るのは、戦っているそれだった。

『ターンアップ』

カプトムシの光の門を潜り抜け、西洋の騎士のような姿を変えて、無数のノイズを一振りで薙ぎ払う。

スルトの炎の剣が振り下ろされ、大地を揺らす。だがそれを、片手で持つ剣で受け止めていた。

「……………」

無言のまま、巨人を薙ぎ払い、何度もその顔を殴る。

はつきり言えば原始的な戦い。だがあり得ない。

（自立型聖遺物スルトは、炎そのものでできた聖遺物だ）

スルトは炎の巨人として言い伝えられていて、現在において詳しい逸話が無いのは、これと出会って生きていた人間がいらないことを指す。

作り出した者はすでにいない、ノイズと同じ、対人類型の兵器。

（巨人などの逸話を持つ聖遺物はだいたいノイズの上位か下位の物……………それを殴り倒すだど？）

そして、また劇的な変化を起こす。

姿が変わった。

青い仮面をつけた異形、鎧を纏うそれは緑色の血を流す。

心の臓を貫かれたが、気にも留めず、武器を振り下ろして倒した。

そして……………

（なんだっ、聖遺物を食らう？ ネフィリムか？）

だがそれは確かあんな形ではないはず。

いままた姿を変え、完全聖遺物を食らうそれを遠巻きに見ながら考え込む。

記憶と記録。この身に刻まれた知識を呼び起こしながら隠れて見ていたが、それは聖遺物を飲み込んだ後、カードを取り出す。

ベルトのハートにそれを読み込ませる。次の瞬間姿を変え、飛翔して飛び去る。

「……………目的の聖遺物、では無かったが、収穫はあった」

オレはその後、奴の血を採取し、テレポトジエムを使い帰還する。



「……………んな、バカな」

解析結果に目を疑う。

ありとあらゆる生物のデータが内包された血液。こんな生物、理論上あり得ない。

それだけでなく、この情報の中に、錬金術を収めたオレだから分かる。

仙草アルニム、これを調べているときにも感じ取った感覚。

パパはこれで難病を治した。いまはその記憶はいい。

「まさかあの生物は、全ての病魔に耐性を持つ？ しかも理想的、いや試すか」

オレはすぐに自分の次の器にこれを組み込んだ。  
結果はどうだ？

「これほどか……まさか」

元々そろそろだろうと思っていたところだったため、すぐに実験に移った。

オレは肉体、身体の転写並び複製をすることで疑似的な不死を会得している。

その際に魂の引継ぎもし、さまざまな錬金術を使うが、その際にできる身体は、限界がまばらであり、安定はしなかった。

だがどうだ？

オレはすぐに転写後の肉体で動き回るが、転写によるさまざまな問題点が解決している。

「ははっ………」

思わず笑みがこぼれる。

例の存在の情報を取り込んでからは、複製した肉体の限界、寿命がただの人間と変わらないほど安定していた。

(だけじゃない、ある程度なら病気にもかからないだろう。これは)

不老不死、一瞬そんなワードが過ると共に、あれは心の臓を貫かれていても平然としていて、傷は塞がっていた。





そしてふらわーへとお好み焼きを食べに出向こうかと言う話の中、少しばかり考える。

「どうしたの響、傷痛むの?」

「ん、傷はもう治ったよ」

そう、傷は了子の異端技術で痕すら残さないらしい。

私は錬金術師キャラル・マールス・デインハイムの攻撃で瓦礫の下。

その間に、クリス、翼のシンフォギアが、アルカノイズにより機能破壊された。

アルカノイズ、キャラルがノイズのレシピから錬金術により作った亜種ノイズ。

それらの情報を持ち込んだのは、エルフナイン。

キャラルの下にいた、ホムンクルス。キャラルのデータを下に作られた子だ。

(怪しき爆発だが、いまはどうするかは司令達に任せるしかないか)

キャラルの下で、チフォージュ・シャトーと言うものを作っていた。それが世界を破壊すると言うものだと知り、キャラルを止めるために私達の下に逃げてきた。

曰く、対抗するには自分が持ち込んだ聖遺物によりシンフォギアを強化する、プロジェクトイグナイトというものを提案。

だが、

◇

『それを使うのなら、俺は貴方達の敵だ』

そう一真が言った。

了子はそれらの情報を集め、思考する。

「とりあえずアルカノイズの分解により、天羽々斬、イチイバルはシンフォギアとしての機能を失った。そこは強化しなければいけない、それに魔剣ダインスレイフを使うのもあり、そう思うが……」

「危険がある」と

「理論上、暴走を抑え、戦える。この聖遺物を使えばできる。だが剣崎一真がそこまで反対する理由が分からない」

そう話し合いながら、ともかく強化はする予定だが、魔剣を使うかは保留らしい。

◇

(どうする気……!)

考え込みながら歩いていると、その時、

「聖杯にはすでに中身は満たされ、されど生贄の少女を求める」

唐突にそれと共に水柱が舞い上がり、全員が硬直する。

「……………誰だ」

木の陰に一人、青色のドレスを着た者がいる。

「久方ぶり。まーさかあの爆発を直撃して生きてるって〜ヤンデレ頑丈過ぎい〜」

そう笑いながら答え、私はカバンを道に投げた。

「錬金術師キャロルの仲間か」

「そしてあなたの倒すべき敵」

見覚えがある人形。性根の腐ったそれはポーズを取りながら、何かをばらまく。そこからアルカノイズが現れ、静かに構える。

だが……………

（後ろがまずいつ、このままここで戦うのか!?!）

表情を変えずに周りを見たが、それをニヤニヤした顔でこちらを見る。

「昔ならともかく、今現在の貴方は戦いにくい状況」

すでに性格から見抜かれている。

「こいつ性格悪うう」

「私らの状況も悪いよっ」

「ビツキー」

どうする。どうすればいいか分からない。

「マスターから貴方は必ず殺せと言われてるのお。だからごめんね」

そして、アルカノイズが行進し出す。

だが……………

◇

バイク音が鳴り響き、高速でアルカノイズを引きつづした。

「！」

「一真っ」

バイク音を鳴り響かせながら、ヘルメットを脱ぎ、人形ガリイへと歩き出す。

「響は戦うな、貴様は俺が破壊する！」

「イモータル……………マスターのお気に入りかつ」

「変身」

《チェンジ》

鳴り響く音と共に駆けだし、カリスが姿を現す。

カリスアローを構えながら、無数のアルカノイズが向かってくるが、ただのノイズと変わらず、カリスアローで切り裂く。

「ちい、いまはお呼びじゃないんだよっ」

そう言った途端、水柱が放たれ、水流が向かってくるが、

《ゲル》

その瞬間、カリスは液状化し、水の中に溶け込んだ。

「なっ」

水から飛び出る瞬間、またカードを取り出す。

《チヨツプ》

ガリイは水を出し、滑るように避けるが、表情は焦りを浮かべている。

放たれた手刀はガリイのいた場所を粉々に粉碎した。

「威力が」

《リモート》

無数のラウズカードを投げ、アンデッドが放たれ、それを見ながら、

「もう〜ガリイちゃんっ、あんたの相手じゃないのにい〜」

「知るかッ」

アルカノイズとアンデッドが戦いですが、アンデッドを分解はできず、破壊される。

ガリイはすぐに懐から小瓶を取り出す、それはカリスアローで破壊、撃ち砕かれた。  
「逃がすと思うか」

「くっ……………」

《エボリユーション》

ギルドラウズカード化した13枚が舞い上がり、カリスはワイルドカリスへと姿を変え、静かに近づく。

「終われ」

「！ 一真上っ」

瞬間気づき、横へと飛ぶ。

風が吹き荒れ、ガリイは安堵する。

「マスターっ」

「一真とは戦闘するなど、言っていたはずだが」

そう不機嫌そうにキャロルは言い、ガリイはめそめそしているように仕草を真似をしながら、

「だってマスターよりも可愛いガリイちゃんの方が好みらしいからっ、しっこくつてええ」

「壊すぞガリイ」

不機嫌そうに言うと、少しだけ舌を出して、すぐに小瓶を取り出し引っ込む。キャロルは舌打ちしながら、何体かのアンデッド、そして一真を見る。

「やはり自分の分身を呼び出せたのか、アンデッドジョーカー……………」  
「なんでキャロルがそれを」

武器を構えながら、カリスは無言のまま見つめ、アンデッド達はアルカノイズを倒し、各々命令を待つ。

「なんだ、貴様は知らないのか。俺と一真はそこそこ長い年月知り合いだぞ」  
「……………」

「なにか言いたそうだな」

得意げに笑うキャロル。それにカリスは、

「なぜ……………成長してない」

「クローンによる複製と転写だと何度説明すれば分かるんだ貴様はッ!!」

そんなバカげた会話にガリイは啞然となり、未来達も啞然となる。  
響だけが目で人を殺せそうなほど睨んでいた。

「……………キャロル、お前はまだ……………命題の答えを探しているのか」  
話を変えるように、カリスはそう呟く。

それにはキャロルは叫ぶ。



「当たり前だ、オレはオレの目的を達成させるツ。無論貴様も手に入れるつ、万能の力、世界の勝利者ツ。生物と言う生物の頂点に立つ、貴様はオレの物だ!!」

その言葉に響は驚愕する。

万能の力や、アンデッドなど……………

(一真のことが、知られているのか……………)

「……………俺は万能の力を、誰かに渡す気は無い。この力は封印され続けるべきものだ」

カリスはカリスで、そう言い返すが、キャロルは聞く気は無い。

「だからと? 諦められるかツ!!」

力強く叫び、睨むようにカリス、一真を見る。

「バトルファイトの存在を知り、アンデッド。イモータルであるその人類を、世界を超えた英知を知ったオレの思いツ。貴様に分かるか一真!!」

「キャロル」

「必ずだ、オレは必ず、世界を、奇跡を、そして貴様を壊すツ。貴様の全てはオレの物だと覚えている!!」

そして小瓶を叩き割り、いずこかへと去るキャロル。

さすがの一真も、キャロルと戦えば、被害が大きくなると判断し、それを見送るしか無かった。



「……………」

一真はキャロルを見届けた後、片手をあげ、アンデッドをカードに戻し、手元に集める。

静かにバイクに乗り、その場から、

「待ってよ一真っ」

それに一瞬止まるが、一真は、

「響、魔剣ダインスレイフには手を出すな」

「！」

「それに手を出すのなら、俺はお前達の敵だッ!!」

そうはつきり、一真はそう言った。

それに驚きながら、だけど……………」

「……………あの子のこと、自分一人で片付ける気なの」

それには何も答えない。

「ふざけるなッ、何でも一人で解決しようとして、それで納得できるか！」

「なら俺と戦うのか」

「ああッ」

それに少し考え込む一真。そして、

バシユと、耳元で音が鳴る。

「響ッ」

頬が痛い、血が流れた。

先ほどの戦いからワイルドカリスのままだった一真が、カリスアローを向けていた。

「言っただけだ、魔剣に手を出すのなら、俺はお前達の敵だっ」

一真は本気らしい。それにガングニールを握りしめたとき、一真は後ろを振り返る。

「……………これで最後だ、次の警告は無い」

そしてバイクを走らせ、その場から去る。

すれ違ったのかは知らないが、車に乗って、マリア、セレナ、奏と戦える装者が駆けつけた。

だが全ては遅く、一真は私達の敵として、立ちふさがる……………

## 第4枚・一万年前

オレはいま、日本と言う国に來ている。

本来ならシャトー建設や奴らとの交渉など、やるべきことはあるが、次の身体に転写する前に、例の機関について、ある程度知っておきたかったからだ。

(人類基盤史研究所、BOARDか……)

それはチベットの洞窟内で発見された、ある遺物を研究する機関。人類の進化をテーマに研究する機関。

(ある男が自身の財力を使って日本政府を動かして立ち上げた、徹底された非公開研究機関。存在を知ったのも、ほぼ偶然だったな)

オレがこの組織を知れたのは、当時の噂、都市伝説レベルで語られる眉唾物。

はつきり言えば表の人間なら信じない話、オレのような異端技術者ならば、ノイズか自立型聖遺物程度と、高を括る程度の話だ。ここに來たのも、半信半疑だ。

当時の噂も人類進化の謎を研究する機関があるという程度までの徹底ぶりだが、逆に言えばその程度の噂は消されなかった。

(まあ、数が数。消したくても消すことはできなかったと解釈するべきか)

ともかく、調べた結果BOARDなる組織はあるのははつきりする。

だがオレはため息を付きつつ、これ以上の情報は手に入らなかつた。

念のため、施設があつたと思われる町、その図書館で調べてみるが、それらしいものは無い。

だが、やはりおかしなところはあつた。

(古い時期の新聞の一面が紛失している、よく調べてみれば現代情報源でもあるインターネットからも、当時の事件などが曖昧にされている。時期からして関係はありそうだが、いかんせん昔過ぎる……………)

図書館で本を戻しながら、少しばかり自分の体格を見る。今回は裏目に出た。

(このガキの姿じゃ、できる範囲は限られるか。奴らを使うと言う手もあるが、これはオレが独占したい情報だ。なにより、ここまでやっておいてハズレの可能性もある)

ともかくこの時期に関する書物なりなんなり、なんでもいいから調べてみることにした。

だがまさか、それが功を成すとは……………

「作者白井虎太郎……………運命と戦う戦士、仮面ライダーブレイド……………」

その街にある図書館、新聞など調べる傍ら、他に何か無いか調べてみると、当時のサイエンスライターの書いた本が収められていた。

ないよりマシかと思いいながら、収められた本棚へと歩き出す……



「ん〜……どうするか」

現在、イチイバル並び天羽々斬を強化しているが、やはりエルフナインが提案した物、どうしても魔剣ダインスレイフを組み込んだシステムになっている。

弦十郎くんも現在悩んでいる。確実に戦力強化は間違いないのは目に見えているが、

「劍崎一真、奴の覚悟がな……」

「あたたかいものです」

「すまない」

友里から飲み物を受け取りながら、考え込む。

はあ、フィーネとして裏切った者としては、やはりまだ慣れない。が、いまは任せられたことをするか。

プロジェクトイグナイト。それを組み込むべきか否か、現在の分岐点。

「司令はどうするんでしょうか」

そう藤堯が口にする。それに関しては、もはや答えは出ているのだろうか、

「分からんよ、私とて、アルカノイズの分解能力の耐性を作る為に動くより、魔剣を組み込んだ方が早いとしか言えない」

だがそれをすれば、不死身の戦士が敵になる。

あれの覚悟はつきりしていた。

己が守る者を傷つけた。あれがそこまで追い詰められているとは。

「そこまでなぜさせる？ 確かに危険な賭けではあるのは確かだ」

あれから焦りを感じられる。なにか彼を追い詰めているか分からない。

「確かデメリットとしては」

「装者の暴走、だな。もし魔剣に飲まれば強化どころの話ではないからな」

それでも、だ。

それでもあれがそこまで反対する理由。それが分からない。

私の見た限り、少なくとも時限式を除く装者は、その可能性は限りなく少ないはずだ。

そして、そういう悩んでいると、

「了子くん、いるか」

クリスと翼、兩名を連れて弦十郎くんが来た。

「結論は決まったか」

「ああ」

プロジェクトイグナイト。それが始まる。

◇

「それじゃ、一真さんとは」

「出会ったら戦う、事になるかもしれない」

そんな話をしながら、私達は雨の中を歩く。

未来には色々迷惑をかけた。だから話をする。

あの子の未来は私以上に動揺していて、おかげで落ち着けた。

なんか、ドライバー取り出して変身しそうなほど、黒い何かが出ていた気がしたが、お

そらく気のせいだろう。

顔の傷は了子によって、元々できるはずもない痕も無く治った。チツ。

「私的には、一真と話せる機会になるからいいんだけど」

「響……………」

「私は決めている、この拳、歌は大馬鹿野郎を殴って止める。私はそう覚悟した」

その時に現れるのは、不死身の怪物なのは分かっている。

だから……………」



◇

「テメエはお呼びじゃないんだよ、人形っ!!」

「人形じゃなくって、ミカ、って言うんだゾっ」

雨雲漂う帰り道、私は未来を巻き込み、敵と遭遇した。

そう言い、赤い髪の人形が現れ、アルカノイズが無数湧き出る。

「よりも未来がいる時、また無関係な奴がいる時にッ」

ともかく廃屋へと逃げ込む。

「未来っ、次の建物に入ってから隠れてっ」

「う、うんっ。けどどうして」

「この辺りは昔の、私達の庭だよっ!!」

昔の寝床もある建物だ、地の利はある。

ともかく一真を殴る前に、この事態を退けなければいけないな。

◇

「アルカノイズの反応を検知」

「位置特定、モニターに出ますっ」

モニターに映るのは、響、未来を追う赤い人形。

「ついにミカも動き出した……」

エルフナインがその画像を見てそう呟き、弦十郎は叫ぶように指示を出す。

「急ぎセレナくんに連絡を。急げッ」

◇

「およ？ 逃げるのはもういいのかだゾ？」

廃屋のビル、未来は奥に隠し、静かに構える。

「壊してやんよっ」

爆炎と暗闇が舞い上がる。

初めからクライマックス、暴走モードで壊してやるよ。

「オヨ？ なんだそれ、ミカ聞いてないゾ」

「この世の絶望を、壊す歌だッ」

◇

「ぼ、暴走状態っ!! 響さんっ、これは」

ボクはその光景を見て驚く。

黒い影に覆われながら、熱量により炎を纏う響さん。これは、

いまは動けないクリスさんと翼さんも、その光景に驚いていた。

「あのバカ、まさか」

「プロジェクトイグナイトは、本来暴走を抑えて強化するシステム。だが」

「それよりも早く、暴走形態を維持できる精神力の持ち主……響さんのデータは、プロ

ジェクトの成功率を上げられそうです……」

「ヤンデレって……」

藤堯さんのやんでれというのは、いったいどのようなことを言っているのでしょうか？

プロジェクト成功の為、後で響さんに尋ねてみましょう。

そしてモニターの先で、戦いが始まります。

◇

【行くぞ赤いのッ】

「赤いのじゃなくって、ミカ、だ、ゾっ!!」

無数のアルカノイズを爆走しながら砕き、攻撃は全て見向く。

紅い眼光が軌跡を描き、アルカノイズの分解を受けず、ミカへと連撃し続けた。

【硬い、だが】

一点に全て拳を叩き込み、バンカーを伸ばし、強化した蹴りを突き刺す。

「オヨ?」

巨大な爪のような腕に僅かに軋みを聞き、再度体制を整えるが、

【そこだ】

瓦礫を蹴り上げ、シユートする。

「いつ!?!」

【性根の腐ったガリイかつ】

物陰からこちらを窺うガリイに気づき、舌打ちしたガリイは無数の水柱と氷柱を巻き

起こす。

それはこちらを含まれているが、狙いが僅かにずれている。

これは、

【狙いは未来かあああああああああッ】

私が避けると、物陰などを巻き込む攻撃。これは隠れている未来を狙っての攻撃だ。攻撃を砕きながら、地面に着地する。

（とはいえ、未来を守りながら全攻撃受けずつてのが無理か。この場から離脱に切り替えるっ）

すぐに未来がいる瓦礫へと突貫し、粉碎すると共に飛び出ていく。

【響っ】

未来を抱き上げながら、崩れて壊れている壁を見る。

【息止めてッ】

言われた通り息を止めた未来、急いでそこから飛び出ていく。

後を追うアルカノイズは、空中で身体をひねりながら、飛び出るアルカノイズを蹴り飛ばす。

また廃屋のビルへと飛び降りるが、

「まだ来るっ」

【くっ】

顔を上げたら、無数のアルカノイズが向かってくる。

すぐにバンカーを伸ばし、すぐに飛び、離れようとしたとき、

無数の炎が撃ち抜いた。

「！」

【これは】

◇

私達が見たところに、一つの炎がいました。

「ギャレン……………」

炎の昆虫、クワガタと言うべきギャレンが空を飛び、ミカと言う人形へと斬り込む。  
重醒銃キンググラウザーと言う武器には刃が付いていて、剣のように振り回して、ミカへと斬りかかる。

「響」

【……………いまは未来が大事】

そう呟いて、響は私の為に、一真さんを見捨てて去る。

その後すぐ、私達がいた廃屋ビルは、紅蓮の炎に包まれました。



「……………これは」

ギャレンの炎でしょうか、司令さんに言われ、時限式では無い私が駆けつけました。マムの下に顔を出していたときの連絡で、マリア姉さん達も飛び出そうとしましたが、マムに止められ、私はアガートラームを纏い、駆けつけたときには、すでに終わっています。

そこに、

「……………あ……………」

私は雨雲すら撃ち抜いた弾丸、そこから照らされた太陽光の下に、彼を見つけた。

光の門が現れ、それを通り抜けると、あの人がいる。

「一真、さん……………」

「……………また」

「えっ……………」

「また微妙な状態で会ったな」

そうだ。この人はプロジェクトイグナイトに反対して、そのプロジェクトを司令さん

が決行すると決めたいま、私達はまた敵同士だ。

「二真さんつ、どうしてプロジェクトイグナイトを、魔剣ダインスレイフを危惧しているんですかっ」

「……………君の名前、確かセレナちゃん、だっけか」

「セレナでいいです」

「分かった……………」

正直、この落ち着いた話し方の時は、他人行儀だと響ちちゃん達に言われている。奏さんたちをちゃん付けするのも、そう言ったところらしい。私は外れたっ。

「魔剣ダインスレイフは、その逸話は一度鞘から放たれれば、生き血を得るまで解き放たれる負の力。聖遺物魔剣ダインスレイフもまた、そういうものだ」

「……………はい」

「……………魔剣ダインスレイフは、誰が作ったと思う？」

「えっ……………」

魔剣ダインスレイフは、北欧の闇の妖精、ドワーフのような種族に作られた。のはず

……………

そう私が考え込んでいると、彼は静かに、

「その魔剣は、一万年前の一人の戦士が握りしめていた」



「……………一万年前？」

あれ？ それはまさか……………

「かつて生物最強の戦士の刃は先史文明時に人々の手に渡り、加工され、魔剣ダインスレイフと言う名の武器へと変わった」

その言葉に、過つた予想が形になる。

心臓の音が早まる。もしもそれが本当なら、聖遺物は、

「その刃が、人類が、生物として頂点に立つ手助けをした物と知らずにね」

心臓が……………爆発しそうになる。

「まさ、か……………」

「俺も、他の欠片を手に入れるまで、気付かなかった」

そう言つて、彼が手をかざすと、黒い剣が現れる。

剣先が欠けた、音叉のような刀身の、黒い魔剣。

「ヒューマンアンドデッドが愛用した武器を加工し、生み出された、人類を生物の頂点へと導いた武器、魔剣ダインスレイフ。俺はこれを人の手に渡す気は無いんだ」

それに背筋が凍る。この光景をモニタリングしているみんなもどうなのか分からない。

そして彼は静かに、剣を収める。

「なぜ、ヒューマンアンデッドが、始まりのジョーカーや、他のアンデッドに勝てたと思う？」

「それは」

そう言えば、この人はジョーカーの姿になることは多いけど、そのジョーカーに勝つた、ヒューマンアンデッドになることは無い。

言われてみればおかしな話だ。なぜ強い姿にならない？

力の安定ができないのなら、ジョーカーの姿の方が、力が安定しない気がする。

なによりリカバーやタイム、サンダーなど、かなり強力なラウズカードも使っている。だけど、ヒューマンアンデッドのラウズカードは？

私が見つたり、聞かされたりする限りでも、強力な効果があるのに、まったく知らない。

「ヒューマンアンデッドの力は、人になる。ただそれだけだ」

私の疑問に答えるように、あの人は答えてくれた。

「それだけですか？」

それだけでどうして？ バトルファイトのルールは確か、モノリスや統制者によって管理されていた。

一万年前のバトルファイトは、敗北者はモノリスによって封印されている。

ヒューマンアンデッドはその戦いを、ジョーカーと言う存在を退けて勝ち上がり、万能の力と種の繁栄の権利を手に入れた、勝利者だ。

だけど、そのカードが人になるだけでは、勝利者になれるとは思えない。

「人の力、ヒューマンアンデッドの力の具現化は、俺の青のジョーカーから分かる」

「青の……アンデッドの」

その時、私は気づく。

青のジョーカーは、アンデッドの『武器』を操る。

「ヒューマンアンデッドは、武器を使う……それが」

「ヒューマンアンデッドがバトルファイトに勝利したのは、武器防具、知恵による勝利。

そしてヒューマンアンデッドが残した武器防具は、その後どうなったと思う」

「……まさか」

そして静かに、あの人は頷く。

「聖遺物、人はそれに加工し、新たに争いを始めた」

私は自分の身体、アガートラムのギアを見る。

これが、かつて世界の繁栄を賭けた戦いに使われた道具。その加工品。

ただ静かに聞きながら、あの人は静かに歩き出す。

「もし魔剣に手を出すのなら、俺はアンデッドとして戦いを挑む。あれは一番、当時の力

を持った聖遺物だから……………」

「ま、待って一真さんっ」

「……………」

だけど彼は振り返らず、そしてその場を後にする。

結局その後、プロジェクトイグナイトは決行するしかない。

あの人と戦うことになろうとも……………」



【さあまたバトルファイトが始まる、君が止めた戦いがまた】

「……………」

【ねえねえどんな気分だい？ 必死に、全てを捨てて止めた戦いが、必死になって守った者達によって再開される気分はっ】

「……………」

【どれほど事実から目を反らしても、現実是不変ならない。新たな戦いが始まるんだ】

「……………」

【世界が滅茶苦茶になる、さあ、君はどうなるんだろうか？】

そして声が消え、それを無視しながら、静かに歩く……………

◇

この事実がもたらした出来事は大きなものでも……………

私達は、その力を手にするしか、道は無かった。

一真さん、私達は、貴方の思いを、裏切っているのでしょうか……………

私は貴方に会いたい。

もう一度、貴方と話したいです……………

## 第5枚・抜剣される魔剣・前編

無数の攻撃を受けても、それは強固な姿でオレを見る。

「それがバトルファイトの勝利者、万能の力、アンデッドジョーカーか」

【……………】

全てを知った、全部わかった、だからこそッ、

「その力はオレの物だッ、世界を知るため……………そしてお前の言う奇跡を壊すッ。劍崎一真、お前はオレの物だッ!!」

必ず手に入れる。世界を生み出した、万能の力を……………

◇

外部協力の下、プロジェクトイグナイトは進む。

全員で話し合う中、弦十郎は腕を組む。

「さすがに神獣鏡はプロジェクトイグナイト対象外か」

魔を払う鏡であるため、魔剣ダインスレイフの力を弾いてしまう。

現在奏、翼、クリス、マリアの聖遺物を対象に、魔剣ダインスレイフを組み込み込みです。

「だが必ず敵となるか、一真くん」

不死身の戦士がそう告げた。

いくつか倒す方法は上がるものだが、どれもこれも数日間無力化できると言うものではない。

なにより、それら全て、劍崎一真と言うリミッターがあるからなると、彼を良く知る二人から言われていた。

「これからどうなる……」

その時、アームが鳴る。

「アルカノイズの反応を検知」

「座標、絞りこみます」

だが爆発が響き、地面が揺れる。

「まさか、敵の狙いは、我々が補給を受けている。この基地発電施設っ!？」

「ここだけではありませんっ、都内複数箇所各地にて、同様の被害を確認っ」

「強化型ギアの回収はまだか」

連絡を付けるが、了子はハイスピードで作業し出す。

「響くん、セレナくんはこの防衛を。時間稼ぎだっ」

「はいっ」

二人の装者が抜け出る中、響は考える。

彼はどうするかと……

◇

某発電施設、1。

「私に地味は似合わない」

そう言い、コインをばらまき、破壊するレイア。だが、

「ん……………」

◇

風力発電所にて、

「これはこれは」





【うおおおおおおおおおおお】

【はあああああああああ】

セレナと共にこの基地の発電システムを守るのだが、

「数が多い」

【ああ】

そして赤い鉱石の弾丸が放たれ、それを睨む。

【人形】

「アタシはミカだって言ってるんだゾ」

攻撃をけて受けて、こいつらの退治しなければいけない。

そう思っていると、少しでも言わんばかりに、基地内の者達が銃で応戦している。

「ダメツ!!」

セレナが叫ぶが、無数のアルカノイズが迫る。

だが、

「デスッ」

翠の鎌と、

「はああああああああああ」

紅の鎌の装者が現れ、兵士たちを助けるが、

「二人ともっ!!?」

【ギアが感電してない、まさか、リンカーを使ったのかっ!!?】

「私達だって、見ているだけはいやつ」

「ここからはザババの鎌が、相手するデスっ」

それに舌打ちしながら、ミカへと対峙するが、

【壊れないっ】

◇

黒い塊のように、響さんはミカと言うオートスコアラと戦っている。

私達はアルカノイズに触れずに、発電施設を守りながら戦う。

「切ちゃん、へいきき?」

「ま、まだ平気、デス」

平気じゃないね、私も……………

これが時限式の限界なの？

セレナは銀のナイフを刃りにばらまき、けして近づけさせずに倒している。

「切ちゃん」

「デス」

「！ 二人ともそれ」

「二人一緒なら」

「怖くない……………」

私達は再度リンカーを投与し合い、ギアを振るう。

響さんから激昂に似た雄たけびが聞こえた。怖いけど、前に感じた怖いじゃない。

私達の過ち、その償いの為に、いま戦わないでどうする。

切ちゃんから鼻血が出る。けれど手を取り合い、前に進む。

「はああああああああああ」

無数のアルカノイズ、このままなら、

「させると思うか」

瞬間、私達の身体が動かなくなる。



キャロルの叫び声が聞こえる。怒りに満ちたように、喜びに満ちたようなそれを聞きながら、

(……………私達、いま裸だ……………)

頬を赤く、真つ赤にしながら、赤いラウザーのベルトを見る。

その時、獣のような叫び声が聞こえた。これは怖い……………

◇

ウルファンデッド、狼の始祖なんだろういまの彼は、私達を安全な場所へ連れていき、むっ、胸を触りゆ。

「にゃっ!？」

「!!」

真つ赤になるけど、すぐにそれは素肌を通り抜け、身体の中、リンカーの悪影響を取り除いているのか、身体が軽くなり始めた。

【悪いけど、我慢してくれ……………】

狼から聞こえたのは、一真さんの声。

一枚のカードが浮き上がり、ラウザーを通る。

## 《リカバー》

身体が軽く、手を引き抜くと、リンカーの液体、身体に負荷を与えるものだろうか？  
それが取り出された。

そして手のひらをかざすと、人の姿に成ると共に、衣類を取り出す。

「ぶかぶかだが、これを着なさい」

「は、はひ」

囁んじやった、恥ずかしいっ。

切ちゃん以外に私の恥ずかしいところ、いや本当に見られちゃったよっ。

「ア、アアス」

なにも言えない私達、だけど一真さんから感じる雰囲気は、人間ではない。

落ち着いて話すときの一真さんは、人間ではなく、ジョーカーとしての一真さんだと聞いている。

「ここにいろ、他の所は、ほかのアンデッドに任せている」

そう告げたとき、爆発音が先ほどの場所から響く。

「……………」

それを見たとき、悲しそうな顔をして、歩き出す。

「あ」

なぜか私達は、その手を握りしめた。

それに少し止まる。だけど……………

「いめん」

そう、小さく呟いた。

その手は暖かく寂しい手……………

少しだけ、響さんやクリス先輩が妬ましい。

この手の優しさだけは伝わり、だけどこの人は……………

先輩達と戦うために、戦場に戻っていく。

◇

【調ちゃん達を女の子しか愛せないようにしてやろうか?】

静かにそう考えながら、クリスと翼がギアを纏って現れた。

そこには奏もいて、槍を振り回す。

「やめてやれよ」

「ともかく」

「強化型シンフォギア、完成だくそつたれッ」

クリスはギリギリ間に合わなかったことに腹を立てながら、キャロルを見る。キャロルも歯を食いしばりながら、周りを睨む。

「一真の大切な者達か」

「マスターヤンデレかだゾ？」

「ガリイの言葉を真に受けるなつ。時限式並び、分解したはずのギア。そして」

「……………」

「暴走しながらまともな奴か」

クリスは静かに睨みながら、キャロルは、

「全てに優先するべきは計画の遂行、ミカ、ここからはオレがやる」

「分かったゾ」

そう言い、ミカは小瓶を割り立ち去る。

「一人で私たちを相手にする気ですか」

「いや、悪いがセレナとあたしは下がるように言われている。セレナは強化前、あたしは

時限式だ。響も下がれツ」

それにセレナは押し黙りながら、翼は剣を構える。

「案ずるな、剣と弓があれば、問題ない」

「なめられたものだ、それとも、この風貌だからそう言うのか？」



そう言いながら突然何かの術を使い、豎琴を取り出す。

「括目せよっ」

それを鳴らす瞬間、聖遺物の起動が始まる。

【豎琴の聖遺物っ!?!】

そしてそれを纏う瞬間、キャロルは大人の姿に成り、鼻で笑う。

「これくらいあれば不足なからう………ハッ」

糸が全てを切り裂きながら迫る。

それを避けると共に、私達の攻撃が始まる。

歌う訳でもないのに、炎や氷の錬金術を使う。それに驚くが、アルカノイズでない以

上、

【私は勝手に、前に出るッ】

◇

「歌う訳でもないのに、この質量。いったいどこから」

「キャロル達錬金術は、本来思い出の焼却にて力を使用します。ですが、ある日を境に、キャロルは無尽蔵に思い出の焼却を可能にする術を手に入れました」

「なんですつてっ!？」

エルフナインの説明から、キャロルは思い出の焼却と言う術を使い、記憶を失う代わりに巨大な力の行使する術。それによる錬金術を使う。

代価として記憶の消失があったのだが、それはいつしか無くなった。

「それはある生物が持つ、自然治癒能力による肉体強化の副産物です」

「ある生物？ まさか」

「はい、全ての生物、始祖達の争いから選ばれた戦士達。イモータル。アンデッドのDNAデータから、記憶の焼却を無くしながらも力の行使を可能にしました。ボクの身体にも、アンデッドのデータが使用されてます」

「なん、だと……………」



「まさか、剣崎さんの力を利用しているのかっ!？」

翼の叫び声に、キャロルは得意げな顔をする。

「奴との邂逅、オレにとつてまさか予期せぬ出会いだった。オレの目的に近い存在であり、こうして計画に利用できるのだから、この世はやはりどうかしている」

「一真の力、一真の、クソガキがッ」

「ハッ、妬ましいか小娘ども。貴様らと違い、オレと一真は数年程度の関係じゃない。何よりも、エルフナインやいま現在利用しているこの肉体、すでに一真の情報を使用して  
いる。エルフナインはある意味で、オレと一真の子供だッ!!」

瞬間、私達から黒い何かが放たれる。

「雪音」

「抜ッ剣ッ」

胸のブローチを起動させ、二人はイグナイトモジュール。魔剣の力を使用する。

私は黒いオーラを纏いながら、獣のように向かう。

「時間かせ、!?!」

瞬間、黒い姿に成り、二人のギアが強化され、現れる。

「初起動ですでに掌握しているだどっ?!」

「ぶっ飛べダブルだクソツタレガアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ミサイルが離れ、三人の歌を歌う。

歌を歌いながら、接近する。

「まさか、こんなにも早く順応するなん、!」

「よそ見しすぎだ、キャロルちゃん」

その腹に重い物を叩き込み、それにキャロルは、

「まさか、お前も」

【終われ】

その顔面に拳を叩き込み、エルフナインはその光景に驚く。強化前のイグナイトの力を使う訳でも無く、気合いでギアを強化したのだから……

◇

「エルフナインには後でお話ししよう」

「いややめてやれよ」

奏がそう言うが認めない。一真の情報使っただけだ。認めないッ。

もしも覆せない事実なのならば……

一真ごと私の物だッ。

「ガキが………たかがその程度で」

「一真は私のだッ、エルフナインも私のだッ」

「いやおかしなこと」

「アア!? 一真は私のだッ、テメエに関係無い。エルフナインも私のだッ」

「雪音っ!？」

どうやらお話し合いは増えたようだ。無理矢理にでもエルフナインを手に入れなくては  
はいけなくなつた。

だけど……………

「……………一真」

すべてが終わつたと思つた時、そこに、

「魔剣を使用したな、シンフォギア」

不死身の戦士として姿を現した一真是、ジョーカーの姿に成りながら、

【聖遺物、貴様達を封印するッ】

瞬間、無数の武器が飛来した……………

## 第6枚・抜剣される魔剣・後編

それは何度目かの出会いであった。

何度も逃がし、何度も話し合う。

「貴様の力はオレの物だ剣崎一真アアアアアアアアアアアア！」

キングフォームと成りながら、黄金の斬撃が放たれ、重醒剣キングラウザーを構えなおす。

「キャロル、俺の力は人間には渡せない。僅かな力ですでに分かっているはずだ」

「ああ分かっているともッ」

風を放てば風が、雷は雷、炎は氷の壁。

時には時間を止め、高速に動き回ったり、数多の姿を持つ。

その力を垣間見る度に、オレの心は胸躍る。

世界の始まり、いまの世界を構成した戦いの力。

バトルファイトの戦士。

「貴様の細胞から創ったこの身体、思い出の焼却を必要とせず、万の病魔への免疫力、人の、いや生命がたどり着かない頂きの力。オレはその力を持って、世界を知る!!」

「世界を知る、何の為に」

「貴様には関係ない、大人しくオレの物になれ剣崎一真ッ」

錬金術のスピードも増す中で、一真は静かに構えなおす。

《チェンジ》

それこそが一真の真なる姿、万象を現す四元素を身体で表し、聖杯、こん棒の杖、硬貨、剣。

一にて世界を現す全、そうだ。お前は世界だ、奇跡だ、だからこそ、

「貴様は俺の物だ………剣崎一真」

その災いを形にした姿で逃げられたあとで、オレは決意する。

その奇跡を壊してこそ、そして知ることがオレの命題、パパから託された命題の解明に繋がるんだと確信できた。

諦めてなるものか。

奇跡を壊し、世界を知る。

お前を知って、壊して、オレの物にすることが、オレの命題なんだ

「一真………」

そう、この長い間、オレから逃げながらも、オレを見続け、向き合い続けたお前を

………





籠手のような武装する腕には剣と杖のようなメイス。

もう一つの両腕は腰から生え、巨大な三つ爪が付いた籠手を纏い、覆い隠した腕。

最後の両腕は、肩に付いたような腕。聖杯と護符のように言葉が刻まれたコイン状の盾を持つ。

【なん】

生物では無い生物は咆哮を上げた。

地面が砕け、雲が消し飛び、飛来してくる。

「んな重量でッ」

クリスは叫びながら、全員がその場から飛び立つ。大地を削りながら飛翔するそれは、機械の鎧すら纏っている。

「もはや生き物ですら無いっ!」

「翼、クリス響っ」

奏やセレナが来るが、巨体を旋回させ、空の上に鎮座するそれは、一種の神話の怪物だ。

聖杯から風をこぼし、剣は雷鳴を呼び、炎の文字を灯す貨幣の盾、杖から冷気を、氷を形作る。

「また体当たりするかもしれないが」



おそらく、空中でクリス達含め、世界は停止した。

《サンダー ファイア トルネード ブリザード エクストリームショット》

次の瞬間、世界は全てのみ込まれた。

◇

翼を閉じて、大地に下りる時、通常のバニティアンデッド姿で着地する。

イグナイトモジュールが解けて、その場に倒れる装者達。

響など、ギアが解けていた。

だが、それよりダメージを受けている。セレナ、奏を見る。

「……………ガングニール、封印」

《バニティ》

ラウザーにカードを通した後、奏へとカードを投げる。

奏は気づいたとき、カードがスーツに刺さり、ガングニール。ギアがカードの絵の中に吸い込まれていく。

「なっ」

「アガートラーム、封印」

《《バニティ》》

同じ手順でセレナに投げると、セレナにも同じ現象が起き、二人とも前を隠すよりも、カードを掴もうとするが、それは回転しながら、主の下へ戻る。

カードを持つ一真は、その絵柄を見せる。

変化したカードは槍と銀色の腕が描かれたカードであった。

「聖遺物を」

「封印した……………」

そしてカードは手の中に取り込まれ、一真の中に封印された。

それに驚愕しながら、

「天羽々斬、イチイバル。封印」

《《バニティ》》

今度は二枚連続に投げ、それは真っ直ぐ、翼とクリスへと向かっていく。

二人は顔を上げ、クリスは弾丸を放つが、それも砕けて、その破片すら中に吸い込まれながら、接近してくる。

(まず)

その時、轟ツと言う音が鳴り響き、カードは叩き落された。

「え……………」

「なっ」

「……………」

叩き落されてもカードはくるくると回転し続けた。

だがカードはそのまま、一真の下に戻り、戻ってきたカードを掴み、現れたそれを睨む。

「存外と硬いな」

そう言いながら、手を振り、アップし出すは、

「オッサンっ」

「旦那!？」

「司令さんッ」

「叔父上」

「司令……………」

歌姫達は驚愕する中、セレナと奏に着る物を持つてくる切歌と調。



轟ッ、ガンッ、バンッと大気を鳴らし、大地を揺らす二人。

海が二人の余波で舞い上がり、空が割れる。

どちらも血を流しながら、撃ちあっていた。

「翼先輩、オッサンはトライアルシリーズなのか？」

「知っているぞ雪音っ、叔父上は人間だっ」

「人間の動きじゃないですよ……………」

セレナの言いたいことは最もだ。どこの世界に一真と生身で互角に戦える人間がいる。

ここにいたよ。

また巨大な揺れをたたき出した後、距離を取る二人。

そして……………

「!」

一真は人間体へ変わる。

だけどその目の色は人の物では無いように、発光していた。

「一真くん？」

「……………弦十郎さん、魔剣ダインスレイフは、ヒューマンアンデッドの最後の兵器、その

一つ。そして、俺の中のシステムと呼べる物を、進化させた」  
ビキビキと何か音が鳴り響き、一真の傷が癒える。

だがこんな奇怪な音を響かせながらなんて、初めてだ。

「アンデッドの戦いに必要なものは、闘争本能だけ……………魔剣ダインスレイフは、まさにうつつつけの力を持つ、バトルファイトを勝ち残った証だ」

「……………君の本音は、響くんたちの安否か」

それを聞き、私達は驚く。

一真は否定も何もしない。

だが構えることはやめなかった。

それに苦笑しながら、一真へと拳を構える。

「君は、キャロルくんのことでも一人で解決する気か」

「何をいまさら……………俺はそういう道を選んだバカだ……………」

拳を握りしめ、静かに構えると共に、司令も構えた。

「君は心の中に仲間を持つ、そして運命と戦うのだろ」

「ああ、けれど、それを無視してでもやらなければいけないこともあるんだ……………俺は仮面ライダーで、剣崎一真で……………化け物だ」



瞬間、二人は跳んだ。

耳を響かせ、空間を揺らす一撃が激突して、そして……

司令は吹き飛び、一真は立ち尽くす。

「司令さんっ」

「一真……」

だが一真は目の色を変えながら、静かに歩き出す。

「いまの状態で封印はできない、俺が俺で無くなる………いまはそれは困る」

そう言いながらラウズカードを取り出す。

「響、翼ちゃん、クリス。調ちゃん、切歌ちゃん。そしてマリアちゃん………魔剣を組み込むと言うんなら、俺はそれを封印する。それは人間が持つべきものでも、歌でもない」

そう言い、一真はフロートの風を巻き起こしてどこかへと去っていく。

とりあえず、私はこの後、司令に弟子入り頼もう。

◇

「……………負けたか」

「建物の被害を考えれば、よく死者が出なかったものだ」

了子くんがそう言いながら、俺の治療をしている。

すでに痛みも何も無い。これならすぐに動けるか。

「錬金術師達は？」

「錬金術師キャロルはすでに姿は無く、各施設を襲っていたオートスコアラー達も、アン

デッドが現れた時点で逃走していた」

逃がしたか、それは仕方ないだろう。

だがやることは多い。

「どうせ、すぐに色々動く気なんだろう？　緒川達がすでに動いている、休ませたいのだが

な」

「すまないな」

こればかりは悪いと思うが、

「とはいえ、プロジェクトイグナイトはどうなった？」

「……………響の GANG ニールを始め、神獣鏡以外のギアに強化完了。これで剣崎一真と敵

対は」

「確定、というわけか」

ため息をつくが、致し方ない。

彼の目的は分かった。アンデッド、一万年前のバトルファイトで使われた魔劍か。闘争本能を求められる戦いで活躍した物。うってつけだったのだろうか。

「一真くん、不器用な男が。他にやりようがあるだろう」

だが分かる。装者全員、危険と知っていてそれを避けるような人間ではない。

切歌くんや調くんも、リンカーを躊躇いも無く、必要なら連続投与する。

罪の清算、譲れない信念、待つてはくれない戦い。

腹立たしいな。

「結局、俺は一真くんに、危険な物に手を出す子供を、無理矢理止める役を押し付けているだけじゃないか」

分かっているから無理矢理なんだろう。

そこまでもしても止まらないだろう。装者達全員、皆そう言う性格だ。

俺は果たして、彼を咎める資格はあるか？ 危険と知りつつ、戦いに出すこの俺が？

考え込んでいると、了子くんの治療で痛みが走る。

「余計なこと考えない、貴方は貴方のやるべきことをするだけでしょ？」

「……………すまない」

「はあ……………まったく、この世はやはり、呪詛がある限り、分かり合えないのだろうか」  
そう言うが、

「いや違う、俺は少なくとも、彼の願いは分かり合えた」

「……………そうか」

響くん達の絶対安全。

彼の願い、彼の願望、唯一の望み。

いまのままだろうと、俺は、俺達は叶えてみせなくてはいけない。

彼から明日を渡された、俺達の、いや、俺達を選んだ明日だ。



「……………一真さんに、裸にされたんだ私……………」

「セレナっ、なんで嬉しそうなの!？」

「なら私達は」

「胸触られたデスっ」

「ほう……………」

「つまりハチの巣になりたいわけか」

「奏は」

「んなもん気にしていられるか、ともかく、二人を止めるぞっ」

この後、弦十郎が医務室から帰還するまで、混乱が続いたらしい……………

◇

そして、

「エルフナイン」

「あつ、響さんっ」

全ての作業を終えたエルフナイン、まるで合わせたように現れる響。

エルフナインは何も不審に思わず、響の下に近づいていく。

「ちようどよかったです、いま響さんたちのシンフォギアの強化が完了しました。これが響さんのガングニールです」

「ありがとう、大事にするよエルフナイン」

そして響はガングニールを受け取ると共に、その手を離さない。

「?・響さん?」

「ところで、これからエルフナインはどこに住むの?」

「はいっ、このままけん「ダメだよ」きゆう……えっ?」

「エルフナインはね、今日から私の所に住むの」

「な、なんですか? は、はなしてください響さ」

そして力づくで、エルフナインの身体を引き寄せ、抱きしめる。

その時、僅かに頬を舐めた。

「はひっ!?!」

「……………一真と同じか……………」

「……………響さん?」

エルフナインはこの時、初めて自分は危険な状況なのではないかと気づいた時、クリスが入ってくる。

「く、クリスさんたすけ」

その手に人一人入る袋と、縄を持って……………

「え……………」

「……………」

「……………」

「交代な」

「おう」

「ひ、ひび」

そしてエルフナインの悲鳴がこだまして、その時、最後の良心風鳴弦十郎が立ちふさがり、響とクリスは御用となる。

「大変だったねエルフナインちゃん」

「ゼレナさん……………」

「よしよし、いい(こ)いい(こ)……………」

その時、ゼレナは僅かに微笑む。

「ゼレナ？」

少し姉が何かに気づき、聞き返したが、優しく微笑む。

ゼレナからもエルフナインを回収され、しばらく装者は説教を受けることになる。

だが翌日、この話を聞いた小日向未来は静かに響に頷いて、会話していたらしい。

「そうなの……………エルフナインちゃんたら……………」

「私は必ず手に入れるよ」

「……………そう……………」

そう静かに相槌して、虚空を見つめる未来。

響は今日も平和だと呟いた。

## 第7枚・予期せぬ

青い空に白い雲……………

「私には似合わない」

剣崎響、いま海にいる。

司令から言われ、特訓と言う名の、装者の心身を休ませるための期間。

翼は特訓と信じて挑むため、奏がにやにやしながら見ていた。

「響、どうしたの？」

「少しね」

あの後、色々なことがありすぎた。

奏、セレナの聖遺物を一真が回収、一真の本気……………

そしてエルフナインを物にしようとしたが、司令が立ちふさがる。

私のギアはイグナイトモジュールを持たせ、切歌と調も強化完了。

マリアのアガートラームも強化完了。本来なら時限式であるマリアから、セレナへ譲渡するのが戦略なのだが、このギアはなぜかマリアしか纏えないと言う事態。

結果奏とセレナは戦線離脱を余儀なくされ、未来と共に海水浴に来ている。



「エルフナイン、肌焼かないようにしないとな」

「は、はひつ。セレナさんに日焼け止めしてもらいました」

「チツ」

奏とマリアの監視が厳しい。セレナ達も、なにげにエルフナインに構いだしてるぞ。戦いの中、魔剣の制御はとりあえず、

「響さんは高確率で制御可能と思われ、クリスさんや翼さんはイグナイト成功ですね」

泳ぎ休み、その話をする一同。やはりと言うか、私は制御できそうらしいし、感覚からもできると判断できる。

「制御するか………抜剣した時、流れ込んだあの感覚」

「確かに、剣崎さんが危惧するのには納得がいく。一歩間違えれば暴走していただろう」  
「そう言い合う二人。そんな中切歌は、

「どうやって制御したんですか？」

と聞くと、

「……………一真を殺したい」

と当たり前なことを言うクリス。

光が無くなった瞳でぶつぶつと、一真を殺したいと言うことを告げる。翼が肩を揺さぶるが止まらない。

私も考え込む。未来がやめたと横で訴え始めるが、やはりやめる気は無い。が、

「だけど一番許せないのは、私だ」

「雪音？」

「明日を一真からもらって、平和な世界で、力を振るわなきやいけない自分が許せなかった」

その言葉に、一同は黙り、翼も頷く。

「ああそうだな。劍崎さんが守った明日に、私達はあの力、イグナイトを用いる不甲斐なさ」

「だからこそ、だとしても私達は暴走しないよ。選んだのは私なんだって気持ちが強くなったら、イグナイトを纏ってた」

なんとなくわかる言葉を聞きながら、私はガングニールを握りしめる。

一真、私は……………



「これは」

「私の研究、フロンティアと共に使用したレイラインマップです」

緒川、という方と共に、彼らに現在の異変について、少々話し合うことになった。

「レイラインマップ?」

「私はフロンティアで、月遺跡の掌握に多くのフォニックゲインが必要でした。ですの  
で、地脈、竜脈と言う、この星のエネルギーの流れを利用し、人々からごく僅かですが、  
フォニックゲインを集めてました」

いま球体として見せているレイラインマップを見せつつ、ごく最近の変化を伝える。

「ここ最近、そのレイラインの流れが変わり、少しずつ変化している。これはつまり」

「何者かが、レイラインを利用している?」

それに静かに頷く。そして考えられるのは、

「このようなことができるのは、剣崎さんと、もう一人。錬金術を利用する者と、櫻井了  
子さんとも同意見です。なんにしても、エネルギーが集まる場所を掴めれば」

「彼女達の行動を止めることができるやも知れない、ですね」

そして今現在、我々は動き出します。



「くつ、かつこいいチヨキが」

「いい加減にしろ翼」

「切ちゃん、好きなもの買い過ぎ」

「これは買い出し班の特権デスっ」

そう言いながら、私達は買い出しでコンビニから出ていく。

私、暁、月読に奏と、海辺に残る皆のもとへ戻る。



「はあ、暇だ」

「ううっ………恥ずかしいです」

エルフナインを抱きしめている私。未来がずっと見ているけど気にしなくていいか。すべすべの肌、真っ白な肌でぷにぷにしている。

このまま全てを私の物にしたいが、いまは監視の目があるからやめておこう。気のせいかな、こちらの思考に気づいて、怯えている。可愛いものだ。

私がぼーっと海を見ていると、身体がざわめく。

「誰だ」

その瞬間、水が立ち上り、全員が身構える。

だが、

【邪魔だ人形】

氷のメイスが海を吹き飛ばす。

「なっ、イモータルっ。ガリイちゃんの邪魔しに来たのかっ」

「一真っ!!」

バニティアンデッドで現れ、すでにガリイは見向きは起きないが、

「マリアは未来たちをつ、一真とは私が話す」

「お前じゃねえッ、私が話す」

……

「抜剣ッ」

「貴方達っ!？」

私達はあまりにもたやすく、イグナイトを纏う。

その様子を見て、一真は、

【くっ……もう魔剣の影響が】

「違うからッ、それは違うわよ一真っ」

「「なに名前呼びしてる」の姉さんっ」

セレナと共に叫ぶ中、セレナ、未来、エルフナインを連れていくマリア。私達は抜剣を纏い、一真へと向かっていく。あとガリイ。

ばらまかれたアルカノイズ。一真は、

《チェンジ》

コーカサスビートルアンデッドに変化し、カードをばらまく。

《リモート》

無数のアンデッドも現れ、砂地に下りて煙を立てる。だが関係ない乱戦だッ、私達は滅茶苦茶暴れる!!

◇

森林の中に走り込む私達、いまはギアを纏い戦うより、エルフナイン達を守る方が最優先だ。

だが、水柱が舞い上がる。

「そっかんとんには」

ガリイと言うオートスコアラが現れるが、

「行くと思うか？」

それには全員が戦慄する。

「うそっ」

「なんでイモータルがッ!? 他の装者と遊んでるんじや」

「無数にリモートを投げたとき、カメレオンアンデッドを混ぜた」

舞い上がる砂に紛れ入れ替わり、こうして彼はここにいる。

ガリイは憎々し気に一真を見て、一真は静かに、

「悪いが、優先順位を間違えるほど、俺は本能に飲まれていない」

そう言いながら私たちの前に立ち、ガリイはそれに舌打ちして、すぐにどこかへと消えた。

それを静かに見届けてから、こちらを見る。

「マリアちゃん、アガートラームを渡してもらおうか」

「待っててくださいっ」

その時、エルフナインが前に出る。そしてエルフナインを見た一真は、僅かに顔をゆがめた。

「キャラルが俺の、アンデッドの情報を利用して作ったのか……………子持ちか」

「認知するんですか一真さんっ!？」

「セレナそこはいま関係ないから!!!」

「いえ大事なことですよマリアさん」

「小日向未来っ、お願いだからいまは抑えてっ!!」

それと、血から情報取られて、そこから色々あつてホムンクルス作られたからつて子供じゃないわよ一真っ。

なんでいま、こういう話になるのよっ！

「すいません……………」

「そ、それよりも、イグナイトモジュールはキャラルの万象黙示録、世界の分解を止めるために必要なんです」

「ばんしよう……………キャラルの願いは、世界を知ること。父親の願いを叶えることのはずだ」

……………その辺り、彼は知らないのね。

「一真、キャラル達は、エルフラインに作らせていたチフォージュ・シャトーと言う物を使って、世界を分解しようとしているの」

「……………キャラル……………そこまで……………」



「……………なにか分かるの?」

「あの子はいつも言っていた、俺の物になれば、オレは世界を知ると……………」

少し懐かしむような、複雑そうに考え込み、そう呟く。

「世界を知る……………。パパの命題、キャロルは世界を分解して、世界を知る気。一真さんを求めるのは、一真さんが錬金術における四代元素を現す、全にして一の存在だから……………」

小さく呟くエルフナイン。錬金術の考え方だけじゃなくても、一真は研究者としては欲しい逸材なのだろう。

「お願いですつ、危険は承知ですが、このままイグナイトを見逃してください!!」

その言葉に、

「無理だ……………」

その瞬間、青のジョーカーに成る一真。

私はすぐにエルフナインの前に立ち、セレナは衝撃を受けながら聞く。

「どうしてですかつ、私達が暴走する、だからですかつ!」

【そうじゃない……………そう、がつ】

その時、彼は胸を押さえながら、すぐに人の姿に成る。

膝を突き、眼の色は青いまま、肩で息をしていた。

「ど、どうしたの一真っ」

「……………イグナイトは、その力は……………俺の中にある、魔剣を呼び起こすんだ」

「魔剣……………まさか」

「どうしたのっ!?!」

エルフナインが青ざめた顔をしながら、首を振り、一真を見る。

「皆さんのイグナイトが、一真さんの中に封印された魔剣ダインスレイフを呼び起こす……………貴方はその結果、アンデッドの本能に刺激されている。そうなんですか」

目を見開き、自分の胸を握りしめるように力強く握り、歯を食いしばりながら、静かに頷く。

「元より、聖遺物は……………ヒューマンアンデッドの武器が使われている物が多い」

「それじゃ」

「アンデッドはどうしようもなく、闘争本能のみでできているんだ……………俺も例外じゃない」

「闘争本能……………貴方の本能を向ける対象、敵は」

「ギアを纏う、私達装者っ!?!」

セレナは叫び、それには静かに後ろに下がりながら、一真は、

「イグナイトにより、俺の中の本能が、魔剣によって呼び起こされ始めて……………忘れる

な、俺が意識を失えば、俺はお前たちの敵なんだ……………」

そう言い彼は去る。

彼はなりたくてなつていたんじゃない。

彼の中の怪物が、そうさせていたんだ……………」



「あつ、ああ……………アアアアアアアアアアアア」

「苦しいね、辛いね、我慢できないね？」

「黙れッ」

「楽になりなよ？ 君は全てを壊す怪物で、彼らは敵だよ？」

「違うッ」

人のいない無人島で、暴風に吹き飛ばされたように地形が変わる。

人でもない、数多の姿になりながら、暴れる力を抑え込む。

「俺は、俺は諦めない！」

「君は何度繰り返すんだい？ 何度自問自答して、何度」

「黙れ」

その時、無人島を叩き割る一撃を地面に放ち、水が噴き出し、獣は吠える。元の姿に戻り、そして空を見た。

「何度だって俺は悩むし苦しむ、それでいいさ……………それが、俺が選んだ生き方だ」  
【……………】

「黙ったな、黙るよな。それがお前だからな」

そして歩く、一歩一歩引きずるように。

「何度迷って、苦しんで、悩んでも……………」

人で無くなっても、これだけは迷いなく言える。

「俺が剣崎一真だ、そうだろ……………みんな」

誰に言う訳でもなく、そしてまた歩き出す。



「姉さん……………」

夕焼けの中、砂浜で黄昏ていると、セレナが近づいて来た。

「セレナ……………」

思えば当たり前か。彼はアンデッドの所為で人間の中から離れている。

セレナ、あの時の彼はおそらく、闘争本能が勝っていたのだろう。でなければ、彼の性格ならば、施設を壊しているのだから……………

「私の為に、離れたんだね……………」

「色々、私達は間違っていたのね」

「いまも苦しんでいるのだろう。一真がアンデッドの本能と戦うとき、いつも一人でいるらしい。」

「自分達は安全な場所に預けたり、居るように言ってから、どこかで苦しんでいる。」

「……………」

「それでも私は……………」

「考え込んでいると、エルフナインがビーチでボールを打つ練習をしていた。」

「エルフナイン」

「あつ、マリアさん、セレナさん」

「話してみると、記憶の中の知識と照らし合わせ、打つ練習をしている。」

「そして私は話し合う。」

「他の皆さんも、今回の事は心を揺るがすことでした……………ボクの考えが足りませんでした、一真さんが魔剣を持っているのなら、可能性があったのに」

「……………それでも、私達は魔剣を手にしていたわ。より強くなるために」

弱いがために何も守れない、あの日の自分。

それが嫌で、力を求め、だけどその結果、あの人を傷付ける。

「一真のように、強く有れば……………」

その時、

「響さんたちとは違う事を言うんですね……………」

「えっ」

私達姉妹は揃って驚く。

「響さんとクリスさんは言ってたんです、一真は弱いつて」

「あの人か」

「そんなはず、あの方は一万年も続く戦いを終わらして、いまでも多くの人々をまも

……………」

その時、あの子達の言葉を、顔を思い出す……………」

そうだ。一真がいるから、いまがあるんだ。

なのに私達は、力を欲して、危険に向かう。

彼は何を望んで人を捨てた？

彼は何を願って、仲間を裏切り、人間であることを捨てた？

「彼は弱い……………」

本当に強かったら、彼は挑まないのではないか？

彼は弱いから、いまもなお、運命に挑んでいる。

誰かを、明日を託す人類を、世界を守る為に……………

「……………私は、私達は彼のことを知らなすぎる」

「姉さん……………」

「彼は捨てたくて捨てたんじゃない、やめたくてやめたんじゃない……………だけど」

彼が彼だから、選んだ道。

私は……………

その時、また水が舞い上がり、すぐに構える。

私は弱い。勝手に誰かを強いと決めつけ、憧れ、強いと思いついていた。

だけと違う。あの人は弱い……………

それでも、彼は彼だから選んだ道。それがあからいまいまがある。

なら、託された私、罪を背負った私がするべきことは一つ。

「彼がくれた明日は、間違いじゃないと証明するためにッ。イグナイトモジュール拔  
剣ッ!!」



誰が話すか、一真の話は私の話だッ。

一真の事を少しは理解したようだが、それだけの分際で得意げになって。行き遅れろッ。

「響、なんか顔怖いよ」

「……………(ぐ)めん」

ガリイがあの後、マリアを襲ったが、イグナイトで撃退したらしい。私達は夜食を買いに、コンビニに出向く。

あの後、あの姉妹は一真のことを聞こうとする。忌々しい。

「イライラする……………」

そう言い、コンビニを見る。そこから男が出てきた。

それは、

「！ お、とう、さ……………」

「!!! ひ、ひびき……………響っ!!!」





「放してッ、いきなりなんだよッ！」

少女は叫ぶ、泣き叫ぶように、睨んでいながら、今にも泣きそうな顔で、

「俺が悪いのは分かってているッ、響が苦しんで、一番辛いのは響なのに、自分が一番辛いと思つて、家を出て行つた……俺のことはいい、恨んでいい、罵つていいッ。けど母さんたちは違うつ、違うんだっ。母さんたちは」

「嫌だッ、聞きたくないっ!!」

その手を振りほどき、少女は男から距離を取る。

男はそれに、とても言い表せないほど動揺した。

「私は、私はこの手で壊したんだ……みんな、家族を、この手で」

「違う、違うつ。響が壊したんじゃない、俺が、俺が弱い所為なんだっ。響、頼む、俺はいい、俺だけはいいいんだひび」

「やめろ近づくなっ」

それに男はふらつくように視界が歪む。

「響……」

「私は、私は」

響は静かに、その場から走り出す。

「ま、まっ」

その時、男はそれ以上何も、言えなくなる。

その場に崩れ落ち、首を垂れた。

何かに謝るように、誰かに謝るように……

もう一人の少女はすぐに友人を追う。

砂浜、夜の海、そこにうずくまる少女をすぐに見つける。

その少女は、彼と共にいた時のように、殻に閉じこもっていた……

## 第8枚・強き弱き者たち

俺がいけなかつたんだ。

風評被害の所為で仕事があまくいかなくなり、色々なものに耐えられなくなり、家を出た。

それから一か月も経ってからか。新聞で娘が行方不明になったことを知って、必死に頭を下げて状況を教えてもらう。

俺が、俺だけがいけなかつたんだ。一番傷付いていたのは響なのに……………

その後は俺は必死に娘を捜し歩く。

そしてたまたま立ち寄ったコンビニで、

「!!! ひ、ひびき……………響っ!!!」

見つけた、見つけた娘は……………

「放してッ、いきなりなんだよッ!」

俺が知っている娘の面影はなく、あのいつも笑顔だった娘が笑顔じゃなかった。

俺の所為だ、俺が傷つけたんだ。

だが娘は自分の所為と叫び、泣きそうな顔で睨んでくる。

そんな顔、俺は、俺はッ。

あの日の自分が嫌になる。

その場から去る娘を追いかけられることもできず、俺はその場に膝をつく……………



「……………」

「うう……………ううっ……………どぼじて」

抱きしめられ、抱き枕のように響に抱きしめられるエルフナインちゃん。

昨日の夜。

「エルフナインの相部屋はくじにするからな」

「各々が用意したくじでやるわよ」

クリスと共に細工したくじを捨てた響は、気合いを入れてくじを作り、エルフナインちゃんに引かせる。

みんなが用意したくじの中、エルフナインちゃんが引いたのは、響の部屋のくじ。

こうして寝て起きても抱きしめられ、その腕で包まれている。

なぜかこちらを見て怯えている、なぜ怯えているか分からない。

あの夜、響はおじさんに出会ってからこの調子であり、エルフナインちゃんを抱きしめている。

エルフナインちゃんとの同室決めに勝ち、ずっと抱きしめられていた。

ずっと……ずっと……

「な、何で見てるんですかあ………いつ、いつたいいつから」

「気にしなくていいよ」

私はそう穏やかな声で答えて、その頬を撫でる。

響を虜にするその肌を………すべすべだね、可愛いね。

これなら響と一緒に………

なんで泣きそうな顔で私を見るのか分からないな。

神獣鏡があれば、私はギアを纏っていそうだ。歌が、私の中からあふれだす。

大丈夫、私が見てあげられるから。

ずっと、ずっと………



「結局、あのままでいいのだろうか」

「にゃ〜」

あの後、すぐにバカンスが終わり、エルフナインを開放した。

私はすぐに、私の居場所へ向かうことにする。

野良猫の集まりの中で、膝の上で丸くなる猫。ここは一真と過ごした廃屋だ。

猫とたわむれる中で、少しだけ親の顔を思い出す。

「……………やつぱり無理だ」

会いたくない。

もう壊れるのも、壊すのも、その後も見るのは嫌だ。

一真に会いたい、一真を感じたい。

あの後、エルフナインを抱きしめて、少しは一真を感じていた。やはり一真が関わるからだ。

必ず手に入れよう、あの子は私の下にいるべき子だと確信した。

全てを終えた後のことを考えたその時、また猫が来る。親子で現れ、すり寄ってくる。

子猫でも生んだのだろうか？ 子猫を加えたりしていた。

そう言えばお腹が大きな子がいたと思います、ここをねぐらにしていた猫。

生んだ猫をくわえて、まるで餌をくれている人だと認識させるがためか、私の膝に子猫を置く。

三匹の目が見えていない子猫がにやーにやーと膝の上で暴れている。

「お前達は親子仲良しのままでいてくれよ」

私と違って……………

「……………一真」

この後、エルフナインを抱きしめに行くか。

めちやくちや可愛がつてやりたいな……………

◇

今日は少し外で出歩く中で、私は切ちゃんと共に飲み物を買う。

切ちゃんがハイテンションで自動販売機同時押しで買ったため、少し変なジュースを飲む。ドリアンエナジー味って、どうして作られたんだろう？

不思議なおいしさのジュースを飲みながら、少し会話する。イグナイトについての話。

そうこうしていると、連絡が入る。

◇

「二人とも、問題ないか」

「問題無しデス」

「はい」

今回近くにいたと言うことで、私達は響先輩についていく。

響先輩は少し何かあったようだが、それは、

「へいき、へっちゃらだそんなの。いいから行くぞ」

「は、はいっ」

そして地下の施設へと入ると、回線らしい重要な機材ばかり見える。

「まずいな、ここじゃ私は戦いづらい………相手は」

軽い舌打ちした後、人選ミスだろと嘆いていた。

物陰に隠れながら、アルカノイズと、オートスコアラーのミカと言う、炎と赤い水晶みたいな物を取り出して戦う相手。

「パワータイプか………切歌、調。攻撃は私がひきつけるから、お前らがミカと戦ってくれ。私はパワーで彼奴の水晶を壊すから」

「はいデス」

私もこくりと頷く。正直私はそんな守られながらは嫌だが、ここは壊れそうな物で溢



れている。

そこを気を付けて戦うしか無い為、私達は従い、先手を打つ。

◇

無数の丸鋸を放ち、切ちやんの戦慄が鳴り響く。

「ゾ?」

それに手のひらから水晶体を取り出し、振り回すミカ。

「装者かだゾ、ミカはいま忙しいんだゾっ」

「知るかッ。大人しく壊されろ!!」

前に出るが、いつもよりも勢いはない。

なるべく囿になりつつ、攻撃が放たれる。向こうはやっぱり、周りにお構いなしだ。

炎は無理だが、水晶体は壊す響先輩。切ちやんと共にユニゾンで攻めるが、

「そのくらいじゃ、ミカは倒せないゾ」

そう遊ぶように言われながら、全部の攻撃が届かない。

手に持つ水晶なりで、私の攻撃が防がれたり、切ちやんも攻め切れない。

水晶体の攻撃は全て響先輩が受け持っているけど、このままじゃ、

「こうなれば」

そう言い、切ちゃんはイグナイトのペンダントを握りしめる。

「待って切ちゃんっ、それじゃ響先輩の邪魔になるっ」

響先輩は本気が出せないから私達に任せてくれてるのに、その私達が周りを巻き込む攻撃したら意味が無いよっ。

「デスけど、このままじゃこいつに勝てないデスっ」

「！ 止まるな二人ともっ」

その時、特大の水晶体が切ちゃんに放たれ、響先輩が無理に前に手で砕く。だけど勢いは止められず、切ちゃんと一緒に後ろの壁へと吹き飛んだ!?

「がはっ」

「デスっ!?!」

二人がバランスを崩すと、炎が放たれる。私はすぐに丸鋸の盾で防ぐ中、「調っ、このままじゃダメです、やっぱりイグナイトを」

「だからそれじゃ響先輩が我慢した意味がないよっ。ここはユニゾンで」

「それじゃダメだから」

「口論している場合かつ、くっ……………」

「響先輩っ」

僅かに苦しそうに膝をつくとき……………

《トルネード》

風を纏いながらバイク音が響、アルカノイズや炎、ミカを吹き飛ばす。

「一真さんっ」

「一真……………ワイルドカリス」

バイクから飛び降りた瞬間、カリスアローから光弾を放ち、ミカに命中させる。

「だゾおおおおお」

吹き飛ばすミカに追撃を掛けるように駆け、13枚のカードが1枚のカードに集まる。

《ワイルド》

そのまま斬り付けるように、醒弓カリススラッシュャーで斬り付けようとするが、

「お前はダメって言われてるんだゾっ」

早口でそう言った途端、無数のアルカノイズがばらまかれ、一斉に向かってくる。

それを切り伏せると、すぐに小瓶で逃げるミカ。

「逃げた……………」

「切歌、調構えろ」

「!? 響先輩、でもっ」

「でもじゃない……………一真は、敵だ」

その言葉に、胸が締め付けられる。

この人がそれを言う。その顔が痛みからなのか分からないけど、酷く歪んでいた。

(私は……………)

カリスであるあの人は、静かに見つめながら、そして、

「ここでの戦闘は、人に迷惑をかける」

そう言った途端、人の姿に戻る。

一真さんはそう言い、響先輩を見つめた。

「……………いまの俺に、心配する資格は無いか」

「……………なんの話だ」

「……………半端者の、我が儘だ」

そう悲しそうに響先輩を見ながら、バイクに乗って走り去る。

その後、糸が切れたように、響先輩は倒れた……………



「なんで止めたんデスカ調っ」

「あそこでイグナイトで戦うことなんてできないっ、切ちゃんの分からず屋っ」

「分ならず屋なのは調デスっ」

「やめなさいあなたたちッ」

響が倒れてから、この子達はこの調子だ。

戦闘結果を見る限り、場所が悪い。回線や機械器具が多く、 GANG ニールのパワーが使えないし、イグナイトなんて成功しても GANG ニールと同じだ。

調の言いたい事は切歌にも分かっている。だけど切歌の言う通り、イグナイト以外に、オートスコアラを倒せるか分からない。

「ともかく、二人は大人しくしていなさいっ」

「マリア……………」

「……………」

二人は黙り込む中、響の方もだ。

あの子も少し無理している気がする。一真が気にかけた。

私はすぐにあの日の夜を思い出し、小日向未来に話を聞こうと、動き出す。

◇

夕焼けの中、切ちゃんと共に、家に帰る。

何も話さず、ただ歩く。

その時、

「！」

静かにあの人が現れた。

「……………」

「一真さんっ」

「デスっ」

一真さんは静かにこちらを見ながら、手を向けて呟く。

「イガリマとシウルシヤガナを渡してくれ」

そう言われ、私達はお互い、自分のペンダントを握りしめる。

それはいや、それだけはいやっ。

「これだけは」

「一真に言われても、渡せないデスっ」

「……………なんでだ」

それに、私達は黙り、静かに、

「私達は間違いを犯した、自分達に正義があつて、月の落下は自分達しか止められないと思ひ込んでいました」

「デスけど違った、私達は間違えたんデス」

「だからもう間違えないためにも、これが必要」

「過ちを正すために、聖遺物、イグナイトの力が必要デスっ」

それを聞きながら、一真さんは悲しそうに見つめていた。

「……………過ちは正せない、なにがあるうと」

そう悲しそうにつぶやいた。

「君たちは一つ、思い違いをしているよ」

「えっ……………」



「力は力だ。俺たち仮面ライダーの力は、怪人たちと変わらない。暴力の力だ」

「デ、デスけど」

「一真さんはその力で、人を、世界や人類を救った」

「だけど、俺は仲間たちを裏切った」

そうだ、俺の過ちは、けして消えない。

「俺は始を救い、戦いという運命から解放したいと、戦いを終わらせたいと願った。これ

しかなかった、それしか思いつかなかった。だけど俺は仲間を裏切った、人間であることを捨てた」

二人は悲しそうに俺を見る。

俺はいま、どんな顔をしているんだろうか。

「だけど、それでも俺はこの選択を選ぶよ。例え怪人でも、何であろうと俺は仮面ライダーでありたいと願う……君たちは間違った、けど、それを力で償う必要は無い」

「力で償う必要………だけど」

「君たちが戦う理由が償いなら、俺は力づくでギアを取り上げる」

前に踏み込むと、彼女たちは後ろに下がる。

「な、なんで」

「力で償えるものなんてない、守るための理由なんて、そんなものはいらない」

「ー!」

「守るために戦う理由なんて、誰かを守り、救いたいって思っただけで十分だ。償うためなら、それは誰かを守りたいんじゃない、自分が救われたいから戦うんだ」

「……………私は」

「違うデス……私達が戦いたい理由は、守られて、大切な人が傷付いてほしくないだけ」



「切ちゃん」

「調……………」

何か考え込む二人は、俺を見る。今度は悲しい顔ではなく、迎え合う為に、そんな顔だ。

「一真さん、やっぱり私達は、聖遺物を渡せません」

「大切な人たちだけに、戦わせて、自分達は安全な場所にいたくない、その隣で、一緒に戦いたいんです」

「……………」

強いな、この子たちは……………」

「そうだ、戦う理由なんてそれでいいんだ……………凄いな、俺は気づくのに、何年も経った、全部取り返しがつかないぐらいに……………」

「一真さん……………」

「だけど俺は変われない、もうこの道を選んだ、だけじゃない。結局これが、俺が俺だから、だからだ」

その時、無数の爆発と悲鳴が響き渡る。

俺たちはすぐに気づき、そこにミカと言うキャラルの人形がいた……………」



その後、私達は戦い、調と共に抜剣したデス。

なんとかユニゾンで勝てた後、アルカノイズを倒していた一真さんに……………  
む、むむ、胸触られて、リンカーの悪影響など、治してもらったデス。

正直、恥ずかしいデスけど、身体の調子が良くなりました。

一真さんはその後悲しそうに、その場を去ります。

ずっと目の色が赤や青、緑になったりしてました。先輩に聞くと、ジョーカーの力が安定してないらしいデス。

「イグナイトはやはり、剣崎さんの力、アンデッドの力を暴走させているのか」  
「だけど、だとしても私達は手放すことはできないわ」

そうマリアと翼先輩が話し合います。デスが……………

「調ちゃん、お姉さん家に少し来ようか」

「お前はこつちだ……………私らに黙って一真と話してたことを話してもらおうか」  
こつちを助けてくださいッ、調、調エエエエエエエエエエッ！



「……………」

静かに一人、怪物が黙り込む。

身体の中で闘争を求め。

「……………俺は」

闇の中で呟きながら、静かにそれと戦い続けた……………

## 第9枚・防人のつるぎと運命のけん

その日私達装者は、風鳴司令によるミーティングをしていた。

切歌と調はもう問題ない、響も回復した。マムもモニター越しに作戦会議に参加している。

「先のオートスコアラーや敵の動きから、次の襲撃地点が予測された」

「それはホントか旦那？」

「ああ。場所は深淵の竜宮、異端技術による危険物や機密性が高い物を封印した、絶対禁区。その性質上、我々ですら全貌を知らないと言う場所だ」

「地図からして海中、深海か」

マムとは別に映し出されるモニターを見る。確かにこの位置は海底でしょうね。

響の言葉に、風鳴司令は頷く。

「オートスコアラーがその位置を割り出していたと言うことは」

「そこにある危険物」

「なら話は簡単だつ、先回りして迎え撃つだけのこと」

「だが、襲撃予測地点は、もう一つある」

それは緒川さんが気になるため搜索したところ、神社などの関係物が何者による襲撃にあった。

全ての施設は竜脈を収める機能を持つもので、マムの話でもそれにより、レイライン、星の力が操作されているらしい。

「つまり、そこにもキャロル達が現れると」

「その通りですマリアさん」

その時、少しだけ顔を曇らせ、響の前に出る風鳴司令。

「未来くんには悪いが………こいつを渡しておく必要があるだろう」

「神獣鏡………」

「アルカノイズ対策はすでにされている………」

そう言い渡される、神獣鏡のペンダント。

それは少しでも戦力が欲しい、いまを考えての事。

一般人を巻き込む………彼、一真がそれを知れば、きっと悲しむだろう。

だけど、結局選ぶのは私達だ。

「もちろん、他のアルカノイズ対策は万全よ」

「どこにアルカノイズが出てモモニタリングします」

「皆さんの体調管理なども任せてください」

フィーネ、じゃなく櫻井了子、藤堯さん、友里さんもそう宣言してくれた。

「すまないとは思う、だが」

「きつと未来はだめつて言つても聞かない……私も聞かないんだから、止める権利はない」

後でそれを渡すために、話を通さなければいけない。

「……………君と未来くんは同じ班にしよう」

そしてチーム分けがされた。

深淵の竜宮にはクリス、切歌、調。

有事の際に動くために、響が残り、私と翼がもう一つの要石なる物がある翼の実家へと向かうことになる。



「十年ぶり……………こんな形で帰るとは」

「了解しました。クリスさんたちも、深淵の竜宮に到着するようです」

色々揉めたものだ。深海なら剣崎さんが出る可能性があると言う声や、一人なら剣崎さんが現れるので揉めた。

いまの状態でようやく落ち着き、私はこうしてここにいる。

「……………」

「？ 翼さん」

「あつ、いえ。少し……………」

思えば、もしもあの人が劍崎さんなら、もしかすれば……………  
時間を見つけて、少し見に行くか。

◇

静かにバイクを走らせ、気配を追う。

「海にイガリマ、イチイバル……………シヤシユラガマ？ いや違う……………ザババの鎌。地

上は響が残って、ここには天羽々斬とアガートラムか」

気配を追う中、天羽々斬とアガートラムが活性化する。これは力を使っている。

（となるとキャロルか）

バイクを走らせ、とある屋敷を見つけ出し、そこにいると分かる。

翼ちゃんの巨大な剣にて攻撃する技が見えたが、それが緑の光で砕かれていた。

すぐにフロントをバイクへ使う。

「変身っ」

『ターンアツプ』

力の安定を第一に、かつ一番使いやすいブレイドになる。

風が中庭で巻き起こり、アルカノイズがうろろうろしていた。

「二真っ」

すぐに緑の、ドレスの裾をつまみ上げていたオートスコアラーを見つけたため、醒剣ブレイラウザーで斬りかかる。

だが緑のオートスコアラーは気にもせず、余裕のまま、

「劍崎さんっ、だめだっ！」

オートスコアラーが持つ劍から放たれる光が触れると、醒剣ブレイラウザーの劍先が砕け散る。

「ッ!?!」

「残念、私の武器ソートブレイカー劍殺しは、劍と定義される物ならば、硬度も精度も関係」

「ウツイイイイイイイイイイイイイイイイ!!?」

いまだ崩壊する劍を使い、そのまま醒剣ブレイラウザーで叩き斬った。

かすかに吹き飛び、大地が砕け散る。



「なぜっ、哲学兵器剣殺しがっ!？」

醒剣ブレイラウザーは刀身が消えて、残る箇所もヒビ、亀裂が走っているが、光が崩壊を止め、ブレイドは剣を握りしめる。

「バカな、剣と定義されているはずの武器が、砕けない!? イモータルには哲学兵器は効かないと言うの?」

「俺の剣は折れないッ、何度も折れても、俺の心が折れない限り折れない!!」

「哲学兵器を概念、信念で防いだとッ!？」

「ウツイイイイイイイイイイイイイイ」

「くっ」

かすかにある部分でカードを使う。

《スラツシュ》

斬撃で建物ごと吹っ飛ばすが、それにノイズしか巻き込めない。

瞬間風が吹きだされ、それを避けると、巨大な石、いや、何か特別な処理をされたものが破壊された。

「今日はここまで、イモータル相手では分が悪い……………」

風が巻き起こり、姿を消す。

瞬間、ブレイラウザーは完全に砕け散る。

ブレイドの姿もまた、簡単に碎け散った。



「……………剣崎さん」

「……………」

翼ちゃんはこちらを見る。何か動揺している。

緒川さんが後ろから拳銃を構えている。だが、

「俺に拳銃は効かない」

「それでも、いま翼さん達の聖遺物をお渡しする訳にはいきません」

「……………危険と、俺は警告している」

「それでも」

マリアちゃんが前に出る。静かに、

「切歌達から聞いているわ……………私達はそれでも手放す気は無い、みんな、戦う力を、貴

方が守った明日を守る力を求める」

「もしもそうなら、魔剣の力を使ってほしくは無い。俺はそんなことのために、戦ってい

たわけじゃない。なにより……………」

「なにより……………」

「……………俺はこんな明日の為に、戦ったわけじゃない」

それにマリアちゃんは黙り込む。

「俺が守りたかった明日は、戦いの無い世界だ」

「それは」

「分かっている、そんな明日が無いのは。けれど、俺の戦う理由は変わらない。戦えない人たちの為に戦う。だからこそ、俺は魔剣を回収する。俺が、装者が暴走する可能性があるのなら」

そう告げるが、人が近づく気配がする。ここは引くしかない……………

「装者が、二課が誰かの為に力を持つのは分かる。だからと言って、だからこそ……………俺は魔剣を見過ごせないんだ」

「……………劍崎さん」

翼ちゃんが眩くと共に、カメレオンアンデッドにかわり、その場から消える。

◇

とある場所で、俺はアンデッドの目を使う。

キャロルがどこかの海底、施設の中でコインのオートスコアラードと行動して、クリス、切歌ちゃん、調ちゃんが、弦十郎さんたちの潜水艦で向かっている。

……………キャロルのホームクルスもいるのか。

そうしていると、

「なぜここが分かった」

そう呟くと、静かに現れたのは、マリアちゃんだった。

「翼から聞いたの」

マリアちゃんがベンチに座る俺の側に来ていて、静かに腕を組む。

「翼ちゃんが、なんで」

ここは少しばかり記憶にある、ただそれだけで選んだ場所だ。

そうここは、ただの公園。

それに少し考え込みながら、

「……………あなた、昔ここで猫を助けなかった？　小さな女の子の歌を聴いて」

「？　ああ……………十年前かそこらか」

一生懸命に歌いながら、時々歌詞を忘れてたりした子。なぜか演歌だったりとおかしく、可愛い子だった。

確かクリスに会う前か……………

一度だけ会話した記憶はある。だが、なぜ？

「あれ、翼よ」

「……………そうか」

静かに立ち上がりながら、どうするべきか考える。

やはり魔剣は回収するべきか、あれに俺の中にある魔剣が強く反応している。あれの力は不幸しか呼ばない。

【いまは彼女一人、回収するのは簡単だ】

「……………」

声を振り払い、俺はマリアちゃんを見る。いまは敵なのに、彼女は構えない。

この魔剣、欠片を集めるたびに、どれほど悲しい出来事があったことを聞いたか分からない。

だからこそ、この手で回収して、封印するべきものなんだ。

だが首を振り、静かに聞く。

「魔剣の欠片がある土地は争いが絶えず、欠片の所有者は暴君として国を治めた」

「……………貴方が欠片を集めたときから」

「持っているだけで、あれは人の闘争本能を引き出す。だからこそ、俺は人間達から回収し続けている」

「……………一真」

「翼ちゃんがあの子なら、悪いがますます置いておけない。あの不器用な人の為にも」

「不器用な、人？」

そして俺は静かに、あることを伝える。

◇

「なぜだッ、ここにヤントラ・サルヴァス帕があるはず!? 一度はここに収められているのは調査済みだ、なのに、なぜ無いッ!?!」

それはありとあらゆる機械を、ダイレクトに所有者と繋げ、自在に行使用する聖遺物。

ここにあるはずのそれが無く、キャロルは叫ぶように探す。

「派手に偽の情報に踊らされているのか?」

そうレイアがポーズしながら聞くが、それは無い。

「情報元は奴らからだッ、ならここにあるのは間違いない。一応は協力関係だ、奴らが偽の情報を渡す意味は無い」

そう考え、静かに思考する。

その時、ふと、何かに気づく

「いや待て、レイア、外の聖遺物、他にもあるか分かるかッ!？」  
「?。」

すぐにコインであたりの倉庫を破壊するが、なにも無い。

それにキャロルは愕然となる。

「クソツタレがッ、一番重要と思ひ、オレ自身が動いたが、やられたッ」

「どういう意味だマスター?。」

「劍崎一真だッ、こんな深海の、世界政府の目が光る施設に、何人も気づかれずに危険物を回収できるのは奴しかない!!」

「へえ、ならあの時の紙が例のもんってことか」

無数の弾幕を放つが、レイアはすぐ無数のコインを放ち防ぐ。

「雪音クリス……………一真と長くいた」

突然の来訪者にして、キャロルが最も嫌悪する装者の一人でもあるクリスは、ニヤリと笑う。

「オレと一真は数年程度の関係じゃない、とか言ってたが、一真のことなくんも知らないんだな」

「なんだと」

お互いけん制し合いながら、それでも愉快そうにクリスは笑う。

「私は一真が変な紙束をある探偵に渡してるところ見たことあるんだ」

「なっ……………」

驚愕する内容に、キャロルは一瞬頭の中が真っ白になる。

側にいる切歌と調も、ええ〜と言う顔で驚いていた。

「なぜかは知らないが、機械やらなんやら簡単に動かしていたな。確か返却もされてないからな、もう二度と誰にも触れることは無い」

「それはそれで問題発言の気が」

「デブス……………」

盛大に舌打ちするキャロル。そしてここで、

「とりあえず、一真のこともある。死んでもらうか！」

「抜かせガキツ、一真と歳の差考えろ！」

「派手に天に唾を放つな」

レイアの一言に二人は鋭い目つきで攻撃し合う。

その光景に二人の装者は、

「いやそれは」



「ダメデース……………」

◇

また爆発が起きて、急いで屋敷へと来ると、翼ちゃんと、

「子煩悩の」

「き、君は」

「えっ……………」

なぜか、可愛い娘に家を継がせたくないと常日頃愚痴っていた人がいた。もう年を取っていたが間違いない。

「マリアちゃんにも話したそれを、静かにマリアちゃんは叫んだ。

「翼っ、一真の話したことは本当らしいわよ」

「お父様……………」

そして何か吹っ切れた顔をし、ブローチ、魔剣の力を使う。

「翼ちゃん」

俺が止めようと前に出たが、その顔を見て止まる。

「剣崎さん、私は、私達は貴方から明日をもらった。だからこそ、私達は、いまを救う為



「呪われた旋律を手に入れるため、わざとイグナイトを受けた……それでなにかをするために」

「ならば、倒されることが鍵なら」

「残るは響とクリス、だけどクリスは」

すぐに目を使い、クリスを見るが、

「!? フロノティアアでマリアたちと一緒に居た博士がいるぞ」

「フロンティアねっ、って、なんでドクターウエルが深淵の竜宮につ。そもそも見えるの」

「万能の力はレイラインを通して、見通すこともできる。だが声は届けられない、クリスはいっ魔法剣を使うか分からない」

「連絡は」

「無理ねっ、その為の妨害は張っているわっ。それじゃ、歌姫さん、これで」

そして爆発し、完全に歌を届け終えた。こうなると、

「ちっ」

《チェンジ》

イーグルアンデッドにかわり、羽ばたく前に、

「俺は響のもとに飛ぶ、君らも」

「ええっ」

「分かりました一真さんっ」

そして動き出す。



「……………」

猫と戯れる響。子猫が母猫に甘える様子、父猫が尻尾で遊ばせたりする様子を見なが

ら、

「……………」

ただ静かに見続けた……………







エルフナインから無線でそう言われ、すぐに離れた。

私がいいた場所を貫き、黒い欠片、ドヴェルグIIダインの遺産が出て来ると、刃先に繋がる。

「がつ………完全体になったか、魔剣ッ」

そして身体の中に封印する一真。

「あれが、最後の欠片だったのか………くそッ」

無理矢理立ち上がると共に、一真は青のジョーカーになる。

「ここから陸地まで時間が無いクリスツ、弦十郎さんに頼んで陸地まで連れて行ってくれっ、このままじゃ間に合わなくなるぞっ」

私はすぐにオツサンに連絡し、すぐに動き出す。



私達は連絡待ちをしていた。

「定義報告、ありませんね」

「ああ、なんかあった。つて考えるべきなんだろうな、緒川さんにもつながらない」

私の家でセレナと奏、そして未来。留守番組がいる中、一真も来ない、連絡もない。や



ばいにおいがする。

「……………！」

その時、辺りを揺らす地震が起きた。

「地震っ!？」

「いや違う」

まるで地震響きのようで、このタイミングの揺れは危機感しかない。

「ごめん未来、力を貸して」

「うんっ」

未来が手を握ってきたので、二人も緊急時の行動プランで動き出す中、ギアを纏って外に出た。



「響っ」

一真や了子のおかげか所為か、未来もまた、リンカーが無くても神獣鏡を纏える装者になって、外に出ていた。

外の景色は都心の空が割れて、中から建物が現れている。

その光景に驚きながら、大急ぎで向かっていった。

◇

「どうだッ、僕の左腕は!! トリガーパーツなど必要ないッ、僕と繋がった聖遺物は、全て意のままに動くのだ」

高笑いする、深淵の竜宮より運び込んだこの男。この男のおかげで、チフオージユ・シャトーは動き出した。

「オートスコアラー達によって、呪われた旋律はあと一つ、だったが、これならばもう必要ない。これで世界はバラバラにかみ砕かれる」

「アアア? 世界を、かみ砕く?」

「……………父親に託された命題だ」

—— キャロル、生きて、もつと世界を知るんだ ——

「分かってるって、だから世界をバラバラにするのっ。だから一真を手に入れるのっ」  
両腕を広げ、ワタシは数々の、一真のデータを立体モニターへ映す。

「万能の力、地球上の生物全ての始祖っ！ 全ての起源であり、全ての生命の大元っ。世界をバラバラにするだけじゃダメだったんだっ♪」

そう、全て一真がいなきやだめなの♪

「全てを、世界を、生命いのちを形成したバトルファイト♪ 知らなかった、そして知ったのっ♪」

あの日の喜びが湧き上がる、始祖の存在がワタシにとつての分岐点だ。

世界の始まりを決める戦い。ワタシの一真、そう、一真はワタシの物っ。

「誰にも渡さないっ、一真はワタシのなんだ♪」

世界を、一真を分解して知る。全て、そう、本当に全てを、世界を知るんだ。

「あとは一真をこの手にして、世界をバラバラにして調べ尽くすのっ♪♪ これぞ万象の全てだけじゃなく、生命そのものも理解できるわっ」

ああなんてすばらしいんだっ、あの日、あの日があったからこれに気づけた。

如何なる事があるうと生物しての機能が停止することがない生き物。生物の限界を超えた生物。

だから手に入れなきやいけない、パパとの命題の為にも、絶対に手に入れなきやいけないの♪

「もうすぐ来る、ワタシの一真っ。一真なら必ず来るわ♪ ワタシの、ワタシだけの獣



真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一真一  
真一真一真一——

「はあああああ、ノウ、レディに夢は無いのか？ 英雄とはあくなき夢を見、誰かに夢を見せるものツ、託された物なんかに満足していたら、底もてっぺんもたかが知れる」

……………なんか、だと？

「父親から託されたものを、なんかとお前は切って捨てたか」

「馬鹿げたものだ、ハア、レディがその様子では、その命題とやらも解き明かせるか疑わしう」

「なに」

「至高の英知を手にするなど、出来るのは英雄だけ。英雄の器が小学生サイズのレディでは荷が重すぎるっ」

ちっ。

「やはり世界に英雄は僕独りぼっち、二人と並ぶ者なんていないツ」

その時、一真の顔が過った……………

そこから廃棄予定の物を早めることにした。



「アルカノイズが周りに」

「響、アルカノイズを潰すよっ」

「ああッ」

アルカノイズが辺りに散らされ、二手に分かれて破壊する。

そして一陣の風が放たれ、すぐにマフラーの尾で叩き落す。

「防いだか」

「キャロル」

お互い睨みながら、舌打ちしそうな顔で見る。

「いい加減、こちらの迷惑は知られている頃か？」

「……………さつき連絡が入った、呪われた旋律は歌わないぞ」

「もう呪われた旋律はもういらん、後はチフォージュ・シャトーにて、世界を解体するだ

け。だがガングニール装者響ッ、貴様の存在は目障りだッ。オレの一真の周りにウロウ

ロと」

「……………貴様こそ、あれは私のだッ。勝手に所有権を持つてるように言うなガキ!!」

「わめくな小娘ッ、あれはオレの物、オレだけの物だッ!!」

豎琴の聖遺物を鳴らすと共に、オートスコアラ達を再現、いや本家はこっちか。

それを避けながら、接近する。

「獣が。神獣鏡からは遠ざけたつ、援軍は無いと思えッ」

「抜かせッ」



歌が聞こえる。最近聞く、ノイズを倒す歌なのだろうか？

そんなことはどうでもいい。

ノイズ、触れただけで死んでしまう、もう無くなつたはずのものだ。

こんな場所に娘はいた。

こんな場所から、帰ってきたのに、俺は、俺はッ。

「大丈夫ですかっ、いいから早く立って走ってッ」

こんなところから生きて帰ってくれた。俺は初め喜んだじゃないかッ、くそ、くそッ。

いま逃げないところでもう戻せないのかもしれない。だけど諦めてたまるか。

「誰かいるのか、くそッ」

逃げてなるものか、転んだ所為か、気を失っている子がいる。この子以外誰もいない。

俺も急いで逃げないと………

そして俺の側に、何かが落下した。

「ひ、びき……………」

「!? どう、し」

その時、突風が、娘を吹き飛ばした。

◇

「あつけないものだ、この程度」

響を吹き飛ばした後、キャロルは静かにトドメを刺す為に構える。

その時、

「やめろッ」

そうして一人の男が前に出る。

「……………なんの真似だ」

「俺はこの子の父親だッ、これ以上娘は傷つけさせないッ」

それをギリっつという音が鳴り、瓦礫をどかして立ち上がる。

「どけ、あんたは関係ないだろ」

「関係あるッ、おれは」



「逃げた癖にツ、いまさら父親面するなツ」

その言葉に、男の顔が歪んだ。だが、

「ああ逃げたツ、逃げたさ！ 自分だけ辛いと思い込んで逃げて、逃げた後で娘があまりの辛さにどこかへ消えたことさえ気づかない男だツ」

だくと呟き、両腕を広げた。

「だけど俺はどこまで行ってもお前の父親だツ」

「私に関わるなツ、私は壊す、壊すことしか」

「壊れたらなおせばいいじゃないかツ、もう一度、母さん達のもとに行こう。俺がいる、だから」

「くだらんツ」

突風が巻き起こり、洗は吹き飛び、地面に落下する。

「！」

その時響の顔は歪む。

だが静かに、よれよれでも立ち上がる。

「だい、じょうぶ………へいき、へっちゃらだ響………」

その言葉を聞き、響は歯を食いしばり、前に出る。

「テメエの相手は私だろ」

「そんな男を救うと言うのか貴様は」

「……………救わない、私の手は壊す手だ。家族も、過去も何もかも壊した、壊す手だ」  
それに男もまた歯を食いしばり立ち上がる。

「……………だけど、だとしてもッ」

その瞬間、バイク音が鳴り響き、雷鳴纏う剣が振り下ろされる。

「ウエイイイイイイイイイイイイイ！」

「一真っ」

雷鳴を防ぐ瞬間、一つの巨大な剣が降り立ち、キャロルを阻む。

「ちっ、一真との再会に、邪魔してくれるかシンフォギア」

緒川が運転する車がやってきて、セレナと奏までもが駆けつける。

その瞬間、気付いた一真は二枚のカードを投げ渡す。

「これは」

「私らのギアっ」

弾幕が張られ、装者全員が駆けつける。

セレナも奏もギアを纏い、ブレイドは静かに響に駆け寄った。

「響」

「遅いよ化け物……………」

そう微笑みながら、ブレイド。一真はキャロルを見る。

「キャロル、お前、世界を分解するのか」

「ああそうだ、世界を分解して、全てを知る。それがオレの命題、パパから与えられた」  
「違う、違うだろキャロル」

首を振りながら、ブレイドは静かに前を歩く。

「お前のお父さんは、世界を知れと言った。世界を壊せなんて言っていない」

「同じことだつ、オレは世界を分解し、世界を知るツ。剣崎一真、星の生命の始祖である  
全てを取り込んだお前もまた、オレが手にする命題の一つだ」

「……………キャロル」

「お前も世界も壊し、オレは全てを知るツ」

竖琴、ダウルダブラを取り出し、音を鳴らす。

身体を一時的に成長させ、シンフォギアのように聖遺物を纏う。

「ファウストローブ……………シンフォギアのように聖遺物を」

「それだけだと思ふなっ!!」

そして戦慄を歌いだす。瞬間、爆発的にエネルギーが跳ね上がり、辺りにばらまき始  
める。

「くっ」



「ええっ、私達があの施設に向かう。後のことは頼む」

「分かった、防人の剣に任せろ!!」

無数の糸がマリアの道を阻んだが、神獣鏡の光と、シウルシャガナがそれを切り裂く。

「行つてくださいっ、マリアさん」

「マリア行くよ」

「この身は時限式ではあるけれど、この絆は時限式じゃないのデスっ」

そして中に入る装者を見ながら、響、奏、翼、クリスは構えながらキヤロルを見る。

「一真が止めているうちに、全て終わらすぞっ」

「「応ッ」」

「やれるものならやってみろ小娘どもがッ」

大量にアルカノイズをばらまき、それを町に放つキヤロル。

こうして滅びの戦慄が鳴り響き、戦場に歌が響き渡る……………

## 第11枚・歌姫の歌声

それは変わらなかった。

「貴様はなんだ」

「……………またか」

呆れながら、変わらない男は変わらず答えず、ただ戦場を駆ける。

変わらない。危険な物を封印し、戦場を駆け、人知れず人々を救う。

だが誰も感謝しない、当たり前だ。どこの世界に、化け物に感謝する者がいる。

「オレのもとに来いっ、その力、その性質はオレの物だッ」

「断る……………この力を誰かに渡す気は無い」

何度も繰り返し、時に途切れ、時に偶然再会する。

変わらなかった。男の考え……………生き方……………

また出会った時、その時……………



「世界を壊す、歌を聴けッ!!」

絶叫を使いながら、私達を追い続けるキャロル。

「なんで錬金術師が」

「七つの惑星と七つの音階、錬金術の深奥ため宇宙の調和は、音楽の調和、ハーモニーより通じる絶対真理」

先史文明時、人類は二つの道を選んだ。万象を知ることを通じ、世界と調和することが錬金術。

言葉を超えて、世界と繋がるうとしたのは歌。

「錬金術も歌も、根源としてはバラルの呪詛により、相互理解を失った人類が模索した知識。失われた統一言語を取り戻す為にある」

インカムから何かうめき声が聞こえる。了子の声。

「どうやら、先史文明の巫女はよく理解しているようだな」

「そんなところまで」

その瞬間、光がより強まり、一真が弾き飛ばされそうになる。

「強く握りしめるんだな一真。東京とはレイラインの中心部とも言える、そこから放たれる世界分解の力、お前を上回る前に弾かれては困る」

「デメエ、一真の力、万能の力を」

「当たり前だろ？ その一万年も前の時代、統制者なる何者かにより授けられた力。錬金術、果ては異端技術全てを用いても、理解できないその不死性。それを知ることでもまた世界を知ることだッ」

「ふざけ……………」

無数の攻撃を避けながら、向こうはエネルギーが無限なのか!?

「力が無限と思うか？ 当たり前だ、オレの使う錬金術は本来、思い出の焼却を求める燃費の悪い品物だった。だが記憶を司る脳器官を再生させる一真の力が、オレのデメリツトを極限まで下げている。このオレですら驚愕するほどになッ」

歌が響くたびに、光が強まり、それに口元を釣り上げる。

「不死と無限がぶつかり合い、いずれ不死を超えたときッ、オレは世界を知ることが、一真をオレの物として手元に置ける……………誰にも邪魔は」

その時、光が僅かに揺れた。

「！…これは」

光の陣を作り、僅かに顔をゆがめた。

「生きていたかドクターウエルツ」

『おあいにく様、シャトーのプログラムを書き換えてるんで、話しかけなくてくれませんかねえ』



「シャトーの、まさかッ」

『錬金術の工程は、分解と解析、そして』

「機能を反転し、分解した世界を再構築する気かッ。バカな、そんな運用に、シャトーが耐えられるものかッ、お前達ごと飲み込んで」

『そうッ、爆散するッ。嫌がらせてるのは最高だッ』

◇

そんな話が聞こえた……………

こんなに身体がおかしくなるのは何年ぶりだ？

【気を付けなよ。レンゲルのように、封印したつもりで僕に支配されないようにね】

コーカサスビートルアンデッド。

【ああ、いつもそうだ。君はそうやって、苦しむ。僕の心を満たす】

お前は異次元の、お前だけの世界に封印した。お前は、

【そう、君の幻聴さ。アンデッドの本能、戦うと言うね】

……………

【君はなぜ、バカな道ばかり選ぶ？ ほんっと、見ていて飽きない】

だから？

「しつかり世界を見たらどうだい？　いまだ世界は戦いに、闘争に満ちている。僕らのバトルファイト。一万年に一度行われる戦いを強制的に終わらせても、戦いは終わらない。むしろ、悪くなってるよね？」

.....

「世界のリセット、本当は世界を壊すことはもう決定していた。だけど君らが抗ったために、この世界はまだあり続ける。その結果が、あの子じゃないか？」

.....

「あの日、世界が滅んでいけば、立花響は戦わずに済んだ」

.....

「あの日、世界が滅んでいけば、風鳴翼は戦わずに済んだ」

.....

「あの日、世界が滅んでいけば、雪音クリス、天羽奏は両親を失うことはなかった」

.....

「あの日、世界が終わっていけば、暁切歌、月読調、カデンツァヴァ姉妹は犯罪者になる  
（ことは無かった）」

.....

【あの日、全てが終わっていれば、小日向未来は、親友を失わずに済んだ。みんな君の所為だ剣崎一真】

.....

【君が戦いの結果を変えたから、終わらず、彼女達が苦しみ、辛い道を進む。全部君の所為だ】

.....

【そして君は彼女達を、敵、として見ている。当然だ、彼女達はアンデッドと戦う道具を使ってるんだからね】

.....

【.....何か言いなよ】

だからどうした。

【ツ!?!】

そんなことは分かってるんだツ。

だけどそれでもそれを否定することを、俺にする権利は無いツ。

いまを生きている命全て、あの日終わっていればよかつたなんて言う権利は、神だろうが万能の力を持つ俺だろうが、誰にも言う権利は無い。

それでもあの子達はいまを生きてるんだ。



その瞬間、世界が光に包まれた。

◇

「なに、が……………」

光り輝きが、全てを包み、全てを吹き飛ばす。

シャトーの広間、パイプオルガンのようなものがある広間。ドクターウエルは気を失い、その左腕は元の腕に戻り、マリア、セレナ、調、切歌がいる中、キャロルを見る。

「お前、一真、な、にを、いつたいなにをしたッ」

一人の男が、そこに立ち尽くしていた。

「全てを封印した、俺の中に、シャトー全ての機能を」

「!? そんなことも、可能なのか貴様」

その時、人の形態なのに一真から植物や動物、機械の身体。

もはやつぎはぎのように翼、腕? そのような異形を生やし、目の色も滅茶苦茶に輝く。

「お前、もう人の姿が保てないほど……………」

「もうやめるんだキャロル、お前の命題、答えが違う」

「黙れッ、そんなわけあるものかッ。パパの命題の答えが他にある、違うなんてことあるものか！ それならば殺されたパパの無念はどうなる！ お前に分かるものか、何も知らないくせに」

「キャロル」

『錬金術の到達点は……世界と調和すること』

「！ 言つて無いッ、パパが、そんなこと言うものかッ」

どこからかエルフナインの声が響く。

『分かっていたはずだよキャロル……ボクの中にも、一真さんの記憶がある。キャロル、ボクらは、キャロルは一真さんの背中を、パパと重ねていたじゃないか』

「違うッ、やめろッ。そんなわけ、一真がパパなわけない!!」

『その一真さんを見て、いまの、響さんたちのために戦う一真さんを見て……答えは出たよキャロル。いや、キャロルはもう出ていたんだ、命題の答えを』

「黙れ、黙れええええええええ」

『だったらボクが代わりに回答する……命題の答え、パパの願いは』

「やめろおおおおおおおおおお」

『世界の調和、世界の仕打ちへの許し……そして』







「……………」

切れた片腕がくつつきながら、一真は立ち上がる。

それと共に振り返り、その襟をつかむ。

「また、一人で抱えるのか、またなのか」

「響……………」

キャロルを睨みながら、拳を構える。

「……………私たちの方が、一真の優しさに甘えてたんだ」

そう背中を見せながら、

「一真、一真のおかげで、私はやっと立ててるんだ。だから見ててよ、一真が守った明日

は、間違いじゃないんだ」

「何を言う小娘」

「一真の代わりに、私がお前を止めるって言ってるんだッ」

ギアが輝く、それはみんな同じだった。

「貴方だけだと思おう？」

「一真さん、私達姉妹も、みんな同じです」

「響だけ、響一人になんかさせない!!」

「防人として、いま我々は羽ばたくッ」

「あんたには、まだ言いたい事、話したいことが山ほどあるんだあたし達はっ」

「一真だけが、誰かのために戦ってるんじゃないってこと、見せてやるッ」

「行くよ、切ちゃんっ」

「デースッ」

そして光が柱と成り、その中で、響は、

「……………行くよ、エルフナイン」

一人だけそう、呟いた。

巨大な鼓動音が鳴り響き、一真から魔剣が解き放たれた。



「なんだ……………」

一人だけ明らかに違う光を放つ。エクストライブが終わり、全員がそれに驚愕していた。

「……………響」

「なんだこの光、イグナイト、いや違うッ。なんだ、なんなんだその光はッ!？」

「イグナイトツ、エクス!! ドラアアアアイブウウウウウツ!!」

その姿は、魔剣ダインスレイフを鎧として纏い、色を、性質を全く異なるものへと反転させた。

長い髪をなびかせ、紅い瞳と金色の瞳を輝かせて、巨大な爪を持つ装者。

鎧のような上半身に、足を覆う獣の爪を模した鎧。

黒と白の翼を広げ、獣のように構えながら、拳を握りしめる。

「エルフナインがくれた、お前を止める、力だツ」

「ふざけるな……ここで、ここでオレに、このオレに奇跡を見せるか……シンフォギ

アアアアアアアアアアツ!!」

町中にアルカノイズをばらまくキャロル。

いま最後の戦いが、幕を開ける……

## 第12枚・命題の終わり

それは改めて奴と出会い、拒否され、争い、そんな中の一つだった。

「君はなぜ、万能の力を求める」

「知れたことッ。父親の命題のためだ！」

「そればかりだ」

そう言いながら、距離を置きながら、静かに構える。

「その命題はなんなんだ」

「それは」

それは世界を知れ、全てを話す。

父親が焼かれた記憶、それをこいつに伝えた。

「だからこそ、オレは」

「キャラル」

その声は悲しそうに、そう呼んだ。

「その答えは一つしか無い」

「なに？」

「その命題の答え………キャロル」

それはオレは決して認めない。認めてなるものか………

◇

無数のアルカノイズは他の装者に任せながら、響はその爪を振り回しながら、キャロルを追い詰める。

「あり得んツ、イグナイトは魔剣の、呪われた旋律だツ。それがエクストライブ、限定解除の対象になり得るなど!!?」

「だとしてもツ、私はいま、歌を拳に変えるだけ!!」

火を吹きだしながら、爪を振るい、拳を放つ。舞い上がる火の粉はまるで炎の踊り子だった。

アルカノイズが迫るが、装甲の隙間から炎が吹き荒れ、獣のようになる。

「認めない………このような奇跡、オレが認めるかツ」

「奇跡奇跡るっさいツ、なんでそこまで認めないイイイ!?!」

「認めてなるものかツ」

絶唱並みの力で大量の水を生成し、渦巻く水に閉じ込めながら、叫び声を上げる。

「奇跡なぞ、あの日ツ、蔓延する疫病から村を救ったオレの父親は、周囲によつて研鑽を奇跡などに変えられ、そればかりか、資格無き奇跡の代行者として、煤へと変えられたつ」

爆発するは水蒸気爆発、炎が急激に熱し、水蒸気を払いながら響は構える。

「父親……………」

「万象に存在する摂理と実利、それらを隠す覆いを外し、チフォージユ・シャトーに記すことがオレの使命。さなわち万象黙示録の完成だった……………だったのにつ」

「……………」

その瞳から僅かにこぼれるものを見ながら、炎を静かに構える。

「奇跡とは、はびこむ病魔にも似た害悪だ!! 故にオレは殺すと誓った、だからオレは、奇跡を纏う者には負けられぬのだツ!!」

「……………ああそうだな、奇跡なんて害悪だ」

一人の男が戦っている。全てを救わんと醜く足掻き、勝手に全てを失っている。

この世界は奇跡で生かされている。たった一人の男、その仲間達によつて。

だが誰もがそれを知らず、そして戦う男を化け物と叫ぶ。

「なるほどな、お前も同じだ。奇跡なんて二文字ですべて解決させられた、一真と同じ犠牲者だ」



れる現在だ!!」

「貴様ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「本当は分かっているだろうがああああああああああ!」

炎を飲み込む水を放つが、それら全てを燃やす。

「水を燃やすだとツ?!」

「お前が一真を求めるのは、世界の真理だからじゃないツ。一真だからだ!」

「黙れツ」

「明日を信じ、私たちに明日をくれた、お前の父親と同じ、明日を信じてくれた!!」

「黙れええええええええええええええええええええええ!」

「お前はただ、信じたいだけだツ。明日をオオオオオオオオオオオオオオ!」

爆発する力、キャロルは距離を取り、静かに自分を張り付けにする。

自分の中にある力、全てを引きずり出そうと……

「やめろキャロルツ」

シャトーの残骸の上、戦いの傷の所為でまだうまく立ち上がれない一真。

正直に言えば違う、自分の中にある、先ほどのエネルギーを完全に支配下に置くのに

時間がかかっていた。

「オレの思い出など、なにもいらぬイイイイイイツ」



無数の糸が集まり、束ねられ、一つの翠の獅子へと姿を変える。

「全てを無に帰す……そうでもしなければ手に入らない、納得できない。納得できるものか」

炎を吹きだし、その片足で響を吹き飛ばす。

だがかみ砕くように炎が絡みつき、片足を砕く。

「獣がッ」

「獣ばかりに気を取られ過ぎだッ」

無数の光と銀の風が舞い上がり、もう片足を貫く。

「限定解除の装者かッ」

「全てのアームドギアを用いてッ、一点突破、勝機を掴み取るッ」

「デスッ」

「分かりましたッ」

「行くぞテメエらッ」

「ごたくは後だ、マシマシが来るぞッ」

炎が吐き出され、集まる装者へと向かっていく。

『ターンアアップ』

「ウエエイエイエイエイエイ」

ブレイドが跳び上がり、その炎へと斬り込む。

「ただのブレイドがッ、突破できるとで」

「ウエイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

「ッ!？」

炎がただのブレイドだけで受け止められ、はじき返されそうになる。

「バカな、ただの!？ キングでもジャックでも、ましてジョーカーでもないブレイドが」

「それが一真だッ、みんなッ」

全員のアームドギアが放たれ、獅子の頭部を砕くが、キャロルはそれを阻む。

「くっ。まだ、だ……………」

「だったらッ」

その時、この身がアームドギアと叫んだ歌姫が、その突破へと向かってくる。

「!？」

それに歯を食いしばる。

「奇跡を殺す、殺し尽くす、オレは奇跡の殺戮者にイイイイイイイ！」

獅子から放たれる光弾が、

「させるかあああああああああああああああ！」

ブレイドが前で防ぎきる。

「!?」

「一真ッ」

「キャロルを、頼むッ」

「ツツ、私の拳は全てを壊す……だから、絶望をこの手で壊し尽くすツ!!」  
「クツ」

再度力を振るおうとしたとき、キャロルの身体が、心臓が跳ね上がる。

「ガッ、こ、んな時に……拒絶反応……!?」

その時、思い出が、記憶が止める。

「違う……これは、オレを止めようとする、パパの、思い出……そ、んな、くそ、なら燃やしてッ」

だがそれに一人の戦士の力が引き止める。

「ふざけるなッ、オレの、記憶、思い出の中でも、お前は、おまえ、おまえは——」

——父親の命題? なにか分からないが、手を貸せるなら貸すが? ——

——ウエエエイイイイイッ!? コジヤドコニイタ!!? ——

——キャロル——



行き場の無くなったエネルギーが爆発する。全ての終わりを告げるように。

「ふふふつ、お前に見せて刻んでやろう。歌ではなにも救えない、世界の真理を」  
「諦めるか、奇跡を超えて、私は絶望を壊すッ」

爆発が起き、キャロルは悲鳴を上げ、元の姿に戻り、落下していく。

響はそれに向かって力を振り絞り爆発する。

その時、

「一真」

「任せた」

「！ ああつ」

一真はエネルギー体へ、響はキャロルへとすれ違う。

「私は奇跡には頼らない……………私は大切な人、仲間たちと共にっ、明日を掴む!!」  
キャロルを抱きしめ、ブレイドは、

「……………魔剣ダインスレイフ」

すれ違う中、響に取り込まれた魔剣は、すでに魔剣では無いものだ。

もう大丈夫だ。

「お前も、光を掴め……………」

無数のカードが舞い上がり、カードは全て一枚の切り札へと集まる。

ブレイドの剣、醒剣にてカードの力を開放した。

《ワイルド》

そして金色の光が、エネルギーを巻き込み食らい、空へと吹き飛ばした……

◇

「こうしてまた仮面ライダーブレイドは、表舞台から姿を消した、か………」

数日後、響はそう呟きながら、いまはシャトーの残骸以外はたいして被害の無い戦いの場へと向かい合う。

響は夏だと言うのにフードはやめず、それを深々と被りながらその光景を見る。

「真のバカ」

そしてキャロルもまた、どこかへと姿をくらませた。

◇

「キャロルくんはいつたいたいどこに」

「分かりません、ですがもうキャロルはなにもしないとします」

パパの命題の答えを知った今、キャロルはもう何もいない。

いえ、やはり違います。

キャロルは知ってしまったのでしよう。一真さんと出会い、一真さんと過ごすうちに。

それでも、そう思いたくないが故に、ここまでのことをしたのだと思う。

「とりあえず事後処理しましよ、がんばがんば〜♪」

了子さんはそう言い、仕事をしだす。ボクも頑張らないと。

残されたこの時間、皆さんには言っていませんが、ボクはホームクルス。

（この身体はいつたいつまで持つか……それでも、ボクはその日が来るまで、皆さんと共に生きます）

そう決意した。

それを見られていると知らずに……

◇

それはエルフナインが少しだけ、研究室に籠っているとき、扉が突然開いた。

「はひつ、どなたで」

その時、糸が自分を拘束し、豎琴を構える一人の少女を見る。

「きゃ、キャロルっ!!?」

「……………」

ただ静かにエルフナインを見つめ、静かに近づく。

「お前はこれからどうする」

「キャロル……………」

「パパの命題は、世界を知れ……………世界の仕打ちを許し、人々の調和を望む。ああ分かっていたさ、一真と、彼奴と出会い、会話する内に」

「……………」

顔を伏せていて、エルフナインはどんな顔か分からない。

そしてすぐに顔を上げた。

「お前はこれからどうするエルフナイン」

「ボクは、ボクのこの命が終わるまで、皆さんと共に、生きてますっ」

その言葉を聞き、静かに黙り込む。

「……………そうか」

そして近づきながら、



「ならオレからの餞別だ、最初のプレゼント、受け取れエルフナイン」

「えっ……………」

「オレはオレで世界を巡り、世界を知る。お前はお前で、世界を知れ」

そう言つて唇へと唇を押し付ける。

その光景がカメラに映り、監視モニターから警報が鳴りながら、エルフナインの身体は炎へと包まれていった……………



キャロルは、エルフナインの部屋で倒れていた。

だけど私達が駆けつけたとき、起き上がったキャロルは、エルフナインだ。

「キャロル……………ありがとう」

そう呟き、自分の身体になった身体を抱きしめる。

エルフナインの話では、この身体は一真の、アンデッドの情報をつんだんに使われていて、ほぼ人間と変わらない。もしかすれば肉体的には人間より優れているらしい。

色々言いたいことがあるが、了子からエルフナインは人より長く生きられない身体から、人間の身体になったと言う話を聞く。

「とりあえず寿命が短い事を黙っていたお仕置きだ」

「ずばぜん……」

お尻ぺんぺんしながら、司令は黙っている。

「ですけど、この場合、キャロルはどうなったんでしょうか？」

藤堯の言葉に、友里さんも頷く。

それにひいと叩かれて泣くエルフナインが、

「キャロルは、シャトー以外にある、保存機にある予備の肉体へ、最後の記憶の転写をするそうです。最後の記憶に、それがありません」

「よし、キャロルもおしりぺんぺんするから攻め込むぞっ」

「いえ、その場所だけ転写されず、わかり、ひやうっ」

ぺんぺんを再開するが、待ったをかける。

それは、

「キャロルを一人そのままでもいいのか、外に何かないのか」  
クリスの言葉に、はひつと眩く。

「キャロルなら……」



目が覚めると、ずっと守っていたのだろうか、それがいた。

「……………服」

そう言い、オレに服を渡す。それを着た後は、静かに世界を見渡す。

とある森の中、日本の中だが、パパと薬草を取りに行ったことを思い出させる。

『いやですよ、黄昏でないとマスター早く身体プリーズっ』

『これは地味に勝手が悪い』

『みんな一緒だゾ〜〜〜』

『マスターこれはいささか』

』

オートスコアラー達の記憶の転写も、メモリーチップのように宝石に転写した。まず

はこいつらの身体作りか。

「分かっている、一真、行くぞ。ゴーレムの聖遺物を取りに行く」

「……………ああ」

オレは一真から渡されたヘルメットをかぶり、後ろに乗る。

これからオレは世界を知る。

この化け物と共に……………



「張り付くよ切ちゃんっ」

「——♪♪」

「なんで未来ちゃんは聖詠を歌うのっ?!」

こうして魔法少女事変は、最後に大きな爆弾が爆発し、最後を終える。

「一真のツ、バツカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

少女の叫び声は、響き渡った……………

## 最後の1枚・魔法少女事変後

朝日の中、眼が覚める。

「ん……………」

病室でボクは目を覚まします。この身体はキャロルの物で、念のために検査しておこうと言う話になり、ボクは検査を受けていました。

切歌さんからお手紙をもらったり、もう退院します。

「あつ、響さん」

「エルフナイン、元気？」

響さんはクリスさんと同じくらいよくお見舞いに来てくれます。

いつも果物を持ってきたり、食べさせてくれたり、身体を拭いてくれたり……………少しおかしいですね。

「もうすぐ退院だね、エルフナインはこれからどこに住むのかな」

「はひつ、本部の研究室に住もうとおも「だめだよ」」

そう言って、響さんはボクの腕を掴みます。

「エルフナインは私とクリスの家を交互に住むんだよ、部屋はもうできてる」

「えっ、な、なん」

「身体が一真でできてるなら………一真と変わらないよね？」

その時、ボクは怖くなってナースコールしようと思いました。なぜかは分かりませんが、ですけどボクはすぐにナースコールしようとしたら、何も起きません。

そして代わりに、クリスさんが入ってきます。

「響準備はできてる」

「さあ退院だよエルフナイン」

「えっ、いえまつ、うわあああああああああ——」



袋に入れてそそくさと移動する二人。

だがその前に、

「っ!？」

「またか………今度は少しばかり強めにお灸をすえないといけないようだ」

「人類最強風鳴司令」

私達はすぐにギアを纏い、縛ったエルフナインを置く。

「エルフナインを手に入れるため、押しとおるっ」

「そのような強制、許すわけにはいかぬ。来いッ！」

激突する中で、袋から出て来るエルフナイン。

「大丈夫エルフナイン」

「セレナさん」

もともと痕が残らないように緩めだったため、簡単に拘束を外すセレナ。

「助かりました、ありがとうございます」

「うん、それじゃ、私のところに行こうか」

「えっ……………」

「じょうだんだよ♪」

その目は消して笑っていないように見えた気がしたエルフナイン。だがすぐに気のせいと思い、そして二人から離れていく。

二人は司令に怒られ、エルフナインに過剰な愛情表現をしないよう言い渡された。

「……………ふふ」





「まったくあの二人は……………」

私はさすがに呆れてしまう。

だがエルフナインは一真さんでできていると言う話だが、あながち外れてはいないらしい。

人間で、生物が持つ抗体とは思えないほど、身体が持つ免疫力が強いとのこと。

病気になったとしても、不可なく自然治癒するほどだ。

別に病気にならないと言うより、なった後、理想的な治り方をしそうな身体とのこと。櫻井女史がここから、新たな新薬が生まれるだろうと、研究に入る。

ある意味エルフナインは別の意味でも攫われる可能性が高い為、本部が自宅と化す。

「翼、なにか考え事？　なにかようがあるらしいけど」

「マリア。ああその……………父のことだ」

とつさに別の考え事を答えた私。マリアはああと納得する。一真さんのことを考えてる事を知られずに済んだ。

マリアは静かに横に座り、この前の、風鳴の家でのことを話す。

「どこかの演歌をよく歌う女の子の後ろから、何度も警察に通報されて職務質問されながら見守っていた人がいたらしいわよ」

それは少し恥ずかしい。見ていたし、聞いていたのか。というよりそんなことが、

「ちなみに警察を呼んだのは彼よ」

「一真さんっ」



私は呆れながらも、父親に愛されていたことを思い出す。  
風鳴の家での出来事、それに、

「聞いていたのか、一真さんも……………ううっ」

なにかこう、顔が赤くなる。

恥ずかしい、けど嬉しい。

その日、歌をほめてくれた男性が誰か分かった。

「ううっ……………」

「あっ、翼さんっ」

「ん、エルフナインか。どうした」

「はひっ、実は翼さんに一真さんから伝言があります」

それを聞いて、少し驚く。

あの人私が私に……………少しだけ心音が早まる。

「『もしも剣とスパーードのペンダントを見つけてたら、持っていていい』とのことですが私はいの一番に奏の下へと走る。

だが奏はすでにどこかのボランティア活動に出かけていた。

一真さんのペンダントを持って……………

「かなではいじわるだ〜〜」

◇

「奏さん面白い物に付き合ってくれてありがとうございます」

ボクは着る物など、色々無かったですから、今日はそれらを買って出かけてます。

「なに、気にすることないさ。あたしは楽しいからさ」

そう言って、いつでも頼っていいそうです。

ですけど、

「どうしてボクが面白い物に出ることがわかったんだらう？」

すでに面白い物に出かける準備していた気が……………気のせいですね。

◇

「マリア姉さん、やっぱり長く家を空けるのはだめだよね」

「セレナ……………」

言いたいことは分かる。探しに出かけたいのは分かるが、

「切歌や調の面倒は誰が見るの？ マムのこともある。私はアーティストとして活動しないといけないから」

「やっぱり我が儘だよね、ごめんねマリア姉さん……………」

そう言い、少し吹っ切れた顔になるセレナ。

私もあの人に会いたい。正直、切歌や調だつてちゃんと話をしている。していないのは私達姉妹だけだ。少しずるい。

「……………」

私はもう二十歳過ぎで、一真は22歳ぐらいで歳が止まっている。

もうすぐ、憧れの人の歳を抜く。



「お願いしますっ、歳を止める術を教えてくださいっ」

「……………」

私は迷える子羊をどう言いくるめるか、頭を痛める日々である。

◇

私の親友はいま、実の父親と対面してます。

「……………久しぶり」

「ああ久しぶり、元気にしていたか？ そのな……………」

少しだけ言葉を選びながらでした、私は隣にいてと親友に言われ、隣で手を繋いでます。

「……………どこまで知ってるの」

「全部……………かな。剣崎くん、っていう、人なのか……………いや、元人間だからいいのか？

彼のもつとで、暮らしていて、苗字を借りてるとか。あとはそうしゃつてもものとか」

「そ……………」

そう言いながら、握る手が強くなる。

「……………父さんが何かを言う資格は無い、全部俺が引き起こしたんだからな。だけど」

「お母さん、たちのこと……………」

「ああそうだ、母さんたちだけは違う。頼む響、俺はいい、だから、母さん達には連絡をしてくれ、一度家に帰ってくれっ」

そう言つて頭を下げる洗さん。

響は……

「……………」

フードを取りながら、静かに、

「いやだ……………」

「響……………」

「……………」お父さんも一緒じゃなきや、いやだ……………」

親友は少しだけ、前を歩いていきます。



手を繋ぎながら、今日は未来と帰る。

「響、苗字のこととかどう説明するの」

「うん……………」

それをどうするか決めている。

「一真とそういう仲とか言えば、深く聞かれないかなって」

「待って響ッ、それは待って!! 絶対に深く聞かれるからッ」

なによりなにを想定してそう答えるか問いただされた。

その時の未来は、神獣鏡を纏っているかのように、バックミュージックがそれだった。  
なんで?

◇

「了子さん私はどうすればいいんでしょうかっ」

「……………」

私は櫻井了子、この人生を生きようと思うため、まずは結婚でもしようと考えてる。

その前に片付けなければいけない案件が多く、辛い。

身から出た錆故に、なにも言えないが……………

◇

休憩室でボクは目を覚まします。

なにか柔らかいものに包まれていました。

「はひ？」

「起きたか」

なぜかクリスさんがボクを抱きしめていて、起きるとボクを開放して、そのままどこかに出ていきました。

ボクは困惑しながら、なぜクリスさんがいたか分かりません。

そう言えば、鍵は掛けましたっけ？



「やったデスよ調々」

「うん、古本屋巡りしてよかった」

私達は目的の物、一真さんの本を手に入れたデスつ。

「これは私と調の宝物」

「先輩たちにもマリアたちにも渡さない」

「デスつ、それじゃさっそく読むデスよっ」

「うんっ」



私たちは一真さんのことを、もつと知るですつ。

◇

オレ達はいまとある町にいる。

それは、ある親子と家族のその後を見るためだった。  
旅の相方が、満足そうに歩いて、顔を出す。

「いい結果だったか」

「ああ、やつと願っていたことの一つが叶った」

悠長なことだ。数は増え続け、叶わない願えばかり、世界がこいつを押しつぶす。  
なのに、これは変わらない。

「行くか」

「ん」

そしてオレ達は走り出す。まずは世界を知る。

「……………聞きたいことがある」

「なんだ」

走りながら、静かに、

「魔剣はもういいのか」

こいつは一度、魔剣の危険性から、装者達を守ろうとした。

あの後、魔剣がどうなったか、エルフナインの記憶を見て知る。

魔剣は響のガングニールにイグナイトとして融合したらしい形跡はあったらしい。

装者響は、撃槍と魔剣の装者になったのだ。

それにこいつは、

「問題ない。あとは……………みんなを信じる」

「……………」

それに少しばかり気分が悪くなる。

だが仕方がない、これがこいつだ。

「もう一つ、本当にお前は元に戻れないのか？」

「……………どういう意味だ」

それは、オレが長くこいつと付き合って疑問に思ったことだ。

「お前は万能の力を手に入れたんだ、その力で、人間になることだってできる、そうじゃないのか？」

「それは」

「できないなんて嘘、オレには通じないぞ」

「……………」

それにこいつは黙りながら、

「……………完全に制御できるようになった時、もう馬鹿でも分かるくらい、時間が経ってたからな」

「……………」

予想した通りだ。もうこいつは人間に戻れる。

だが望んで戻らない。己に封じた力や、聖遺物がある限り。

「だけど、この身体だから、やれることはあると分かってたし、聖遺物、バトルファイトの爪痕はいまだに各地にある。俺はそれを終わらすまで、人間に戻る気は無い。終わっても戻るか分からないが」

「……………そうか」

そうか、戻れる気はあるのか。

オレの肉体年齢はどれくらいだろうか？

世界中の聖遺物の封印か、少しばかり考え物だ。

こいつの説得には骨が折れそうだが、やる価値はある。

新たな命題を見つけ、オレは静かに目を瞑り、背中に顔を埋めた。

いまはこいつとの旅を楽しもう。

それが、いまを生きる、明日を信じた。パパとこいつを信じることにした、ワタシの、答えだ。



一人の男がいた。

一人の怪物であつた。

そして、全てを守る、戦士である。

## 仮面ライダー編

### 第1枚・出会うライダー

ある町のとある病院内、そこで一人のドクターが休憩をしていた。

男はピコピコとゲームを操作し、少しの休憩だったが、

「ん……………」

ゲームクリアの画面になり、顔を上げたとき、一人の男がそこにいた。

次の瞬間、青と赤の粒子が彼の中から出て来る。

「パレードっ!？」

「気を付けるエムツ、こいつ、人間じゃない!!」

現れたパレードと言う男の呼び声と共に、彼もまた身構える。

男は顔を静かに上げた。

「仮面ライダーエグゼイド、宝生永夢。仮面ライダーパレードクス、バグスターパレード」

自分達の名前を呼ばれ、より身構える二人。

「誰だ、お前は?」

パレードの問いかけに、その男は、

「この子を預かってほしい」

「なんでアマゾンからいきなり町中なんだあああああああ！」

そう言つて一人の、銀色の少女を預けに来た。

その男は仮面ライダー剣。異世界の仮面ライダーだ……

◇

私の名前は雪音クリス。そういま説明した。

「そうなのか………つて、それだけじゃ分からない、ピプペポパニックだよっ」

「いやね、平行世界の剣崎さんが言うには、この子の服とかも用意してくれると助かるつて言つてたんだよ」

「だからつて引き受けるつてツ、CRは病院なんだよ！　びよ・お・い・ん！」

看護師じゃない格好の女の人に怒られるのは、一真曰く仮面ライダーらしい。

「まったく、だが異世界の仮面ライダーとはどういう意味だ？」

そう言いながら、シュークリームを綺麗に切つて食べている白衣の男に、アロハシャツの男が静かに答える。

「どうやら、剣崎一真は剣崎一真だが、俺らが知る剣崎一真じゃない剣崎一真らしい。そ

うだろ?」

「ああ。正直、俺自身がこつちの方に会ってないから分からない。だけどあれは人間じゃない。その子もそう証言してるぜ」

パラドとか言われた奴がそう言いながら、こつちを見る。

ともかく一真は私をここに置いて行った。後で殴ってやるんだ。

「えつと、雪音クリスちゃん、だね。僕は宝生永夢、あつちが」

「鏡飛彩だ」

そう言つて、箱から一個シュークリームを出して、私の前に置く。そして、

「俺は九条貴利矢、よろしく〜♪」

「……………みんな仮面ライダーなのか?」

それに、カラフルな人がナースに戻りながら、私の顔を見る。

「えつ、あなた、仮面ライダーのこと知ってるの?」

「一真がそれだろ? いちおう、へいこーせかいのライダーにも、会ったことある」

そう言いながら、私はシュークリームをかぶり食べた。

「ああつ、フオークとナイフはともかく、ナプキンはつけようよ〜」

「ふーふえーっ」



口いっぱい食べ物を含みながら、クリスちゃんもポッピーの問いかけに受け答えしている。

念のために予防検査もしてくれて言われて、お金を置かれてる。ですけど……

「んぐ……お金はこつち来てから、宝石とか売ったお金だから、こつちの金だぞ」

「それなりの額だな、とりあえず患者扱いで良いだろう」

札束で渡されて困っていたけど、飛彩さん達はちゃんと使う分だけ引くつもりらしい。

僕も彼から頼まれたことを、断るつもりは無い。だけど、

「異世界のライダーか、心躍るな。強いのか」

「アア？ 一真が一番強いに決まってるだろう」

そんなやり取りをパラドとしながら、

「ともかく、服とかはポッピーの休み時間に行ってもらえばいいしよ。さすがに俺らが行くのもなんだからな」

「下着もいるからな」

ということ、ポッピーは問題なく了承してくれた。



「それじゃ、私達は仕事に戻るから、ここにいてね。それと」

『私のことは気にしなくてもいい』

そう言つて黎斗さんが、パソコンでゲームを作っている。

いまこの部屋の空気は、あの人が何かするんじゃないかと言うことでいっぱいなんだ。

彼は特別なオリ、ゲーム機の中で、その様子をクリスちゃんは不思議そうに見ている。「おい神。いたいけな少女だますなよ」

『君らは私を何だと思つている？ 私は心を入れ替えたし、いま新しいゲームアイデアで手いっぱいだ。なにもしないから安心してくれたまえ』

「ま、そう簡単にそこから出ることはできない。念のため交代できたらして、様子を見ればいいだろう」

「そうですね」

「異議なし」

「信用ねえな」

クリスちゃんはそう言いながら、またシュークリームを食べ始めていた。



色々あったが、検査を終えたクリス。病気も無く、健康でよかったとほっとする永夢。その後永夢と明日那は、クリスの衣類などを買い、CRに戻る途中、ドーナツを食べる。

お店特性の物から、普通のプレーンシユガーを食べるクリスたち。

そんな中、リュックサックいっぱい服などを詰め込んだ少女のことを見る。

「黎斗と二人つきりにしちゃたけど、なにかしてって言われなかった？」

「別に。こっちの一真のこと教えてほしい程度だった」

そう話しながら、永夢は少し考えたが、ある疑念を聞くことにした。

「クリスちゃん、その……………君の二両親は」

その時、クリスの顔から色が消えた。永夢はそれを感じて、クリスはドーナツを食べる。

「死んだ……………パパも、ママも……………私だけ助かって、一真に助けてもらった」

「……………そうなんだ」

いまこの子になにを言ってもだめだと、そう感じながら、

「一真は」

その時、不意にクリスは町の風景を見ながら、

「一真は私達の世界なんて見捨てられるのに、なんでいるんだろうな……………」

そう寂しそうに言う中、それは、

「それはクリスちゃんたちが生きてるからだよ」

「えっ」

クリスは顔を上げ、永夢は目線を合わせながら微笑む。

「僕たち、仮面ライダーは、みんなの笑顔を守るために戦うんだ」

「……………けど、一真はパパもママも救うことができなかつた。歌でみんなを笑顔にする、ママたちを守れなかつた」

「……………それでも」

静かにその手を握り、クリスの顔を見る。

「それでも僕は、僕達は」

その時、巨大な音が鳴り響いた……………



「なんだっ!?!」

妙にごつごつした岩、それはバグスターとは違い、本物の岩でできた化け物だ。

「早く逃げてくださいいっ、ポツピーはクリスちゃんをつ」

「エム待ってっ、あれは」

「バグスターじゃなくても、僕は」

その時、ゲーマドライバーを腰に巻く。

「俺は仮面ライダーだッ」

《《マイティアクションX!》》

《《ゲキトツロボッツ!》》

「大・大・大変身!」

《《レベルアップ!》》

二つのガシャット使用し、レベル3ロボットゲーマになるエグゼイド。

巨大な岩の怪物は、バグスターと患者が融合状態の時ほどの大きさで、左腕のゲキトツスマツシャーで撃墜している。

「くっ、こっのおおおおおおおお」

◇

「こっちです、こっち………クリスちゃん、クリスちゃんっ!?!」

明日那は避難誘導のために少し目を離れた時、クリスはどこかにいて、見つけたとき、建物の隅にしゃがみ込んでいた。

「ほらっ、暴れるなっ！」

そう言つて、何かを持ち上げたとき、

「危ないっ！」

その時、怪物の拳が建物を破壊して、瓦礫がクリスの上に、

「！」

《〈デیفエンド！ プリーズ〉》

クリスの頭上に魔法陣が生まれ、そして、

《〈サンダー〉》

バイク音と共に轟雷が響き渡り、瓦礫を粉々にして着地する。

「どうやら間に合ったようだな」

そう、指輪をした男がそう言う。

明日那は首をかしげながら、恐る恐る尋ねた。

「あなたは……………」

「俺か。俺は最後の希望さ」

そしてバイクからは、

「クリス」

「遅いぞ一真っ」

そう言つて、子猫と母猫を持ち上げているクリス。それに微笑みながら、

「ファントムか……………にしてもでかい」

「そのようだ」

エグゼイドがこちらにホツとして戦う中、バックルにカードをセットして、それが宙を舞う。

《ドライバーオン！》

鳴り響く音とともにベルトが出現し、二人の男は構える。

「どちらにしろ、あれは俺の本能を刺激した……………」

《シャバドウビ タッチ ヘンシン！ シャバドウビ タッチ ヘンシン！》

「変身っ」

《ターンアップ》《アプソブクイーン！ フュージョンジャック》

《フレイム・ドラゴン！ ボー ボー ボーボーボー！》

エグゼイドが力負けて吹き飛んだとき、指輪を瞬時に切り替え、ベルトにかざす。

《バインド！ プリーズ》

無数の鎖がエグゼイドに巻き付き、エグゼイドは意図に気づき、そのまま鎖に身を預

け、敵に拳をぶつける。

それと共に飛翔するブレイドが、

《ビート》

その拳で奥へと吹き飛ばし、三人が揃う。

「ウィザード、それに」

「仮面ライダーブレイド、ジャックフォームだ」

「さあ、ショータイムだ」

「ああ。超協力プレイでクリアしてやるぜ！」

◇

「一気に片付けるっ！ 大技を」

「了解っ」

そう言い、エグゼイドは前に出て巨腕から振るわれる攻撃を、ジャックで飛ぶブレイドと共に翻弄する中、ウィザードはすぐに指輪を変えた。

《スペシヤル サイコー！》

魔法陣から竜が飛び、胸にドラゴスカルを出現させる。

「はっ！」

竜の口より炎が吐かれ、ひるんだ瞬間、ほぼ同時だった。

《スラツシュ サンダー ライトニングスラツシュ》

《キメワザ！ ゲキトツクリテイカルスライク！》

放たれる拳が届く前に雷鳴を纏う剣が頭部へと叩き付けられると同時に、そのブレイ  
ラウザーにゲキトツスマツシャーが叩き込まれる。

そしてトドメにエグゼイドが拳を叩き込むと共に、剣に力を入れ、亀裂を作り出す。

その後ろで、

「フィナーレだ」

《チヨーイイネ！ キックストライク サイコー！》

身体をひねりながら空高く跳び、炎を纏いながらその亀裂へ強烈なライダーキックを  
叩き込む。

その一撃に耐えられることも無く、ファントムは悲鳴を上げながら、粉々に砕け散つ  
た。

「ふい〜」

ゲームクリアと言う音が鳴り響くと共に、ブレイドは地面に着地した。





## 第2枚・各々の戦い

戦いを終えた彼らはお互いお互い、自己紹介をした。

「あんたとまた会うなんてな、ウイザード」

「ん？ 俺とどこかで会ったか？」

「魔法石じや世話になった」

それにああくと言う顔になる中、クリスは不機嫌そうに一真のすねを蹴る。

「いつ」

「なに二人で話してるんだよっ」

それに永夢はまあまあとポツピーとなだめて、そんな中ハンカチでほこりを払う永夢。

「クリスちゃん、猫を助けるのはいいけど、自分も大切にね」

「……………ふん」

そう頬を赤くしていて、それに一真とウイザード。操真晴人は微笑んでいると、

「！」

アンデッドの瞳になり、空を見る。

それと共に世界が変わった。

◇

「なっ、なんだあれっ!?!」

「な、なになに」

「うそ、わたし聴いてないっ」

「ちよ、超常現象ですぞおおおおおおお」

さまざまな場所で空に、地球が映ると言う現象が起きると共に、海から巨大な塔が現れる。

その塔からなにかのエネルギーが放たれると共に、それに一部の者達は気づく。

そして……

空に浮かぶ地球が少しずつ迫っていると気づきだす。

◇

「み、みんな、パラドっ!? エム!?!」

「一真っ」

「いまのは……………」

仮面ライダーたちが膝を付いていると、側から悲鳴と共に怪物が現れる。

「またファントム……………」

「バグスターか？ なんにしてもエムっ」

「ああ」

そしてガシヤット、指輪、カードを取り出すライダーたち。

「！」

だが異変に気付いた一真はそこで止まる。

「「変身っ」」

そう叫んだが、ガシヤットは何も起きず、指輪はなにも起こさない。

「な、魔力はまだあるはずだっ。ドラゴンっ」

「！ これは」

「ガシヤットが動かない!?!」

「えー！ー！っ!?!」

「一真？」

剣崎一真だけがなにもせず、静かにカードを見る。



パラドの言葉に、すぐに走り出す。



CRにて、ドクター達はとある男に詰め寄っていた。

「どうなつてやがるツ、なんでガシヤットが」

『落ち着き給え』

花家大我は檀黎斗に詰め寄るが、彼は冷静だった。

『檀、黎斗、神だツ!!』

「突然なに言ってるんだテメエ」

貴利矢も多少苛立ちながら、パソコンのキーを叩く彼を睨む。

『今しがた、海上付近でなにかしらのエネルギー波が放たれている。おそらくそれが原因だ』

「それはこれか」

そう言つて飛彩がテレビを点けると、すぐそばの沖合に巨大な建造物、塔のようなものが現れ、巨大な石が発光しているのが中継されている。

それを見た晴人は、

「魔法石だどっ!？」

塔の発光する鉱石、それが指輪の材料になる魔法石だと瞬時に理解する。

「それより、これは」

「一真が言ってた塔だっ」

クリスの一言に、全員がそれを見る。

その影のような場所から、無数の怪物が生まれ、町へと繰り出していた。

「飛彩」

「父さん、いったいどうした」

そんなテレビの光景を見てみると、一人の男が慌てて入ってきた。

「どうしたじゃないよっ、衛生省から、檀黎斗の一時釈放が許可された」

「なに?」

「俺が念のために掛け合っていたんだ、ガシヤットがなーんにも反応しないんじゃない」

『とうッ』

貴利矢の言葉と共に、飛び上がる男。

そして閉じ込められていたゲーム機のような機器から飛び出る檀黎斗神。

服装を整え、満面の笑みで、とある紙を触る。

「これがかは分らないが、これが何の類か知っている人物を、私は知っている」

「私だろ」

クリスがそう言い、全員がクリスを見る。

「それ、せいじぶつっていう、変なもんだよ。ノイズみたいに、昔の人が作った、わたしたちの世界のだ」

「のいず？」

「触ると人が炭化する古代兵器、そう一真が言ってた。公になったのは最近だけど」  
それにゾツとする一同だが、一人、興味深そうに耳を傾ける男がいる。

だがそれを遮り、

「ともかく、それを使うために、風都の探偵に会わなければいけない。だが」

「いま外は怪物がウロウロしている。それを」

その言葉に黙り込む中、

「その役、俺にやらせてくれないか」

そう現れた男に、全員が驚愕する。





「止まるなああああ、うおおおおおおお」

一人の刑事が走り、銃を乱射して民間人を助け出す。

だが鏡から出てきた怪物、ガルドサンダーは何発も弾丸を受けても止まらず、こちらに迫る。

「くっ」

【ハアアアアアアアアア】

そこに割って入る、アンデッドの武器を振るう青のジョーカーが現れ、それを両断。  
「なっ」

それに一人の刑事が驚く中、周りの怪物も倒し、辺りを見渡す。

「あんた」

【……………】

何も言わず、その場から走り去り、塔へと向かって走り出す。

「いまのは」



赤い車が走る。

「自前の車かつ」

「ああ、自慢のとは少し違うがな」

「クリスマスちゃん大丈夫っ」

「平気だけどスピード違反じゃないのかっ」

「大丈夫、俺は刑事、そして仮面ライダーードライブツ。泊進ノ介だ」

自前の車を走らせる中、晴人と永夢は話しかける。

「風都の探偵の場所は分かるんですか」

「いや。だが、風都の仮面ライダーは知っている。俺と同じ刑事で、すでに連絡している

！ 他の警察各所と連携して、怪物を退治している」

「……………」

その言葉を聞いたとき、永夢はクリスを見る。

何も言わず、ただ睨むような顔のクリス。それに不思議がつっていると、

「ドライブっ」

「！」

無数の空を飛ぶ怪物が迫り、それをかいくぐりながら、車を操作する。

「泊さんっ」

「平気だつ、例え俺達はいま変身できなくても、仮面ライダーだッ！」  
そう言い、車を走らせた。

◇

走る中、怪物たちをマンティスで叩き斬る。

それでも未だに数が多いうえ、背中を撃たれた。

もう気にしても仕方ない。怪物の気配ではないのだから、人間だろう。  
気にしていられない、だから、

【ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ】

怪物は前に進む。

◇

「ここで待ち合わせのはず」

とあるビルの中で車を止め、大人たち、永夢、パラド、進之介だけが外に出た。

その時、無数の怪物もまた現れ、仮面ライダー達は構える。

「いない場所を選んだんだけどな……………」

「どうやらまだまだウロウロしてるようですね」

「ああ」

「俺達の心を滾らせるな」

それを仮面ライダー達は変身せず、その場で戦いだす。

【ガルルルル】

「車に近づくなッ」

車の中にはクリスがいるため、車から怪物を引きはがして、全員が撃退していると、バイク音が響き渡り、それが怪物を吹き飛ばす。

「照井刑事っ」

「すまない遅れた」

「フイリップっ、お前は無茶するなよっ」

「了解だ翔太郎」

三人の男が来て、全員が怪物を退けながら、クリスを連れてそこから離れる。



怪物達を巻き、建物の物陰に隠れながら、お互いを見る。

「照井刑事、彼らは」

「俺と同じ、風都の仮面ライダーだ」

「僕達をご指名のようだけど、この状況を打開できる方法があるのかい？」

そうフードの男。フィリップが訪ねると、クリスは「ごそこそと服の中に大事に持っていた渡されていた聖遺物を渡す。」

「これ、一真がこれになにか役に立って思って渡したんだ」

「それは……ヤントラ・サルヴァスパ。君は平行世界の剣崎一真の知り合いかい？」

「知っているのか」

それに彼らは頷く。

帽子をかぶり直し、息を整える男はそれを見ながら説明し出す。

「これを使えばどんな機械も、端末経由無く機械に直接アクセス可能だったはずだぜ」

「もしもこの事態を引き起こしているのが、怪物たちを創り出すあの塔だとすれば、これを使って操作すればあるいは」

「それは助かるつ、もうすぐ警察関係や、各所の部隊から一斉反撃がある。それと同時に行動できれば」

その言葉を聞いたとき、クリスはうつつむく。

(クリスちゃん?)

◇

また一真が戦っている。

また傷付いて、また誰にも感謝されず戦っているんだ。

いま怪物たちに反撃するみたいだけど、きつと一真が巻き込まれる。

仕方ない、一真は……………

「ちよつと待っててください」

そう先生が言った。

「どうした」

「その作戦の中で、剣崎さんが攻撃されないように呼びかけられないでしょうか」

「それはどういふことだ?」

「剣崎さんと言う、仮面ライダーが、人では無く、怪物の姿で戦ってくれてるんです」

「なに?」

それに驚くが、先生はそれでも詳しい説明をし、どうしても止めてくれるように頼み込む。

何言ってるんだ？

無理に決まっている。

他の奴にとつて、一真も怪物なんだ。化け物なんだ。

「無理は承知です、ですけど。いま劍崎さんは一人、怪物の姿で戦ってくれてるんです。その劍崎さんを助けるならともかく、巻き込むのは」

「しかし、その劍崎という男と、怪物の違いを伝えることは」

「それでも」

「もういい……………」



「無茶なことを言うなよ……………」

「クリスちゃん……………」

クリスは下を向きながら、静かに黙り込む。

「だけど、僕は、僕はできない。あの人は今何のために戦っているのか、それは僕らと同じ理由のはずなんですっ」

「……………」

泊は静かに黙り込みながら、携帯を取り出す。

「もしもし現さん、いまからする作戦で頼みたいことが」

それにクリスは驚く。

だが……………

（無理だ、だって、誰も、誰もっ）

「……………」

そして泊から……………



【塔の内部か】

怪物を倒しながら進んでいたら、塔付近まで近づいた。

そのまま中に入ると、一つの鏡が光の柱を空へと放っている。

あれかと思いつくと、無数の鎖がジョーカーへと絡みつく。

【!?!】

【来たか仮面ライダー……………いや、アンデッド】

そう言いながら、光の魔法陣が現れ、そこから黒いローブの男が静かに現れる。



【お前がこの騒ぎを起こした男か】

【ああ………だが、もうすぐ終わる】

そう言いながら、部屋が広がり、壁が消え、部屋が上がっていく。

塔の魔法石へと近づく中、静かに睨む。

【お前はフアントムか】

【それをお前に答えるつもりは無い。もうすぐ全てのエネルギーが集まる、ここへの攻撃が始まれば、な】

そして空に映る地球の他に、自分の周りに鏡のように何かが映る。

【自衛隊、ミサイルか】

【その火力を持って、お前たち、ライダーの個人の強力な力より、多方面による力を使い、私は、私の目的を達成させる】

【一】

すぐにこいつの作戦を理解する。こいつはここを重火器などで攻撃させて、その火力で魔法石を活性化させようとしている。

その時、ジョーカーの力を解放しようとしたが、違和感を感じやめた。

【残念だ、お前の力でも、次元の壁を壊すことは可能なのだが】

一真は自分を先行させたのも、その火力の一部にしようとしていたからだということ

を理解する。

【次元の壁、それを壊すことが目的なのか】

【ライダーの力ではだめなのだ、ライダーの、守る力では】

そう言い、自衛隊の戦闘機を見ながら、両手を上げる。

【さあ来い、来てここを攻撃しろっ。そうすれば】

だが、自衛隊の様子がおかしい。

【なぜだ、なぜまだ動かないっ。わざわざ動きやすくコマは動かしている!? なぜ】

そう叫ぶ中でも、戦闘機などは一切動き出そうとしない。



「いつやくごめんね、それじゃ、しばらく待機と民間人の保護よろしくね」

そう言い、一人の男が電話を切る。

彼は警察の中で、数多のコネクションを持って、作戦を遅らせ、人々の安全を最優先にさせていたのだ。

戦う『人間』はまだいる。

「電話の通じないところの説得は、頼みましたよ」

だがその人物の今日の運勢は、大吉。  
彼は安心して任せ、自分の仕事を全うする



「だからっ、俺達を守る怪物がいるっ。攻撃はまだ待つんだ！」

一人の男が走り回る。

「よし次だっ、待ってる。俺の足は、まだ動くッ!!」

そう言い、一人の刑事は走り出す。

人を守る怪物のために、

「俺はまだ止まらないぜっ!! ハートオオオオオオオオ！」



【なぜだっ、なぜだああああああああああ】

未だ計画が動かない中、仕方ないと言わんばかりに、無数の槍がジョーカーへ放たれる。

【グツ】

【こうなればジョーカーツ、貴様の力を】

だが、急に施設の動きがおかしくなる。

【なんだっ!?!】

それに、黒ローブは驚愕する。

【バカなっ、ここの施設が、魔法石の機能が上書きされているだっ!?!】

【どうやら間に合ったらしいな】

【どういう】

【こういうことだ】

その時、一人の男が現れる。

すでに人が入り込めない高い塔の位置だというのに……………

【貴様は】

【アンデッドの気配を感じたが……………お前か】

【……………】

まるで間違い探しのようだ。

ジョーカーの前に現れたのは、剣崎一真。

剣崎一真、この世界の一真が現れ、その隙に鎖を引きちぎる。

【剣崎一真が、二人………！ 平行世界かつ】

【気付くのが遅かったな】

「もうすぐこの機能、俺達仮面ライダーの力を封じていた機能が終わる」

その言葉に、僅かに肩を震わせる。

それは、

【ふっははははは、仮面ライダー？ お前は違う平行世界のつ、貴様は】

【俺はアンデッド、それでもいい】

鎖を完全に引きちぎり、二人の一真が並び立つ。

一人は人の姿で、一人は化け物の姿で。

それを忌々しく睨みながら、彼らは構え。

「だが、俺たちは」



「よし、これで僕らの変身能力は解除される」

「はいっ、ここで待っててねクリスちゃん」

「……………」

その時、クリスは無言のまま、永夢を見る。

「クリスちゃん？」

「なんでだよ」

そうスカートを握りしめながら、問い詰めるように見る。

それに永夢は、

「僕も悲しいからだよ」

「……………」

「あの人は僕らのために、いま戦ってる。なのに、攻撃に巻き込まれるなんて、そんなの、悲しすぎるじゃないか」

「……………」

「待っててクリスちゃん」

そしてゲーマードライバーを構え、ガシヤットを構える。

「全ての運命は、俺が、俺達仮面ライダーが変えるッ」

「さあ、ショータイムだッ」





## 第3枚・思い出の大戦

「んじやま、ノリノリで行っちゃようよ〜」

それは怪物たちの群れに飛び込む、二人の白衣のドクターと、一人の神。

「貴様らの存在はノーサンキューだ」

「神の才能を、教えてやろう……………」

ガシヤットを三人のライダーが構える。

「ゼロ速」

《爆走バイク!》

「術式レベル100つ!」  
ハンドレット

《タドルレガシー!》

「グレートX—0ツ!」

《マイティーアクションX! アガツチャ! デンジヤラスゾンビ!》

「変身ツ!!!」

0の力を持つレーサーと辿る歴史の騎士、0のゾンビが現れ、瞬時に怪物たちへと殺到する。



「遅いぞッ！」

すでに戦っていたシュミレーションの戦士が一斉射撃で薙ぎ払い、炎の剣で薙ぎ払い、各々が戦いだす。

「悪いって、まだまだノリノリで行っちゃおうよッ！」

《ドラゴナイトハンター！》

「まだ援軍がいるらしい」

《アクセル！》

赤いバイクが通り過ぎると共に次々と怪物を引き、瞬時姿を変え、剣を振るう。

「他のライダーか!？」

「俺に質問をするな……………」

《エンジン！》

「振り切るぜ！」

地上でライダーたちもまた、闘い始めていた。

◇

竜のようなフロントムで、禍々しい羽を広げ、飛翔する中、二人のブレイドが駆け抜

け、剣を振るう。

「はあああああああああああつ！」

「ウツリイアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

【こごかしいッ】

雷の魔法が放たれる中、フロートで飛び、斬り付ける。

ビートの拳が頭部にめり込み、鱗をはがす。

その時、ファントムの目が怪しく光る。

視線の先には鏡があるが、何も起きず、それに忌々しく空を睨む。

【くっ、やはり、まだ力が】

【次元の壁を壊す気か】

【私の世界を生み出すッ、なのに】

それは平行世界の剣崎一真。それを忌々しく睨む。

【お前が、お前があああああああああ！】

【次元の壁は壊させないッ】

【ここでお前を倒すっ！】

【己、オノレエエエエエエエエエ、平行の世界イイイイイイイイ！】

叫ぶように炎を吐き散らす中、それを避け、剣を腹へと突き刺し、切り裂く。



翼をたたみ、防ぐが、その時、黄金と白銀が交差し、翼を切り払う。

【ツ!?!】

《輝け流星のごとく!黄金の最強ゲーマー!ハイパームテキエグゼイド!》

「仮面ライダーはまだいるぞ」

《ファイニッシュュストライク!サイコー!》

「グラウンドファイナーレだ」

【ウィザード……………貴様らアアアアアアアアアアアア】

切り落とされた翼の肉体からまた翼が生え、無数の火球を吐きまくる。

それを避けながら、交差するように攻撃する仮面ライダーたち。

「ファイニッシュュは必殺技で決まりだ!」

《キメワザ!》

【!】

【止まってもらうぞ!】

無数の鎖や蔦などが絡みつき、氷が空にファントムを固定させる。

《スピードX J Q K A ロイヤルストレートフラッシュ》

黄金の一撃が、ファントムに迫る。

【やめろ……………やめろおおおおおおおおおおおお】

「ファイナーレだッ！」

「ノーコンテニューで終わらせてやるッ！」

「ウツイリアアアアアアアアアアアアア！」

《ハイパークリティカル！スパークキング！》

黄金の三つの飛び蹴りが迫り、それは、

【アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——】

ただ雄たけびを上げるしかできなかった。

「もうゲームはクリアーだ」

「ふい〜」

《究極の一発！ 完全勝利！》



「おっ？」

爆発が轟き、竜の雄たけびが響くと共に、怪物たちも消えていく。

「全部終わったようだな」

「ああ」



「さて、また捕らえられる前に、なにか……………ん、あれは……………」



そして嘘だったように戦いの爪痕は無く、全てを終えてクリスと共にいる一真。  
「それで、もう帰るんですか？」

「この世界には剣崎一真がいる。俺がいるわけにはいかない」

そうバイクに乗りながら、永夢達に見送られようとしている。

クリスは静かにリュックサックなど、持ち物を持ちながら黙り込む。

「それじゃ、またいつか」

「ああ」

「……………」

そして、

「おい」

「ん？ なんだいクリスちゃん」

クリスは静かに……………

「ありがとう……………」

それは一真を気づかされたからかは分からないが、そう彼女は呟いた。

そう言つて一真のバイクに乗り込む。

それに苦笑しながら、一真はバイクを走り出す。その先にオーロラが現れ、それをくぐると共に、姿が消える。

「……………僕は、あの子の笑顔を、守ることができたんでしょか」

「さあな、だが、無駄ではないだろう」

飛彩はそう言い、明日那は微笑む。

と……………

「おい平行世界の剣崎一真はっ」

そう言い、一人の男、左翔太郎がバイクに乗り、駆けつけた。

「いま帰りましたよ」

「彼奴これ忘れて行ったぞっ」

「ああああああああ」

晴人の叫び声に、全員が左翔太郎が持つ紙束を見て、全員がどうするか騒ぐ中……………



「異世界の、仮面ライダー……あああああああああああああ」

神は叫ぶ。

「もう少しデータがあれば、私のガシャットに、あらたな力を……つけられたもの  
おとおおおとおおおとおおおとおおお！」

すでにゲームの、特別なオリの中、彼はウロウロする。

「だがしつかああしい」

そう微笑みながら、僅かな血痕らしき、緑色のサンプル。

それを静かに懐にしまう。

「これで私は、神の中の神、最高神になる……そのためにはまず、例のガシャットを完  
成させなければ……できれば一度試運転できる機会があれば」  
ぶつぶつと繰り返し呟きながら、今日も彼は賑やかであった。





「てなことがあって、たぶんそれなんじゃないか？」

そう、S・O・N・G.の面々の前で説明するクリス。

風鳴弦十郎は頭を抱え、了子は間違いないと指摘する。

「それじゃ、一真が異世界に置いて行ったんだね」

「回収は……できないな」

「デエス……」

「私を見ても無駄だぞ、昔の事なんだからなっ」

そう言いながら、ともかく仕方ないと、全員が思う中で、マリアは、

「けど、仮面ライダーって、そんなにいるのね」

「ああうん。私も知っているのも、平行世界を渡り歩く奴だからね」

一人俺と響は友達だって言われたことを思いだしながら、響は、

「ま、もうすんだことだ」

「だな。わ・た・し・と、一真の話だ」

それに黙っていた響は静かに、

「私は一緒に財団Xと戦った」

「……………」

無言でギアを取り出す二人。

それに風鳴司令はため息をつく中で、止めに入った。



「つてなことがあつた」

「ふざけるなあああああ」

どこかの遺跡の入り口でキャンプしているとき、キャロルが紙束のことを聞いて来た。

「紙束って言うなバカ!! 貴様、それをいつ手に入れた!!?」

「二百年くらい前?」

「ちようど仕舞われて年月が経ってからああああああ」

『マスターあまり叫ぶのは』

『地味に時間帯がな』

「こんなところで叫んで誰に迷惑がかかるツ。ここに来たのはお前たちのボデイのためだろが!」

「……マシユマロが焼けたぞ」

「食うよ! つてかお前ほんとなにしてるんだ」

「……………普通の遺跡かと思った」

「近代的だったろ!？」

「そういうのも多くあった」

「聖遺物強奪犯はお前かあああああああああああああ」

キャロルはずつとわめきながら、今日も少し平和だった。



海の中、瓦礫の中で、魔法石が輝く。

【私と……………同じ、おな】

そう呼応する時、割れた鏡が光る。

その時、辺りを包み込み。鏡と魔法石はその場から消えた。

新たな物語は、いままさに動き出そうとしていることに、誰も気づかない……………

## 第4枚・いつもの？

燦然と太陽が大地を照らす中、彼女達は、

「エルフナインちゃん、次はこれを着てみようか」

「これなんかも似合いそうですね〜」

「じゃあさじゃあさ、次は」

とある少女たちが集まり、一人の少女、エルフナインと言う子の洋服を着せたりしている。

「あれ？ 響は」

「あのバカなら」

小日向未来が疑問に思い、雪音クリスへと尋ねる。クリスは疲れた顔で答える。

そして大量の服を持ってきたのは、

「立花、少し買い過ぎだぞ」

「まったく……………」

帽子とサングラスで顔を隠す二人の女性が呆れながら、後輩二人に手伝ってもらいながら、

「えへへっ♪ せっかくだからいっぱい買っちゃいましょうよっ♪♪」

そう笑顔で話しながら、響と言う子は洋服を見せる。

「せっかくの夏休みなんだからっ、楽しまなきゃっ」

そう眩きながら、エルフナインに微笑む。



燦然と太陽が大地を照らす中、彼女達は、

「エルフナインちゃん、次はこれを着てみようか」

「これなんかも似合いそうですね〜」

「じゃあさじゃあさ、次は」

とある少女たちが集まり、一人の少女、エルフナインと言う子の洋服を着せたりして  
いる。

「あれ？ 響は」

「ああ、彼奴なら逃げたぞ」

小日向未来が疑問に思い、雪音クリスへと尋ねる。クリスは自分も逃げようかと考  
える。

「誰が逃げるか誰が」

そう言いながら、ちゃんとした服を持ってくる響。

「デス」

「似合いそうな服持ってきたよ」

そして後輩二人は、各々が似合うと思った衣類を持ってきた

「二人とも、少しは響を見習ったらどうだ？　少し買い過ぎだぞ」

「まったく……」

帽子とサングラスで顔を隠す二人の女性が呆れながら、後輩二人の後ろから、

「まあまあいいじゃないか、せっかくなんだからよ」

同じように顔を隠す、天羽奏が後輩達をそそのかしたらしく、服を持っていて、それ

を微笑ましく見るセレナ。

それに二人はやれやれと、お互い諦めて微笑む。

「ま、こんな日もいいか」

そう微笑みながら話し、響と言う子は洋服を見せる。

「せっかくの夏休みなんだ、楽しもう」

「はひっ」

そう呟きながら、エルフナインに微笑む。

◇

「ん」

その時

◇

「あれ？」

鏡を見つめ合う。

◇

「えっ」

お互いがお互い、  
違う自分を見つめた。

◇

「ん、どうした立花？」

「あつ、えつ、いえつ。気のせいだよね？ 着てる服もフード付きのものじゃないし」

◇

「どうした響？」

「？ いや……まさかね。あんなしやれたもの着てないし……けど、まさか」

少し考え込む響。静かに嫌な予感がする。

◇

「なにか食べられる場所だとオレは聞いた」

オレは錬金術師、キャロル・マールス・ディーンハイム。いま世界を知る為に、世界中を巡り、聖遺物、オーバーテクノロジーでできた物。異端技術の品々を封印する。

現在は首から五つ色のペンダントを下げている。これはオートスコアラー達のデータが入ったペンダントだ。



そして同行と言うより、オレより先に、聖遺物封印をしている者、剣崎一真と共に、砂漠のど真ん中にいたッ。

「ここはどこに食べられる店があるッ、砂漠のど真ん中でオアシスも無いぞ!!」

「……………」

だが一真の目は青く光り、静かにバイクを走らせると、

「!?!」

突然建物がポツリとあり、オレは驚く。

「日本語? 光写真館?」

そう書かれている管板で、一真は気にも留めず、中に入る。



「ともかく、写真館なら写真を撮るのであって、食い物は出ないはずだが?」

「ここはコーヒーは出してくれるし、飯もあり合わせ食わせてくれる。よくクリスと響を連れてきたしな」

『おやおや、マスターは三人目ですか。初めてじゃなくって残念でしたねあつははは』

『地味に傷付く話だ』

『地味でしようか?』

『早く活動したいゾ』

『――』

「やかましいわツ」

なにかこいつらの身体を用意したら、うるさいことになった気がする。

一応ゴーレムなどを基本に、身体とペンダント状態で過ごさせていた。

レイアの妹はでかいからミニサイズだぞと言ったが、本人は気にしていないからいいが……

「それより一真、誰もいないぞ」

「おじさん? 誰もいないのか? デイケイド、夏ミカンさん、クウガ?」

「おい一つおかしいぞ」

「そうデイケイドから聞いた」

そう一真が言いながら奥へ進む。

中を探りながら入っていくと、

《シニガミハカセ》

「!? まさかつ」

突然中に飛び込む一真だが、何かが飛び出て、それと共に窓の外、建物の外へと吹き

飛んだ。

「!? 一真っ」

「まさかッ、ちっ」

《チェンジ》

ジャガーアンデッドになり、高速に動き出す。

◇

【やはりワームかつ】

ウカワームと言う、防御力が高く、盾に変形する左腕と、ハサミのような右腕を持つ。それが光速で動き回り、同時に動くが、何度も切り裂かれ吹き飛ぶ。

「一真っ!?」

【来るなキャロルっ、光速移動、いや超感覚で動く生物だ!! 高速移動できなければ対応できないぞ!】

「??? ! そういうことか、くそっ」

そう言い、すぐに言いたいことを理解し、

「どれほど早く行動できようとッ」

砂漠と言う足場に術を使用する。大量の水がばらまかれ、泥が生み出される。

それがウカワームの身体に絡みつき、クロックアツプを強制的に使えなくした。

「おそらくその身体は、つまるところ時間の流れを変えたり、思考が高速で動き、高速移動と同じように動くのだろう。少なくとも一真の言い方でそれ以外あり得ない」

『ツーカーですなマスター』

「るっさいぞガリイツ。ともかくその泥は少々特殊なものでな、対象の感覚を遅くする」  
 「これなら、変身っ」

『ターンアツプ』

ブレイドへ変化し醒剣を持って斬る。

「ウエエエイイイイイ」

切り払う中、その腕を切り落とし、殴る前にラウズカードをスライドする。

《《ビート》》

拳を叩き付けると硬い甲羅にヒビを入れ、そしてすぐにラウズアブゾーバーを出現させ、ジャックフォームへと成り、空へと羽ばたく。

《《サンダー ファイア トルネード ブリザード エクストリームショット》》

四属性を纏い、飛来し叩き斬る。

ワームは爆散し、ブレイドの姿を解く。

◇

「一真、あの生き物は」

「ワームだ、感覚が鋭く、光より早く行動できる」

「感覚が早い、生物だと？」

つまりあれは光速で動くのではなく、感覚がそのレベルまで早く活動できる。

まあ難しいから、光速移動できる生物で片付けた方がいいか。

オレはワームなる生物のサンプルを確保しつつ、一真は光写真館へと入っていく。

◇

俺は写真館のとある場所に来る。

「これは」

それは背景ロールがある、撮影場所でもある場所。

その背景ロールは、六人の歌姫が歌を歌い、星が歌を歌う背景。

「まじか」

そしてすぐに背景ロールが揺らぎ、場所が変わる。

「！ 一真っ」

「分かってる、ここはそういうところだ」

そう、いつの間にか、砂漠の熱気が無くなり、都会の熱気にかわり果てて、  
「砂漠とは別の意味で暑い……………」

「……………」

そう都市のど真ん中、ここは日本、そして、

「マリアと翼のポスター」

「なにがどうなってるんだ」

「ここは」

平行世界、新たな運命が動き出した……………

## 第5枚・出会い

図書館で学生がテーブルを囲み、勉強する。

「ねえねえ聞いた？ 噂の」

「ああ、噂の」

それは最近の噂。

「なんでも幽霊が出てるらしいよ」

「マジらしいな」

そんな噂が町に広まる。

「なんでも、テレビ局で……………」

その裏で、ある男達が動き出す

◇

S. O. N. G. の本部にて、装者全員が呼び出され、風鳴弦十郎は静かに見渡す。  
「全員そろっているな」

「司令、今日はどういったことで」

「うむ。マリアくん、翼なら耳に入っていると思うが……ここ最近、テレビ局、またはその関係各所にて、妙な噂が流れ出ている」

「噂って、幽霊ですか？」

「おいオッサン、いくらなんでも幽霊の一つや二つであたしらが出ることには実はなっている」

そう聞き流そうとした雪音クリスはびくりと硬直し、立花響は青ざめる。

切歌と調はお互い抱きしめ合って、マリアは疑問に思う。

「ですけど、そう言った噂はよくあるんじゃないのかしら？」

「それが、そこに行方不明と言う単語が無ければ、我々も調査に動きません」  
「!？」

緒川からそれを聞き、少しばかり話を聞くと、

「ここ最近、若手アイドルやアーティストの女性の行方が途絶えているんです」

「それは……少し聞いたことがあるわ」

「はい、我々のところでも調査したのですが難航しています。なにより」

「そのエージェントからの連絡が途中で途絶えた、故に我々が動くことになった」

「というと、なにか考えがあると」



「ああ、少々危険ではあるが」

◇

「それでは次の方」

「デース♪ 霧島翠デース」

「赤羽宇佐美です」

装者二人、暁切歌と月読調が偽名にて潜入調査。

アーティスト候補のオーデイションに入り込み、囹捜査である。

その少し離れた位置で、二人組が建物の屋上から、オーデイションの屋内を観察していた。

「彼奴ら大丈夫か？」

雪音クリスはそう呟きながら、飲み物を飲みながら、望遠鏡でその様子を覗き込む立花響。

「クリスちゃん、暑いね」

「言うなバカ、先輩らならともかく、あたしらが芸能事務所の中に入れないから、こうして見張るしかねーんだよっ」

そう言いながら、渋々望遠鏡などを持って見張る。

運悪くカフェなどは近くに無く、応募も年齢制限に引っかけり、こうして見張るしかない。

そんな二人のインカムからエルフナインから連絡が入る。

『お二人の様子はモニタリングしているので、熱中症になる前にアシストしますっ』

「できればあ、こんな炎天下にいる必要のないアシストがよかったよ……………」

◇

それは静かに近づく。

「しっかし、幽霊ね……………」

疑問を呟くクリスに、響は嬉しそうに顔を覗き込む。

「あれれ〜クリスちゃん、怖いのか?」

「ば、バカ言ってるんじゃないやねえッよっ。あたしはともかく、後輩達が心配なだけだしっ」

そんな楽しい会話の中、それは近くに来た。

手に持つ青竜刀を構え、静かに近づき、そして…………

《チェンジ》

光弾が見えない空間へ放たれ、爆発する。

二人の装者が戸惑う中、二射目が放たれた。

二人はそれに気づき、すぐに距離を取る。

「敵だつ、姿の見えない敵がいるつ」

そうクリスが叫ぶと、何か感電するように空間がズレ、何者かの姿が現れた。

「なっ」

「嘘だろっ!?!」

『!? 未知のエネルギー反応感知つ、響ちゃん達のすぐそばですつ』

『なにをしたたツ、そこまで接近を許すとは』

「とはいうが、いきなり」

それと共に、風を纏い、ハートのような模様をモチーフにした者が唐突に現れた。

「な、なにが」

「青竜刀眼魔、貴様を封印する」

「援護は派手に任せろ」

その声と共に何者かがコインを弾丸のように放ち、クリスは驚き、次の瞬間、彼らは消えた。

「これは」

『いま感知しましたっ、錬金術によるテレポート。これはキャロルが最も使用していたものによる転移です!』

「なんだって!?!」

『今そこで何が起きたっ』

「ええっと、変なスーツ姿の人と、唐突に変なものが現れて、何言ってるんだか全然わからないよっ」



醒弓カリスアローを用いて、接近戦をしながら、森の中を走る。

「貴様っ、よくも邪魔を。なにより眼魔を探知できるのかっ!」

「俺はジョーカー………人とは違うッ」

すれ違いざま、腰ベルトからカードを取り出し、振り返ると共にラウザーへと通す。  
《チヨップ》

斬ると共に手刀の一撃を同時に放ち、距離を取られてもすぐに身体をずらす。

その瞬間、無数のコインが弾丸のように命中する。

「がっ」

「貴様は少々地味過ぎる」

「フンッ」

カリスアローで敵を貫き吹き飛ばすと共に、カリスラウザーへ二枚カードを通す。

《チヨップ トルネード スピニングウエーブ》

風を纏い、そのまま敵に手刀を叩き付ける。

距離が開いていたが、それでも大地を砕き、一閃の刃の如く、眼魔と言う敵を討つ。

「敵が地味過ぎた」

そうポーズを取りながら、一人の人形が静かに呟いた。

◇

「レイアのような攻撃、ですか」

「ああ間違いない」

クリスはそう言い、切歌を遠いところを見ながら、話し合っていた。

「キャロルの使用したテレポートジェムは錬金術師なら誰でも再現可能です。ですけど、レイアのようなものとなると」

「私は彼奴とガチで戦ったからな、彼奴の言い方や攻撃、間違いないよ」

「デス……………」

「つていうか、切歌ちゃんはどうしたの？」

魂が抜けた顔で椅子に倒れ込む後輩に、二人は首をかしげ、周りは言いにくそうにしていた。

「う、うむ……………知つての通り、例の事務所に我々の手を回すのはいささか危険と判断したため、本来のスペックで受けるしかなかったのだが」

「切ちゃん、第一審査で落ちちゃって……………」

調が第一審査合格の紙を持ちながら、切歌は落選の紙を持っている。緒川が言いにくそうに、

「内容が若手アイドルで、求められるのが可愛い系の、家事などができるアイドルでして」

「あの子に家事関係は無理だったのよ」

「デスウ……………」

マリアと翼はとりあえずと区切り、クリスと響になんとなくスーツの男と、変なものを書いてもらったが、余計変なものになったとしか言えず、分からない。

そうした話をしていると、未来が入ってくる。

「こんにちは、あれ響っ!? 服替えたの?」

「ほへ？ なに言ってるの未来」

おやつなどを持って来てくれた未来は、妙なことを言う。

「なにつて、フード付きの服着てたじゃない。私が声かけたんだけど、そのまま人込みの中に入って……」

「えっ？ 私はずっとクリスちゃんと、これ書いてたよ」

「なにこれ??？」

「いや、私も分からなくなったよ」

そんな会話の中、静かに歯車がかみ合い始める。



「それでは第三審査お願いします」

(第三審査まで来ちゃった……)

私は月読調、正直この名前はF・I・Sで付けられたから、赤羽宇佐美の名前も少しの練習でどうにかこうにか、対応できました。

切ちゃんは時々反応が遅れた所為で落ちてしまいました、けしてデスデスやオヨヨの所為ではありません。

二次審査はただの食器洗いでした、正直簡単すぎで、翼先輩たちにコーチされたダンスなど、まだ披露していない。

ある程度の受け答えも、緒川さんから色々模範解答を用意してもらっている。これなら問題……

「赤羽宇佐美さん、少しこちらへ」

「はい？」

問題発生つ、急にプロデューサーの方々に呼び出された。

どうしよう……

「赤羽宇佐美さん、貴方は第三審査はそのまま横に置き、そのまま合格が会社関係全員の意見で決定しました」

別の意味でどうしようっ!?

「えっ、あの、歌や踊りの審査は……」

「それらはおいおい。赤羽さんの努力次第でどうにかできますからね」と言う訳で私はこのまま困捜査し続けるとアイドルになりそうです。

助けて切ちゃんっ。

◇



「オヨヨ〜いま、調が助けを呼んでる気が」

「いま彼奴第三審査の踊りとかだから、それじゃね？」

「デスね、ステツプ覚えるのが大変デスから」

そう言い、今度は外にカフェがあり、そこで某スタジオの前を張る。

「だけど、まずいことになったわね」

マリアはいまクリスたち、芸能人側ではない方に顔を出して、情報交換をしていた。

「なにがですかマリアさん」

「調べてみたんだけど、少しばかり行方不明事件が本当にあるみたい」

「それでなんで大事になってないんだ？」

クリスの疑問に対して、マリアは、

「まず彼女達は新米と言ってもアイドル、大事にすることはできないから、水面下で警察が動いていることも関係してるわ。むしろ隠さず、すぐに行動したから私達が動いてるんだだけ」

「そうなんですか、それでなにがまずいんですか？」

「攫われた子が全員、調くらいの子が多いのよ」

それに立ち上がり、マリアを見る切歌。

「待つてくださいつ、なら調も狙われるかも知れないじゃないデスカつ」

「落ち着け、元々そう言うのが目的だろ」

それに切歌はあつと言う顔になる。だから響やクリスは活動外なのだった。

そして別のまずい点は、

「手口が全く分らないのよ、それも全部」

「全部ですか？」

「ええ。用意された部屋などにいたはずのアイドルが、煙のように消える。あるのは通

気口などくらいだけど、入口になりそうところは鉄格子があるから、防犯は問題ない」

「他にも部外者が入れる可能性も無いですか」

「そうよ、だから謎。攫う子も、どうやって連れ出したか分からないから」

こうして私達が悩む中、静かにスタジオを見守ってる。

例え落ちたとしても、ここまで来れば最終審査を見学できるため、もう調は仕事を終

えていると言っている。

それ以上の展開になっているとは、微塵も思っていないかった。



「ど、どうしよう」

私はいま別室にいます。

一応緒川さんが用意してくれた衣装に着替え、合格メンバーによる、一時的なダンスと歌を撮るらしい。

その後アイドルデビューと言うものであるのだが、

「何で私がセンターなのっ!？」

そうなのだ、私がメインなのだ。

なぜなの切ちゃん、切ちゃんがいないのにこんなところに居られないよっ。

そう思っていると、扉が叩かれる。

それにはさすがに警戒する。私は行方不明事件の囹調査をしているのだ、いくらなんでも警戒は忘れない。

「赤羽さん、本番です」

「はい……………」

もし変な人なら、緒川さんに渡された護身用アイテムでけん制する。

そして異端技術の使い手なら、ギアを纏う。

リンカーが無いから、騒ぎに気づくようにして情報を持ち帰る。それが作戦の流れだ。

声の主は女の人だが、けして警戒は怠らず、私は扉を開ける。

「？」

そこには誰もいない、廊下の左右、人、呼びに来たスタッフが……

「！」

その時、急に視界が暗くなり、次の瞬間……

◇

「……………暑いな」

「なにも起きないね」

「……………！ 翼からよ」

マリアがスマホを取り、すぐに出る。

『マリア、そちらに動きはあるかっ』

「どうしたの翼っ」

『月読が楽屋から姿を消したっ、他にも数名。予想より此度は被害が多い』

「なんですってっ!?!」

「調っ」

そして入り口を見るが、それらしい怪しい人物どころか、誰も出入りしていない。

「オペレーターっ」

『衛星からのカメラでマリアさんたちが監視している場所並びに、各方面からモニタリングしてましたが、人っ子一人行き来してませんっ』

「どういふこと!?!」

「……………! まさか、姿を消す奴が姿を消して出て行つた」

『それでもエネルギーの反応が』

『! いえっ、エネルギー感知はもう一人の、スーツの方の攻撃を受けてから感知しましたっ。ボク達は始め、感知することもできていませんっ』

それに戦慄しながら、私達に冷や汗が流れる……………



「……………あなたは誰なの」

「……………」

私はいま、親友の手を掴む。

だけど親友はいま、任務でスタジオで調ちゃんを守っている。

なら、この親友は、

「私は」

そう静かに、フードを外しながら、

「剣崎響、完全聖遺物の力を借りて平行世界から来た、ガングニールの装者だよ」

その時、二人の女性が現れた。

一人は分からないけど、もう一人は、

「奏さん……………」

私は驚きながら、響は獣のように鋭い目つきで、スマホ画面を見て口元を釣り上げた。

「悪いけど、今回の事件の犯人と、それを追う知り合いが動いたから、話はここまです」

そう言い三人はギアを纏う、ガングニールの二人の装者に、アガートラーム？

彼女達は静かに動き出す。

あの親友は知っている。私が側にいなかった、平行世界の響だ。

だけど、

「剣崎って、どういうこと響……………」

そう呟き、私は急いで司令さんたちに連絡をした。



「おーあんまり変わらないな」

「そうでもないよ、場所によつては種族とかそういうの違うかもしれない」

私は平行世界は一真と来たことがある。

吸血鬼のようなもの、全く違う世界、無職の神が天地創造してる星。色々だ。

そして、

「んあ」

「ん……………んツ!？」

それと出会った。



暗闇の中、私は身体をゆすられて目を覚ます。

「だ、だいじょうぶ……………」

酷く怯えている、私より小さな男の子。

「ハハハ」

どこかの建物の中、何人かは不安そうな顔で集まり、私のように困惑したり、恐怖しながら周りを見る人達。



起きていた人達は、

(行方不明のリストにいた人つ)

そう、攫われた人達だ。

念のため、反応を追う発信機付きの装飾品は外れていないし、いざとなればギアを纏え、みんなが駆けつける。

シウルシヤガナはここにある、なら逃げだせるはず……

(あれ)

とここで私は疑問に思う。

別に拘束されている訳でもない人達の他に、おかしいものがあつた。

巨大なメロンだ。

もう一度言う、巨大にカットされたメロンが置かれている。

「これ、おやつだつて置かれてるの………いまは食べよ」

「これって」

そして気づいて、建物の窓の外を見て、愕然とする。

「私、私たち、小さくなつてるっ!?!」



「そんなバカなつ、発信機の反応が微弱過ぎます?!? これはいつたい」

「壊されたわけでもないのに、微弱な反応………地下か」

「いえつ、それでも反応は拾えます。ですが、これは発信機が放つ電波が弱まったとし  
か」

本部は混乱しながら、それでも場所を特定するために、必死に搜索し出す。



「小さくなる、これつて」

『ああ、新しいお友達起きたの〜〜』

とても大きな声が響き渡り、起きていた人達が泣きそうな顔になる。

ここはドールハウスだったらしく、建物が割れて、女の人が嬉しそうに見ていた。

『ああとてもかわいいわ、とくに赤羽ちゃんつ。これで本当にお人形みたいだわ〜』

そう言つて私を見る。巨人のように見えるけど、本当に周りの景色を見る限り、彼女

が大きいんじゃない、私達が小さくなっているんだ。

(そうか、これで攫う人達を小さくしたり、自分も小さくなれば)

それが自在なら、通気口や少しの隙間から入り込める。

これじゃ誰も気づかない。

(どうしよう、シウルシヤガナを纏っても、これじゃみんなを守れない)

本当に身体の大きさは人形だろうか。そう思っていると、人形の服を持ち出す。

『これ、これ赤羽ちゃんに似合いそうっ♪ ふふっ、不思議の国のうさぎちゃん♪』

そう思っていると、身体を掴まれ、グルグル回される。

それだけでジェットコースターのようにGが掛かる、なにより、

(このままじゃ、裸にされて、服を着せられるっ)

そう思うが、これじゃ抵抗も何もできない。

なぜかカメラも回ってる。いやっ、そんな、いやッ。

そう思っていると、トントんとノックが響き渡る。

『えっ』



誰だ、私の城に土足に入り込むのは。

また探検ごっこしに来た子供かそこらか。

子供じゃなければ殺そう。

小さくすればどんなものだろうと怖くない。そうして口封じしたし、誰も気づかない。

ハハッ、この素晴らしい力があれば、私の可愛いお人形コレクションは完璧よっ

「だれ？」

そう思った時、

「ウツイイイイイイイイイイ」

窓ガラスを割り、私を蹴り飛ばす。



「つと、平気か」

小さくされた月読調をキャッチして、両手で覆う。

静かにこくりと頷く、どうやら問題ないらしい。

「あんた、いったい」

「あいにくと、耳と目は良いんでね……小さくなつたあんたがスタジオに入ったりしたり、出ていくのを見て、こうして追うこともできた」

「……………そう」

《サイズ》

USBメモリを取り出し、それを押す。

瞬間、光の渦が自分を囲むが、

「効かない」

力を放ち、メモリの力を吹き飛ばす。

「えっ……………」

力が効かないことに気づくのに遅れ、すぐにドールハウスを持って、外に出る。

◇

「いまはこの子達の安全か」

【ラウンド1】

「ツ!?!」

一真はすぐにそれを避ける。

炎の拳が放たれ、ノイズが走り、すぐに姿が現れた。

【ノックアウトファイターツ、ロケットファイヤーツ!!】

まるでボクシング選手が現れたように出て来るのは、

「バクスター……ノックアウトファイターゲーム、相手をKOするまで叩きのめす格闘ゲーム」

【ファイツ】

炎を纏いながら、ドールハウスを持ち、手の中にいる調を守りながら、その拳を避けていると、

「私のコレクションを返しなさいツ!!」

コネクタは腕に刻まれていて、そこにガイアメモリを差し込む。

するとドーパント、サイズドーパントが現れ、腕のサイズを伸ばして、ドールハウスへと延びるが、すぐに高く跳び避けた。

「サイズか、身体の大きさや長さのサイズを操るのか」

【カエセエエエエエエエエエエエエエエエツ!】

その時、

「貴様が言うなああああああああああああああ!」

槍のように鋭い拳が放たれ、サイズドーパントは吹き飛んだ。

「響つ、いや、君は」

「かあああずうううまああああ………」

（えっ、ひ、響先輩？）

手の中にある調は困惑する。目の前にいるのは響。

だが凶悪な笑みを浮かべ、武装が所々尖っているガングニールを纏う。

そして、

（え………）

「響さん、前に出すぎですっ」

「つて、一真っ」

奏とセレナが現れ、調が驚愕する。

そんな中、サイズドーパントが起き上がり、

【あら♪ 新しいお人形ウウウウウウウウウウウウ】

手のひらが光り、光弾を放つが、そこに風が吹き、帽子が激突する。

帽子が小さくなるが、一人の男に一真是、驚いた。

「！ 左翔太郎」

「ドーパントは任せろ、仮面ライダーブレイド」

そう言い、ジャケットを整え、静かに風が吹く中、サイズドーパントの前に立つ。



「そう言う訳にはいかない、響たちは、ノックアウトファイターを頼む。俺たちは」  
「おいおい、ま、いいけどな」

【ダレダアアアアアアアアア、わたシのコレクションを奪うのはあああああ！】  
そう叫ぶサイズズドーパント。

それに静かにドライバーを取り出す左翔太郎。

「誰かの涙をぬぐう、一枚のハンカチさ」

《ジョーカー！》

取り出したのは、黒いメモリ。

その瞬間、全てのカードを一つにし、構える一真。

「変身」

いつの間にか緑のメモリが差し込まれたドライバーに二つのメモリを設置する。

《サイクロン！ ジョーカー！》

風が吹き荒れ、緑の右に黒の左。

左右別れ、マフラーをなびかせるライダーが姿を現せる。



「さあ、お前の罪を数えろっ！」

異なる声を重ね、相手にそう宣言した。

【サイズドーパント、貴様のメモリ、封印、いや、メモリブレイクするッ】

バニティアンデッドはそう宣言すると、サイズドーパントは雄たけびを上げ、巨大化する。

それに驚くが、

【乗れ、ダブルっ】

そう言い、竜へと変化し、飛翔する。

「応っ」

そう言い乗り込み、二人のライダーが協力しだす。

◇

「つたく、人にこいつらの面倒を押し付けて」

(きや、キャロル?)

キャロルはすぐに一真からドールハウスと調を受け取り、すぐに場所を離れ、ドールハウスの者達は眠らせた。

「おい平気か平行世界の月詠調」

それに驚きつつも頷き、フラメンコのように剣を構えるファラが仮面ライダーを見る。

「マスターあれは」

「知らない、が、敵ではないだろう。とりあえず平行世界、どうもオレ達が想定しているよりも厄介な事態にはなっているな」

そう忌々しげに言い、響達の方も見る。



「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ——」

【オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ——】  
拳と拳が激突し出す戦い。

炎を纏いながらの拳だが、それをすれすれに避け、カウンターを放ちながら、  
「ハッ、だッ」

その時、顔を蹴られ、体制が崩れた瞬間、銀の風が突風として放たれる。

【ま、待て、三対一は卑怯だっ】

「知るか」

両腕のバンカーを伸ばし、吹き飛ばすと共に、そこに追撃するようにガングニールの槍を構える奏が敵を貫く。

《ゲームクリアー》

そう鳴り響き、静かにふんと鼻を鳴らす。

「レベル5くらいか………本家より下過ぎ」

◇

《ルナ！ トリガー！》

右は黄色、左は青になり、胸についている銃を取り出し、軌道を変える弾丸を撃ちまくる。

【ダブル、メモリブレイクを頼む】

「任された、翔太郎っ」

「応よっ」

《ブリザード》

バニティが口から冷気を放ち、足元を凍らせた瞬間、銃ことトリガーマグナムにトリ



悲鳴と共に爆発が起き、炎の中、メモリが飛び出て碎け散った……………

◇

元の姿に成り地面に下りる二人。

風と共に変身を解いて、ドールハウスは光り、眠っている人々が元の姿に。調ももの大きさに戻る。

「も、もどった……………」

どこかほっとした顔になる調。身体を触りながら、キャロルはつたくと言う顔で呆れていた。

「どうやら解決したようだね」

フードをつけた、本を片手に持つ男性が現れ、調を見る。そしてギアを纏う三人も、「これが話に聞いていたアームドギアとシンフォギア、実に興味深い、ゾクゾクするねっ

♪

「おいフィリップ、あんまレディをジロジロ見るな」

そう言い、元に戻った帽子をかぶり直す左翔太郎。

「左翔太郎、フィリップ……………いや少し違う。俺のいたライダーの世界じゃない」

そう首をかしげながら言うが、

「おそらく少し違うだけだろうね、そこもまた興味深い」

「ま、あんたが剣崎一真、仮面ライダーであることは変わらない。よろしく」

「ああ、だがなぜ響……………この世界ではなく、平行世界の響と」

「この世界に来たとき、公園のベンチで倒れてたのを見つけた」

「あのお……………」

調がよくわからない会話をされ、困惑していた。

響は響で、頭を撫でたりしながら、調を可愛がっている。

「ともかく簡単に言えば、ここにいる人間と物はお前の知る世界の物じゃない、平行世界のものばかりだ」

「キヤロル……………ギャラルホルンだね」

「それぞれ。一真たちは」

「写真館」

「ああ」

「なんで写真館が平行世界に移動できるのっ!？」

「おいそれ俺らも驚愕ものだぞっ」

そう二人から言われながら、響はぶにぶにと調の頬を触ったりする。

「あ、あの、どうしたんですか？」

「……………こっちの調は大人しいな、私を見てマリアの布団から離れられなくなった調じゃない」

「そっちの私になにかあったのっ!!？」

「おいつ、コントはその辺にしてそろそろ移動するぞっ。こっちの世界のお前ら色々説明すると長くなる！ ただでさえ一真以外の仮面ライダーがいるんだぞ」

「けどよ、旦那達に話を通した方が」

「バカか天羽奏っ、ここににいる者のほとんどは一真がいなければ死んでいた人間ばかりだっ。ならこの世界のお前は」

「……………よし、翼が来る前に移動するぞ」

「マリア姉さん、こじらせてそう……………」

「せ、セレナ」

そう言い、響は静かに後ろから抱きしめる。

「ひ、響せん」

「可愛がってあがるよ、調ちゃん……………」

「え……………」



急に反応がはつきりして、すぐに出向くと、調は、

「調っ」

「マリア……………」

なぜかガクガク震え、響を見ると怯えてマリアのもとに出向く。

「えっ、なに、どしたの」

「響先輩怖い」

「なにがあつたのっ!？」

ここうして調はしばらく、切歌と共に眠る……………



## 第7枚・状況整理

俺の名前は左翔太郎、風都と言う町ではない探偵をする、ハードボイルドな男だ。

『自分からハードボイルドって言ってるゾ』

「翔太郎の悪いところだ」

俺の相棒、フィリップと共に、とある謎の噂を聞き、調査に出た。

『地味にスルーしたな』

いつもなら探偵事務所にいるフィリップがいるのは、もう一つの俺達の顔、仮面ライダーダブルが関係している。

「僕らはこのガイアメモリと言う、地球の記憶の一部とも言える物を使用して仮面ライダーになる」

本来ガイアメモリは一人一つ以上使うことは危険だが、俺たちはこのダブルドライブバーというベルトを使う。

これを使うことで、フィリップの意識だけが俺の身体を使うことにより、もう一つのメモリを使用できるようになっている。

「かみ砕いて言えば、その通りだよ翔太郎。より細かく言えば、僕の使うメモリの担当が

ソウルメモリ。彼はボディ担当と言う訳だ」

だが俺達は数々の戦いで、心も身体も一つにする、エクストリームと言う形態を身につけている。

これはフィリップの身体をデータ化し、俺の下でエクストリームメモリを利用して、完全なシンクロ状態で戦う、ダブルの最終形態とも言える状態だ。

二人で一人の仮面ライダーである俺達の最強の姿ではあるが、その変身を解くとき、フィリップは当然、俺の側にいる。

「その時、妙なことが起きてね。気が付いたら僕らは風都からこの町に流れ着いていた」  
「そこでどうするか悩んでいる時、響と出会ったってわけだ」

「私も聞いたときは驚いた」

「そう言う事か」

ここは光写真館。もう一人の仮面ライダーである男が居候しているところだが、本人はいないうえ、ほかの仮面ライダーもない。

いまはこの男、異世界か未来から来たか知らないが、未来から来た、過去に活躍した仮面ライダーである剣崎一真と、それと共に風都に来たことがある少女。響。

その仲間である、セレナと奏。彼女達とで、いまは光写真館を俺達で管理している。

「だが、話を聞く限り、メモリがまた関わっているのなら、俺達ダブルの出番だ」

「悪いが、風都でない限り、メモリは俺が封印、破壊する」

「私らで壊すことはできる?」

「それはシンフォギアシステムを見てみないことにはなんとも言えない、手伝ってくれるかい? 錬金術師」

「まあいいだろう」

そんな感じで、戦闘面についてはまだ要相談だなこれは。

と、もう一つのことだが、

「聖遺物ギャラルホルン、ね」

「北欧の神々が、最終決戦ラグナロクの到来を呼ぶ笛だね。まさか平行世界へ移動する道具なんて」

「響達はそれで、オレ達はこの写真館でこの平行世界に移動した」

そしてその先で、ガイアメモリ、眼魔と言う見えない敵、ゲーム病と言うバクスターが現れた。

「はい、ゲーム病ってなんですか?」

セレナと言う子がそう尋ねて来る。彼女と奏と言う子は異世界から来ている。仮面ライダーのことを良く知らない。

「僕らの世界で、新しく発見された新種のコンピューターウイルスさ。人間に感染する

ね」

「それに感染すると、ストレスによって進行が早まり、身体がデータ化されちまう」

「その際、肉体からバグスターと言う、病原菌が各ジャンルのゲームキャラとして現れ、さらに感染者にストレスを与える。最終的には感染者は完全にデータ化され、バグスターはより自立行動可能になる。というところか？ 正確にはもう少し違うが」

フィリップ、翔太郎、一真の順に説明を受けるセレナ。奏も嫌な顔をしながら、  
「それはどうやって治すんだ」

「バグスターを倒すまたは、それ専用のドクターが、バグスターを倒すしかない。ただ  
ど」

「この世界にいるかどうか……」

そしてキャロルはホワイトパネルに情報を書き込み、裏側に回す。

「それと、ここからは平行世界側の、装者達の情報だ」

「地味に仕事をしていたオートスコアラーと言う人形のレイア・ダラーヒムだ、派手によろしく」

ホワイトボードにキャロルは書き書きと、情報を書く。

「まず天羽奏はコンサート事件の際、死亡している。一真がないからな、可能性は高かったが、当時の事件は大幅に被害は拡大していた」

「……………そうか」

「それなら、私も死んでますね……………倒壊している施設で絶唱なんか歌ったのなら、調も私を見て驚いてましたし」

暗い顔になりながら、キャロル自身も、

「俺もこいつがいなければ、記憶の焼却が大幅に軽減されていない。ならよくて廃人だろう」

「……………こつちの私はどうなんだろう？ 妙に調が驚いてたし、死んでいない、よくて知っている人なのは間違いないけど……………とっ捕まえて攫えばよかった」

物騒な事言うな、まあ過ごした環境が悪い。彼女の事情は多少だが知っている。

その後、関係が修復していると言うのは喜ばしい事だ。

『マスター他に話があるとしたら』

「噂だな。お前達、風都での噂ってのは」

「ガイアメモリが製造されているって噂だ、マスカレイドドーパントが廃工場でメモリを作るってな」

「実際、マスカレイドドーパントはいたし、関係ない人達、攫われたと思われる人たちもいた」

「そつちは照井がどうかしていることを祈るか。どんな風に俺達は移動したんだ」

「光だね、何か光ったと思ったら移動していた。現時点ではそうとしか言えない」  
地球外生命体ワームも関わるこの事件、闇が深いが、これらは全て、俺達仮面ライダーが解決すべき事件だ。

少なくともここに居る者達はそれに関しては問題ないらしい。

こうして俺達は動き出す。

………

「これからどうする？」

俺は剣崎一真とそう聞き合った。



「と言う訳です」

私は聞いた話を、みんなに報告した。

その後、犯人は捕まり、証拠品はコレクションと言っていたビデオや写真が決め手でした。あの人が来なければ私は………少しゾツとします。

ですが専門のカウンセラーが付けられるので、これで被害者の方が良くなることを祈るしかありません。

「平行世界の、奏……………」

「セ、レナが……………成長したセレナが」

ある意味向こう側が危惧する動揺が、私達から見ても分かるためなにも言えない。

「だが、こうして知ったからには、むしろ向こう側と腹を割って話し合いたいところだ」  
確かに、私達はそう思う。

その時、響先輩がおずおずと手を上げる。

「あのくどうして調ちゃんはマリアさんを盾に、そう私から、距離を取るのでしょうか？」

「ごめんなさい、ごめんなさいッ。」

もう大人しくしますから、耳元で怖い話をしないでッ。



「うえええええんっ、みくうううううううううう」

「よしよし」

どうも向こうの響は、ギャラルホルンの響みたい。

このギャラルホルンの響とは、私が側にいない所為でいまの響と打って変った性格の

響のことを言います。

泣き付く響をあやししながら、エルフナインちゃんが話を続けました。

「向こうにはキャロルの他にオートスコアラールもいるようです。この事件についてもボク達よりも詳しくそうではありませんが」

「こうなると詳しく話し合う必要がある……私たちの方は、しつかり受け止める」

「それじゃ、響先輩を探すですっ」

そう切歌ちゃんは言うが向こう側の情報は少ない。

他に気になるのは調ちゃんを助けた男の人だ。何者だろうか？



「とりあえずキャロル、お金は平気なのか」

「問題ない、いまこうやってコンピュータで増やしている」

『宝石を質屋に売って、それを元手にパソコンで増やすんですねマスター』

『地味に派手なことだ』

そうキャロルのペンダントからそれが聴こえ、少しイラつとするが我慢する。

その後はその金で買い物、響が付き添いで来るが、まあいい。



「キャロルちゃん、今日はお姉ちゃんと一緒に寝ようか」

「顔の表情変えずになにを口走るっ」

「……………エルフナインと一緒に、同じ味かな」

「おいッ、エルフナインになにしているんだっ」

「いや、ほぼ一真と同じならと思って」

『ヤンデレがおかしなこと言い始めた』

『もう手遅れだゾ』

『地味にエルフナインが被害者になっていた』

『あらあら』

オレの側により、背後を取る。まずい、接近戦はこいつが上だ。  
なにするか分らない知りたくないッ。

そうしていると、

「!」

「どうし」

その時、白いリボンを付けた、奴がいた……………

◇

「響待ってっ、どうして逃げるの！」

「未来が追いかけて来るからっ」

「平行世界の響だよねっ、逃げないでお話ししよっ、どんな響でも、響は私の大切な人だよー。」

『百合なんだゾ』

『地味に告白だな』

「やかましいわッ」

キャロルを小脇に抱え、走る私、

ここどこちらの未来に捕まれば、あれよあれよどこちらの翼やマリアと関わる。

「マリアさんも翼さんも覚悟を決めたって言ってたよ」

「それでも納得できないことがある」

「それでも話し合うべきだよっ」

「話し合いはいまじゃない」

.....

「この未来は走りが早い、いやこちらもか。どうしてこんなに身体能力が高いんだろ  
う。」

そして、

「未来っ、駆けつけたよ！」

「!?」

この走り回りの中で、まさか連絡していたのか。

目の前にカラフルな私がいる。その側に、

「デース。調は私が守るデースっ」

「切ちゃん」

いや出て来るなよそれなら。

だが都合が良い。

走りながら前に立つ私の横をすり抜け、そのまま後ろで調を守る切歌をすり抜け、掻っ攫う。

「デース？」

「あれ？」

「人質」

「ああああああああああああ」

◇

どうしてこうなったか分からないが、致し方ないだろう。

オレ達は月読調を人質にし、S. O. N. G. の本部へと来る。

「キャロル……………」

「そんな顔をするなエルフナイン、こっちのオレは悪人だろうに」

「けどキャロルはボクにとって家族ですから」

「それはこちらのキャロルだ、オレじゃない。ったく」

『ツンデレだゾ』

『言っちゃだめですよミカ』

ペンダントのメモリ破壊してやろうか？

ともかく、すでに歓迎モードなのはいいかなものか。

「それじゃ、改めて自己紹介、もおかしいか」

「まあな、あまり変わらないだろう。名前は」

そう言いながら、こちらと向こうの誤差を確認する。



やはりこちらの奏とセレナは死に、了子さんやナスターシャ教授はいない。

マリアはなにかそわそわし、翼もそわそわしている。

「こつちの二人に悪いから、死人は黙って会う気はなさそうぞ」

「そ、それは、そうだけどっ」

その辺の葛藤は任せるしかない、調を抱きしめながら、耳に息を吹きかける。

「なんか、こつちの私、だいぶ違うんですけど」

「こつちはこつちで色々あった、未来があ頃、側にいない私だ」

そして一番違うのは、

「かめんらいだーと言う存在ですね、彼らの存在は確認されていません」

「だろうな、一真の存在は決定的な部分である。オレも含めてな」

「私も一真に助けられたから」

そしてこちらの人達の要求は、情報の共有らしい。

元々ギャラルホルンの事件は初めてじゃないらしい、こちらに来る装者は初めてだが。

「言つちや悪いが足手まといだ、仮面ライダーの知識をいちいち説明するのは」

「アア？ それはどういう意味だ」

「こつちのクリスも口が悪い。」

「擬態と言う能力で瓜二つになる怪物や、高速移動に、超能力を使ったり、重加速やゲム病。魔法使いやメダル、果実の力も。種類が多すぎて伝えなきやいけないことはたくさんある」

「ありすぎだろっ」

「ならばこそ、我々に情報を教えてはくれないか？ 君達が拒否しても、この世界で事が起きる限り、我々は動くぞ」

「確かに、どうする剣崎響」

「はい？ けんざき？」

「……………立花の苗字は捨てた、お母さんやおばあちゃんを捨てて、自殺しようとしたんだよ私は。その意思表示……………いまは関係修復中だけど」

それに微妙な雰囲気になるが、すぐに切り替え、私は告げる。

「ともかく分かったよ、今度全員で来る。それでいいか」

「セレナが来るのねっ」

「奏も」

「分かったから、言っておくけど、来るかは本人次第だからな」

そして本部を後にする。

「待ってくださいっ、調を、調を返してっ」

「切ちゃんっ」

などと言ったことがあった。

◇

何かが静かに燃え上がる。

「……………また失敗、だが次こそ」

そう眩きながら、その場に草木が生えていった。

異形の実を実らせながら……………

## 第8枚・禁断の森

「……………早めに行動してよかった」

そう言い、剣崎一真はしゃがみ込み、異形の実を取る。

その実は極彩色の植物に実り、それを取り、食らう。

「やはり勝利者には意味ないか」

そう言い、いつの間にか空間から突如現れるように、剣崎一真の前に一人の男が現れる。

一真はそれをアンデッドの目で睨んで、男はおおっと、大げさにひるむが、顔は全然ひるんでいない。

「貴様がこの世界に根を張るか、蛇」

「いや違うぞ勝利者、俺は今回被害者だ」

そう言いながら、男の背後からジツパー状の入口が開いて、草木が中に取り込まれていく。実は残して。

瞬間、ジョーカーになり立ち上がり、爆炎が辺りを包む。

森にまで届く炎に、おいおいと慌てたそぶりをするが、特に気にも留めない。



「俺は呼ばれ、根を張ってしまった被害者だ。俺に怒りを向けるのは違う」

「黙れ、お前は統制者に近い、知らないとも思っていたか」

「統制者、か……まさか奴が取り込まれ、封印され消えるとは思わなかった。葛葉紘汰  
といいお前といい、仮面ライダーという存在は面白い……」

そう言い、ある仮面ライダーの名前を言いながら周りを歩く。

「ごたくはいい、お前はなぜここに」

「どうやら俺は、お気に召さなかったようだ。そう言っておこう」

【ふざけるなッ】

無数の武器が男に放たれたが、草木の蛇となり、それは通り過ぎて消える。

『俺は鏡から呼ばれた、気を付けろ。あの様子じゃ、まだ『呼ぶ』気だろう』

そう言い気配が消えたため、人の姿に戻りながら実を全て食らう。

「……………急ぐか」

そして人では無い力を振るい、その場から離れた。



「少しまずいんだけど、どうするか」

間髪入れずミーティングをすぐに始めた時、向こうの立花、彼女からガングニールか響。そう呼ぶように言われた。

その響が、キャロル、奏、そしてマリアの妹であるセレナ。彼女達と共に来て、難しい顔でそう言う。

「なにか問題があるのか？」

「どうも一真の話じゃ、ヘルヘイムの森の気配があつたらしいんだ」

「ヘルヘイム？」

「北欧神話で、女神ヘルが治め、ユグドラシルの地下にあると言う死者の国のことですか？」

エルフナインの言葉に、我々は目を丸くする。

あまりに突拍子の無い話だが、

「それより質が悪い」

険しい顔で顔を歪めながら、キャロルたちも分からないという顔をする。彼女達も知らないようだ。

「ヘルヘイムの森つてのは、仮面ライダーの世界の人類が付けた呼称で、実際名前は無い」

「響先輩が呼称っ!？」

「おい、気持ちちは分かるがいまは黙れ後輩」

「みんな……………」

立花が少し遠い目をしながら、僅かに呆れながら、話を戻す。

「外来種って言葉は知っているな」

「外国から来た、その大陸や地域に無い植物や生き物のことね」

「ヘルヘイムの森は平行世界、他宇宙からの外来種と言ったものなんだ」

「どゆことデス？」

ここで響が話すには、ヘルヘイムの森と言う植物は、どんな場所でも根を張り、実を作る。

それを見続けている生き物はそれを美味そうだと思い、口にしてしまう。よほどの精神力があるか、強く警戒していなければ、口にして食べてしまう。

口にすれば最後、インベスと言う生き物に突然変異してしまい、森の住人になる。

「インベスは別の個体に攻撃して、森の毒を植え付けて殺して肥料にする。インベスは実を食べて広げ、被害は拡大する。一種の侵略行為だ」

「そんなものがあるんですか」

セレナの言葉に静かに頷き、ヘルヘイムの森は、森を発見した者達が付けただけであり、剣崎と言う、まだ会っていない者が言うには、生き物らしい。

「實際蛇と言うアバターみたいなものを使って、森の侵食を受けている生き物に接触するらしい。私も会ったことないんだけど」

「どうしてそんなことを」

「本人曰く、そう生まれたかららしい。理由はない、森の侵食に耐え、森の力を吸収して、その世界の文明を進化させる。それが森の性質」

「その森が我々の世界に？」

「本当なら急いで根こそぎ焼きたいけど、問題は実を前にして耐えられるか、インベスが現れた際の対処、それと、あんたらがサンプルとして実を持つこと」

最後の一つだけ、我々は顔を険しくする。

だが響は、手で制した。

「それくらい警戒するもんだよ。ここだって組織として活動する以上、現物研究は視野に入れなきゃいけないことだろ？ だから場所は聞いてるけど、返答次第じゃ一真達に任せるしかない」

「……………つまり、木々のサンプルはけして取らず、危険物として一切合切処分することが条件か」

それに叔父様は頭を抱える。響の言うことはもつともだ。

危険物とは言え、未知の植物。我々の判断だけで処分することはできない。

少し腕を組みながら考え、すぐに、

「分かった、実並びにヘルヘイムの森のサンプルはけして取らない。我々もそれほどまでの危険物を管理する気はないからな」

「じゃ、メンバーを何人か決めて行こう。それと森の怪物と実はけして相手にしない、したとしても」

「毒のことや、実を口にしないことを前提だな、分かっている。だが実際現れたら」

「一真は問題ないんだ、一真のことも言っておく」

それは剣崎一真と言う者は人間から別の存在、ジョーカーと言う不死身の戦士になり、自分達を救ったと。

その彼なら実を食べても問題ないし、傷つけられても毒は効かない。そして我々からは私、マリアが出向き、向こうはセレナと奏が来る。



「おお、来たか」

私達はマリアと翼を連れて、もう一人の仮面ライダーである翔太郎が待っている工場へとやってきた。

「ここは、すでに廃棄されているな」

「ここに森の植物が」

「ああ、すでに発見されて剣崎が奥で処理、俺は人が入らないように見張りだ。俺も森の実は危険だから」

翔太郎の言葉に頷きながら、結局セレナとマリアをここに置いて、私達は中の見に行

く。  
一真のことだから、食べながら草木燃やしているだろうな……



平行世界のセレナ。

「~~~~~♪」

鼻歌を歌いながら、本部には連絡して周りの人払いは終わらせたし、この辺りで行方不明事件が起きているかの確認も終えて、現在はまだ何も起きていないらしい。

セレナは静かにいる。

セレナ……………

(セレナああああああああああああ)

もう可愛いッ、可愛いわよずるいわよ向こうの私ッ。

セレナごめんなさい、お姉ちゃんは寂しがり屋なのッ。セレナがいなくて何度くじけかけたか分からないの!!!

向こうのセレナはこっちのセレナや私のことを気にしてあまり話もしない。

話かしたいのッ、滅茶苦茶24時間体制で一緒に居たいの。

けどダメよね、私のセレナじゃないんだからそんなこと。ああけど……………

◇

顔には出ていませんが、気のせいかな、こちらのマリアさんは私を気にかけて暴走している気がします。

あつ、いま反応した。マリアさんと他人行儀にしたからなのっ!?

◇

一真は果物? つぼいもんをむしやむしやと食べていた。

「……………そっちはもう済んだのか」

「そつちはなに食べてるんだよ」

「ともかく火はいるか」

「火は自前がある」

キャロルとそう会話しながら、果物を食べている。

一見すると不気味なもんだが、確かによく見ていると食いたくなる。その前に食われていくが……

「確かに、危険な果物ですね……貴方は平気なんですか？」

「俺は人間じゃないからな」

そう言い、僅かにこちらの翼にジョーカーの姿を見せて戻る。

さすがに驚くが、すでに話しているから、すぐに落ち着く。

「ともかく、蛇と接触した」

「蛇と？」

「曰く、鏡から呼ばれたらしい。聖遺物で、鏡、召喚で検索を掛けて欲しいんだが」

「分かりました、本部に連絡を」

「いや待て、聖遺物、こつちや俺達の世界の神話の道具なら、相棒に聞けば早い」





「OK翔太郎、検索ワードは『聖遺物』『鏡』『呼び出す』でいいんだね」

僕の能力で、すでに確認済み。問題なくこの世界でも星の本棚は使用可能。

「さあ検索を始めよう」

白い空間、無数の本棚の中、僕は検索ワードを口にする。

無数の本が現れる中、少しばかり考え込む。

「少し多いな……もう少し絞り込むことはできないかな？」

そう連絡すると、すぐに『呼び出す』のワードを変える。

異形と……

すると一冊の本が手元に。

「ふむ」



『ニトクリスの鏡』か……エジプトの女王が持っていたらしい物で、本来は冥界のよ  
うな世界を見る鏡。そしてそこからそういうもんが出て来るらしいが」

携帯電話で相棒と会話しながら、それにキャロルは顔をゆがめる。

「存在する、ニトクリスの鏡とそのままだな。誰が所有しているか、完全聖遺物であるかは不明だが……………」

「こちらもいまエルフナインたちが調べ始めています」

「そつちもそれが当たりと思うのか。後は一真が蛇に騙されていないかだけど」

「そればかりはな」

そう思いながら立ち上がり……………



俺はすぐにガラスを砕いた。

ジョーカーになり、マンティスを構え、すぐに戦闘態勢に入る。

その様子に響や翔太郎はすぐに構え、奏ちちゃんは風鳴ちゃんと遅れて構えた。

「なんだ敵かつ」

【……………ミラーモンスターだと】

そう呟くと、入口である映るものから、レイドラグーンと言う怪物が大量に出て来る。

ミラーワールドには意識が向いていなかった。

「いっつは」

【ミラーワールドと言う、かつてあった世界の化け物だ。鏡の中に人間を引きずり込んで食らう】

「それが」

「かなり数が多いぞツ」

すぐにリモートを取り出し、無数のアンデッドを呼び出し、構える。

翔太郎も黒いメモリを取り出す、すでに緑のメモリが差し込まれていた。

「変身ッ」

《サイクロン！ ジョーカー！》

「これはまずいね」

「ともかくやるしかないッ」

「ちっ、こいつつはインベスじゃないっ、一匹残らず駆逐するぞっ」

「おうっ」

「ああッ」



「こつちでも数は確認したわ」

「行きましよう、マリアさんっ」

「ツツ、ええツ」

◇

二人の仮面ライダーが無数の敵を切り払う。

「ったく」

《ルナ！ トリガー！》

右が黄色に左の銃を取り出し、軌道が曲がりながら撃ち落とす。

《ルナ！ メタル！》

今度は伸縮自在になったメタルシャフトを振り回す。

ジョーカーになっている一真は斬撃を飛ばしたりして、数を減らしていた。

「このままじゃちが明かないぞ」

「数が多いうえ、かなり強敵ときた」

「仕方ねえツ、一気に肩を付けるぞブレイド！」

【ああっ】

13枚のカードを取り出し、バツクルを構える。

どこからか鳥の鳴き声と共に、エクストリームメモリが飛んできた。

《ターンアップ》

《サイクロン！ ジョーカー！ エクストリーム！》

13のレリーフを纏う黄金のブレイドと、完全にシンクロしたダブル。エクストリームが現れ、盾と剣を呼び出し、プリズムメモリを初めとした四つのメモリを差し込む。

「ビツカーファイナリユージョン」

ビツカーシールドから照射される光が次々とレイドラグーンを撃ち落とし、ブレイドは重醒剣キングラウザーにギルドラウズカードを読み込ませると共に、醒剣を取り出す。

《スピードⅡ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ ストレートフラッシュ》

無数いるレイドラグーンを切り刻み、全て消し飛ばす。

「まだ数がある」

「気を抜かずに片付けるしかないね」

「他のみんなは…………！」

その時、僅かに違和感を感じた。

だがすぐに敵が迫り、返り討ちにする。

「いまは……いつらか」

そう眩き、  
劍を構え走り出した。

## 第9枚・世界を超えたユニゾンと異変

私はいま、マリアさんと共に歌いながらレイドラグーンであると連絡が入ったモンス  
ターと戦う。

銀の剣と風と共に、飛び回るそれを倒す。

「気を付けてマリアさんっ、映るものからこれらが出たり入ったりしてます」

「ええ、分かっているわセレナ」

背中合わせでそれを話し合い、このままではいけない。

速攻で決める認識をして、私達はイグナイトに手を伸ばす。

「イグナイトモジュール、抜剣ッ」

銀の剣に黒が装飾され、私の纏うアガートラームも黒が混ざって、剣を構え歌いだす。

黒と銀、そして白の衣装。歌を歌い、銀の風に乗り滑る。

無数のナイフを取り出し、マリアさんも蛇腹剣を伸ばし、広範囲に攻撃する準備をし  
た。

私は回転して、スカートが刃のように鋭くなり、銀の刃をまき散らす。それが雪を放  
ち、辺りに刃がばらまかれる。

マリアさんはそれと共に銀の風を纏い突風になり、辺り一面にいるレイドラグーンを切り刻む。

「これで殲滅完了ですね」

「……………ええ」

気のせいかな、やはり敬語を使うと妙に間がある。

ひよつとしたらこつちのマリアさんは、マリア姉さんと大して変わらない寂しがり屋なのかもしれない……………



「オツラアアアアアアアアアアア」

槍を投げ、それが無数に分かれ、空を飛ぶレイドラグーンを貫き、翼は逆羅刹で倒し、こちらに来る。

「このままでは我々の体力が削れるだけ」

「なら、一気に歌うが、付いてこれるか？」

「無論だっ」

上等、私達はブローチに手を伸ばす。



「イグナイトモジュール、抜剣ッ」

翼は青に黒の鎧を纏い、私は黄色に黒い槍を挿み、ブースターがついた身体を見る。私だけ少し鎧じみてないか？ まあいいか。

歌いながら加速して、弾丸のように貫き、翼は炎と共に飛翔する。

私達は塊を見つけたとき、すぐに連携に入り、翼が私の背中に張り付き、炎の翼になり、私は槍を最大に回転させ、まさに炎の流星のように、レイドラグーンを粉々に蹴散らす。

「うし、問題ないっ」

「ああ、いまの我々は無敵だ！」

そして私は大爆発が轟き、お互い驚く。

あれは……………



「私に地味は似合わないっ」

「全部壊すゾ♪♪」

「それでは聞かせてください、あなた方の歌を」

「ま、久々だからやりますか」

「オートスコアラール全員を取り出し、オレもダウルダブルを纏い、蹴散らせる。

たわいないが、少しばかりおかしい。

（数が今回は多すぎる………誘導か？ なら狙いはなんだ………）

念のためインカムに連絡をつけ、エルフナインに話をする。無論渡されたものだ。

「エルフナイン聞こえるか」

『はいっ、キャロルなにか』

「少しばかり動きが気になる。他の装者は」

『響さんたちは外側付近で待機してます、これでレイドラグーン殲滅は問題ないと思

います。それ以外はなにも』

「………そうか」

「思い過ごしか？ そう思うが、

「ダブルエクストリーム」っ!!」

風を纏い、塊を蹴り飛ばすダブルが現れ、それに気づく。

「ダブル、一真は」

「ああ、彼奴は」

その時、大爆発が起き、オレ達はそちらを見た。

◇

虫が飛ぶ、めんどくさい。

「仕方ない、行くぞ魔剣ダインスレイフツ」

そう言い私はブローチを押し、魔剣を呼び起こす。

獣のようなうなり声と共に、黒い影が私に纏い、私の身体を闇に染め、巨大な爪を構え、拳を握りしめる。

「ぶち壊すツ、道を開ける絶望!!」

ブースターから吹きだす炎と黒い闇を纏い、空を駆け、目につくレイドラグーンは全て千切り、大地にいる者達には、闇を纏った紅蓮の炎を塊にしてプレゼント。

大爆発が起きる中、一掃完了し、私は周りを見る。

「……………真がいらない？」

◇

それは静かに見ていた。

「予想外に力が集まった、これは上々」

そう言い、なにかの欠片を手に持ち、ほくそ笑む。

「なにが上々だ、十面鬼」

それは一真の問いかけに驚き、球体に乗りながら、振り返る。

「仮面ライダーブレイドっ!? なぜ貴様がミラーワールドの中にッ」

「答えろ」

静かに戦闘の構えを取りながら、レイドラグーンを何匹か呼び出し、キングフォームのブレイドをけん制する。

「まあいい。我が名は十面鬼ユム・キミルつ、貴様を倒すものだっ」

「……………行くぞ」

瞬間、13のレリーフからカードの光が飛び出し、ジョーカーの力により一枚になる。

「来いッ」

《ワイルド》

その音と共に加速し、レイドラグーンを切り捨てながら接近するが、

「ワイルド返しッ」

その時、爆発するエネルギーがぶつかり、少し吹き飛ばす。



「解析はこの組織に任せられた方がいいだろう」

キャロルもそう言いながら、フィリップはその欠片を見る。

「何かの欠片のようだね、エネルギー？ それをどこかに送るものかな。興味深い」

「この世界でエネルギーなら、フォニックゲインか」

「フォニックゲインって、なんだ？」

翔太郎の問いかけに、キャロルは腕を組みながら、

「かみ砕けば聖遺物を起動させるエネルギーであり、歌と言えればいいんだろうな。まあ

代理エネルギーはいくらでもできるが」

そう言いながら横目で一真を見る、フロンティアを万能の力で起動させた男。

それにふくと反応を見せながら、そう言えばと懐に手を伸ばす。

「そう言えば、これを返すの忘れてた」

「……………ああ」

そう言い、翔太郎が懐から、紙束を取り出す。

それを見た一真も思い出して納得して、手を伸ばすが、

「ふつぎけるなああああああああああああああああああああー！」

キャロルは叫びながらそれを取り上げた。

「これはヤントラ・サルヴァスパ、だどっ!?」

「ああ、財団Xって言う組織と、少し面倒ごとがあつてな。その時にこいつが異世界から来た」

「あの時は、キャロルが何度も追いかけて来て大変だったから、次元の隙間を通つたら関わった」

「その時のことかッ、異世界に逃げていたのか貴様ッ」

憤慨しながら睨み、エルフナインも驚愕していた。

響たちは呆れ、向こうの装者は驚いている。

「それのおかげで、奴らしか使えない装置の起動を止めて、どうにかなつてな。んで、その次があつた。その時に、そのままどっかに帰つたから、俺が持つてたんだ」

「聖遺物を置いて行くなバカッ」

そしてキャロルは懐にしまう。それに一真は少し考えるが、まあいいかと思ひ立ち上がる。

「!?」

後ろから響に刺される。

「えっ? なにキャロルにプレゼントしてるの一真? 刺すよ?」

「なにしてるの私?!? そういうのは刺す前に言わなきゃッ」

「ちげえだろバカッ」

「いつものことのような気が……」

「真さん私も何か欲しいですっ」

「……………セレナ」

緑の血を流しながら、どこから取り出したか分からないナイフをしまう響。

立花響は向こうの自分がヤンデレでびっくりしていて、困惑し、マリアはこの世の終わりのような顔でセレナを見る。

キャロルは悪くないと言う顔をして、オートスコアラーはとりあえず宝石に戻った。



もう一つの世界の私は過激だ。

刺すとか壊すとか、少し分からない。だけどやっぱり私なんだと、心のどこかでそう思う。

「ともかく明日の用事を終えないとな」

「明日か、あたしらは泊まればいいか」

「えっ、平気なの私？ 夏休みの宿題とか、課題とか」

「んなもん、もう終わってるよ」



彼女は私なんだろうか？

ともかく、

「お願いッ、助けて私iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

◇

翌日の教室で、出された課題をこなすある少女の姿がいた。

教師はすぐに採点してくれて、少女は眠そうなのか、少し目つきが悪いが、本人はいいませんとすでに一声かけていたため、咎められない。

「はい、よくできました立花さん。よくやり遂げましたね」

「はい……………すこし、いえ、かなり眠いですけど……………」

「正直まだまだあるのですが、いまは休んでくださいね」

「はい……………失礼します」

◇

そして私が教室から出ると、こちらの世界の未来がいた。

「お疲れさま響」

「そっちの私はちゃんと勉強してる？」

「それがしつかりさせてるよ。もう響ったら……」

課題の点数の結果では、まだまだ夏休みの途中で呼び出される数が増えるため、どうしても赤点回避しなければいけないが、

だから平行世界から来た私が受けたのだが、

「疲れた？」

「正直。バレないように、全問正解も避けなきゃいけないし、赤点回避ギリギリがいいから、調整がね……」

苦笑する未来。私達はともかく歩いていると、

「お疲れ」

「デース」

「お疲れ様です」

そう言つて、後輩とこちらのクリスが出迎え、私は調を抱きしめる。

抱き心地いいんだよな。

「調——」

こっちの切歌も取られたように叫ぶけど、しばらくすると慣れるのはこちらも変わら

ない。

帰り道の中、他の装者の様子を聞く。

「マリアはセレナと一緒デス。デスけど……」

「セレナは、異世界の人として接するから、じりじりと精神を削られてます。正直迷惑かけて申し訳ないです」

後輩ズからそう言われる。それでも離れられないのは、こちらのマリアも寂しがり屋のようである。どうするんだこれ。

「先輩の方はカラオケ程度なら問題ないって、奏先輩とすぐに打ち解けたりしてるんだけどな」

「仕方ないよ、二人とも、こっちの自分のこと考えてるんだしね」

難しい問題だと思いつながら、静かに歩く。

そうして歩いていると、

「!」

その時、調を投げ、私はすぐに魔剣を開放して炎を防いだ。

◇

「ノックアウトファイトツ!!」

「なんだありやつ!？」

突然あのバカじやない方が後輩を投げ渡したと思つたら、炎を放つ、変なもんが現れた。

周りからも変なもん。ゲームの敵キャラのようなもんが現れる。取り巻きのように、やる気マンマンらしい。

「まったく、未来、平気？」

「平気だよ響」

「そっちは、イグナイトの力、かなり制御できるんだな」

「もう一つの相棒さ。とりあえずボスは任せろ、周りを頼む。けど近づくな、あれはバクスターだから」

バクスターってのは確か、ゲーム病とか言う、人に感染するコンピューターウイルスだったか。

私らにかかるとを考えると、問題だが、

「お前は平気なのか」

「魔剣を纏う、問題ない。行くぞつ」

「ファイツ」

後輩はギアを纏わせず、小日向を守らせ、私は雑魚キャラを遠方で倒す。彼奴は、暴走状態っ!? あつちとこつちじゃかなり違う。暴走状態で殴り合い始めた。

まったく、こつちとは別の意味で問題児のようだぞっ。

◇

「これはおもしろいことになっているな」

それを見下ろす男がいる。

整備された学園の道で戦いだすバクスターと未知の力。

「ノックアウトファイターを攻略できるかな?」

不敵に笑いながら、彼は彼で静かに観察する。

自分の為に……………

「ふふ……………この神の出番はあるか?」

そう静かに呟いた……………

◇

炎を纏うノックアウトファイターの拳に対して、暗闇を纏い、獣のように殴り合うが、「なんなんだあつちのバカはっ」

「暴走状態のはずデス!?!」なのはどうして」

理性的、技と言うものを使い、カウンターやフェイントを躲しながら、周りにいる雑魚キャラですら打ち倒しながら、攻め入っていた。

そして獣が蹴りを叩き付けるとHIT!と叩き付けたときに、

「!?!」

その足を掴み、拘束するようにその場にとどめた瞬間だった。

「デスっ」

無数のパズルが頭上から降って来て、二人はそれに潰された。

「響さんっ」

「響っ!?!」

「誰だッ」

クリスは何かがいた場所にガトリングを放つと、それをパズルのような壁が現れ防がれる。

「ほっほっほ。私はパーフェクトパズルのバクスターっ。レベル99!!」

「そう言い、杖を持つバグスターが現れ、それにガトリングを放ったが、霧かノイズのようにそれがずれて、攻撃が素通りする。」

「なっ」

「無駄です、我々バグスターはウイルスっ。落ち着いて対処すれば、あなた方の攻撃は無効化できるのですよ！」

「そう言った瞬間、黒い炎がパズルから巻き起こり、全員が驚愕する。」

「なっ!?!」

GAME CLEAR!と鳴り響くと共に、暗闇の炎から響が現れた。

その拳と言う名の爪で、ノックアウトファイターを貫いて……………

「ふんっ、だったら一ミリも残さず壊してやんよ」

「響がロングっ!?! いい……………」

「ヒナさんっ!?!」

「アニメかッ」

その様子に恐れて、また霧状になる。

それに舌打ちした響だが、

「ッ!?!」

辺りが光に包まれ、逃げ出そうとしたバグスターがその場に姿を現す。

「なっ、なぜ逃走がっ?!」

「ふっははははははははははッ」

突然何者かの笑い声が響き渡り、その男が姿を見せる。

「なんだっ?!」

クリスはそれを見ると、その腰には蛍光色のベルトが巻かれ、男は何かを握りしめ、叫ぶ。

「グレード0ッ。変身!」

《ガッシャット! レベルアップ! マイティーアクションX!》

それは黒い戦士。

ハンマー型の武器をすぐに剣へと変え、堂々と歩きながら現れたのは、

「仮面ライダーエグゼイドっ?!」

響の言葉に、

「違っうウウウウウウウウウ、私は、神だああああああああああ!」

そう叫び、仮面ライダーゲンムが姿を現した。





「仮面ライダーゲンムツ!? 檀黎斗が外に出たのかッ」

バイクを走らせ、左翔太郎と共に現場に向かう中、インカムからの通信を聞き、そう叫ぶ一真。

『何者なんですかっ!?』

エルフナインの言葉に、

「神と自負する男だッ」

『そんなだけで分かるかッ、詳しい人物像を言えッ』

キャロルに怒られた一真是、

「神だッ」

『殺すぞッ』



「ふっははははははははははっ」

「くっ、貴様のゲームドライバーの所為で、逃げられないのかッ。このっ」

無数のパズルがクリスマス達の頭上に現れるが、ゲムムは気にせず、「行つたぞっ」

そうしか言わない。

仕方なく、響や他の装者がそれを防ぐが、バグスターは叫ぶ。

「貴様っ、自分でどうにかしないのかっ」

「生憎と、できる者がやった方が効率がいい。貴様を倒せるのは、神である私だけだッ。ほかのことなどおお………知つたことかッ！」

斬り合う中で、ゲムムはバグスターにたびたび意味不明に触れている。

それにバグスターは、

「これは」

「気付くのが遅かつたなッ、レベル0はその名の通りレベル0オオオ。貴様のレベルはああ、すでに0ダアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「早いッ、これは」

「無駄に牢獄の中にいたわけではなあああいいいいいい。私はレベル0の能力を上げておいたのさー!」

そして静かに、

「さ・ら・にいいいいいいいいいい」

《ウイザード!》

「グレート0レジエンド!」

《アガツチャ! シャツシャツシャバドウビタツチで変身! プリーズ! マジッグウイザード!》

赤い魔法陣が現れ、その姿が変わる。

手に持つ武器も変わり、ゲムムは叫ぶ。

「この通りつ、隠し持っていたライダーガシャツトも使用可能おおおお。やはり

……私は天ツ才だああああああああ!!」

高笑いしながら、炎を纏いながら、トリツキーに動き戦うゲムム。

その様子に、

「な、なんか、嫌な人を思い出すデスっ」

「うん、似てる……」

そう言い合いながら、静かに見ているしかない。

「これで終わりだッ」

そう言い、いつの間にか設置されているコイン状の何かに触れる。

それと共に、ガシャツトを腰ベルトの別口にセットした。

《高速化!》

《キメワザ！ マジックザクリティカルストライク！》

高速に移動し、何度も炎が切りつけると共に魔法陣が拘束し、空にいつの間にか高く跳び上がり、魔法陣を叩き付けるように、バグスターに飛び蹴りを叩き付けた。

「ゲームクリアだ………」

そう言い、静かに仮面ライダーゲンムは勝利を収めた。



「仮面ライダーゲンム」

「檀ッ、黎斗神だ!!」

「檀、黎斗神」

「言い直すなよッ」

一真と檀黎斗神が向かい合う中、周りに関係者、人が集まる。

「仮面ライダーW、仮面ライダー剣、このような形で再開するとは」

「一真、こいつ」

「雪音クリスくん、は、どうやら初対面のようだ」

「こいつ私の事知っているのかと言う顔になるが、響が落ち着かせ、無視して話を進め

る。

「お前も、呼ばれた口か」

「そうとも、この、神の才能を求められたらしいが、どうやら求めていたものと違うらしく、危なく、残りの残機を消されるところだった」

そう言うと、立体映像のようにモニターが出て、1と表示されている。

その話を聞く中で、翼が気づく。

「待て、その口ぶり。この騒動を起こしている者と」

「出会った、そしてどうにか逃げ延びたのさ、この私はっ」

それに空気が変わり、全員が神を見る。

「少しばかり厄介だ、そろそろ奴らは」

その時、司令室から連絡が入り、それと共に地震が大地を揺らす。

全員が体勢を崩し、切歌と調を支えた為、響がギロリと二人を見る。

戦慄する二人だが、それより驚くことが起きた。

「これは」

空に、地球が映り出す。

「これは」

「あんときと同じ」

「どうやら動き出したらしい、相手はあの時の者だ、仮面ライダーブレイド」

「なん、だと」

「そして目的は……………」



一人の男が鏡と黒ローブに祈るように、装置を動かす。

「これで本当に……………」

「ああ。お前の願いが、この魔法石と聖遺物と連動して、お前の願いを叶えてくれる」

「……………また怪物を出すだけじゃないのか？」

「その怪物の力は見ていたはずだ。その力を使えば」

「……………」

そして男は言われるがまま、魔法石に触れ続ける。

黒ローブ、ファントムは心の中で笑う。

全て、自分の願いの為に……………」

## 第10枚・小さな願いの果て

「それはある男が願った偶然からだ」

神は車の中、指揮者に手を動かしながら語る。

「どうもその男は娘がいて、不治の病らしい。そんな中どういう経緯かは知らないが、鏡を手に入れた。異次元に通じる鏡を」

「聖遺物か」

劍崎響が、立花響たちと共に聞く中、神は頷く。

「そこである魔法使いが現れたらしい」

「魔法使いだあ？」

「驚くことでは無い、我々の世界、ライダーの世界では太古に錬金術師や魔法使いと言った者たちがいたのだ。ともかく」

「そいつの力で娘さんは治ったと？」

合流した面々と共に、神は頷き、だがと続けた。

「娘はまた唐突に病気により倒れた、魔法使いが言うには、力が足りない」と

「まさかその人」

「魔法使いに言われるがまま、鏡の力を開放し続けた。魔法使いが管理しているから、化物たちは大人しいらしい。私も、その中で呼ばれた」

「そうなのか」

翼が真剣な顔で頷くと、

「まあ、娘の病の正体は鏡の所為なのだがな」

その言葉に全員が神を見る。神は無駄にその視線を浴びた。

「考えてもみたまえ、なぜ私がここまで知識があるのかを。神と自負する才能がろうと、異世界の知識まで持ち合わせていない。私は鏡の力で呼ばれた、ゆ・え・に」

「鏡からある程度の知識を与えられたのか」

「その通りだ左翔太郎」

「その子が聖遺物の装者なんだきつと」

その言葉に、エルフナインも通話越しに話しかけてきた。

『おそらく響さんの言う通りなのでしょう。完全聖遺物かは分かりませんが、起動には必ず装者がいなければなりません』

「魔法使いはそれを良い事に、うまく男を騙していると言うところだ。自分の世界をこ



の世界に創造するために。私もそれを断った瞬間、殺されかけたが、データになり逃げた」

その時、緒川が叫ぶ。

「そろそろ見えてきました」

車の前に無数の怪物が現れ、町を壊していた。

人は避難していて、その先に建物らしき建造物が生まれたのこと。

「ともかく、その鏡を破壊すればいいのか」

『いや、鏡だけを壊しても、効果は消えるかどうか』

「俺が封印する」

『……………しかないか』

キャロルの言葉に、彼らの行動は決まった。

「行くぜフィリップ」

「僕の身体、お願いするね」

「分かりました、ご武運を」

緒川にそう呼びかけ、左翔太郎と一真を始め、車から装者が出て来る。

「派手に歌うか」

「絶望は道を開ける……………」

「一直線に真っ直ぐにッ」

「デース」

「神の才能を見せてやろう」

瞬間、姿を変えて、怪物たちへ流れ込む。



「これは、これで娘はまた元気になるのか」

「ああ、また元気に学園に通え、普通の人間として、生を謳歌する」

「……………本当に」

「星から力を奪わなければいけない、お前は、またベットの上にいるだけの人生を、娘に強いるのか？」

「……………」

苦しそうにうなりながら、鏡に祈りを捧げる男。

それが許されないことは分かっている。

だが、だがと……………

「……………」

ロープの男は外に出て、喉を鳴らす。

「やはり人間は愚かだ、全ての元凶に、救いを祈るとは」

静かにそこに、イカデビルが現れ、笑いながら告げる。

「準備はできた、お前の、世界創造の準備が」

「他の怪物たちも愚かだ、自分たちがフォニックゲインを集める端末に改造されていると知らずに町に出向き暴れ、装者たちに撃たれるたびに力が集まる」

「完璧な作戦だっ」

「後はッ」

憎々し気に、彼は三人の戦士を睨む。

「仮面ライダーどもッ」

◇

「お熱いの行くぜ！」

「邪魔だッ」

「ふはははははははっ」

0の力を振るうゲナム。数を見ながら、渋々ガシヤットを取り出す。

「神の力は終わらない……………」

《バーコードウォリアーデイクイド!》

破壊者の力を振るいだすゲンムに呆れながら、カリスへ変わり、ワイルドカリスに成る。

《ワイルド》

何体も巻き込み吹き飛ばし、切りがないため、響がすでに抜剣状態で暴れていた。

「数が多いよつ、私たちも抜剣を」

「待てつ、彼女と違い、我々はそう長く持たないぞ!」

「だからつてええええええええええツ」

ミサイルや弾丸、途中から全員集合して突破を図るが、先に進めないでいた。

「どうします? このままじゃ」

「おい神つ、どうにかできないのかよ!」

敵を倒していたゲンムが、静かに考え込み、

「致し方ない、神の才能。最高神の力を見せよう……………」

白い塊のガシャットを取り出し、ゲーマドライバーにセットした。

「いまはまだ神の中の神になる時ではないが、いいだろう」

その時、何かを取り出し、



高笑いをしながら発光して、感電しているそのフォームは、  
「……………長くはなさそうだ」

「あれについて行こう」

「了解」

◇

「来たか」

巨大な何かが迫る中、男はいまだに祈りを捧げていた。

すでに男は何も見えていない。

「我が魔法の力に、もはや抗えない。欲望をさらし、そして世界を絶望に染めろ」

その時、巨大な何かが、何かをぶん投げた。

《サンダー キック ライトニングプラスチック》

《ジョーカーマキシマムドライブ》

壁を蹴り破り、二人のライダーが現れ、男がそれを睨む。

「怪物のライダー……………またもやたてつくか！」

「貴様、まさか」

「私は」

指輪を取り出し、構え出す。

「変身」

《チェンジ！ナウ！》

金色の魔法陣が辺りを包み、そこに現れるのは、ハルバートを持つ金色の魔法使い。

「フアントムのライダー………」

「貴様と同じ、私は仮面ライダーの力を持つ。仮面ライダーソーサラー」

「怪物のライダーか」

ダブルがそう言うと、イカデビルも出て来る中、静かに歩き出す。

「そうだ、貴様と同じだブレイド。だというのに貴様は怪物を裏切り、ライダーの真似事をする。怪物でもライダーでもない貴様は、醜悪の極みだツ!!」

「こいつは怪物でも、ライダーの心は本物だ」

「それは僕ら、仮面ライダーが一番分かっている」

「真に醜悪なのは貴様だソーサラー………」

鏡の前で操られたように、ずっと娘のために祈る男性を見る。

その前にあるのは、禍々しく、数多の世界を映し続ける異形の鏡。

「貴様は俺の本能を刺激したツ」

「さあ、お前の罪を数えろ！」  
その瞬間、彼らは駆けだす。

◇

「砕けて散れ絶望ども！」

壊して壊して壊し続けて、やっと海上に浮かぶ塔を見る。

「やっとたどり着けた」

「デスっ」

「黒い人がおかしい」

突然感電して、元の大きさに戻り、白いガシャットを取り出す。

「……………ふん、やはり天才ゲーマーである彼の力、条件が揃わなすぎたか。だが前座はできた」

紫の光を纏うガシャットをしまい、敵を倒しだす。

響は黒い咆哮を上げ、敵と言う敵を壊す。

◇



《ライトニング！ナウ！》

《サンダー》

雷撃がぶつかり合う中、剣と斧が激突する。

「貴様は我らと同じ怪物ツ、人に忌み嫌われ、人を絶望に起こす。それでもなお抗うか愚か者めツ」

「それでも、俺はライダーだ！」

「真の姿を見せてもまだ言えるか!？」

《エクスプロージョン！》

その指輪の方角に、祈る男がいる。

「きさい」

《ナウ！》

バニティアンデッドに変わり、それを防ぐ。緑の血をまき散らし、膝をつく。

「それが貴様だアンデッドツ。その姿こそが貴様なのだ」

その瞬間、鏡が無数の鎖を吐き出し、彼を捕らえる。

「このまま鏡の栄養になれ！」



「っ!? なに」

「あれは」

塔がより浮上し、無数のドラゴンの顔を出す。

「まさか塔自体が怪物か……どうする、ブレイド！」



【ふざけるな………】

その鎖を握りしめ、力が吸われるのに抵抗する。

「無駄だ、怪物である貴様に、抵抗することはできないッ。その鏡は怪物の出入り口、貴様をそのまま異世界に飛ばしてくれる！」

だが、

【俺は………俺は！】



「っ!? なんだ……………」

ゲナムは手に持つ輝くガシヤットを見る。

それを見て、しばらく考え込み、ふんと笑う。

「いいだろう、神の才能を、くれてやるッ」

そう言い、輝くそれらを塔へと投げた。

◇

「なんだっ!？」

「なめるなッ」

《ジョーカーマキシマムドライブ》

イカデビルを倒し終えた後、ダブルは叫ぶ。

「彼奴は怪物だろうが関係ない、彼奴は」

「僕たち同じ」

「仮面ライダーだッ」

《ハーフボイルド! 数えろ! お前の罪を! 名探偵ダブル!》

その瞬間、目の前にガシヤットが現れ鳴り響き、彼の中に入る。

「ああああああああああああ」

《キング！キング！キング！ キングオブポーカールブレイド！》

彼の中にブレイドのガシヤットが鳴り響くと共に、一つの赤と青のガシヤットが降り立つ。

《ラビットタンク！ ウサギと戦車！ ベストベストマッチ！ イエーイ！》

その瞬間、一人の仮面ライダーが現れ、ソーサラーは武器を構える。

「なんだ、何者だつ。貴様は仮面ライダーかッ!？」

「俺の名はビルド、作る、形成すると言う意味の、ビルドだ」

「そう言い、静かにドリルクラッシャーを取り出す。」

「さあ、実験を始めよう」



無数の頭部を持つ塔の怪物の周りに、ガシヤットが現れる。

一つのガシヤットが空間から現れた。

無数のガシヤットからライダーたちが舞い降りて、塔のドラゴンと戦いだす。



「あり得ない……なぜ、なぜライダーがここに来たッ」

「仮面ライダーはどこからでも現れるッ、大切な、祈りの声が俺たちを呼んだ！」

「祈りだと、あの操り人形かッ」

「彼の祈りは間違っていただろう。だがそれは方法だけだッ」

雷を避けながら、ビルドはドリルクラッシュャーを鳴り響かせ、斬り込むと共に、ブレイドも駆けつけ、共に斬りかかる。

「娘を思う彼の祈りは本物だッ、だからこそ俺たちは来たッ」

「仮面ライダーが怪人と言うのならそれでいいッ、それでも俺たちは」

「俺たちは戦うと決めたんだ！」

斬撃が決まり、鏡へとぶつかるが、ソーサラーはまるで鏡と同化したように建物と一体化した。

「ふざけるなッ。我々は悪だッ、それ以上も以下でもないッ」

「貴様の価値観なんて」

「俺たちが知るかッ」

その瞬間、二つの黒い影が壁を壊して、男とイカデビルだった男を攫う。

【!?】

「救助は任せてくださいッ」

「思いつきり行けライダーっ」

二つの顔を見て、三人のライダーは構える。

「勝利の法則は、決まった!」

「終わりだ」

「決めるぜ」

◇

19人のライダーが飛び上がり、各々の必殺技が輝く。

「セイツヤアアアアアアアア」

「セイハアアアアアアアアアアア」

「フィンナーレだッ」

「だああああああああああ」

弾丸のように貫かれる中、ソーサラーはそれを見た。





「離せッ」

「キャロルを確保してれば一真が出て来るッ、放してなるものか！」

「一真の奴、オレを忘れているな……………コロス、殺して中のものを取り出す！」

「ねえねえわたし、キャロルちゃんここにいますなら、私一緒に寝たいんだけど」  
「くつつくな抱き着くなオレに近づくなああああああ」

「セレナ、あなたしばらくここにいますのね、私もしばらくいますわ」

「泊まりますね姉さん」

「翼あんがと」

「違う世界の奏であろうと、私と奏の仲だろう」

「……………うまく利用されてる」

「オヨヨ」

「もうなにも言うまい」

クリスが呆れながら、そんな光景を見ていて、早く迎えに来いと、一人のライダーの顔を思い返す……………

一つ言えるのは、一つの親子だけは、幸せになった。



ただそれだけの話だ……

## 第11枚・別れた後の平行世界の彼ら

私の名前は立花響つ、私は現在、

「この公式はね」

「凄いや私っ」

平行世界の私こと、剣崎響に勉強を見てもらう。ある実験をエルフナインちゃんから頼まれた。



こうして私たちは平行世界へ翼さんとクリスちゃんと共に来ました。

完全聖遺物ギヤラルホルン、これによって起きる数々の事件を解決するため、無関係ではありませんがデータ収集のために、こうして事件が起きていない世界へと渡って来たのです。

「相変わらずこの世界も同じに見えて、少し違うんだな」

「だねクリスちゃん♪ この世界はどんな世界だろう？」

そう話し合っていたら、警報が鳴り響く。これは、

「ノイズやも知れない、立花、雪音」

「ああ」

「はいっ」

そして私たちは急いで出向く。

この世界の最大の問題へと……………

◇

「ちつくしよ今回は数が多いっ」

そう叫ぶイチイバルの装者、雪音クリス。

「致し方なし、散開して各個撃破だ」

そう言い、剣を振るう風鳴翼。

ガングニールの響は拳を振るい、シユルシャガナの調とイガリマの切歌。

そしてアガートラムの……………

「はああああああああああ」



「こいつは」

「アガートラームを纏うのは」

「セレナちゃんっ!?!」

そう叫び、乱入する三人に、装者全員が驚きながら、こちらを見る。

「わ、我々がもう一人っ!?!」

「となると、ギャラルホルンか?」

「話が早くて助かるな、私は雪、って先輩がいるんじや、苗字呼びも意味ないか」

「待てっ、そっちの雪音は私のこと先輩と呼んでくれるのかっ」

「あっ、向こうはまだ恥ずかしがってるみたいだよっ」

「その通りデス」

「いやいいから戦えよっ」

「皆さんきますっ」

その言葉に、全員が協力して戦いだす。

そんな中思うのは、一人いない装者。

それを振り払うように、平行世界の装者はノイズを倒す。



「ギャラルホルンのテストで、我々の世界に来たのか」

「はいっ、こちらでは立花と呼んでって、翼さんは名前で呼んでください！」

「心得た、では我々の方の基地で休むといい」

「皆さん、きつと歓迎してくれます♪」

そう言い微笑むのは、自分たちの世界では死んでしまった少女であった。



「ようこそ、話は聞いているよ」

「こちらの叔父様、しばしよろしくお願いします」

「まあ、平行世界とはいえ、自分がもう一人いるってのは」

「少しびつくりするよね」

「そうだね。こつちとそつちの違いってなにかあるのかな？」

それに凍り付く平行世界に、ポカッと雪音が立花を叩く。

「ばか、察してやれよ。こっちだって、セレナが死んでたり、奏が生きてたりしてるんだから」

「あつ、ごめんなさい……………」

「うっ、ううんいいよ私っ。けど、そっちのクリスちゃん、そんなに本気で叩かないんだね」

「ご志望なら叩いてやるぞバカっ」

響とクリスが話し合う様子に苦笑する平行世界。

だがと風鳴が難しい顔で訪ねた。

「テストである以上、差異は確認せねばいけないだろう。言いにくいかもしれないが、質問してくれ私」

「すまない……………では」

エルフナインなど、あまり変わりは無く、やはり一番違うのは、

「マリアは……………」

「マリア姉さん？ マリア姉さんがどうしたんですか？」

「マリアはどうしている？」

「はい、いまアガートラムが故障しているので自宅待機です」

その時、やってきた装者たちはなんとも言えない顔になる。

死んでいたと思っていたが、単純に出れなかったただけだった。

「なんていうか、よかったとかかなんていうか」

「ああそうだな」

「そ、そうか。だが、よくよく考えれば、マリアとセレナ。二人の年齢差が違うな」

よく考えれば、セレナはマリアと2、3歳差だが、話を聞くとかなり年齢差があるらしい。

ネフィリムの暴走の所為で、傷を癒すのにコールドスリープを使用したからだそう  
だ。

「それ以外に違いはなさそうだな」

「そうですか、そちらのマリア姉さんも元気そうで嬉しいです」

「あつははは、そ……………う……………」

その時、響は気づく。

組織の面々、特に切歌と調が物凄く顔を反らしていた。

それに気づいたのはクリスと翼も同じである。

「せ、セレナちゃんっ、そういえば今日はいいの？ なにか予定とか」

「？ 別にありませんけど？」

立花が話題を変えようと、急に変な事を言いだし、セレナはきよとんとしている。

「そんなことは無いデスよっ、きつとなにかあるデス！」  
「う、うんっ、きつとあるよセレナ!!」

そしてしばらく考え込み、少しだけ頬を緩ませて、

「それでは私はここで………暁さん、月読さん、また」

「はいデスっ」

「またねセレナ」

そしてセレナは嬉しそうに基地を後にして………

みんなが沈んだ顔になる。

「………なにながあった」

「………実は」



とあるマンションの一室、一人の女性が来客の対応の為、ドアの側に近づく。

「だれ………」

「マリア、私だ」

「つばさ………いまはだれにも会いたくないって言ったわよね？」



「マリア、いい加減にここを開けてくれ」

「いやよ………いまは一人になりた、はっ!？」

その時、背後に気配がしたのに気づき、振り返ると、

『影縫い』っ」

クナイが影に刺さると共に、マリアは動けなくなり、それに驚く。

「っ、翼が二人っ!？」

「平行世界から来た私だ、中を開けてくれ私」

「あ、ああ………」

少し戸惑いながら、扉を開けて、セレナを除く全員が中に入る。

『うわあ………』

全員が魔境と化した部屋と、布団をかぶり、目にくまを作ったトップパーティーテイストに、ただただ驚愕している。

この世界のマリアは引きこもりになっていた。



「なぜこうなってしまったんだ」

「言いにくいことなんだか、言いやすいんだか……」

クリスは事情を知らない三人に、どういえばいいか分からないが、覚悟を決めて言う。  
「こっちのセレナには彼氏がいる」

『うわあ……』

マリアは悲鳴を上げ、錯乱し、切歌と調は泣きそうな顔になる。

「マリア、いい加減に現実を見るデス」

「セレナの恋人さん、良い人だよ」

「それが一番納得できないっ、悪い虫なら、悪い虫なら別れさせてるのにッ。セレナ、セレナあああああああ」

泣きながらセレナの名前を連呼する様子に、クリスは雪音たちに説明する。

「とまあ、セレナに彼氏ができてからご覧の有り様で、こっちも参ってるんだ」

「大変だなこっち」

ともかく、こんなんでは戦闘に参加させられないため、色々困っているらしい。中に入れたのはラッキーなので、この際掃除をします。

泣きながら縛られるマリアと風鳴、翼を隅に、掃除し出す装者たち。

「わ、わたしたちは？」

『マリアを見張って』

ほぼ全員からそう言われ、お互いがお互いを励ます光景を見ながら、

「クリス先輩、服はどうするデス？」

「一か所にまず集めて、後で色落ちするものとしないものに分ける」

「クリスちゃん、雑誌とかは？」

「まずは数が数だから、一か所に集めて、古いものを束ねて捨てる」

「このスナイパーライフルはどうするデス？」

「専用のアタッシュケースがあるはずだからそれにつてッ！」

「デス？」

そう言い、切歌はスナイパーライフルを持ち上げ、その時、引き金を引く。

天井へ音もなく、弾丸の痕跡ができた。

全員が固まり、沈黙後、マリアを見る。

マリアは顔を背けていた。

「……………マリア？」

「……………これしかなかったの」

マリアはそう、焦点が定まらない目でそう告げた……………



「ね、ねえわたし」

「な、なにわたし？ いま凄いことに」

「違くてこれ」

「えっ？」

二人の響が洗面所の鏡の裏側にセレナの写真があるのを見つけ、それに嫌な予感がする。

映画とかだと、殺したい相手の写真が鏡の裏にいつばいあるとか言うのが定番だ。

そしてこのセレナは隣に誰かいて、隠し撮り。

「や、やめてわたし、それ以上踏み込まないでっ」

「わ、わかっているってわたしっ。さすがにわたしも」

そう言っていたら、鏡が開いた。

鏡の裏側には、男女の写真がびっしりと貼られていて、男だけがズタズタにされている。

無論、これがセレナの彼氏だろう。

「うわああああああああああああああああああああああああ——！！」



マリアは余罪を聞かれている犯人のように黙秘して、だがしかし、部屋を掃除すると次々と証拠が見つかる。

『姉さん、いまなにしているんだろう……………』

『マリアさんだから平気、にしてもな……………』

と言う男女の声が響くノートパソコンが決定的になり、マリアはゆつくりと語る。

「……………セレナについていかがわしい思惑があると思ったのよ」

「盗聴器……………盗聴器ですか」

「無いわあ……………ほんと無いわあ……………」

「マリア……………」

「そこまで追い込まれていたんデスね……………」

クマがあるのも、ずっと盗聴していたかららしい。

だが過去ログを確認しても、彼はセレナを大切にされていて、むしろ聴いている皆がブラックコーヒーが欲しくなるほどのバカップルだ。

それをずっと聞いていて、涙が枯れたらしい。

「セレナ……………私のセレナが」

『ねえ……私たち、付き合ってくださいぶ経つよね』

「!?」

その瞬間、縄抜けをし、パソコンに食い気味にかぶりつく。

『な、なに言ってるんだセレナっ』

『その、ね……キス、してほしい、なって』

「ダメよセレナっ、そんな子に育てた覚えはママには無いわよ!」

「お、落ち着けマリアっ」

「やっぱりあの時撃っていればよかったっ、まだ遅くないっ。立花響、アタツシユケースを渡しなさい!」

突撃してくるマリアを立花が抑え、もう片方の響がケースを持つ。

残りのみんなはマリアを抑える。

「落ち着くデスマリア」

「狼狽えるなッ」

「狼狽えてるのはお前だけだ!」





叫び声を上げ、ついに立花を乗り越え、ケースへと迫る。

この様子を見ていた平行世界の装者はお互いを見て、頷く。

「……………じゃ、我々はこれで」

「待て、逃げるな平行世界の私っ」

「……………逃げるぞ」

「う、うんっ」

「待ってあたしっ」

「待てっ、この状況を解決してから帰れ私っ！」

今度は数名、自分を掴み、抑え込む。

「放せ！ 付き合っついていられるか！」

「見捨てないでくださいっ」

「もう耐えられない……………」

アタツシユケースに手を伸ばすマリアを止めながら、装者はその場から去ろうとする。  
る。

結局、アタツシユケースだけ押し付けられ、その世界から去っていった。





「それで、これがお土産ですか」

「こちらで処分して欲しいと懇願されて、断れなかった……………」

「こつちに戻った私たちは、師匠たちにアタツシユケースを任せ、平行世界のことを話すが、

「こちらのマリアには」

「黙ってようデス」

「うん、知ったらなにする……………はっ！」

そして調が見ると、扉の隙間から血走った目で話を聞く、歌姫が……………



「放してっ、向こうの私の代わりに私がセレナの悪い虫を駆除するわ！」

「落ち着けマリアっ」

「狼狽えるな！」

「狼狽えてるのはマリアさんですっ」

「放してええええええゼレナあああああああいつやあああああああああ——」

その様子を見ているのは、もう一つの平行世界の剣崎響側の、セレナと奏だ。

「全く……なにやっつて、つてこれ、写真？」

「向こうの私と彼氏さんの？」

その写真を拾い上げて見てみると、

「……………は？」

「こいつは」

「!!!」

嬉しそうにセレナは手を合わせて、その写真を見る。

彼氏の男は、どこことなく、ある男によく似ているのだ。

セレナは嬉しそうに頬が緩み、それに対してマリアの反応がより強くなる中、剣崎響

は、

「少し用事ができた、エルフナインどこだっ」

「待って響っ」

暴走し出す者たちの中、クリスは悲鳴を上げた。



師匠が出てくれて、その後座標はエルフナインちゃん以外誰も分からないため、もうあの世界にはいかない。

キャロルちゃんが動き出そうとして、こちらも問題になり、平行世界組は帰還した。

「なんだっ、いてやると言うのになぜ帰すッ！」

「エルフナインちゃん私とお話ししようかあああああああああ！」

「待つてくださいいっ、そつとしておきましようっ。平行世界ですしっ」

「いいから帰るぞ響っ」

マリアさんはあの後、エルフナインちゃんと二人つきりになろうとしたりしましたが、何度も側にいる私たちが止めに入りました。

こうして私たちと剣崎響の話は、ここでいったん終わりました……………

「クリスだつてこっち側なのにッ」

「あたしはヤンデレじゃねえよッ」

「……………」

奏さんが目を背けましたが、私たちも目を背けました……………

## ワイルドカード・暗黒面2

それは嬉しい限りです。

ボクはキャロルにまた会えました。

色々な話を奏さんから聞き、少し騒動がありました。が、いまではキャロルと暮らして  
います。

「こうして暮らせる日が来るなんて、ボクは嬉しいです」

「そうか……、ほら、口にシチューがついてるぞ。拭いてやろう」

キャロルはボクに優しく、なんだか嬉しい。

帰ってからのキャロルは、ボクと仲良く、家族として……

『マスターったら、エルフナインのことを娘のように扱ってますね』

『ヤンデレは自己解決が凄いゾ』

『地味に確実な事実を拾うな』

『エルフナイン逃げて、キャハハハハハ』

……えっ……



特別監獄、内部1。

「セレナがセレナがセレナがセレナがセレナがセレ——」



特別監獄、内部2。

「……………ははっ」



特別監獄、内部3。

「やばい、第五から第三ロツク破壊されてます！ このままでは解放されますツ」  
「響やめてツ、異世界の一真さんとセレナさんがいちやいちゃしてるからつて」

『この衝動二いいいいいいいいいいイイイイ、ミをマガゼロおおおおお——』



「……………なんデスかこれ、世紀末？」

「クリス先輩が無表情でこつち見てるんだけど……………カメラ隠れてるんだよね？」

「姉さんはもう、早く独り立ちして欲しいな〜♪」

「セレナ、おま……………」

「……………よかった、我々はまだ正気のようにだ」

だがしばらくしてエルフナインは風鳴家へ避難し、キャロルからも逃げ出した。



「というわけで、私たち、平行世界組が、剣崎さんたちの世界に来ましたよ〜」

「こつちは平気なのだろうか？ 我々の世界の実験で大変なことになったらしいが」

「あたしはとりあえず、こつちの自分に会うのが怖いぜ……………」

そして異世界から来た彼らが異世界の自分を見て、戦慄するまであとちよつと……………



「こっちの響、少し明るくって、女の子の格好はちゃんとするんだね」

「うんっ♪ こっちの私はオシヤレしないの？」

「うん。だから……………」

その手を掴む未来。立花響はへ？と暢気な顔をするが、彼女の背後の部屋は、真っ暗であり、彼女はハイライトが消えた目で、微笑んだ……………

「おしゃれの時間だよ、響……………」



「こっちの私はまともでよかった」

「少しは違うと思うが、あそこまで取り乱す気は無い」

そう言いながら、自分の部屋へと案内して、部屋を開ける。

そこは腐海で広がって……………すぐ閉めた。

「……………私？」

「最近緒川さんが響たちの世話で……………奏」

「あーはいはい」



大人しく、風鳴と雪音は、翼の部屋を掃除していた。

「こっちの先輩は変わらないのか………なんか安心するのがおかしいな」

「言うな雪音」

「かなで〜かなで〜」

「全く翼は、よしよし」

そして静かに雑誌を縛って、外に出すとき、

「このままの翼でいいんだぞ………」

そう呟き、部屋に戻る。

たまたま、そうたまたまそこに、エルフナインが通りかかっていた。

「……………あぁ……………」

エルフナインのヤンデレ恐怖は終わりはない。





結局、マリア以外、一か所に集めて、しばらく反省を促すが、

「捨てられた女は黙ってろッ」

「ああっ!? 捨てられたのは貴様だろクリスッ」

「貴様らこそっ、オレにはエルフナインがいることを忘れるな!」

「あの子は私がもらうッ」

全員は警戒して攻撃はしないものの、お互いけん制し合い、睨み合う。

別にエルフナインは関係ないが、つまるところ、彼女を手に入ればいいと全員が納得して、一時的にまとまった。



「そんなこんなでだいぶデータ取れたし、そろそろ帰るか」

「ぬ? そう言えば、この世界に来てから、立花は小日向のところか」

「ただいま……………」

女の子っぽくなった立花響がやってきて、映像と写真を手満足な未来。

平行世界組はなにも言わず、最終日まで平和に過ごす。



「小日向さん……………」

「オヨヨ……………もうだめです」

「セレナ、どうして私まだ手錠のようなもの付けられてるのかしら？」

「私からの贈り物だから外さないでね♪」

「ともかく全員で止めに行くぞおおおおおおおおお」

彼女たちの戦いは終わらない……………

## 第12枚・新たな平行世界

一人の男がバイクに乗りながら、とある高台で止まり、静かに空を仰ぐ。

「……………キャロルを置いて来た」

その後、光写真館も元通りになり、世界を旅し出す。

自分は自分自身の力を使い、別世界へと移動。

その後彼女、キャロルとオートスコアラ―達を忘れていることに気づいたが、後の祭り。

キャロルは他の装者のように元の世界に戻れるが、おそらくキレてるだろう。

「どうする……………」

剣崎一真は割と本気で考えた。



「……………そもそもこの世界はどこだろう」

色々な世界を渡り歩くために、よく分からない時が多い。

一真は途方に暮れていると、悲鳴が響く。

「!」

彼はすぐにアンデッドの力を使い、瞬時に場所を割る。

「遠いか」

《チェンジ》

その姿をバニテイ、全ての生物を司る姿に変化して駆けだす。

景色を置いて行き、人に襲いかかろうとするそれを吹き飛ばした。

悲鳴を上げて逃げ出す人は無視して、人を襲っていたそれ、怪物を見る。

【アマゾン………】

【アアアアアアアアアアアアアアアアアア】



某潜水艦内部。

そこはけたたましいサイレン音と共に、多くの人々が叫ぶように声を出し、災害に対して動いていた。

「通報がありましたつ、またアマゾンです。場所は」

「急ぎ装者を送りだせ！」

とある場所でカメラに映る二つの怪物をモニタで見るのは、

「弦十郎くん、今度はノイズじゃなく、アマゾン。それも二体ね」

「ああ」

一人の女性は眼鏡を直しながらモニタを、男は腕を組み、その光景を見る。

彼ら、特異災害対策機動部二課。ここは人の枠を超えた存在を対処する最後の砦でもあった。

「アマゾン、二体とも交戦中っ」

「アマゾン同士の共食いでしょうか」

アマゾンは人のタンパク質を求める傾向があり、ノイズ対策で研究された危険物。人がノイズを倒すために研究されていたが、いまではノイズ共々同じ扱い。

「全く……………」

「アマゾン二体、動きますっ」

そのアマゾンは、カードを取り出していた。



《チェンジ》

カリスへと変身し、目の前のアマゾンへと向かう。ワシのようなアマゾンは飛翔したが、すぐにフロートを使用し飛び上がる。

【アアアアアア】

「……………動物がベースか」

そう言いながらカリスアローを構え、間合いを取ると、

「化け物がいるって聞いたが、どっちだ」

「っ!？」

【アアアアアアアアアアアアアア】

突然一人の男が現れ、それは静かに両方を見る。

どちらも人の姿ではないが、男は気にせず、両方を静かに見つめた。

それに対してカリスは、

「どちらも化け物だが、お前は」

「なんだ、律儀に答えるんだな。まあいい」

『スクラツシユドライバー!!』

腰にドライバーをセットした瞬間、カリスは接する。

「仮面ライダー………お前、何者だ」

「俺か？ 俺は」

【シャアアアアアアアアアアア】

「ちっ！」

話の中、遮るワシアマゾン。

向かってくるワシアマゾンに対してカウンターで蹴りを放つ。

「オツラっ！」

そのままワシアマゾンを蹴り飛ばし、それにカリスは静かに観察する。

「お前、身体をいじったか」

「ああ、人間兵器だ」

律儀に答える怪物に、律儀に答える兵器。

そして手に、ゼリーの入れ物のようなものを取り出し、ドライバーにセットした。

『ロボットゼリーツ』

「変身」







そしてグリスは、もう一人の怪物に対して、ツインブレイカーを向ける。

「お前は、俺の心を燃やせてくれるか？」

その瞬間、カリスはワイルドへと変貌し、激突する。

「心火だ、心火を燃やすツ!!」



「こちらは風鳴天羽、いま現場に」

『向かうな翼っ!』

「えっ」

その瞬間、爆発する。



「解放!」

いつの間にバニティアンデッドになり、激突していた。

ボクシングのように何度も激突する戦いで、アンデッドの身体を傷つけながらも、彼



「力を貸せ、お前らああああああああ!!」

クワガタ、フクロウ、キャツスルの三つのボトルを使い、ブレイドはキングラウザーにカードがセットされる。

《ロイヤルストレートフラッシュ》

『デイスチャージボトル! 潰れな〜い! デイスチャージクラッシュユ!』  
黄金とボトルの激突が辺りを包み、二人の影はそこから消える。

◇

「なるほど、俺は別の世界に来たってわけか。どーりでみーたんがないわけだ」

全ての激戦を終え、落ち着いた彼らは話をした。

戦った理由については、拳で語った。そう彼は言う。

彼は猿渡一海、仮面ライダーグリスであり、ネピュラガスにより仮面ライダーに変身する世界らしい。

平行世界だの異世界だの、彼はともかく、すんなり受け入れた。どうも同じようなことがあったようだ。

行ったことがない世界だが、こことはだいぶ違う話を聞き、納得する一真。

「それでお前はアンデッド、怪物ってわけか」  
「ああ」

隠すことではないため、アンデッドであることも説明し、彼はそれも受け入れた。自分も実験で人間兵器と化している、それなら自分の事も関係無いだろう。

「ま、俺にはどうでもいいが、俺がここにいる理由も分からない」

「聞かせてくれ、お前が異世界に来た理由を」

「……………」

そして彼は少し長くも短い話を始めた。



あれは俺がみーたんの仲間になり、パンドラボックスを取り返した後のことだ。

バカがはしやぐ中、俺はその日の夜、みーたんの為にうまい朝食を用意するために動こうと、少しばかり早く起きて買い物に出かけたときだった。

道端に、なにかみよーな石が転がっていたんだ。

俺はこれを見てピンと来た。これはみーたんにプレゼントしろと神が言ったと俺は思い、すぐに石を拾う。

その瞬間、光が世界を包み込んだ。

「それで気が付いたらここにいた」

「魔法石か」

話を聞き、即座に思いつく物を口にした。

廃屋のマンションの中で話を聞き、一真はすぐに思いつく言葉に、一海は首をひねる。

「まほうせき？」

「魔力を帯びた石のことだ。お前はそれに触れてこの世界に来た。来た理由は俺には分からない。その石の持ち主が、何かを願ったはずだ」

一真の知識では、魔法石は奇跡が詰まっているとも言える。

誰かが、何かを願い、それを叶えるピースとして 그리스である彼を呼んだ。そう説明した。

「そうか………みーたんが心配しているといけねえな。早く済ませるか」

叶える必要は無いが、彼の中にその考えは無いらしい。

それを聞き、この世界であることを決めた一真は、お互い目的を見つけた。

「だが問題はある。アマゾンだ」

「細胞変化の、新種か。お前はどこまで知っている」

それに対して、一真は僅かに首を振る。

「知っているだけ。俺はアマゾンの世界には滞在したことは無い」

それと人のタンパク質を求め、中には人をベースにした者もいる。

特殊な薬剤を使用して抑えることもできるが、一度人を食えば抑えることはできない。

そんな話を聞き、一海は胸糞悪いと呟く。

「ちつ、八方塞がりか………戦いの途中で来た連中は」

それに少しばかり考え込むが、

「平行世界だからな、いまいち分からない。ただ言えることは、アマゾン対策がされている対怪物組織または、武装をした道具使いだ」

途中で現れた者には気づいていた。気づいていながら、まだ戦った二人。

それ以上は聞かず、一海は静かに彼から渡されたパンを齧り、一真は外を見ていた。

「雨、か………」



「………だれか」

少女は雨の中歩く、そんな中、静かに天に祈る。



「だれか、わたしを殺して……………」

その瞬間、少女は異形の、青いアマゾンへと変わる。

少女としての残りは、理性と、友からもらったブレスレットだけだった。



「世界は僕をツ、アマゾンを求めてるうううううう」

一人の男がアマゾンを従え、そして舞台は急激に動き出そうとしていた……………

## 最後の一枚・そしてまた旅に出る

そこは廃屋の病院である。

だが地下施設、防護服に身を包み、数々の動物を潰けた液体がある中で、警報が鳴り響く。

扉や壁が壊され、突如として二人の戦士が現れる。

「心火を燃やして、ぶっ潰す」

【……………】

そしてアマゾン研究者たちを手あたり次第襲う。

そんな中、グリスは静かに研究書類を見ながら、舌打ちする。

【どうした】

バニティアンデッドが近づくと、グリスは、

「マジで人間にも投与する予定らしい、いや、もうすでにされてる」

死刑囚や重病患者。

様々な方法を使い、アマゾン細胞の投与をしていたらしい。

「ですが、全ての方はアマゾン細胞に食われて死亡しています」

突然声がして、二人はゆっくりそちらを見る。

「お前は」

「特異災害対策機動部二課、緒川と言います」

彼らと接触しながら 그리스とバニティは、仕方なくその姿のまま、彼らの施設へ出向く。

◇

「君らがアマゾン研究所を襲うのは、そう言う意味が」

「何よりも気に食わない」

「……………」

風鳴弦十郎に詳しい話を聞かされながら、奏、翼は彼らを不審な目で見続けた。

だが、櫻井了子はそれよりも、

「それよりも、どうやってアマゾンの研究所を」

「こいつがアマゾン細胞の気配を見つけ出したからだ」

「俺は怪物だ。人とは違う力も察することができる」

「なら我々と協力を」

【それはできない、君達が俺達を信じられないように、こちらも。ん?】  
「どうした」

その時、急にアラームが鳴り響き、すぐにモニターに何か浮遊する島が映る。

「なんだあれは………みーたんの浮遊島ライブか」

【あれはふららんであだ】

「フロンティアっ、こんな遺跡が急に浮遊するなんてっ」

二人はなにも言わなくなる中、だがすぐに一真は気づく。

「フロンティア内部に無数のアマゾン反応ありっ、外部にも無数のアマゾンの活動を感知」

「ようは空飛ぶアマゾン研究所か。笑えねえな………」

「翼、奏っ。分かってるな」

「はい、いまは確かに貴方たちを信用できない」

「だけどあれを放っておくことはできない」

「分かってる」

【さっさと終わらずぞ】

こうして彼らは、フロンティアへと降り立つ。



「殲滅ッ」

無数のアマゾンがうろつく中、

『ビームモードッ』

「駆逐ッ」

『シングル！ シングルブレイク！』

「激ッ戦ッ!!」

アマゾンをや々と倒す中、中には変なベルトを着けているアマゾンもいる。

「こいつは」

【気を付けろ】

《ブレード・ローディング》

瞬間、剣のようなものや棘、数多の武器を取り出す。

アマゾンの姿が異常になり、これに装者たちは驚愕する。

「こいつは」

【ネオアマゾンドライバー、アマゾンを進化させたのか】

「まあいい、心火を燃やしてッ、突っ切るッ!!」

そして彼らは奥へ奥へと先に進む。

◇

それは叫んだ。

「これがこの僕がツ、ノイズ対策で作りに出した、古代兵器アマゾンの数々だあああああ  
あ」

叫び声を上げ、あらゆる場所で集うアマゾンに満足する中、白いリボンの少女は睨む。  
彼女は彼に攫われ、なぜかここにいる。

「……………なんで」

「んくん？」

「なんでこんなひどいことをするんですかっ」

「酷い？ 酷いだってっ。ただの家畜や物言わない植物から、この僕に使える最強の生  
物アマゾンに変わったんだ！ むしろ感謝されるべき、そう、僕は世界を壊す事も救う  
事も許された存在、英雄ツになったんだ!!」

「狂ってる……………」

その瞬間、壁を壊し、レンゲルが現れ、それに身構える。

「同感だ、貴様はまともじゃない」

「貴様、この僕の作品とは別の、怪物くんは」

男、ウエル博士は攫われた少女、小日向未来と共にいた。

レンゲルがレンゲルラウザーを向けながら歩く中でも、けして笑みは止まらない。

「後ろだッ」

グリスの叫びに、すぐに身体を動かすと、

《ブレード・ローディング》

【アアアアアアアアアアアアアアアアアア】

ブレードを取り出すアマゾンが現れ、それを防ぐ。

「!? まずいつ、この個体は人だッ」

「なにッ」

「そのとおおおおおおおりいいいい。アマゾンネオっ、やってしまいなさいッ」

向かってくるアマゾンは、

「ネオ、仮面ライダーアマゾンネオっ」

「なんっ、こいつも仮面ライダーかッ」

『アタックモード!』

うなるツインブレイカーを振り回し、レンゲルから、バニテイへと変わり、抑え込も

うとする。

「どうすんだこれッ」

「人の意識があればいいが、これは」

「無駄ですよつ、その子はもう、僕の兵器ですよつ。アマゾンネオつ、僕の言う通りに動きなさい！ 後で極上のエサをあげますよ!!」

激突する怪物の中、未来は信じられない顔でネオを見る。

「ひ、びき………響っ」

「っ!? 知り合いかよ!」

「お願い響を傷つけないで!」

叫び声を上げる時、ネオの腕に気づく。

「! 魔法石………繋がッ」

ブレードが突き刺さり、そのまま切り裂かれた。

「響っ」

「ガア、ガアっ」

「この程度で死ぬかっ」

斬られたが即座に繋がり、そのままアマゾンネオを取り押さえた。

「グア」



【 그리스つ、この子にはまだ意識がある、魔法石の所有者だつ】

「なに……………」

【お前ならこの子を、この子たちの未来を変えられるツ。お前の力を貸してくれ！】

その言葉を聞きながら、苦しむように雄たけびを上げるアマゾンネオを見ながら、舌打ちする。

「だからつてどうすればいいんだよ……………」

《ニードル・ローディング》

その瞬間、無数の棘が放たれ、 그리스 共々それを避け、ウエル博士すら避けた。

「きやあ」

その時、微かにかすめた未来。

一滴の血が流れ、それにアマゾンネオが振り向く。

【イ、あ……………アアアアア】

その一筋の血を見て苦しみ出すアマゾンネオ。

【まずい、アマゾンネオツ】

抑え込む中、アマゾンネオから少女の、叫び声が、

【ゴロジデ、わたし、をつ。殺せエエエエエエエエ】

向かって来るアマゾンネオに対して、武器などで対処する。

【アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア】

叫び声を上げるアマゾンネオを見ながら、グリスは、

「……………ちくしようが」

そう呟き、ツインブレイカーを構える。

「待って、響を殺さないで！」

未来はそう叫ぶが、グリスは、

「いまこいつを殺さなきゃ、テメエが彼奴に殺されて食われるんだツ。ならここで殺す

のが、彼奴の願い、俺がここにいる理由だ！」

そしてツインブレイカーをビームモードで放つが、

《リフレクト》

反射する中、バニティはグリスを、

「テメ、分かっているのかッ」

「……………俺は」

【アアアアアアアアアアアアアアアアアア】

叫び声を上げ、三者三様が暴れる中、その時、

「せっかくの成功例ですが仕方ないですね」

そう言い、静かに物陰に隠れ、なにかを操作した。

その瞬間、彼らを囲む柱が生まれ、電流が流れる。

「響っ」

叫ぶと共に、アマゾンネオがバニティを蹴り、そのまま電磁フィールドから飛び出た。

「響っ」

【コナイデ】

剣を向け、未来を止めるアマゾンネオ、響。

その手に同じブレスレットが輝く中、それでも未来は、

「怖くないっ」

そう言い、抱きしめる未来。

それに動きを止め、顔の口が僅かに開き、噛みつく。

【ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ】

噛み千切らないようにか叫び声を上げるが、彼女の服が微かに血で汚れる。

それでも、

「響に食べられるんなら、わたしはいいよ響」

そう言って離れない未来。

それに電磁波の中にいるグリスは、

「心火だ………心の火を、心火を燃やせっ」



「それは彼女が仮面ライダーになったからだ」

それに一真も人の姿で現れ、少女達の前に立つ。

「かめんらいだー……………」

響が反響するようにその言葉を口にし、魔法石のブレスレットを見つめた。

「その魔法石が集めた。仮面ライダーアマゾンネオに、彼の思いを集めた」

「仮面ライダーだからこいつは正気に戻ったとも言いたいのか？」

グリスも人の姿に戻りながら、前に現れ、静かに聞く。

一真は首を振り、静かに告げる。

「いいや。仮面ライダーだからというだけじゃ、正気に戻らない。この子がこの子だから、信じてくれた人がいるからだ」

そしてキングのカードを取り出し、一海もゼリーを構える。

「仮面ライダーは人間だけじゃない。怪物でもあり、兵器でもある。だけど、俺達の中にある正義が、俺達の未来を決める」

「正義……………」

「ご託はいい、俺は心火を燃やし続ける。彼奴らの為にもな」

そう言い構える彼らを見ながら、響は、

「未来、私も」



グリスはツインブレイカーをアタックモードにし、何度も拳を振るう。

勢いあまり、部屋から飛び出すと共に、肥大化し、巨大なアマゾンネフィリムの巨腕が振るわれたが、それすら無視して吹き飛ばす。

「最強」

一つはクワガタ、青い羽。

「究極」

一つはフクロウ、黄色い羽。

「無双」

一つは白、赤い羽。

「これが俺達の必殺技だあああああああああああああああああああああ」

ぶつかり放たれた一撃に片腕がもげるアマゾンネフィリム。

「もう片方ッ」

《スピードX J Q K A ロイヤルストレートフラッシュ》

「ウツイイイイイイイイイイイイイイイイイイ」

片腕は黄金の斬撃で、斬られ、

「アマゾンネオッ」

雄たけびを上げて、取り出す武器は、





◇

ウエル博士は捕まり、多くの制御不可能のアマゾンが退治された。

響の身は、二課が責任を取り、また彼女を調査して、人型アマゾンに対する治療方法を調べる。

調べる人間が了子と言うのが心配な一真だが、この世界は平行世界。信じるしかない。

だから、

「魔法石を壊せば、いまの彼女はどうか分からない。だけど壊さなければ、君を帰せない」

「任せろ。俺の、この思いは半端ない」

◇

それは次元を超えた先、

「カズミンどこ行つた？」

「朝食買いに出かけたはずだけど……………なんだ？」

彼らが集まる場所で光のオーロラが現れ、その瞬間、  
「みーたん……みーたん……みーたん……みーたん……」

その叫び声と共に砕け散り、次元の壁は壊れた。

「ぶーっ、カズミンっ」

「オメエなにしてるんだよー！」

「みーたん、これ異世界のマグロ。獲れたれピチピチの、これでみーたんとうまい朝食作るよ」

そう言い、生きの良いマグロを差し出す笑顔の男。

「あり、ありがとう………」

確実に引きながら、彼女はそう言うしかない。

「おまつ、飯買いにどこまで出かけてるんだよっ」

「んなわけあるかつ。って、お前は」

「……………」

壁の先、超えた彼を見ながら、一真は、

「そっちは任せたぞ、仮面ライダービルド」

「……………ああ、任せろ。仮面ライダーブレイド」

そう言い壁が消える瞬間、彼もまた別の世界へと扉を開けて、バイクで走り出す。

◇

ある世界で戦いはまだ続き、ある世界で彷徨いながらも戦い続ける怪物がいて、そして、

「未来っ」

「響」

同じ石のブレスレットを身に着けた少女が、

「アマゾンが出た、私は行くね」

「うん、いつものように待ってるよ。仮面ライダー」

そう言い合い、彼女は静かに変身する。

誰かを、自分のように守るために、その為に、

「私は仮面ライダーアマゾンネオだッ」

そう叫び声を上げて、何者になっても、助けを求める者の前に駆けだした。

◇

バイクを走らせ、異世界を走る。

「……………俺は戦うよ、この運命に」

そう呟き、アクセルを強め、一人また走り出した……………